

指宿駅西部土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 Vol.4

# 橋牟礼川遺跡

## (V区)



令和 5 年 3 月

鹿児島県指宿市教育委員会

指宿駅西部土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 Vol.4

# 橋牟礼川遺跡

(V区)

令和5年3月

鹿児島県指宿市教育委員会





倒壊建物と出土遺物



## 序 文

大正 5（1916）年に発見された橋牟礼川遺跡は、平成 28（2016）年に発見から 100 年を迎えました。その発見には、指宿出身で旧制志布志中学校で学んだ西牟田盛健氏が大きな役割を果たしました。遺跡の発見後、瀬之口傳九郎、山崎五十麿、喜田貞吉、濱田耕作、長谷部言人、鳥居龍蔵など当時の日本の考古学、人類学をリードしていた学者たちによって調査が行われてきました。その調査の中でも、京都帝国大学の濱田耕作による発掘調査において、縄文土器と弥生土器に時期差を見出したのは、日本考古学史に残る重大な成果として知られています。そして、大正 13 年に「国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡」として国指定史跡に指定されました。

昭和 50 年代に入ると、指宿駅西部土地区画整理事業の計画が立ち上がり、国指定史跡の隣接地に幹線道路が敷かれることとなりました。そこで、事業に伴う発掘調査を実施したところ、874 年 3 月 25 日の開聞岳噴火で埋没した平安時代の倒壊建物跡や畠跡が検出され、さらに下層からは古墳時代の大規模な集落跡がみつかりました。これらの発掘調査成果から、国指定史跡の追加指定が決定し、隣接する形で指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれが平成 8 年に開館しました。開館から現在まで、指宿市内の発掘調査成果や文化財情報を広く市民の方々へ公開・活用しているところです。

本報告書は昭和 63 年から平成元年に実施された発掘調査の成果を再構成し、報告書にまとめたものです。本成果が、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の更なる理解につながり、指宿市の文化財が市民の方々に保護・活用されることを祈念いたします。

令和 5 年 3 月

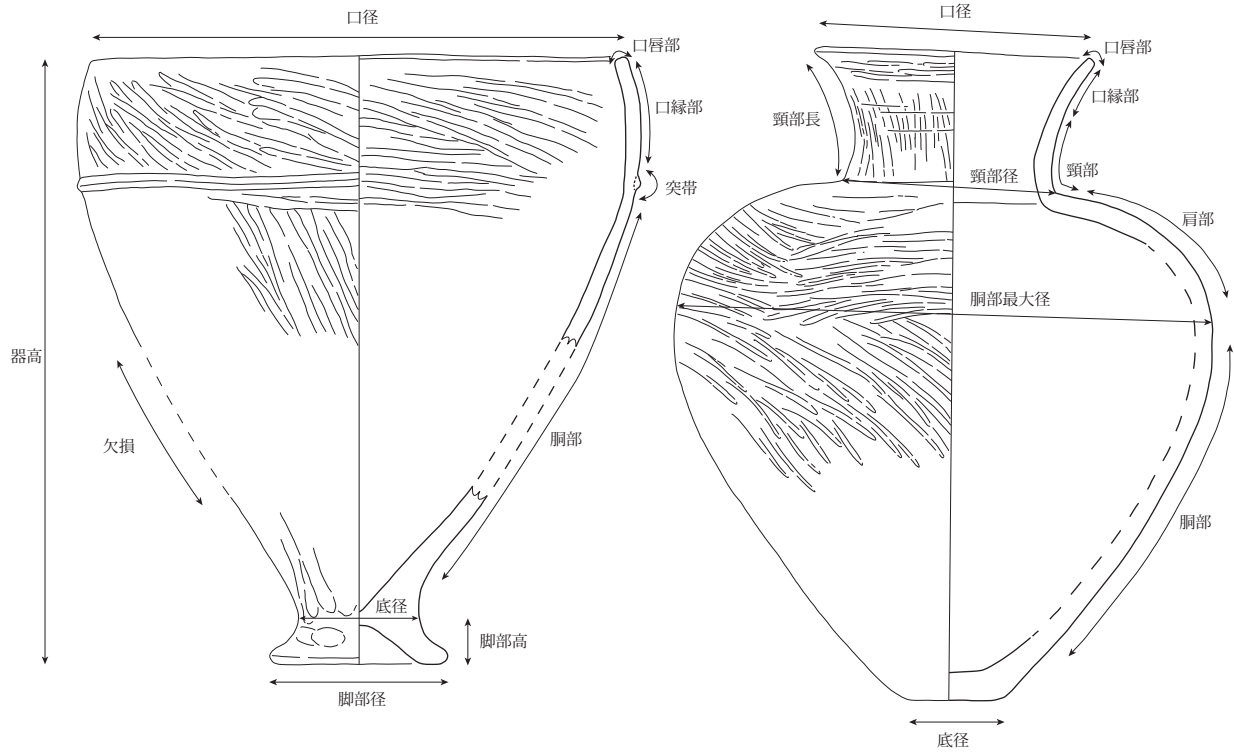
指宿市教育委員会  
教育長 吉元 鈴代

## 例 言

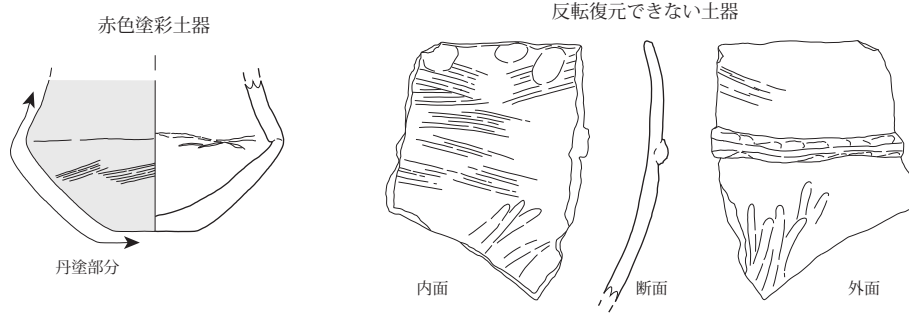
1. 本書は鹿児島県指宿市十二町に所在する橋牟礼川遺跡の発掘調査報告書である。起因事業は指宿駅西部土地区画整理事業である。
2. 発掘調査はV区を昭和63年7月10日から平成元年3月20日まで実施した。
3. 発掘調査は指宿市教育委員会が実施し、鹿児島県教育委員会文化財課の協力を得た。
4. 報告書作成主体は指宿市教育委員会、報告書作成は中摩浩太郎・松崎大嗣・西牟田瑛子が担当した。
5. 本書の編集、執筆は中摩浩太郎・松崎大嗣・西牟田瑛子が行い、図面整理、遺物実測は上田洋子・湯ノ口美和子が、また、遺物実測の一部を九州文化財研究所へ委託した。遺物写真撮影は中摩が行った。
6. V区出土遺物図・遺構図・層位断面図については、調査時に作成された図面をトレースしたものである。トレースは、上田、湯ノ口、清秀子、鎌田真由美、境由希、堂園綾が行った。
7. 報告書作成に要した経費のうち、50%は国、4.3%は県からの補助を得た。
8. 本報告書におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
10. 出土遺物については観察表を作成した。寸法の表記のなかで復元によるサイズは( )をつけた。
11. 遺構は遺構の略号を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記する。  
SI（竪穴建物）
12. 層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。なお、本文中の土器の色味表記については、全体観の表現に努めたため、観察表の記載と異なることがある。
13. 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
14. 発掘調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれで保管し、活用する。橋牟礼川遺跡の遺物注記の略号は「HS」である。

# 凡 例

1. 本書で用いる土器の部位名称は以下のとおりである。



2. 本書で用いる土器の表現は以下のとおりである。





# 目 次

巻頭図版

序文

例言

凡例

## 第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 発掘調査の組織…………… 4

第3節 整理・報告書作成…………… 4

## 第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境…………… 5

第2節 歴史的環境…………… 6

第3節 基本層序…………… 12

## 第3章 V区の調査結果

第1節 調査の概要…………… 15

第2節 古墳時代の遺構と遺物…………… 15

(1)遺構…………… 15

第3節 調査区の層序…………… 16

第4節 古墳時代の遺構と遺物…………… 21

(1)遺構…………… 21

① 竪穴建物跡…………… 21

② 土坑…………… 64

③ 溝状遺構…………… 65

(2)遺物…………… 66

① 竪穴建物跡出土遺物…………… 66

② 溝状遺構出土遺物…………… 113

③ 8層出土遺物…………… 114

④ 9層出土遺物…………… 120

第5節 古代の遺物…………… 138

第6節 西暦874年の遺構と遺物…………… 144

(1)倒壊建物跡…………… 144

(2)畠跡…………… 150

(3)道跡…………… 150

## 第4章 分析

第1節 古墳時代竪穴建物…………… 151

第2節 西暦874年の倒壊建物…………… 159

第3節 子持勾玉について…………… 163

## 第5章 総括

第1節 古墳時代…………… 165

第2節 古代…………… 166

第3節 開聞岳噴火災害を受けた建物跡と  
6層上面をめぐる課題…………… 167

第4節 倒壊建物の移設…………… 169

図版…………… 179

# 挿 図 目 次

図 1	橋牟礼川遺跡の調査範囲……………	3	図 30	S I 39・42・43 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	56
図 2	指宿市の位置……………	5	図 31	S I 48・49・50 平面図・S I 48 ピット 断面図 (S=1/50) ……………	62
図 3	指宿市の火山地形……………	6	図 32	S I 48・49・50 断面図 (S=1/50) ……………	63
図 4	指宿市南東部の遺跡……………	7	図 33	S I - 1 出土遺物……………	68
図 5	橋牟礼川遺跡の範囲と周辺遺跡……………	9	図 34	S I 3 出土遺物……………	68
図 6	橋牟礼川遺跡の基本層序……………	13	図 35	S I 7 出土遺物……………	69
図 7	調査区配置図……………	15	図 36	S I 8 出土遺物……………	69
図 8	調査区南壁層位断面図 1 (S=1/50) ……………	17	図 37	S I 8 出土遺物……………	70
図 9	調査区南壁層位断面図 2 (S=1/50) ……………	18	図 38	S I 9 出土遺物……………	71
図 10	調査区北壁層位断面図 1 (S=1/50) ……………	19	図 39	S I 10 出土遺物……………	72
図 11	調査区北壁層位断面図 2 (S=1/50) ……………	20	図 40	S I 10 出土遺物……………	72
図 12	古墳時代遺構配置図 (S=1/200) ……	22	図 41	S I 11 出土遺物……………	73
図 13	S I 1・4・5・6・7 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	24	図 42	S I 12 出土遺物……………	73
図 14	S I 2・3 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	26	図 43	S I 12 出土遺物……………	74
図 15	S I 2 土坑断面図 (S=1/20) ……	28	図 44	S I 12 出土遺物……………	75
図 16	S I 8 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	30	図 45	S I 13 出土遺物……………	76
図 17	S I 12 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	32	図 46	S I 13 出土遺物……………	77
図 18	S I 9・10・11・13・1・51 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	34	図 47	S I 14 出土遺物……………	78
図 19	S I 14・15・16・17・18・19・20 平面図 (S=1/50) ……………	36	図 48	S I 14 鍛冶遺構 出土遺物……………	79
図 20	S I 14・15・16・17・18・19 断面図 (S=1/50) ……………	37	図 49	S I 14 鍛冶遺構 出土遺物……………	80
図 21	S I 21・22 平面図 (S=1/50) ……	40	図 50	S I 15 出土遺物……………	81
図 22	S I 21 断面図 (S=1/50)……………	41	図 51	S I 16 出土遺物……………	82
図 23	S I 23・28・29・52 平面図 (S=1/50) ……………	44	図 52	S I 17 出土遺物……………	82
図 24	S I 28 断面図 (S=1/50)……………	45	図 53	S I 18 出土遺物……………	83
図 25	S I 24・25・26・36・37 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	46	図 54	S I 19 出土遺物……………	83
図 26	S I 27・30・31 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	48	図 55	S I 21 出土遺物……………	84
図 27	S I 32・33・34 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	50	図 56	S I 21 出土遺物……………	85
図 28	S I 35・44・45・46・47 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	52	図 57	S I 21 出土遺物……………	86
図 29	S I 38・40・41 平面図・断面図 (S=1/50) ……………	54	図 58	S I 21 出土遺物……………	87
			図 59	S I 22 出土遺物……………	87
			図 60	S I 23 出土遺物……………	87
			図 61	S I 24 出土遺物……………	88
			図 62	S I 25 出土遺物……………	88
			図 63	S I 26 出土遺物……………	88
			図 64	S I 26 出土遺物……………	90
			図 65	S I 26 出土遺物……………	91
			図 66	S I 27 出土遺物……………	91

# 挿 図 目 次

図 67	S I 28	出土遺物	92	図 106	9 層	出土遺物	125
図 68	S I 29	出土遺物	93	図 107	9 層	出土遺物	125
図 69	S I 33	出土遺物	93	図 108	9 層	出土遺物	126
図 70	S I 33	出土遺物	95	図 109	9 層	出土遺物	127
図 71	S I 33	出土遺物	96	図 110	9 層	出土遺物	128
図 72	S I 34	出土遺物	97	図 111	9 層	出土遺物	129
図 73	S I 35	出土遺物	98	図 112	9 層	出土遺物	130
図 74	S I 37	出土遺物	98	図 113	9 層	出土遺物	131
図 75	S I 37	出土遺物	99	図 114	9 層	出土遺物	132
図 76	S I 38	出土遺物	100	図 115	9 層	出土遺物	133
図 77	S I 39	出土遺物	100	図 116	9 層	出土遺物	135
図 78	S I 39	出土遺物	101	図 117	6 層	出土遺物	139
図 79	S I 41	出土遺物	102	図 118	6 層	出土遺物	141
図 80	S I 41	出土遺物	103	図 119	6 層	出土遺物	142
図 81	S I 42	出土遺物	104	図 120	6 層	出土遺物	143
図 82	S I 44	出土遺物	105	図 121	倒壊建物検出位置図 (S=1/200)		145
図 83	S I 46	出土遺物	105	図 122	倒壊建物平面図・層位断面図 (S=1/40)		146
図 84	S I 46	出土遺物	107	図 123	倒壊建物東側ベルト断面図 (S=1/30)		147
図 85	S I 46	出土遺物	108	図 124	倒壊建物東側紫コラ火山灰二次堆積層中 出土遺物		148
図 86	S I 48	出土遺物	109	図 125	5 層紫コラ 2 次堆積層中 出土遺物		149
図 87	S I 49	出土遺物	110	図 126	方形竪穴建物面積比較グラフ		154
図 88	S I 50	出土遺物	110	図 127	竪穴建物切り合い関係図		156
図 89	S I 50	出土遺物	111	図 128	古墳時代竪穴建物造営模式図		158
図 90	S I 52	出土遺物	112	図 129	敷領遺跡埋没過程		160
図 91	S I 52	出土遺物	113	図 130	倒壊建物・埋没建物比較 (S=1/85)		161
図 92	S I 52	出土遺物	114				
図 93	溝埋土	出土遺物	115	表 1	橋牟礼川遺跡発掘調査年表 1		1
図 94	8 層	出土遺物	115	表 2	橋牟礼川遺跡発掘調査年表 2		2
図 95	9 層	出土遺物	116	表 3	古墳時代竪穴建物属性集成表		152
図 96	9 層	出土遺物	117	表 4	土器観察表 1		171
図 97	9 層	出土遺物	118	表 5	土器観察表 2		172
図 98	9 層	出土遺物	119	表 6	土器観察表 3		173
図 99	9 層	出土遺物	120	表 7	土器観察表 4		174
図 100	9 層	出土遺物	121	表 8	土器観察表 5		175
図 101	9 層	出土遺物	122	表 9	土器観察表 6		176
図 102	9 層	出土遺物	122	表 10	石器観察表 1		177
図 103	9 層	出土遺物	123	表 11	石器観察表 2		178
図 104	9 層	出土遺物	123	表 12	金属器観察表		178
図 105	9 層	出土遺物	124				

# 図 版 目 次

図版 1	橋牟礼川遺跡空撮写真……………	180	図版 14	SI-1, SI 3, SI 7, SI 8 出土遺物	……………	193
図版 2	V区空撮写真……………	181	図版 15-1	SI 8 出土遺物 ……………	194	
図版 3-1	古墳時代竪穴建物完掘状況(西から)	……………	182	図版 15-2	SI 9 出土遺物 ……………	194
図版 3-2	古墳時代竪穴建物完掘状況(東から)	……………	182	図版 16	SI10 出土遺物 ……………	195
図版 4-1	SI3 ……………	183	図版 17-1	SI11 出土遺物 ……………	196	
図版 4-2	SI3 ……………	183	図版 17-2	SI12 出土遺物 ……………	196	
図版 4-3	SI 8, SI 2, SI 9, SI51 ……………	183	図版 18-1	SI12 出土遺物 ……………	197	
図版 5-1	SI-1, SI 9, SI10, SI11, SI13	184	図版 18-2	SI13 出土遺物 ……………	197	
図版 5-2	SI12, SI11, SI14, SI51 ……………	184	図版 19-1	SI13 出土遺物 ……………	198	
図版 5-3	SI 9, SI11, SI12, SI14, SI15, SI17, SI51 ……………	184	図版 19-2	SI14 出土遺物 ……………	198	
図版 6-1	SI21, SI19, SI20 ……………	185	図版 19-3	SI14 鍛冶遺構 出土遺物 ……	198	
図版 6-2	SI22 ……………	185	図版 20-1	SI15 出土遺物 ……………	199	
図版 6-3	SI23, SI24, SI25, SI26, SI27, SI28, SI30, SI34, SI36, SI37 …	185	図版 20-2	SI16 出土遺物 ……………	199	
図版 7-1	SI24 ……………	186	図版 21-1	SI17 出土遺物 ……………	200	
図版 7-2	SI26, SI24, SI25 ……………	186	図版 21-2	SI18 出土遺物 ……………	200	
図版 7-3	SI26 炉跡内出土蓋 ……………	186	図版 22-1	SI19 出土遺物 ……………	201	
図版 8-1	SI27 ……………	187	図版 22-2	SI21 出土遺物 ……………	201	
図版 8-2	SI34, SI38, SI40, SI41, SI42, SI43, SI46 ……………	187	図版 23	SI21 出土遺物 ……………	202	
図版 8-3	SI34, SI30 ……………	187	図版 24-1	SI23 出土遺物 ……………	203	
図版 9-1	SI46 ……………	188	図版 24-2	SI24 出土遺物 ……………	203	
図版 9-2	SI48, SI49, SI50 ……………	188	図版 24-3	SI25 出土遺物 ……………	203	
図版 9-3	SI49 張出部遺物出土状況 ……	188	図版 24-4	SI26 出土遺物 ……………	203	
図版 10-1	SI37 子持勾玉出土状況 ……	189	図版 25-1	SI27 出土遺物 ……………	204	
図版 10-2	9層遺物出土状況……………	189	図版 25-2	SI28 出土遺物 ……………	204	
図版 11-1	倒壊建物跡全景(北から) ……	190	図版 26-1	SI29 出土遺物 ……………	205	
図版 11-2	倒壊建物平面(南から) ……	190	図版 26-2	SI33 出土遺物 ……………	205	
図版 11-3	倒壊建物部材痕跡……………	190	図版 27-1	SI33 出土遺物 ……………	206	
図版 12-1	倒壊建物東側遺物(No.391)出土状況	191	図版 27-2	SI34 出土遺物 ……………	206	
図版 12-2	倒壊建物東側二次堆積層中須恵器 (No.394)出土状況 ……………	191	図版 27-3	SI35 出土遺物 ……………	206	
図版 12-3	石膏型取り出し状況……………	191	図版 28	SI37 出土遺物 ……………	207	
図版 13-1	倒壊建物移設作業1 ……………	192	図版 29-1	SI37 出土遺物 ……………	208	
図版 13-2	倒壊建物移設作業2 ……………	192	図版 29-2	SI38 出土遺物 ……………	208	
図版 13-3	指宿市考古博物館における倒壊建物展示	192	図版 29-3	SI39 出土遺物 ……………	208	
			図版 30-1	SI39 出土遺物 ……………	209	
			図版 30-2	SI41 出土遺物 ……………	209	
			図版 30-3	SI42 出土遺物 ……………	209	
			図版 31-1	SI42 出土遺物 ……………	210	
			図版 31-2	SI44 出土遺物 ……………	210	

## 図 版 目 次

図版 31-3	SI46	出土遺物	……………	210
図版 32-1	SI46	出土遺物	……………	211
図版 32-2	SI48	出土遺物	……………	211
図版 33-1	SI49	出土遺物	……………	212
図版 33-2	SI50	出土遺物	……………	212
図版 34	SI52	出土遺物	……………	213
図版 35-1	古墳時代遺物包含層（8層）出土遺物		……………	214
図版 35-2	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 1		……………	214
図版 36	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 2		……………	215
図版 37	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 3		……………	216
図版 38	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 4		……………	217
図版 39	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 5		……………	218
図版 40	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 6		……………	219
図版 41	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 7		……………	220
図版 42	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 8		……………	221
図版 43	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 9		……………	222
図版 44	古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 10		……………	223
図版 45	6層出土遺物 1		……………	224
図版 46	6層出土遺物 2		……………	225
図版 47	6層出土遺物 3		……………	226
図版 48	倒壊建物東側紫コラ火山灰二次堆積層 中出土遺物 1		……………	227
図版 49	倒壊建物東側紫コラ火山灰二次堆積層 中出土遺物 2		……………	228
図版 50-1	紫コラ火山灰二次堆積層中出土遺物		……………	229
図版 50-2	発掘調査に携わった作業員の方々			229

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

橋牟礼川遺跡は、大正7・8年に京都帝国大学の濱田耕作、長谷部言人らによる発掘調査がおこなわれ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代のものであることが国内で初めて実証された遺跡として知られる。大正13年には、国指定史跡に指定され、昭和53年には、史跡保存のための2.36haの公有地化が完了した。

その後、国指定史跡に隣接する北西側の土地からJR指宿駅付近に至る範囲まで土地区画整理事業がおこなわれることとなった。この事業に伴い、昭和61年度から平成3年度まで、深さ1.5m以上の掘削を伴う道路部分と下水道が敷設される部分において発掘調査がおこなわれることとなった。

橋牟礼川遺跡の調査履歴は第1表から第2表のとおりである。本報告書に掲載する橋牟礼川遺跡における発掘調査の内容及び検出した遺構遺物等に関しては、第1図に示した調査区名を用いた。なお、本報告書で便宜上用いた調査区名については、下記のように付している。

- ・ I 区 ～ X III 区：昭和54年度～平成6年度の指宿駅西部土地区画整理事業（以下「都市計画事業」）及び博物館建設に伴う調査
- ・ 下水1～下水28：平成2年度から平成3年度の下水道敷設に伴う発掘調査
- ・ 年度+トレンチ番号：大正年間以降に橋牟礼川遺跡及び隣接遺跡での確認調査及び緊急調査（T：大正，S：昭和，H：平成を示す）

表1 橋牟礼川遺跡発掘調査年表1

西暦	和暦	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	本報告書調査区名
1917	大正6		山崎五十磨	喜田貞吉の依頼で、縄文土器と弥生土器が出土する地点を確認。	
1918	大正7	1月	京都帝国大学	京都帝国大学による学術調査が行われ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代の土器であることが日本で初めて実証される。	T7・8A～F
1919	大正8	4月	京都帝国大学	京都帝国大学による学術調査によって、「日本のポンペイ或いはサントリン」と報告され、日本で最も早く火山災害遺跡であることが認識される。	
1926	大正15		史跡名勝天然記念物調査委員（山崎五十磨）	濱田の調査を要約	
西暦	年度	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	本報告書調査区名
1948	昭和22	2月	鹿児島県	鹿児島県国立公園候補地学術調査が行われ、縄文土器、弥生土器の包含層に加え、古墳時代の貝塚が発見される。	
1974	昭和48	2月25日～3月11日	指宿市教育委員会	史跡指定現状変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、平安時代の土壇から幼児骨など5体が発見される。	S48I～IV
1975	昭和49	2月3日～2月18日	指宿市教育委員会	史跡指定現状変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代に至る各時代の文化層、火山灰層が確認される。また、縄文～弥生期の竪穴住居跡、古墳時代の土器集中廃棄所などが発見される。	S49V～VII
1979	昭和54	10月22日～12月1日	指宿市教育委員会	区画整理事業に伴う確認調査が行われ、遺跡の広がり10ha以上に及ぶことが確認される。	S54T1～T18
1983	昭和57	2月21日～3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の竪穴住居跡や貝塚が発見される。	S57T1～T7

表2 橋牟礼川遺跡発掘調査年表2

西暦	年度	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	本報告書調査区名
1986	昭和61	5月6日～6月30日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の堅穴住居跡やV字溝、鍛冶に伴う遺物が出土する。また、平安時代の鉄器、須恵器、土師器などが出土する。	S61T8～T10
1986	昭和61	7月10日～3月20日	指宿市教育委員会	区画整理事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火に伴う土石流で埋め尽くされた旧河川が発見される。	VII区
1987	昭和62	6月1日～1月30日	指宿市教育委員会	区画整理事業に伴う発掘調査が行われ、国指定史跡内で発見されている古墳時代の堅穴住居跡と同時代の住居群が確認される。	VI区
1988	昭和63	7月4日～1月30日	指宿市教育委員会	区画整理事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火で埋没した建物跡が発見される。また、古墳時代の子持勾玉が出土する。	V区
1988	昭和63	4月25日～5月20日	指宿市教育委員会	温泉源移転に伴う確認調査が行われ、古墳時代の集落の広がり確認される。	X区
1990	昭和63	平成元年1月8日～1月28日	指宿市教育委員会	個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火で倒壊・埋没した建物跡の一部が発見される。	XIV区
1989	平成元	4月20日～6月30日	指宿市教育委員会	区画整理事業による温泉源移転に伴う確認調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火で埋没した樹木跡が発見される。	X区
1989	平成元	4月20日～平成2年3月29日	指宿市教育委員会	区画整理事業による発掘調査が行われ貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火に伴う土石流跡を確認、日本三代実録の「河水砂和」を実証する。	II区・III区
1989	平成元	10月5日～12月10日	指宿市教育委員会	区画整理事業区内個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、平安時代の畠跡、建物跡、古墳時代の堅穴住居跡などが発見される。	XII区
1990	平成2 平成3	5月1日～平成3年7月30日	指宿市教育委員会	区画整理事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落跡、土器集中廃棄所、道跡、平安時代の畠跡、建物跡などが発見される。	I区
1990	平成2 平成3	7月4日～平成3年9月17日	指宿市教育委員会	下水道事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落、平安時代の畠地が広範囲にあることが確認される。	下水①～28
1991	平成3	6月7日～11月30日	指宿市教育委員会	区画整理事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火で埋没した畠跡に隣接して、高床倉庫跡、道跡、櫓列跡などの関連する遺構が発見される。	VIII区
1991	平成3	9月27日～11月30日	指宿市教育委員会	区画整理事業による発掘調査が行われ、古墳時代の堅穴住居、馬骨が出土する。	XIII区
1992	平成4	平成5年2月20日～3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、道跡等が発見される。	IX区
1992	平成4	8月17日～平成5年1月26日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、古墳時代の土器集中廃棄所等が発見される。	H4T1～T5
1992	平成4	10月21日～平成5年3月20日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が実施され、平安時代の堅穴住居跡2基が発見される。	H4K1
1992	平成4	7月1日～平成5年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、旧河川の続きと平安時代の畠跡が発見される。	IX区
1993	平成5	4月1日～平成6年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、平安時代の畠跡、古墳時代の馬鋏状工具痕跡、弥生時代の土器集中廃棄所等が発見される。	IX区
1993	平成5	10月1日～平成6年3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が行われ、平安時代の堅穴住居跡2基が発見される。	H5K2・K3
1994	平成5	平成6年1月17日～3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査（片野田地点）によって、中世の畠跡、平安時代の道跡が発見される。	H5
1994	平成6	4月1日～5月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、縄文時代後期の柱穴群が確認される。	IX区
1994	平成6	平成6年7月15日～3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査（片野田地点）によって、中世～近世の墓、古墳時代の柱穴等が発見される。	H6
1995	平成7	9月17日～3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査（向吉地点）によって、弥生時代終末～古墳時代の祭祀遺構が発見される。	H7
1996	平成8	11月8日～平成9年3月31日	指宿市教育委員会	市道拡幅工事に伴い発掘調査が行われ、古墳時代の遺構・遺物が発見される。	—
1996	平成8	12月1日～平成9年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火で埋没した樹木跡が確認される。	H8
1997	平成9	7月1日～平成10年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査（南丹波地点）によって、古墳時代の柱穴が確認される。	H9
1998	平成10	7月1日～平成11年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、古墳時代の柱穴が確認される。	H10
1999	平成11	7月26日～平成12年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、道跡が確認される。	H11

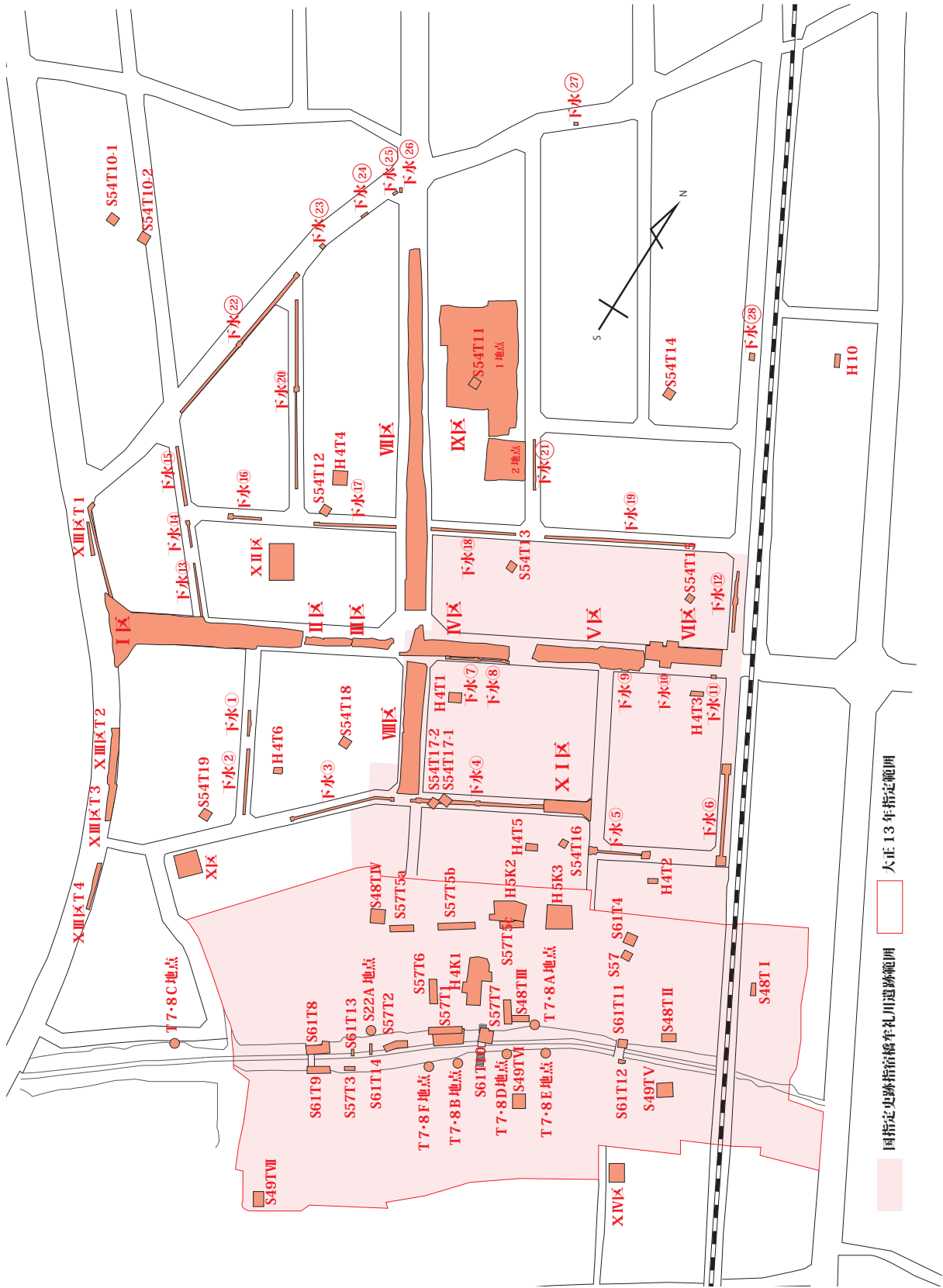


図1 橋牟礼川遺跡の調査範囲



## 第2節 発掘調査の組織

調査主体者	指宿市教育委員会		
調査責任者		教育長	安田新駒(～S63.10) 中村利廣(S63.10～)
調査事務担当者		社会教育課長	川寄猛
		社会教育係長	堀口健一郎
		主事	福山一幸
		主事補	下山覚
調査担当者	指宿市教育委員会	主事補	下山覚
	鹿児島県教育庁文化財課	指導主事	富田逸郎

なお、調査企画において、県教育長文化財課の指導・助言を得た。また、発掘調査、遺物については、鹿児島県考古学会長・河口貞徳氏、鹿児島大学教授・上村俊雄氏、同助手・本田道輝氏、同埋蔵文化財調査室の松永幸男氏、獣骨については鹿児島大学農学部教授・西中川駿氏、地層については玉龍高校教諭・成尾英仁氏の指導、助言を受けた。※所属は当時。

## 第3節 整理・報告書作成

作成主体	指宿市教育委員会		
作成責任者	指宿市教育委員会		
	教育長	吉元 鈴代	
作成担当組織員	指宿市教育委員会		
	教育部長	鶴窪 誠作(令和2～3年度) 紺屋 聖一(令和4年度)	
	教育部参与兼歴史文化課長	中摩浩太郎(令和3年度)	
	歴史文化課長	中摩浩太郎(令和2年度) 上蘭 浩司(令和4年度)	
	主幹兼文化施設管理係長	上村 真史	
	文化施設管理係 主査	内山 正人	
	主幹兼文化財係長	鎌田 洋昭(令和2年度) 鎌田 幸博(令和3～4年度)	
	文化財係 主任	西牟田 瑛子	
	文化財係 主任	松崎 大嗣	
	文化財係 技師	江口 寛基(令和4年度)	
	文化財係 技師	新垣 匠	
文化財係	臨時的任用職員	上田 洋子	
	整理作業員	清 秀子・鎌田 真由美・境 由希・堂園 綾・ 湯ノ口 美和子・向吉 真里	

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置している。地形的には、山地、台地、平野、湖沼と大きく4つに分類できる。これらの地形は、約10万5千年前から約11万年前に噴火した阿多火山の噴火活動に伴うカルデラ内にほぼ収まる。約5万3千年前には、池田湖の東側に位置する清見岳が大きな噴火を繰り返した。約2万8千年前から約3万年前には、始良カルデラの噴出物である入戸火砕流が現在の台地部に厚く堆積した。

指宿市開聞地区から南洋を臨むと、硫黄島・竹島を目視することができる。この二つの島は約7,300年前に噴火した鬼界カルデラの北縁であり、指宿市から約50kmの距離に位置する。鬼界カルデラから噴出した「幸屋火砕流」は、指宿市新西方の幸屋で発見したことからこの名がついている（宇井 1967）。

その後、新期指宿火山群（池田火山）が活発な火山活動を始めた。中でも、約5,700年前の池田火山の活動により、九州最大のカルデラ湖である池田湖が形成された。その噴出物は、指宿市全域の直接的な地形形成の要因となっている。池田火山が噴火した直後に松ヶ窪、池底、鰻池、成川、山川港が連続して噴火し、「爆裂火口」と呼ばれる一直線上に並ぶ火口を形成した。

さらに、池田火山の南西に位置するトロコニーデ型の開聞岳は、約4,700年前から約3700年前に活動を開始した。開聞岳噴出物のうち、旧指宿市域では主に4回分の開聞岳噴火火山灰層を確認することができる。有史時代の噴火についてはいくつかの資料に記録されており、西暦874年（以下「874年」と表記）と885年の噴火とそれに伴う災害の状況等が『日本三代実録』に記録されている。特に、874年の開聞岳噴火に伴う固結火山灰層は広く市域を覆っている。

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市街地に所在し、指宿市街地に並行し南北に走る山塊の山裾から海岸へ傾斜する海拔7m～20m程度の緩やかな火山性扇状地上に位置する。

扇状地上には、山裾を水源とする複数の河川が海岸に向かい東流するが、いずれも大地を深く削り、深さ数m～10数mに達するV字状の谷を形成している。大正13年に国史跡に指定された範囲の中央にも、上記のようにして形成された橋牟礼川が流れるが、V字状谷の側面には遺物包含

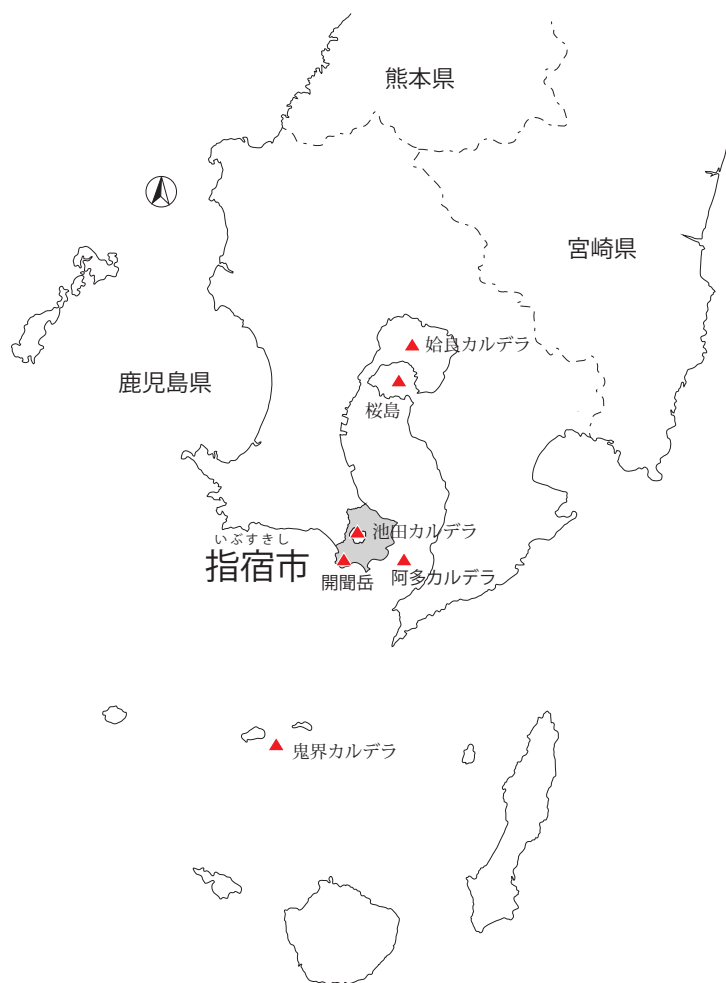


図2 指宿市の位置



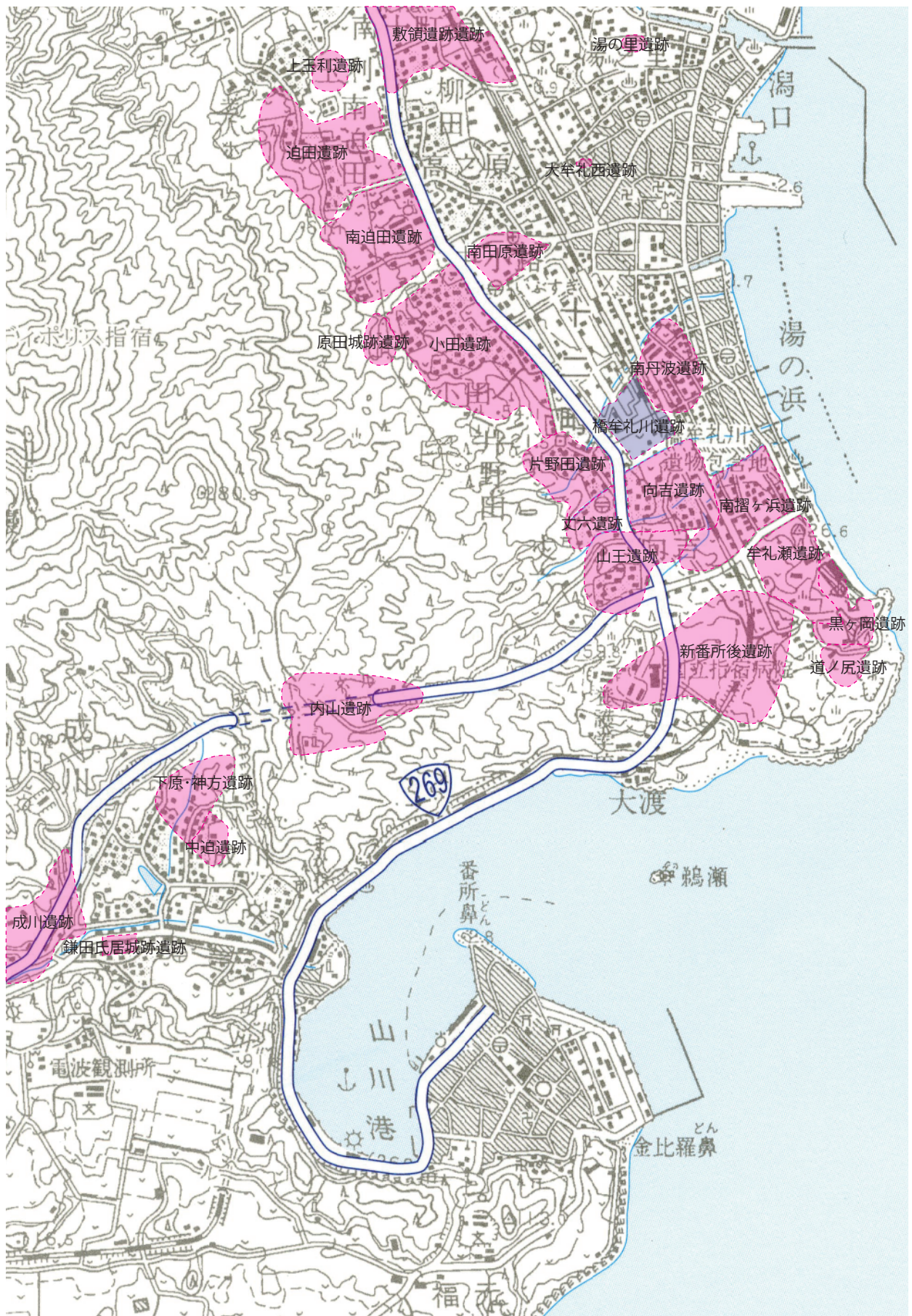


図4 指宿市南東部の遺跡

同じ種類の遺構は切り合う状況がある。これは、ここで生活した人々が集落内の施設配置を考えた上で、空間を意識的に利用し回帰的な生活を行っていた結果と考えられる。

小牧3A遺跡 指宿市北部の標高65mの阿多カルデラの北端丘陵に立地する。国営畑地総合土地改良事業に伴って調査を実施している。旧石器時代の出土遺物は、ナイフ形石器文化期と細石刃文化期に分けられ、大きく2つの石器文化期があったと考えられる。先行するナイフ形石器文化期の遺物は、ナイフ形石器98点・台形石器112点、薄片尖頭器22点、両面加工尖頭器5点、三稜尖頭器20点、スクレイパー18点、石核50点などがみられる。細石刃文化期の遺物は細石刃、細石核、楔形石器などが出土している（長野2005）。

## （2）縄文時代

岩本遺跡 上記の小牧3A遺跡と小河川で侵食された狭小な谷によって隔てられた断層海岸の先端部に立地する。岩本地区県営畑地灌漑事業に伴って発掘調査が実施されている。発掘調査では岩本1～4類土器を中心に隆帯文土器や押型文土器、打製石鏃、磨製石鏃、石匙、局部磨製石槍などが出土している。隆帯文土器は、口唇部を巡るように口唇部とその下に隆帯を貼り付け貝殻で文様を付けるものと、短い隆帯を縦方向あるいは横方向に貼り付けるもの、胴部に1本隆帯を巡らし貝殻で文様を付けるものがある。岩本1～4類土器はすべて円筒深鉢形で、平底になる。最大径は口縁部にあり、底部から口縁部にかけて開きながら直線的に立ち上がる形を呈する（長野2005）。

大渡遺跡 山川湾を見渡す台地状に立地する。指宿式や市来式土器が出土する縄文後期の遺跡であり、昭和32年の第一次および第二次の調査で4～5体分の縄文人骨が出土している。出土遺物は市来式土器が多く見られる。なかでも、奄美群島でみられるような注口土器と尖底土器が出土していることが特徴的で、南西諸島との関連性をうかがえる資料として注目される。

南摺ヶ浜遺跡 指宿市十二町及び湯の浜に所在する。遺跡は、指宿市街地海浜部に面した標高8mの海岸段丘上にあり、山裾から海岸へと傾斜する火山性扇状地の端部に位置する。橋牟礼川遺跡の南東約500mの位置である。平成5年に社員寮建設予定地の発掘調査において、宇宿上層式土器が出土した。宇宿上層式土器は、トカラ列島中之島付近を北限に沖縄本島まで分布する土器である。本遺跡で出土した宇宿上層式土器が、南西諸島からの搬入品か、当地で製作された土器かにわかに判別し難い。しかし、土器の胎土に着目すると、南西諸島の宇宿上層式土器に見られる白色粒子（石灰あるいは貝殻片？）がほとんど含まれていない点を重視すれば搬入品である可能性は低いと考える。いずれにせよ縄文時代晩期に南西諸島との文化交流があったことを物語る遺物であり、南部九州本土における南島土器の存在の可能性を大きく広げた発見となった。今後の資料の増加が期待されるとともに、大渡遺跡の尖底土器の存在も合わせて注意すべき資料である。

## （3）弥生時代

横瀬遺跡 指宿市西方横瀬に所在し、指宿市北部の台地上に位置する。県営畑地総合土地改良事業に伴い、発掘調査が実施されている。発掘調査では方形の竪穴建物跡が切り合う形で12基検出されている。2号建物からは多量の土器が出土しており、弥生時代後期に位置づけられる高付式土器に加え、多条突帯を有する長頸壺などが確認できる。また、これらの土器に共伴する形で、小型仿製鏡が出土している。

南丹波遺跡 指宿市十二町に所在し、橋牟礼川遺跡に東隣する遺跡である。丹波小学校の校舎建て替えに伴い発掘調査が実施された。発掘調査では花卉形建物跡を含む竪穴建物跡を14基確認した。

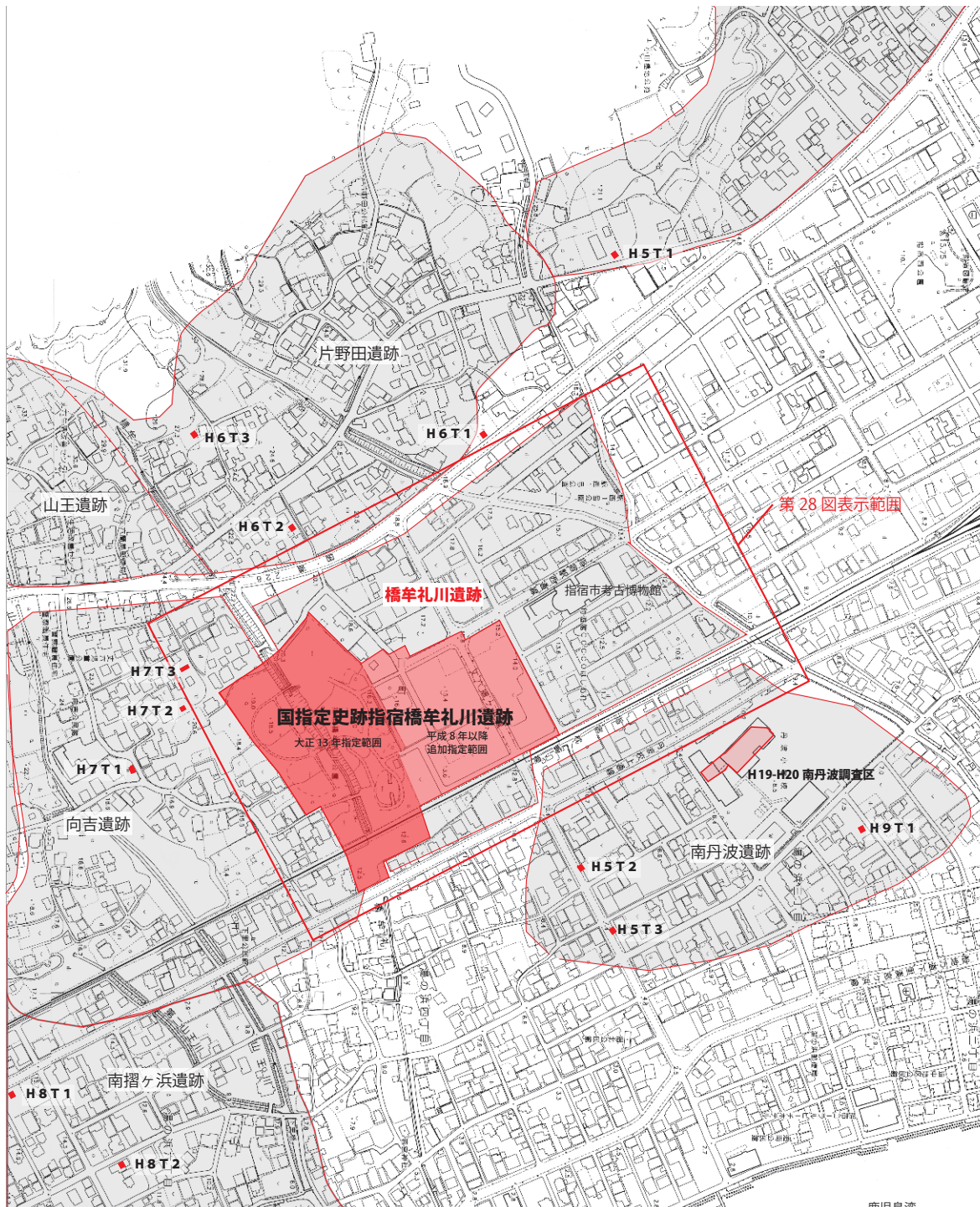


図5 橋牟礼川遺跡の範囲と周辺遺跡

これらの建物跡は2つの群に分かれており、その間には土器集中廃棄所が確認されている。土器集中廃棄所の出土遺物を見ると弥生時代終末期～古墳時代前期に位置づけられる甕や壺、高杯などが出土している。南丹波遺跡は橋牟礼川遺跡と隣接している集落であり、橋牟礼川遺跡が古墳時代後期を中心とする建物跡が多く検出されていることから、南丹波遺跡から集落の中心が橋牟礼川遺跡へ移行した可能性も考えられている。

#### (4) 古墳時代

成川遺跡 指宿市山川成川に所在し、成川マール西部の山裾から鳴川へ向かって下る傾斜部に位置

する。弥生時代から古墳時代にかけての埋葬遺跡である。昭和 32 年に成川浜埋め立てのための土取り作業中に遺跡が発見され、昭和 33 年に国の文化財保護審議員によって学術調査が行われた。それにより、200 体を超える人骨に加え、おびただしい量の土器や鉄製品が確認された。埋葬の形態は土壙墓と呼ばれるものであり、これらの埋葬施設の上部や周辺に上記出土遺物が供献される形で出土した。また、土壙墓周辺には立石と呼ばれる板石が立てられた施設も確認されている。

令和元年度から鹿児島女子短期大学と鹿児島国際大学による発掘調査が実施されており、文化庁が調査した調査区の南部にも埋葬範囲が広がることが確認された。また検出された土壙墓は、弥生時代中期後半に噴火した暗紫コラを上層から掘り込む形で確認されている。

南摺ヶ浜遺跡 立地は上記の通り。ホテル社員寮の建設などに伴って調査が行われ、成川遺跡と同様の土壙墓群が広がることがわかった。その後、南摺ヶ浜遺跡の範囲内で道路新設工事が計画され、鹿児島県によって調査が行われた。この調査では、土壙墓や立石に加え、土器棺墓や円形周溝墓が確認された。また、墓域からは多くの供献土器や鉄製品が出土した。

弥次ヶ湯古墳 弥次ヶ湯古墳は、指宿市十町敷領一帯に広がる敷領遺跡地内から発見された。遺跡は山裾から海岸に向けて緩傾斜する海拔 4～6 m の火山性扇状地の末端部にある。平成 8 年の公営団地建設に伴う発掘調査に伴い、直径約 17.5m の円墳が検出された。古墳は、現地表面から、わずか 30cm 前後の所に埋もれており、その大部分は、火山灰に埋没していた。調査区の西壁に接するかたちで墳丘の約 1/2 を確認することができた。残りは、生活道路となっている団地内の市道の下に隠れていたため、発掘できなかった。そこで、地下レーダー探査で地形を把握し、円墳であることを確認した。残存する墳丘の高さは最大で約 1.3m、周溝は、幅 2 m 前後、深さ約 40～60cm で、埋土からは、甕、鉢、壺、高杯、埴、ミニチュア土器など 800 点の土器片が出土した。埋葬施設については検出し得なかったが、既に削平を受けた部分にあった可能性も考えられる。

弥次ヶ湯古墳の築造時期は、出土遺物の年代観より、5 世紀後半から 6 世紀前半と推定される。古墳の「空白地帯」と呼ばれていた薩摩半島からの円墳の発見は、古墳分布の限界線を書き換えると同時に、古墳時代の薩摩半島の社会像に再考を迫る契機となった。

## (5) 古代

敷領遺跡 指宿市十町に所在し、山裾から海岸に向けて緩傾斜する海拔 4～6 m の火山性扇状地の末端部にある。平成 8 年の公営団地建設に伴う発掘調査に伴い調査が行われた。発掘調査によって、貞観 16 年 3 月 4 日（西暦 874 年 3 月 25 日）の開聞岳噴火によって埋没した水田跡が検出され、橋牟礼川遺跡と同様の火山災害遺跡であることが確認された。この時の火山性噴出物は紫コラと総称され、この下層からは掘立柱建物跡 6 棟、総柱の高床倉庫跡 1 棟、竪穴建物跡 1 基、杭列跡などの遺構群が確認されている。遺物は、古墳時代の成川式土器の伝統を色濃く残した甕形土器に加えて、須恵器、土師器、転用硯、「糲」・「智」と書かれた墨書土器、鉄製品等が出土している。鉄製品の中には、鉄製甲臺と呼ばれるものもあり、その形態と鉄製品表面に残る有機質の形状から亀トに関連する遺物であると考えられている。

平成 7 年度以降の開発に伴う調査や、学術調査によって中敷領地区では、建物遺構 2 基が検出されたことから、一帯に居住域が広がっている可能性が指摘されている。

平成 26 年度には、中敷領地点において 3 号建物跡の発掘調査がおこなわれた。この建物は開聞岳噴出物によって埋没した状態で検出され、建物の中央付近には煙道をもたない造り付けのカマドや板石をコの字に組んだ石組炉などの調理施設が検出された。

平成 30 年度の調査では、3 号建物跡の東側から幅 10m を超える 2 状の溝跡が確認されている。溝内は紫コラ火山灰層で埋没しており、火山灰下層埋土はグライ土壌が確認された。この溝跡は居住域を区画する区画溝である可能性もある。

宮之前遺跡 宮之前遺跡は指宿市西方に所在し、宮ヶ浜の西側の台地上に位置する。県営畑地帯総合土地改良事業に伴い、昭和 55・56 年に発掘調査が行われた。この調査によって、竪穴建物群やその周囲に土器集中遺構が確認され、台地縁辺部に集落が存在することがわかった。出土遺物は成川式土器に加えて、奈良時代の須恵器や土師器が出土しており、古墳時代から古代にかけての集落であることが想定できる。

また、平成 30 年度に実施された発掘調査では、上記集落跡の南側で、紫コラ火山灰に直接被覆された畠跡が確認され、宮之前遺跡も橋牟礼川遺跡や敷領遺跡同様、火山災害遺跡であることが確認された。

## (6) 中世

松尾城跡 松尾城は、指宿市西方字城ヶ崎とその周辺を含めた丘陵上のエリアに所在する山城である。城の東側は絶壁となっていて、錦江湾に面しているため、海城の性格もあわせもつといわれている。松尾城は、他の山城同様に複数の曲輪から成り立っており、どの曲輪の頂上も平坦に作り出されている。国道 226 号はちょうど曲輪同士を区切る空堀を通っており、また、JR 指宿枕崎線が曲輪の間を走っている。城内には防御用の土塁や武者走り、武者揃いといった施設が名残をとどめ、大手門と思われる場所も推定されている。城の築城時期は、現段階でははっきりとはしていないが、指宿氏以来、指宿を治める武将が松尾城の城主となった。鎌倉時代から室町時代にかけての城主は指宿氏であったが、指宿を大隅守護の島津氏が領有してから、松尾城の城主は次々と変わっていく。

応永 16 年 (1409)、指宿を領有していた島津元久が城代として阿多時成を松尾城に封じ、指宿氏は退去。その 3 年後には奈良氏が城番として入っている。しかし、奈良氏は島津久豊に倒されてしまう。文明 7 年 (1475) には、島津久継が松尾城に地頭となったが、島津氏が内紛を始め、文明 8 年 (1476) 島津久継らと対立していた島津忠昌が、禰寝重清らに松尾城を攻め落とさせ、指宿は禰寝氏の領地となった。

その後、指宿は再び島津忠昌の孫である勝久の領地となり、大永 6 年 (1526) に地頭として伊地知重弦がおかれ、その後、頼娃の地頭を務めていた頼娃兼洪が、天文 4 年 (1535) に指宿を攻め、家来の津曲兼任を地頭として指宿に派遣。これ以降、天正 16 年 (1588) に頼娃氏が守護職の島津氏によって他の領地に移動させられるまで松尾城の城主は頼娃氏の家臣が務めた。

## (7) 近世

今和泉島津家墓所 指宿市北部に位置する岩本地区に所在している。墓地は東側と南側を市道に挟まれており、西側には南側市道につながる里道が通っている。東側市道の東には六地藏塔が 3 基設置されている。また、今和泉島津家墓地の南側斜面上の狭い平坦地には、墓地が多数置かれており、今和泉島津家の家臣及びその子孫の墓が多く含まれている。今和泉島津家の元となる和泉家は、島津家 4 代当主忠宗の子、忠氏を初代とし、5 代直久まで続いた。直久が応永 24 年 (1417) の第二次川辺戦争で戦死したため断絶した。延享元年 (1744)、島津継豊が弟の忠卿に、327 年ぶりに、断絶していた和泉氏を継がせた。今和泉家は通称である。忠卿は、寛保 2 年 2 月 12 日に誕生した藩主島津吉貴の次男である。同年 12 月に、指宿郡の内、小牧村、岩本村、西方村、頼娃郡の内、



池田村，仙田村を割いて今和泉郷とし所領地とした。また，佐多郷栢山，伊作郷田尻村，飯野郷坂本村，串良郷岩広村を追加し，石高1万5093石となった。

今和泉家は，初代忠卿，2代忠温，3代忠厚，4代忠喬，5代忠剛，6代忠冬，7代忠敬，8代忠欽と続いた。今和泉島津家墓所では，初代から6代までの当主およびその親族が祀られている。墓石は宝篋印塔，五輪塔，家祠型墓石がみられる。近年の墓石の型式学的研究や源姓和泉氏嫡流系図の再検討により，墓所内の墓石配列および基盤整備には複数のグルーピングができることが明らかになっている。

文献

宇井 忠英 1967「鹿児島県指宿地方の地質」『地質学雑誌』73巻10号 pp.477 - 490

長野 真一 2005「岩本遺跡」『先史・古代の鹿児島（資料編）』pp.63 - 65

長野 真一 2005「小牧3A遺跡」『先史・古代の鹿児島（資料編）』pp.66 - 69

### 第3節 基本層序

橋牟礼川遺跡の地層は，基本的に池田カルデラ噴出物と開聞岳噴出物とそれらに挟まれる扇状地堆積物から形成される。ここでは，1991年に確認された橋牟礼川遺跡の標準層位をもとに述べる。

#### 第1層 黒褐色土層（表土）

耕作土。都市計画事業によってシラスや砂利，礫層がある場合がある。また土地利用の履歴により第1層の厚さや性状に差異が認められる。重機による掘削痕跡が下層に及ぶ場合がある。

#### 第2層 暗灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

#### 第3層 黒灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

#### 第4層 黒色土層

中世（鎌倉～室町時代）の遺物包含層である。黒ボクのような腐食土が発達している。厚さは20cm～50cmと厚く，宋代の青磁・白磁や糸切り底の土師器が出土する。内黒土師器も出土していることから，上限は平安時代後期まで遡る可能性がある。紫コラ（貞観16年，仁和元年の開聞岳噴出物）の堆積後の生活が再開される時期を考える上で重要な層である。

#### 第5層 a 紫灰色火山灰層（紫コラ）

平安時代に堆積した開聞岳噴出物層である。平安時代の旧地表面を覆う火山灰層の上位に存在することから，下位の火山灰層を貞観16年に，上位の第5a層を仁和元年の開聞岳噴出物に対比させる説もあるが，近年の地質学的調査の成果から，下位と上位の噴出物は一連の火山活動に伴うものであるとする考えがある。

#### 第5層 b 紫灰色火山灰層二次堆積物

次に説明する紫灰色火山灰堆積物 第5層 c（874年開聞岳噴出物）の二次堆積層で，水流作用で形成された層と考えられ，砂が多く混在し，クロスラミナが発達する。

#### 第5層 c 紫灰色火山灰層（紫コラ）

紫灰色火山灰層（紫コラ）。874年の開聞岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて強く固結し，フォール・ユニットが認められる。第5層 c の最下部には，2cm以下の礫が2～5cmの厚さで堆積するが，これは貞観16年の火山活動に伴う最初の降下物とみられる。第5層

cの厚さは、約30～80cmであり、場所によっては一次堆積物を侵蝕して、クロスラミナを形成する堆積層が観察されることがある。

#### 第6層 暗オリーブ褐色土層

奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は874年開聞岳噴出物層に直接被覆され、旧地表面の地形をそのままに留めている。第6層は標準層位では、a, b, cの3分層が可能である。a層は腐食が進行しており、特に畠跡周辺では黒色が強くなる。b層はオリーブ褐色を呈するが、河川跡付近では砂層となる場合がある。c層は7層青コラの二次堆積層である。

#### 第7層 青灰色固結火山灰層（青コラ）

7世紀第4四半期に比定される開聞岳噴出物層で、下部には火山活動の初期に降下したと考えられるスコリアが2～5cm程度堆積する。さらに、暗橙色土層を5～10cm程度挟み、1～2cm程度のスコリア堆積が部分的に見られる場合があることから、火山活動の小休止期があったと考えられている。

#### 第8層 橙色土層

古墳時代に相当する扇状地堆積物層であり、5～30cmほど堆積する。層中には、スコリアのブロック（開聞岳の7世紀第4四半期の噴出物堆積層と休止期を挟んで下位に存在する初期の噴出物）や、砂層、池田湖起源の噴出物のブロック、池田湖降下軽石等を含む。古墳時代などのローリングを受けたものが検出される。

#### 第9層 暗褐色土層

古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田カルデラ降下軽石を若干含む。やや粘質であり、厚さは50cm～1m程度である。第9層中から遺構が掘りこまれた場合は土色などからの判別が困

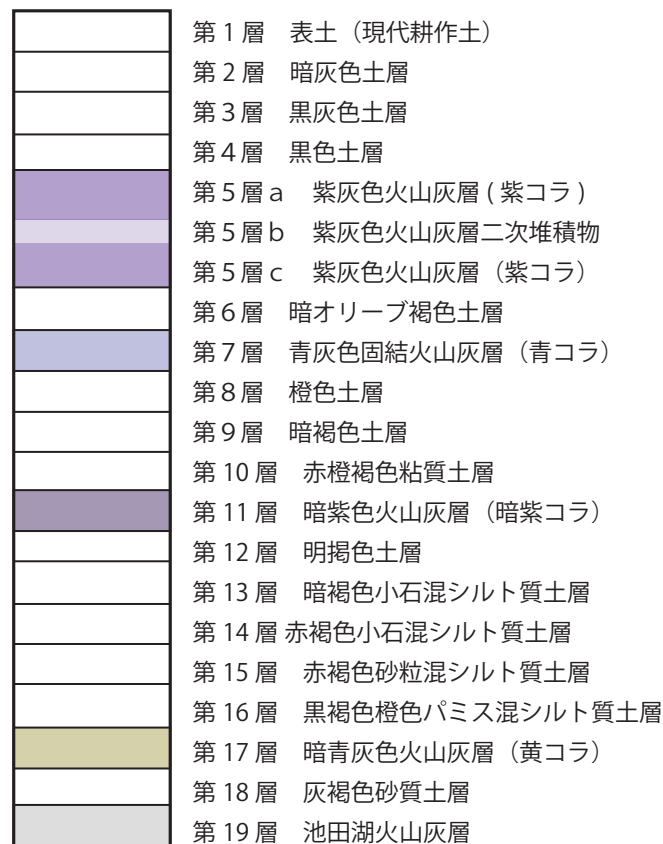


図6 橋牟礼川遺跡の基本層序

難であり、下位層の第10層に達している場合は、第10層上面で検出できる。第9層の形成は、出土須恵器から5世紀から6世紀代の集落形成による地層の攪乱と、複数回にわたる河川の氾濫などによる堆積などの要因が複合しているとみなされる。

#### 第10層 赤橙褐色粘質土層

弥生時代中期～後期の遺物包含層で、いわゆる山ノ口式土器などが出土する。基本的には扇状地堆積層で、池田湖降下火山灰のブロックを含む。第10層の中位から砂層ブロックが検出されることがある。第9層から掘り込まれた遺構は、通常、第10層に到達するため、第9層中に混在する弥生土器は第10層に包含されていたものがあると考えられる。

#### 第11層 暗紫色火山灰層（暗紫コラ）

弥生時代（山ノ口式土器段階）に降下した開聞岳噴出物堆積層である。強く固結せず、ブロック状に堆積していることが多い。層厚は0～5cm程度である。山ノ口遺跡、成川遺跡など、この火山灰が山ノ口式土器を被覆していた事例がある。

#### 第12層 明褐色土層

弥生時代前～中期にかけての遺物包含層で、第13層と色調は類似するが、粘性が強く粒度は小さい。

#### 第13層 暗褐色小石混シルト質土層

主に、刻目突帯文土器を包含する層で、小石が混じる。

#### 第14層 赤褐色小石混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含む。黒川式土器が主体となる。

#### 第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含むが、縄文時代後期の遺物が出土することがある。

#### 第16層 黒褐色橙色パミス混シルト質土層

主に、縄文時代後・晩期の遺物を含む。縄文時代後期の上加世田式土器、市来式土器などが確認されている。第14層から第16層までは、場所により欠落する場合があるが、第16層はコンスタントに確認することができる。

#### 第17層 暗青灰色火山灰層（黄コラ）

縄文時代後期の開聞岳噴出物で、上半は黄色細粒火山灰、下半は黒灰色スコリア及び粗粒火山灰の二層から構成される。ブロック状に残存し当時低い部分には10～15cm程度の層厚を確認することができる。成川遺跡などでは、「指宿式土器」を被覆していた事例がある。

#### 第18層 灰褐色砂質土層

縄文時代後期遺物包含層で「指宿式土器」を主に包含するが、同層より「阿高式土器」が出土している。下部は、池田湖降下軽石を含む砂層に変化し、池田湖火山灰層の二次的な堆積層となる。

#### 第19層 池田湖火山灰層

灰色～黄灰色を呈する層で、約5700年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものである。軽石を多く含み、軽石には角閃石が多く含まれる。同層が、この地域の地形基盤を成すものと考えられ、発掘調査では、現在のところ同層を除去した事例はない。指宿市北部の横瀬遺跡では2m以上の層厚を呈する。橋牟礼川遺跡付近では、池田火砕流堆積物は30m以上に達すると考えられている。

## 第3章 V区の調査結果

### 第1節 調査の概要

V区の調査は昭和63年7月4日から平成元年1月30日まで実施された。調査区は、指宿駅西部土地区画整備事業に伴い設置が計画された都市計画道路のうち、国道226号線から海に向けて東西方向に新設される幹線道路予定地の最も東側に、JR指宿枕崎線に面して設けられたVI区の西となりである(図7)。

### 第2節 古墳時代の遺構と遺物

#### (1) 遺構

V区においては、古墳時代に帰属する竪穴建物等の遺構が検出された。主体となるのは、第8層・第9層中で検出された竪穴建物等の遺構群である。検出された竪穴建物は53基である。橋牟礼川遺跡総括報告書(指宿市教育委員会2016)においては竪穴建物数を50基としているが、本書で



図7 調査区配置図

は調査時点で調査担当者が竪穴建物として記録したものをすべて記載することとしたため、3基増えたものである。竪穴建物は著しく切り合った状況で検出されており、遺構の全体形が不明瞭なものもある。このような状況は、V区周辺で建物の造営が繰り返された結果と考えられる。V区と同様に、指宿駅土地区画整理事業に伴う発掘調査区のうち、竪穴建物が数多く切り合って検出されているのは、I区の西端部分、VI区、XII区等があるが、最も切り合いが激しく、建物遺構が集中しているのがV区である。

ただ、V区で検出された竪穴建物には、VI区で検出された7世紀後半の第7層青コラ火山灰が降下する時点で埋没過程にあるものは確認できておらず、床面直上遺物で弥生土器が主となるような竪穴建物も確認されていない。

古墳時代に帰属する遺構の構成は、竪穴建物跡とみられる遺構53基（SIと表記）、土坑7基、溝状遺構1基である。なお、ピット状の窪みが集中する箇所が複数確認されている。その中で分布平面形から方形等を呈することから竪穴建物の掘削遺構と捉えたものが、SI31、SI44、SI45の3基である。それ以外に、平面形状が不整形を呈するものは4基程度あり、本来は何らかの遺構であったことが考えられる。

本稿の記載は、昭和63年度において作成された遺構平面図や層位断面図等の現場で作成された図面を基に行った。したがって、遺構の帰属層位や新旧関係等に関しては図面をもとに再構成し、既述のように調査当時、竪穴建物と記録されたもので、遺構番号がアルファベットで付されたもの等については、今回新たに遺構番号を付した。

### 第3節 調査区の層序

V区の層序は、表土は耕作に伴う盛土や客土などによる攪乱土等であることが多い。表土下は、中世（鎌倉～室町時代）の遺物包含層である4層黒褐色土となる。色調は7.5YR2/2である。

4層下は、開聞岳火山噴出物層である5層紫コラ火山灰層である。南壁の西側においては、5層が極めて厚く堆積しており、最上位から5層aの黒褐色固結火山灰層が2枚に細分される。それぞれ色調は、5YR2/2及び10YR2/3となる。5層中位の5層bは水流作用で生成されたものと考えられ、砂が多く混在する層である。上位にオリーブ黒色火山灰（5Y3/1）が堆積し、下位に黒色砂層（10YR2/1）が堆積している。上位のオリーブ黒色火山灰は倒壊建物内の二次堆積物中黒色に近い堆積物に類似している。5層cは下位に堆積する一次堆積物であり、フォールユニットが明らかで、最下部に火山礫の堆積がある。一次堆積物の色調は7.5YR2/1、火山礫の色調は10YR2/3となる。

6層は褐色土であり、色調は7.5YR4/4。

7層は青コラ火山灰層であり、上位の火山灰層（10YR1.7/1）はところどころブロック状に残存している場合もある。下位にはスコリア（5YR4/6）が堆積している。

8層と9層は古墳時代包含層であり、V区で53基確認されている竪穴建物の掘り込み層となっている。8層は赤褐色土層であり、色調により2細分される。上位を8層a、下位を8層bとした。色調は8層aが5YR4/6、8層bが7.5YR4/6である。

9層黒褐色土は8層と比較し腐食が進み、黒味が強い土色となっている。遺物を多く包含するとともに、竪穴建物の埋土となっている。土色自体の黒色が強いいため、平面ラインの検出の困難性が高い。このため、色調の明るい10層上面で平面ラインを把握できることが多い。

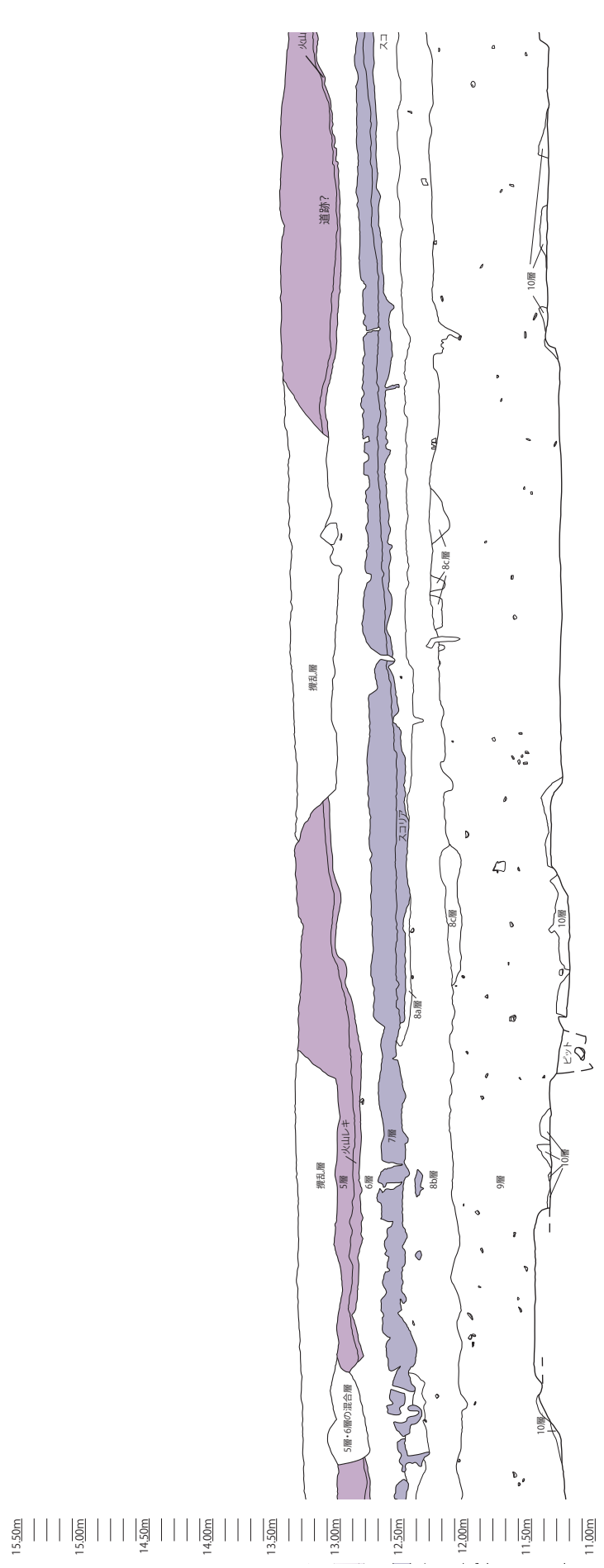
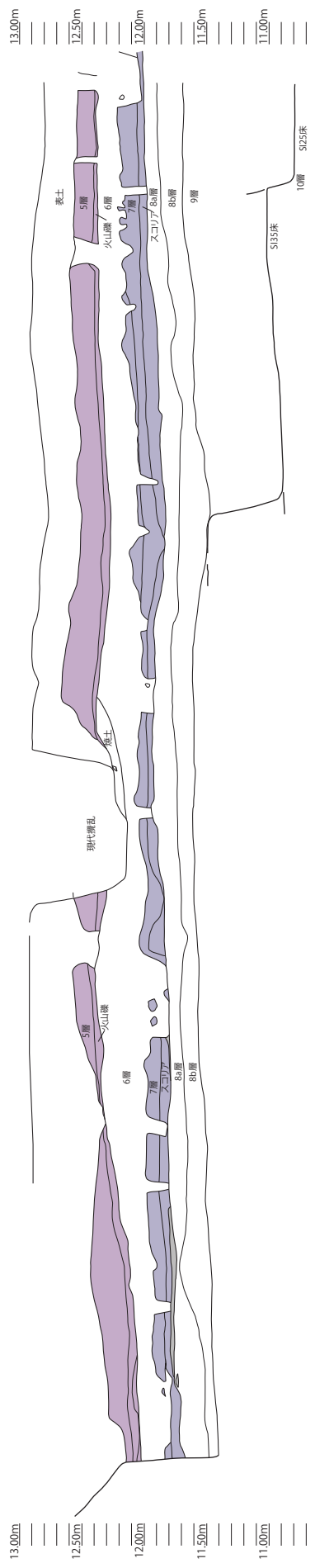


図8 調査区南壁層位断面図1 (S=1/50)

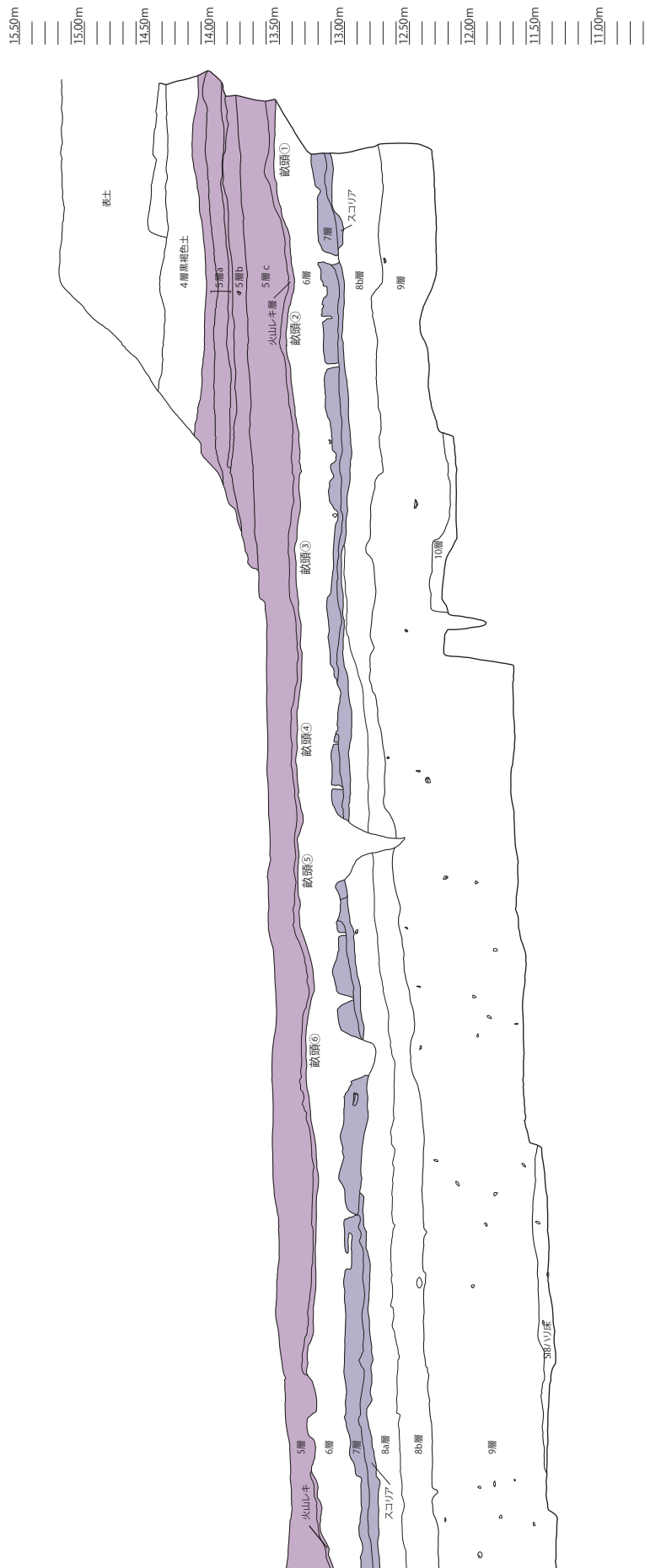


図9 調査区南壁層位断面図2 (S=1/50)

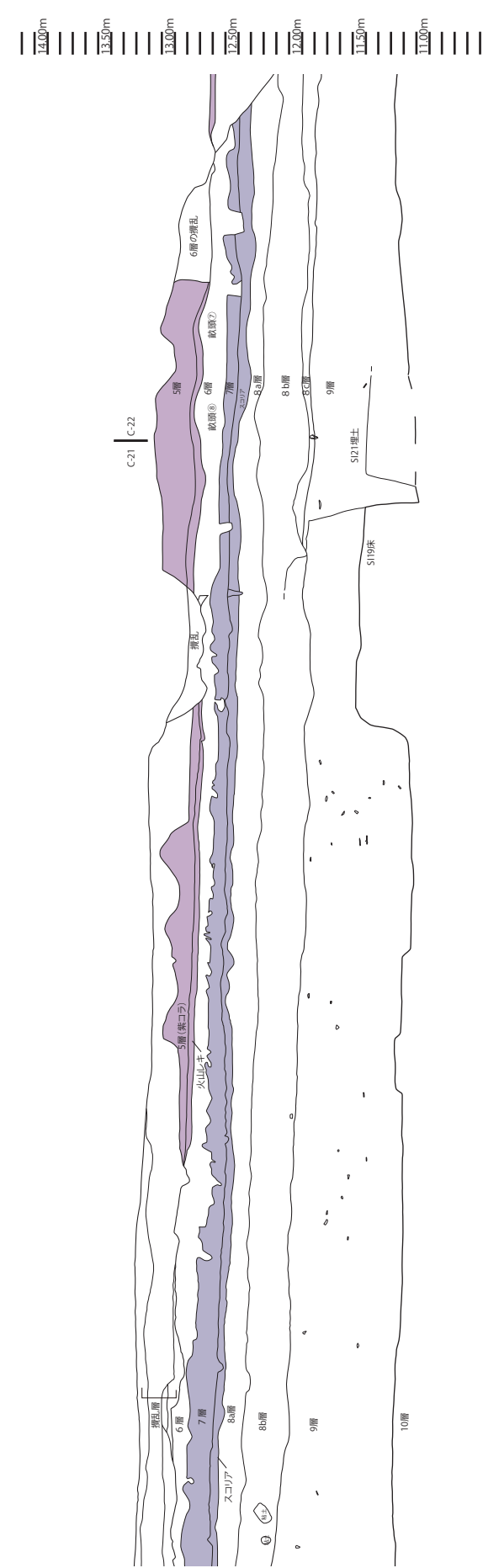
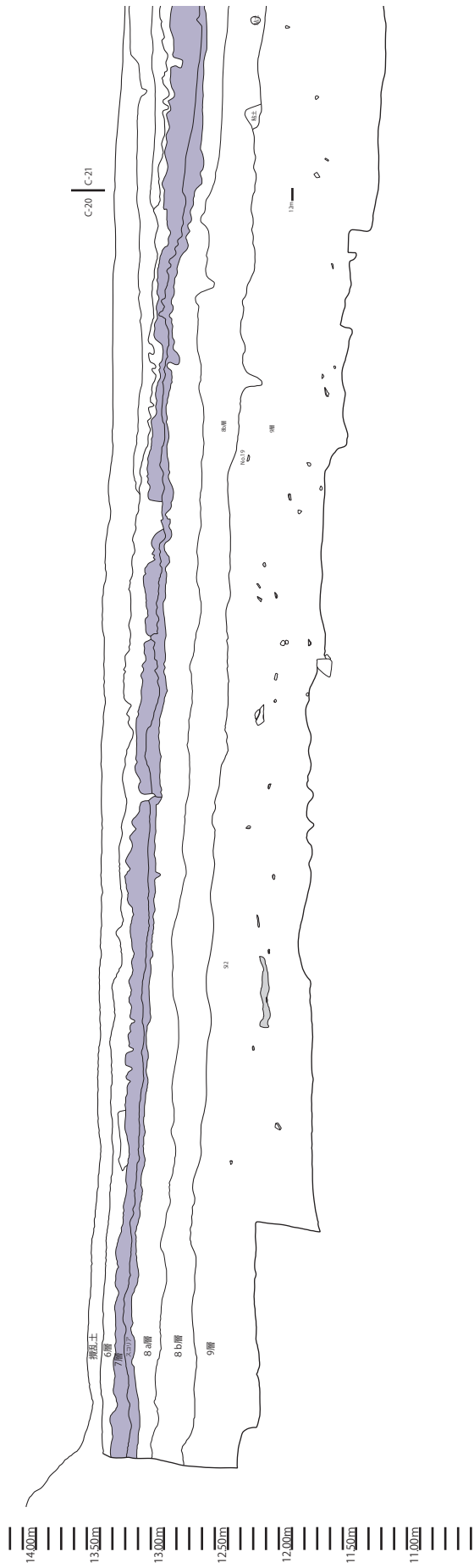


図 10 調査区北壁層位断面図 1 (S=1/50)



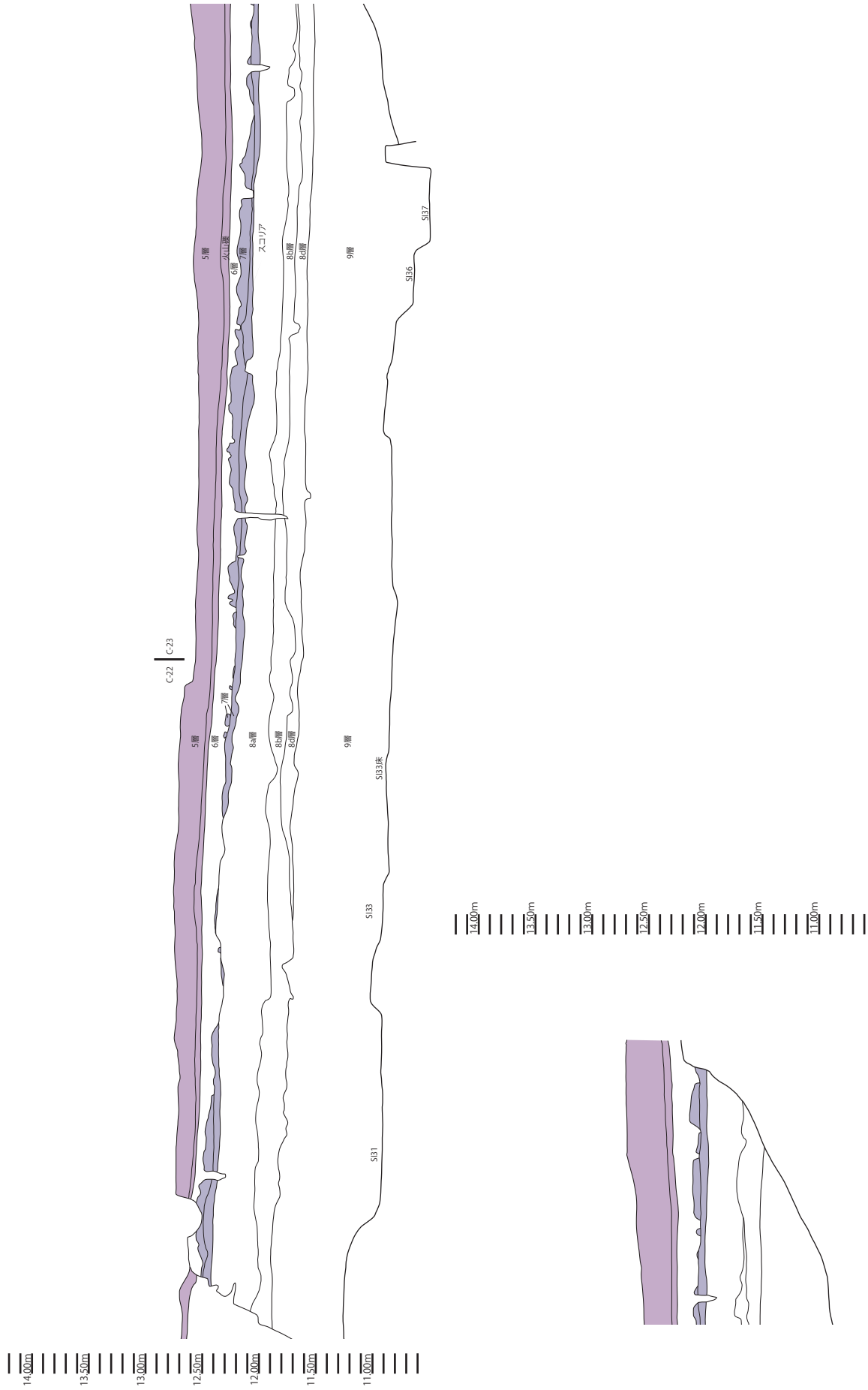


図 11 調査区北壁層位断面図 2 (S=1/50)

## 第4節 古墳時代の遺構と遺物

### (1) 遺構

#### ① 竪穴建物跡 (図13～図31・図版2～図版9)

##### S I - 1 (図18)

S I - 1 は、竪穴の北面上端ライン・西面上端ラインが検出されている。主軸は南北とみられ、方形プランを呈すると考えられる。検出された竪穴の東西幅は 3.4 m 以上となる。

S I - 1 は、S I 10 と切り合い関係にあり、切り合い順は、

(新) S I 10 → S I - 1 (旧)

と考えられる。

床面には貼り床が 2 回形成されている。1 回目の貼り床は厚さ 5 cm 程度であり、明褐色土 (Hue7.5YR5/6) の 10 層土を利用している。2 回目の貼り床は 9 層と 10 層の混合土とみられる土壌で形成している。2 回目の貼り床造営により床面に造りつけられていた小溝が埋められている。1 回目の貼り床層下部には 9 層と 10 層の混合土である赤土層 (Hue5YR) が確認でき、部分的には 9 層土のみがブロック状に入る部分もある。この層の下端は凹凸が多数見られることから、竪穴掘削の際の掘り具痕跡の可能性が考えられる。

したがって、床面の形成過程は、

掘り具による土坑の掘削→掘削凹凸面に混合土を入れ、整形→1 回目の貼り床の形成→生活利用→9 層と 10 層の混合土による 2 回目の貼り床形成→生活利用  
と考えられる。S I - 1 の東西断面では、2 回目の貼り床直上に厚さ 2 cm 程度のカーボン層 (Hue7.5YR) が見られる。カーボン層は貼り床を全面的に覆っているため、床面において火を使う等、何らかの行為の繰り返しによって形成されたか、意図的に床面を覆ったものと考えられる。

付帯遺構として、床面に土坑 1、南面上端ラインに接する位置に検出された土坑 2、調査区北側境界付近の土坑 3 の合計 3 基が検出された。土坑 1 は長軸 27cm、短軸 24cm の略円形である。土坑 2 は壁帯土坑であり、逆台形を呈し、幅 45cm、奥行 35cm を測る。土坑 1 と土坑 2 の間の床面には、幅 90cm、奥行 50cm の不整形の範囲で特にカーボンが集積する範囲がある。分布範囲は土坑 1 に偏っていることから、土坑 1 が火処であったと考えられ、カーボンは炉からかき出されたものとみられる。

出土遺物として、カーボン集積部分の床面直上出土の成川式土器の甕形土器 No. 1、剥片 No. 2 がある。No. 1 は甕または鉢の口縁部である。

##### S I 1 (図13)

S I 1 は、竪穴のコーナー部分のみが検出されている。コーナー部分が、約 90 度で方向を変えていることから、方形プランの竪穴建物跡と推定される。竪穴の法量は不明である。床面の付帯遺構等も不明である。

S I 1 は S I 3 と切り合い関係にあり、切り合い順は、

(新) S I 3 → S I 1 (旧)

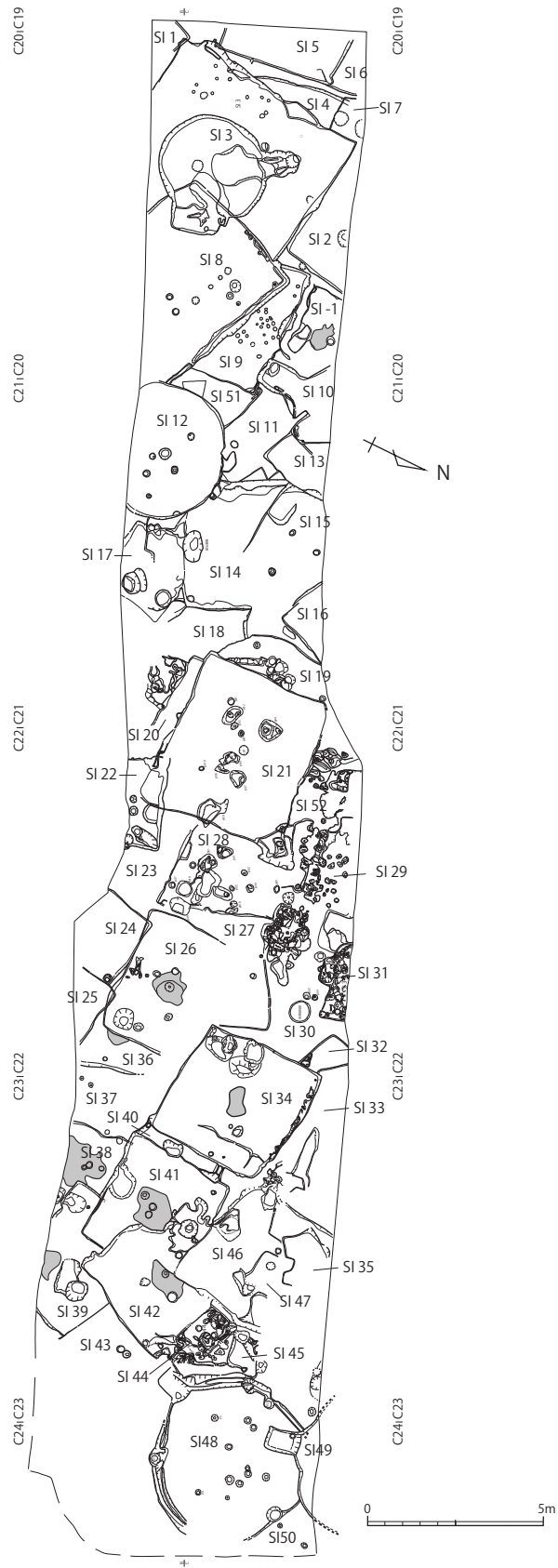


図 12 古墳時代遺構配置図 (S=1/200)

と考えられる。

付帯遺構は検出されていない。

### S I 2 (図 14・15, 図版 4)

S I 2 は、竪穴の東面上端ラインが検出されている。主軸は南北とみられ、方形プランを呈すると考えられる。検出された竪穴の一辺は 2 m 以上となる。

S I 2 と切り合い関係にある建物は、S I 3・S I 7 であり、切り合い関係は(新) S I 3→S I 2 (旧) は確認できるが、S I 7 との切り合い順については確認できていない

付帯遺構として、土坑 1 基が検出された。土坑は最大径 48cm の楕円形である。検出面からの深さは 17cm であり、埋土上面に土器片が入り込んでいた。

### S I 3 (図 14・図版 4)

S I 3 は、主軸を南北にとり、方形プラン+円形プランの 2 段掘りの竪穴建物である。ほぼ全体が検出されているが、竪穴の北面と西面上端ラインは全体形が検出されている。検出された竪穴の西面上端ラインは 5.7 m、北面上端ラインは  $4.5\text{ m} + \alpha$  を測り、検出面からの上段の方形竪穴の深さは約 30cm を測る。下段の円形竪穴は、ややゆがんだ形状であり、直径は 3.1 m 前後となっている。上段方形竪穴床面からの深さが最大 45cm 程度である。円形竪穴は東側に方形の張り出しを伴うが、法量は奥行 75cm、幅 1.7 m を測る。また、北西側の舌状の張り出しを伴うが、法量は幅 75cm、奥行 1.1 m である。

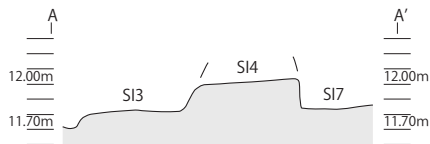
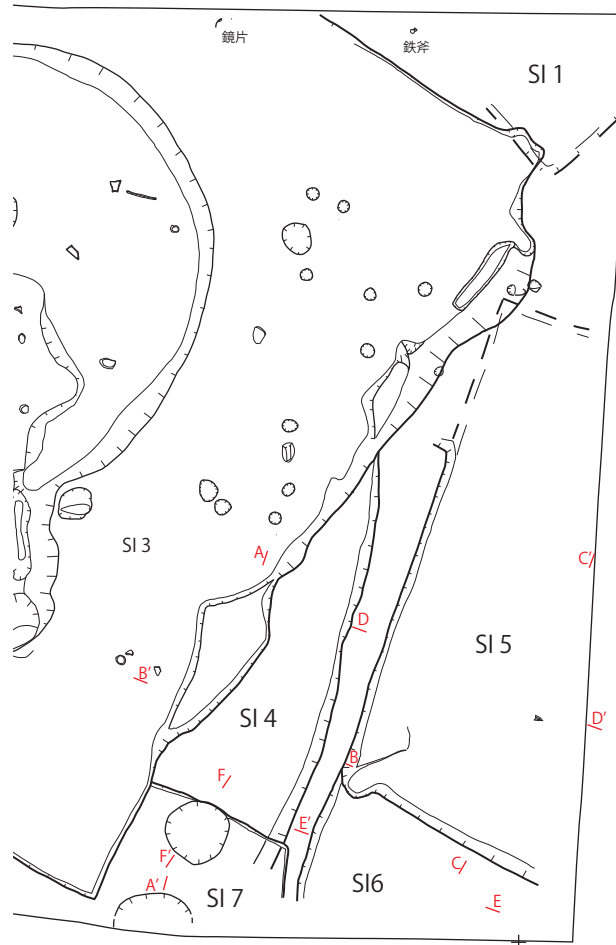
S I 3 は S I 2・S I 4・S I 7・S I 8 と切り合い関係にあり、切り合い順は、  
(新) S I 8→S I 3 (旧)、(新) S I 3→S I 2 (旧)、(新) S I 3→S I 4 (旧)、  
(新) S I 3→S I 7 (旧)

と考えられる。

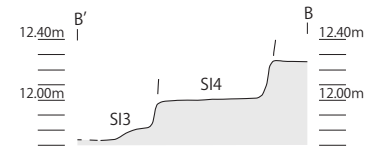
S I 3 の床面の形状については、上段の方形竪穴の床面はレベル 10 m 70cm 前後に収まる平坦な造りとなるが、下段の円形竪穴の床面は、舌状の張り出し部分端部から舌状のやや高い部分 (A) があり、この上面は土坑 1 に向かって傾斜している。

付帯遺構として、方形の上段にピット 13 基 (Pit 1・Pit 2・Pit 3・Pit 4・Pit 5・Pit 6・Pit 7・Pit 8・Pit 9・Pit 10・Pit 11・Pit 12・Pit 13)、下段の円形竪穴内に略円形の土坑 1 基 (土坑 1) がある。また、舌状の張り出し内部には円形の土坑 1 基 (土坑 2)、楕円形の小土坑 2 基 (土坑 3・4) がある。舌状の張り出し部分は上段の方形竪穴のコーナーに向かって伸びている。

Pit 1 は長径 22cm、短径 18cm の略円形である。Pit 2 は直径 20cm の略円形である。Pit 1・Pit 2 は主柱穴と考えられる。以下は直径が小さい小ピットである。Pit 3 は長径 13cm・短径 12cm の略円形である。Pit 4 は長径 10cm・短径 8cm の楕円形である。Pit 5 は長径 8cm・短径 7cm の楕円形である。Pit 6 は長径 8cm・短径 7cm の楕円形である。Pit 7 は直径 9cm の略円形である。Pit 8 は長径 8cm・短径 7cm の楕円形である。Pit 9 は長径 9cm・短径 8cm の略円形である。Pit 10 は長径 11cm・短径 10cm の略円形で、深さ 3cm である。Pit 11 は径 8cm の略円形である。Pit 12 は直径 7cm の略円形である。Pit 13 は直径 7cm の略円形である。Pit 3 以降の 11 基はいずれも直径 11cm 以内と小型である。配置に関しては上段の方形竪穴の床面西側に偏っていることから主柱穴とは考



SI4 南北断面图



SI4 東西断面图



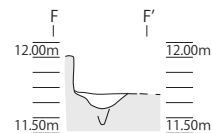
SI5 南北断面图



SI5 東西断面图



SI6 東西断面图



SI7 土坑断面图

图 13 SI 1·4·5·6·7 平面图·断面图 (S=1/50)

えにくい。確認されている支柱は西側床面の2基であるが、床面東側がS I 8によって切られているため、本来は4支柱であった可能性が考えられるところである。

方形竪穴の西面の竪穴掘り方部分には、いくつかの付帯遺構とみられるものが確認されている。南西隅付近の竪穴下端に長さ55cm、幅10cmの溝状の遺構が確認されているが、壁帯溝の一部と考えられる。また、幅1.2m、奥行45cmの不整形の段が見られるが、建物の出入口ステップの可能性も考慮しておきたい。

円形竪穴床面中央の土坑1は長軸33cm、短軸32cmの略円形であり、断面は深さ8cmで断面逆台形を呈する。埋土には、スミやカーボンが含まれている。また、円形竪穴床面には多量にススが付着しており、土坑1は土坑炉と考えられる。土坑2・3・4は円形竪穴の舌状張り出し部分に設けられている。舌状張り出し部分の床面は円形竪穴との接続部分から、約40cm張り出しに入り込んだ部分を頂部として、土坑2と円形竪穴床面に向かって傾斜している。土坑2は直径36cmの平面略円形で、張り出しの外側に向かって掘りこまれた形になっているため、やや斜めに立ち上がっている。土坑3・土坑4は張り出し下端にそって設けられており、長さは土坑3が40cm、土坑4が57cmである。

円形竪穴に造りつけられた方形状の張り出し部分の床面は、円形竪穴床面より10cm程度高く、ベッド状遺構であったとみられる。さらに、方形張り出しから、円形竪穴床面に向けて10cm程度の高低差のある舌状の高まり(B)がみられ、舌状張り出しから延びる高まり(A)と接する。AとBの機能については不明である。

出土遺物として、袋状鉄斧No.3・青銅製鈴No.4がある。

S I 3のように、「方形竪穴+柄鏡形円形竪穴」に類似した形態の建物遺構の例は、昭和53年度の宮之前遺跡調査で2基検出されている<sup>(1)</sup>。2号建物跡と7号建物跡である。2号建物跡は5.8m×5.4mの方形竪穴の内部に、直径3.6mの円形竪穴を掘削したものである。張り出し部分は方形の土坑であり、張り出し長が40cm程度と短い。支柱穴は4基であり、円形竪穴の掘り方と重なっている。このため、円形竪穴の掘削は、方形竪穴の掘削後にまず支柱を埋設し、その後に行われたものと考えられる。

7号建物跡は5.76m×5.5mの方形竪穴の内部に、長径3.15m・短径3mの円形竪穴を掘削したものである。張り出し部分は方形の土坑であり、張り出し長が1.1mである。支柱穴は7基検出されているが、このうち同時期に6基が使用されたと考えられる。支柱は円形竪穴の掘り方と重なっているか近接している。

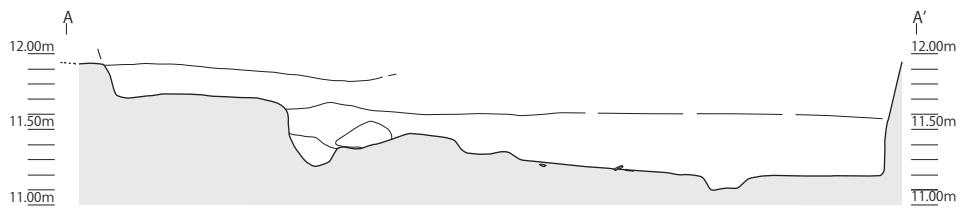
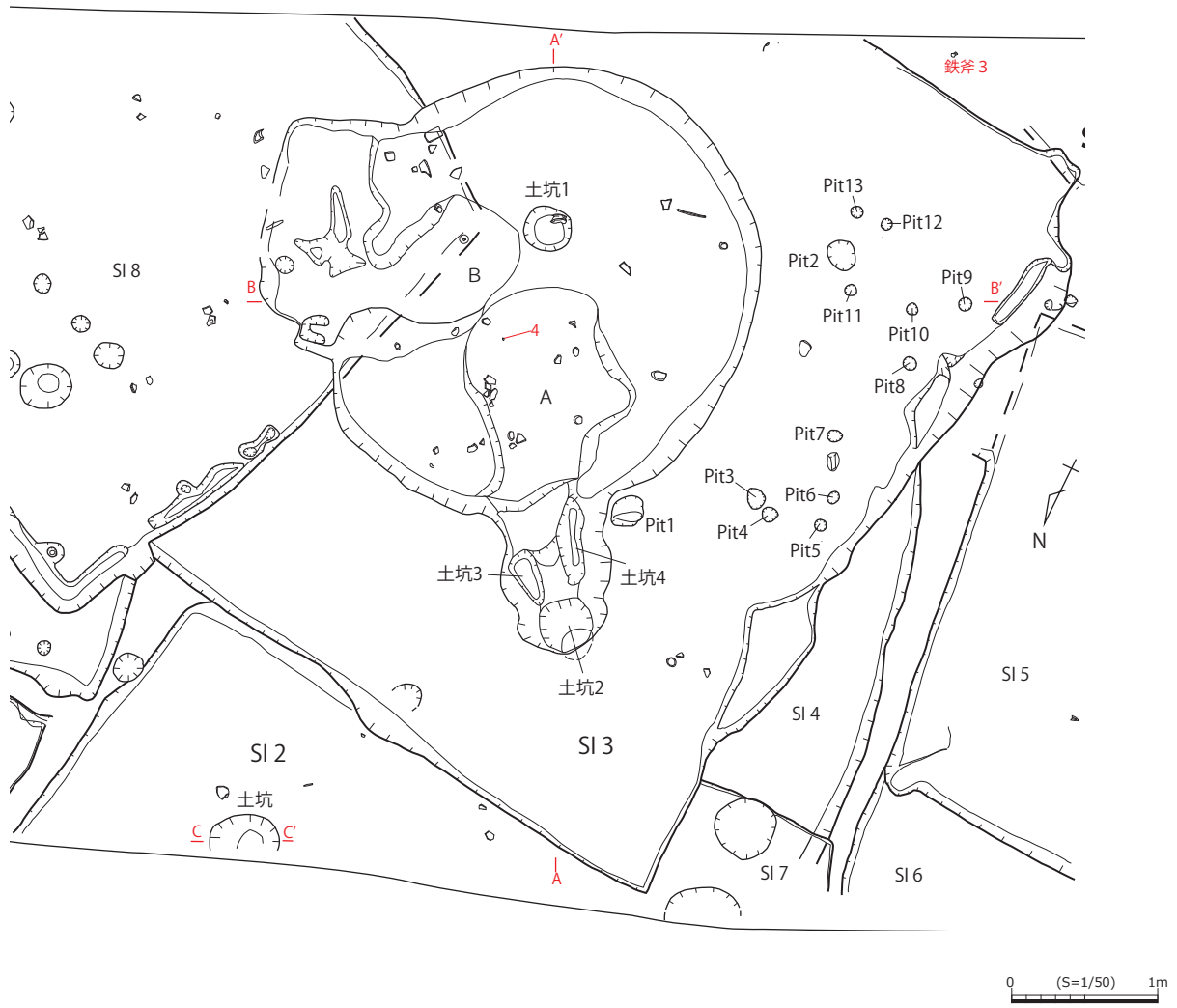
宮之前遺跡7号建物跡とS I 3とは、方形竪穴と円形竪穴の法量が近似している。ただ、宮之前遺跡7号建物跡の張り出しは主軸方向に対し90度であるのに対し、S I 3は45度となっており、ずれている。また、張り出しの形状は宮之前遺跡7号建物跡が方形であるのに対し、S I 3は舌状となり異なっている。

註

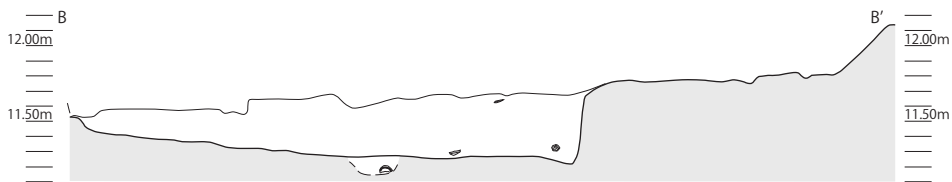
(1) 指宿市教育委員会 1981 『宮之前遺跡』指宿市埋蔵文化財調査報告書5

## S I 4 (図13・図版5)

S I 4は、竪穴の大部分をS I 3に切られた状態であり、わずかに竪穴掘り方の西面の一部が



SI 3南北断面图



SI 3东西断面图

图 14 S12·3平面图·断面图 (S=1/50)

検出された。なお、竪穴北西隅はS I 7に切られており、検出されていない。竪穴掘り方の西面は長さ2.5mが検出され、やや曲線的な部分があるものの直線的に伸びており、方形竪穴であると推定できる。竪穴の法量は不明である。

S I 4はS I 3・S I 7と切り合い関係にあり、切りあい順は、

(新) S I 3→S I 4 (旧), (新) S I 7→S I 4 (旧)

と考えられる。

付帯遺構は検出されていない。

### S I 5 (図13・図版5)

S I 5は、竪穴の東面上端ラインと北面上端ライン、南面上端ラインが検出されており、北東隅のコーナー部分が確認されているとともに、竪穴の東面上端ラインと南面上端ラインの位置関係から南東隅にコーナー部分があったと推定され、いずれも直角に近い角度で曲がると考えられることから、方形竪穴建物と考えられる。南東のコーナー部分はS I 3に切られている。竪穴の西側半分以上が調査区の外側に出ているため、法量は不明である。主軸は略南北と推定する。竪穴の東面ラインの法量は3.3m、北面ラインは1.4m+ $\alpha$ のみの検出である。検出面からの竪穴深さは約13cmを測る。

付帯遺構は検出されていない。なお、竪穴北東隅のコーナー部分はわずかに張り出し気味の形状である。

S I 5はS I 3・S I 6と切り合い関係にあり、切りあい順は、

(新) S I 3→S I 5 (旧), (新) S I 5→S I 6 (旧),

と考えられる。

### S I 6 (図13)

S I 6は、S I 5に大半を切られている。床面と竪穴の東面上端ラインがわずかに検出されたのみである。検出面からの竪穴深さは約2cm程度であり、主軸方向は不明であり、東面上端ラインは90cmのみの検出である。竪穴の法量は不明である。

S I 6とS I 5と切り合い順は、

(新) S I 5→S I 6 (旧),

と考えられる。

埋土中からの遺物の出土はない。

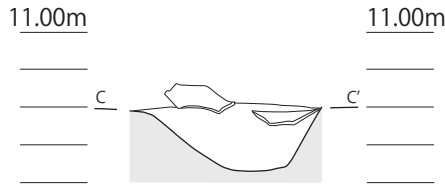
### S I 7 (図14)

S I 7は、竪穴の南面上端ラインの一部と西面上端ラインの一部、南西のコーナーが検出された。南西のコーナー角度はやや開くが、方形竪穴建物と考えられる。検出された南面上端ラインは1m、西面上端ラインは30cmを測る。

S I 7はS I 3・S I 14と切り合い関係にあり、切りあい順は、

(新) S I 3→S I 7 (旧), (新) S I 7→S I 4 (旧)





SI 2土坑断面図 (S=1/20)

図 15 S I 2 土坑断面図 (S=1/20)

と考えられる。

付帯遺構は検出されていない。

埋土中からの出土遺物は、成川式土器短頸壺口縁部No. 5，勾玉あるいは鏡を模した可能性のある滑石製模造品No. 6，No. 7は磨製石鏃片である。軽石製加工品として，No. 8がある。

### S I 8 (図 16・図版 4)

S I 8は，主軸を略東西にとり，長軸  $4.9\text{ m} + \alpha$ ，短軸  $4.2\text{ m}$ の長方形プランを呈する可能性がある。検出面からの竪穴深さは約  $20\text{ cm}$ を測る。北面と西面の掘り方下端には溝状のくぼみがあり，北面では床面から  $15\text{ cm}$ 程度の深さとなる。

S I 8は，S I 3・S I 9・S I 12・S I 51と切り合い関係にあり，切りあい順は，  
 (新) S I 8→S I 3 (旧)，(新) S I 8→S I 9 (旧)，(新) S I 8→S I 51 (旧)，  
 (新) S I 12→S I 8 (旧)と考えられる。

建物床面にはカーボンが付着しており，付帯遺構として土坑 1 基，ピット 8 基 (Pit 1・Pit 2・Pit 3・Pit 4・Pit 5・Pit 6・Pit 7・Pit 8)，壁帯溝が検出された。

土坑は長軸  $35\text{ cm}$ ，短軸  $30\text{ cm}$ を測り，深さは  $49\text{ cm}$ を測る。土坑内部にはカーボンが付着していた。Pit 1は長軸  $12\text{ cm}$ ，短径  $11\text{ cm}$ の略円形である。Pit 2は長軸  $21\text{ cm}$ ，短径  $20\text{ cm}$ の略円形である。Pit 3は長軸  $20\text{ cm}$ ，短径  $17\text{ cm}$ の略円形である。Pit 4は長軸  $12\text{ cm}$ ，短径  $11\text{ cm}$ の略円形である。Pit 5は長軸  $13\text{ cm}$ ，短径  $12\text{ cm}$ の略円形である。Pit 6は長軸  $22\text{ cm}$ ，短径  $20\text{ cm}$ の略円形である。Pit 7は長軸  $16\text{ cm}$ ，短径  $14\text{ cm}$ の略円形である。Pit 8は長軸  $20\text{ cm}$ ，短径  $18\text{ cm}$ の略円形である。Pit 3・Pit 4・Pit 5・Pit 6・Pit 7は長軸に並行して直線的に並んでおり，主柱が含まれると考えられる。ただ，これが中心軸を形成するには，東側にずれている。同時に，西側に平行した軸を形成するピット列が検出されていれば，主柱が 4 穴，6 穴といった平行軸からなる構造となることが期待できる。例えば，S I 3の張り出し部分で検出されたピットを，Pit 3に対応するものとするれば，この可能性も考えられる。

壁帯溝は北面と西面の竪穴下端にみられる。北面に関しては，1カ所で  $10\text{ cm}$ 弱の断絶を見せるが，ほぼ全長に渡り設けられていたものと考えられる。検出全長は  $4.4\text{ m}$ 程度を測り，西面に延びている。下端幅は  $5\text{ cm} \sim 10\text{ cm}$ 程度である。北側コーナー付近で小ピットが隣接している。西面では，長さ  $70\text{ cm}$ と  $30\text{ cm}$ の小型溝が 2 基確認されている。

S I 8の出土遺物としては，成川式土器の甕口縁部No. 9・No. 103，同底部No. 11，壺口縁部No. 12，埴胴部片No. 13がある。石器としては，磨製石器の刃部とみられる破片No. 14，端部に敲打痕

がみられるNo. 15, 軽石製加工品No. 16・No. 17。青銅鏡片No. 18がある。

No. 12を除く出土遺物は床面直上出土である。

### S I 9 (図 18・図版 4)

S I 9は、他の建物との切り合いが著しい建物であり、竪穴の北面・東面・西面上端ラインの一部が検出されている。竪穴の北面上端ラインに関しては北東コーナーと北西コーナーが検出されており、いずれも直角に近い角度で曲がることから方形竪穴建物であると考えられる。S I 9は主軸を南北にとるとみられる。長軸 3.8 m, 短軸 2 m +  $\alpha$  である。検出面からの竪穴深さは 20cm を測る。

S I 9はS I 8・S I 10・S I 11・S I 51と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 8→S I 9 (旧), (新) S I 9→S I 51 (旧), (新) S I 9→S I 11 (旧),

(新) S I 10→S I 9 (旧)

と考えられる。なお、S I - 1とは隣接しているが、新旧関係は不明である。

付帯遺構として床面にピット 21 基が検出された。Pit 1は長径 12cm, 短径 10cmの楕円形である。Pit 2は長径 12cm, 短径 10cmの略円形である。Pit 3は直径 11cmの略円形である。Pit 4は長径 13cm・短径 11cmの楕円形である。Pit 5は長径 10cm・短径 7cmの略円形である。Pit 6は長径 10cm・短径 9cmの楕円形である。Pit 7は直径 8cmの略円形である。Pit 8は直径 6cmの略円形である。Pit 9は直径 7cmの略円形である。Pit 10は直径 7cmの略円形である。Pit 11は直径 5cmの略円形である。Pit 12は直径 7cmの略円形である。Pit 13は長径 9cm, 短径 8cmの略円形である。Pit 14は長径 10cm, 短径 8cmの略円形である。Pit 15は長径 10cm, 短径 7cmの楕円形である。Pit 16は長径 10cm, 短径 9cmの略円形である。Pit 17は直径 10cmの略円形である。Pit 18は長径 11cm, 短径 9cmの楕円形である。Pit 19は長径 13cm, 短径 6cmの不整形である。Pit 20は直径 9cmの略円形である。Pit 21は長径 8cm, 短径 6cmの略円形である。Pit 22は直径 8cmの略円形である。Pit 23は直径 8cmの略円形である。Pit 24は直径 9cmの略円形である。

S I 9の床面出土遺物としては、砥石No. 19, 敲石No. 20がある。また、他に北面立ち上がり部分に土器片がまとまって出土している。

### S I 10 (図 18・図版 5)

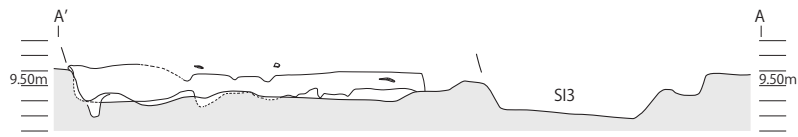
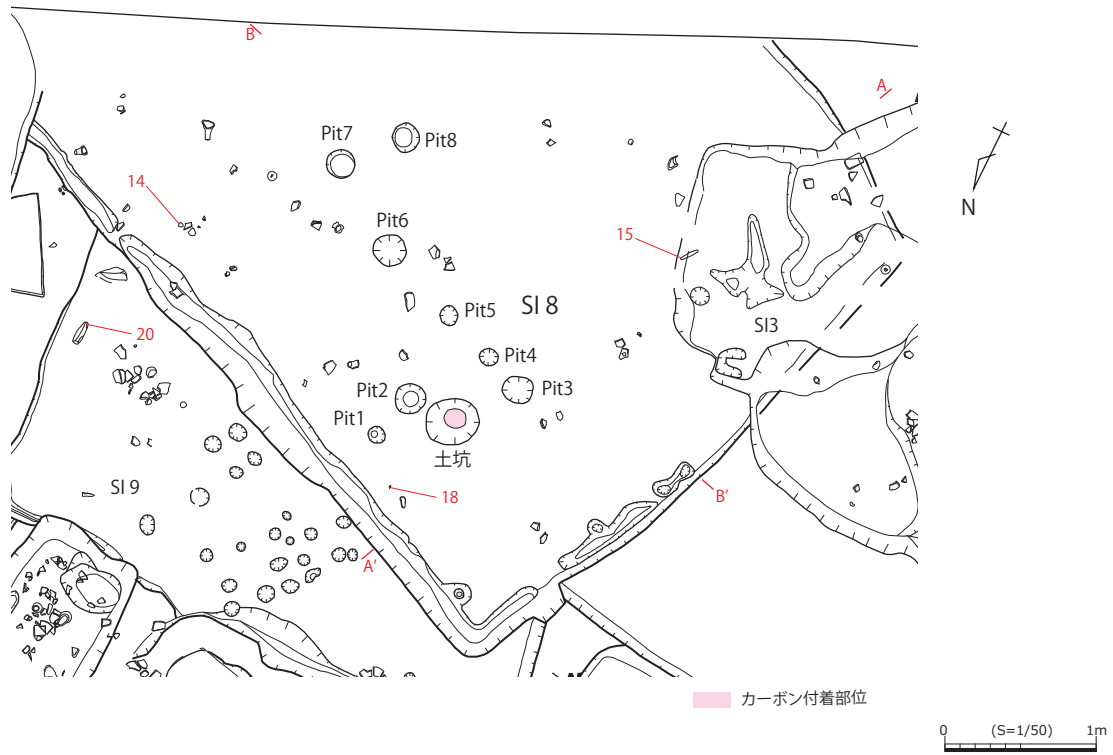
S I 10は、およそ竪穴の半分以上が調査区外に出ており、全形は不明であるが、円形竪穴に張り出しを造りつけた柄鏡形の平面形に類似している。円形部分の最大検出幅は 2.6 m, 張り出しを含めた最大検出奥行は 2.4 m である。円形部分は 3分の1程度の検出であり、最大径はさらに大きいとみられる。検出面からの竪穴の深さは最大で 40cm程度である。張り出し部分の法量は、奥行き 1.1 m, 幅 90cmを測り、浅い土坑を伴う。床面は円形竪穴に向けて緩やかに高まっている。主軸は南北方向と考えられる。

本調査区で検出された竪穴建物の内、S I 3が張り出しを持つ円形竪穴と方形竪穴との組み合わせになっている。S I 3は上段の方形竪穴床面に支柱穴を配置する。

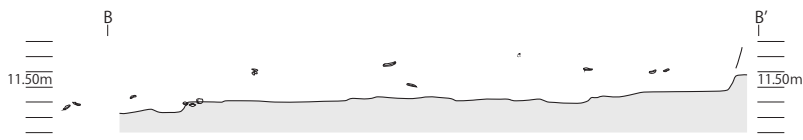
S I 10はS I - 1・S I 9・S I 11・S I 13と切り合い関係にあり、切りあい順は、

(新) S I 10→S I - 1 (旧), (新) S I 10→S I 9 (旧), (新) S I 10→S I 11 (旧),

(新) S I 10→S I 13 (旧)



SI8 南北断面図



SI8 東西断面図

図 16 S I 8 平面図・断面図 (S=1/50)

と考えられる。

付帯遺構として、円形竪穴部分に造りつけられた間仕切り状遺構と円形竪穴下端の溝状遺構、そして、張り出し部分の浅い土坑1基がある。円形竪穴部分に造りつけられた間仕切り状遺構は、長さ50cm、幅約10cm、高さ25cmを測る。また、張り出し部分の土坑は、長軸40cm、短軸30cmの不整楕円形を呈している。円形竪穴床面には柱穴の検出はない。S I 10がS I 3のような二段掘りの竪穴建物であったなら、円形竪穴の外部に柱穴が検出されることが考えられるが、S I 10周辺には確認されていない。

指宿市内における間仕切りを持つ竪穴建物の事例は、南丹波遺跡にある。南丹波遺跡では、円形と方形の竪穴建物に間仕切りが複数設けられ、花卉状を呈する形態となる例が5例、円形竪穴に間仕切りが設けられた例が2例ある。時期は、弥生時代終末から古墳時代初頭の中津野式土器の時期に位置付けられている。一方、S I 10が切っているS I 13は、古墳時代中期に位置付けられると考えられるため、S I 10も古墳時代中期を上限とすることになり、南丹波遺跡事例とは時期が離れているところである。

S I 10の出土遺物としては、成川式土器甕No. 21・No. 22・No. 24、同突帯部No. 23、脚部No. 25・No. 26、壺底部No. 27、高杯杯部No. 28、埴No. 29・No. 30、ボール形の鉢No. 31、扁平打製石斧No. 32がある。

#### S I 11 (図18・図版5)

S I 11は、S I 9・S I 10・S I 12・S I 13・S I 14・S I 51から切られており、周囲の竪穴建物の中でも最も古い建物であると考えられる。このため、検出されたのは床面のみであり、平面形状や法量は不明である。

付帯遺構として、床面にピット1基が検出されている。法量は長軸21cm、短軸19cmを測る。

出土遺物として、No. 33の埴がある。埴は床面直上出土である。

#### S I 12 (図17・図版5)

S I 12は、円形竪穴建物と考えられ、全体の4分の3程度が検出された。竪穴の直径は3.9mで、検出面からの竪穴深さは最大で約40cmを測る。主軸方向は明瞭ではない。

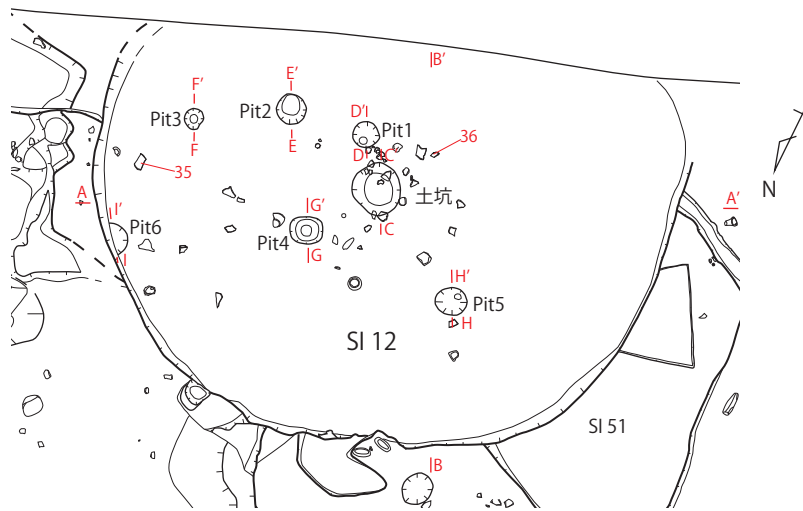
S I 12は、S I 8・S I 11・S I 14・S I 51と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 12 → S I 8 (旧)、(新) S I 12 → S I 11 (旧)、(新) S I 12 → S I 14 (旧)、  
(新) S I 12 → S I 51 (旧)

と考えられ、このブロックではS I 12が最も新しい建物となる。

付帯遺構として床面にピット6基(Pit 1, Pit 2, Pit 3, Pit 4, Pit 5, Pit 6)と土坑1基を伴っている。

Pit 1は長径18cm、短径17cm、深さ12cmの略円形である。Pit 2は径20cm、深さ17cmの略円形である。Pit 3は長径14cm、短径12cm、深さ10cmの不整円形である。Pit 4は長径21cm・短径18cm、深さ9cmの楕円形である。Pit 5は長径22cm・短径17cm、深さ14cmの楕円形である。Pit 6は径21cmの楕円形、深さ25cmである。

ピットは東半に偏る傾向がみられるが、Pit 2とPit 5を主柱穴とする2主柱の軸を想定するこ



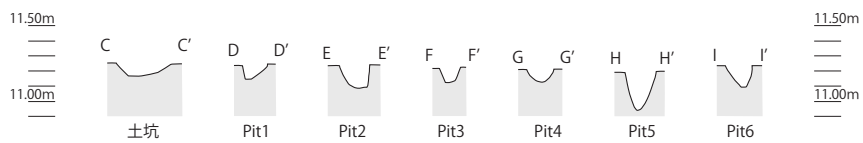
0 (S=1/50) 1m



SI12東西断面図



SI12南北断面図



SI1内遺構断面図

図 17 S I 12 平面図・断面図 (S=1/50)

とも可能であること、竪穴に接したピットは Pit 6 のみであり、円形竪穴の床面に複数のピットが確認されていることなどから、S I 3 のように方形+円形の二段掘り竪穴建物である可能性は高くないと考える。

土坑は床面のほぼ中央に位置し、長径 35cm、短径 32cm の略円形であり、断面は逆台形状を呈し、深さ 10cm を測る。

S I 12 の出土遺物としては、山ノ口式土器甕口縁部 No. 34、成川式土器甕 No. 35・No. 36、甕脚台 No. 38、小型壺底部 No. 39、高杯脚台 No. 37、磨製石器 No. 40、長細い形状の磨石 No. 41、端部に敲打痕が集中する敲石 No. 42、軽石製加工品 No. 43・No. 44・No. 45 がある。

### S I 13 (図 18)

S I 13 は、竪穴のコーナー 1 か所と竪穴の東面上端ライン・南面上端ラインの一部が検出された。コーナーは直角よりやや鋭角に曲がっているが、おそらく方形竪穴建物であると考えられる。竪穴の北側部分は調査区外に出ていることから、検出された部分の竪穴長は 2.1 m、幅は 1 m であり、全体法量は不明である。検出面からの竪穴深さは 20cm を測る。

S I 13 は、S I 10・S I 11・S I 14・S I 15 と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 13 → S I 11 (旧)、(新) S I 10 → S I 13 (旧)、(新) S I 13 → S I 14 (旧)、  
(新) S I 15 → S I 13 (旧)

と考えられる。

付帯遺構は検出されていない。

出土遺物として、成川式土器の甕口縁部 No. 46・No. 47、同脚台 No. 48、壺形土器胴部 No. 50、同底部 No. 49、高杯口縁部 No. 51 があり、石器では、頁岩製剥片 No. 52、軽石製加工品 No. 53・No. 54 がある。

### S I 14 (図 19・図 20・図版 5)

S I 14 は、他の建物との切り合いが著しい建物であり、竪穴の東面・南面・西面上端ラインの一部が検出されており、同時に竪穴の北面上端ラインに関しては直角に近い角度の南東コーナーが検出されており、方形竪穴建物であると考えられる。S I 9 は主軸を南北にとるとみられる。東西幅 3.6 m、南北長は  $3\text{m} + \alpha$  である。検出面からの竪穴深さは約 36cm を測る。

S I 14 は、S I 11・S I 12・S I 15・S I 17・S I 18 と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 14 → S I 11 (旧)、(新) S I 12 → S I 14 (旧)、(新) S I 15 → S I 14 (旧)、  
(新) S I 14 → S I 17 (旧)、(新) S I 14 → S I 18 (旧)

と考えられる。なお、明確な切りあい関係は確認できていないが、S I 14 は S I 16 に切られていると考えられる。

付帯遺構として竪穴の南面ラインの中央付近で竪穴掘り方に接した壁帯土坑が検出された。土坑内には台石 (No. 58) が入り込んだ状態で確認されるとともに、土坑に接した床面直上に鉄滓 (No. 59～64) が出土しており、鍛冶遺構の可能性が考えられる。

土坑の法量は、幅 90cm、奥行 53cm の楕円形で、深さは 15cm を測る。断面形状は浅いボール状を呈する。

S I 14 の出土遺物としては、成川式土器甕 No. 55・No. 56、鉢 No. 57 のほか、上記の鍛冶遺構に

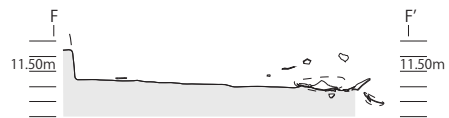
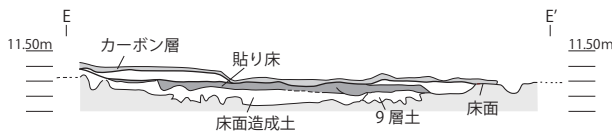
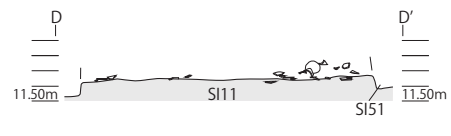
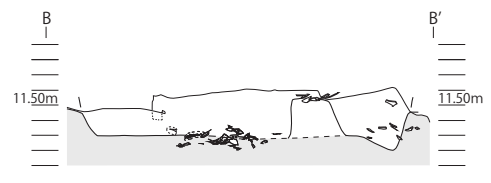
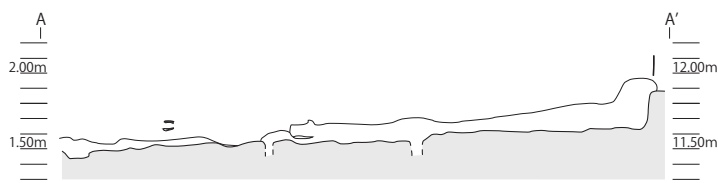
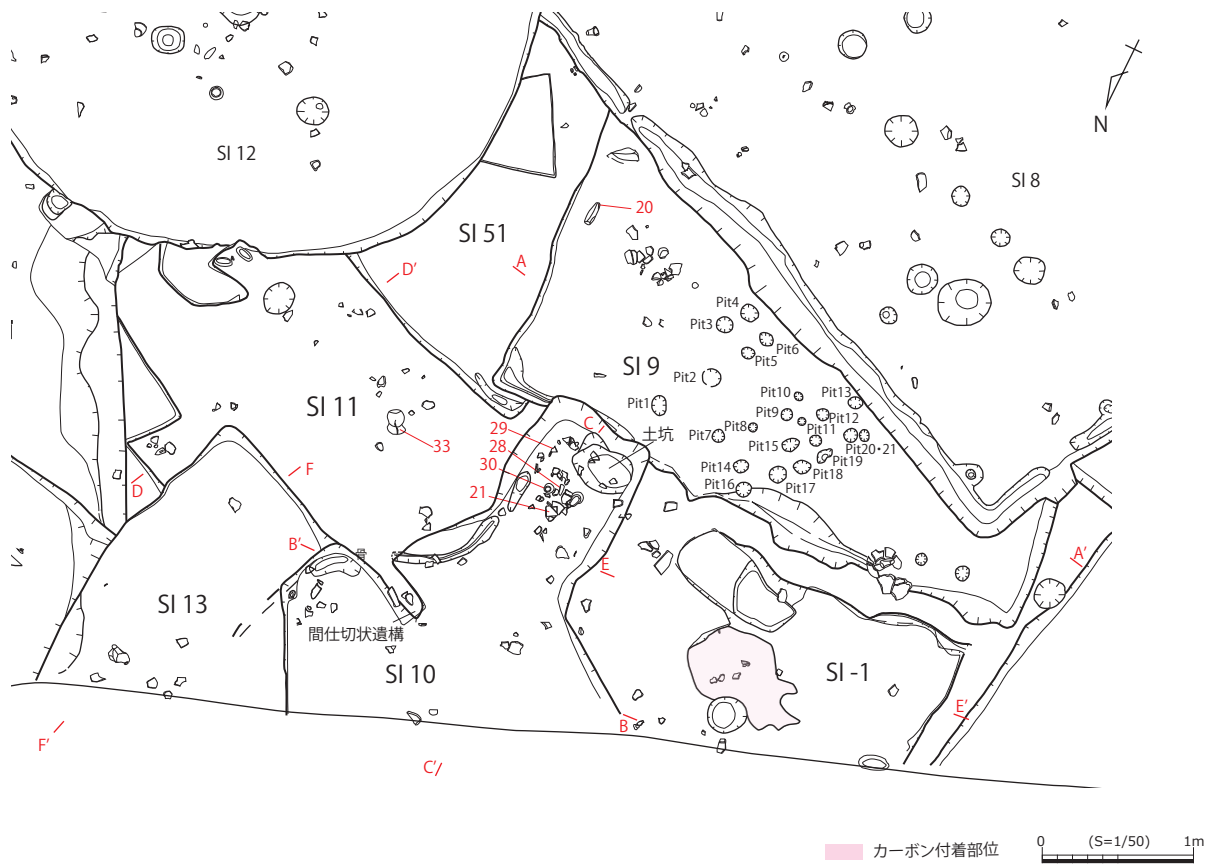


図 18 S I 9・10・11・13・-1・51 平面図・断面図 (S=1/50)

伴う石器・鉄滓などがある。

### S I 15 (図 19・図 20)

S I 15 は、大部分が S I 14 の床面と重なっており、竪穴の南面上端ラインのみ検出されている。残存する竪穴の幅は 2.5 m 程度である。南面上端ラインが直線的であることから、方形竪穴建物であることが推定できる。

S I 15 は S I 14 と切り合い関係がある他、S I 16 から切られていると考えられる。切りあい順は、

(新) S I 15 → S I 14 (旧), (新) S I 16 → S I 15 (旧)

と考えられる。

付帯遺構は竪穴の南面掘り方ラインに接して設けられた壁帯土坑 1 基、床面のピット 2 基である。壁帯土坑は、全形を検出されていない。法量は、幅 75cm +  $\alpha$ 、奥行 60cm、深さ 12cm を測り、平面形は隅丸方形を呈し、断面形は逆台形を呈する。竪穴との関係から、S I 14 の鍛冶遺構と考えられる土坑と配置が類似しているが、鍛冶関連遺物の出土は確認できない。

Pit 1 は長径 20cm、短径 15cm、深さ 32cm の略円形である。Pit 2 は長径 20cm、短径 16cm、深さ 58cm の楕円形である。2 基はその配置が主軸に重なると考えられることから、支柱穴 2 基の可能性はある。

出土遺物は、竪穴立ち上がり壁から出土した弥生土器甕 No. 65、成川式土器甕または鉢 No. 66・床面直上出土の甕 No. 68、成川式土器壺は埋土中出土 No. 69・ピット出土の甕 No. 67・床面直上出土の高杯 No. 70・No. 71・No. 72、東壁出土の埴 No. 73 がある。

### S I 16 (図 19・図 20)

S I 16 は、調査区外にその大半があるため、全形は不明であるが、南東コーナーが直角に近い角度であることから、方形竪穴建物であることが考えられる。検出部分の法量は、南北 1.7 m、東西 1.5 m、深さが数 cm である。

S I 16 は、S I 15・S I 19 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 16 → S I 15 (旧), (新) S I 19 → S I 16 (旧)

と考えられる。

付帯遺構は確認されていない。床面直上遺物は、成川式土器高杯 No. 74 と鉢形土器 No. 75 がある。

### S I 17 (図 19・図版 5)

S I 17 は、主軸を東西にとり、東西 2.2 m、南北 2.1 m の小型の方形竪穴建物である。S I 14 と切りあっており、竪穴の北コーナーは確認できない。また、竪穴の南コーナーは調査区外に出ており同じく確認できていない。

S I 17 と S I 14 と切り合い関係は、

(新) S I 14 → S I 17 (旧),

と考えられる。



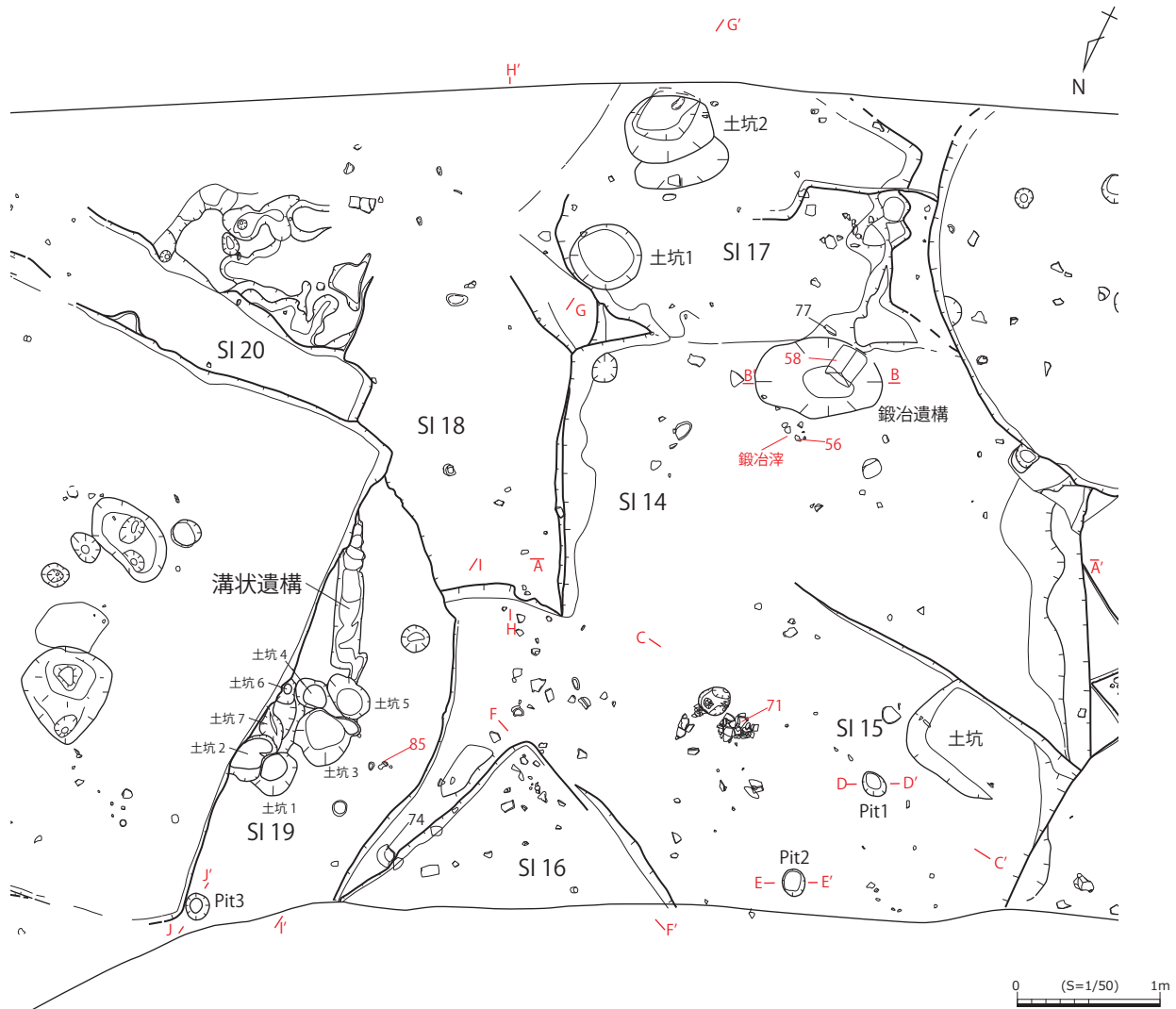


図19 S I 14・15・16・17・18・19・20 平面図 (S=1/50)

付帯遺構として、土坑2基が検出された。土坑1は長軸50cm，短軸46cmの略円形で，深さは16cmを測る。土坑2は長軸60cm，短軸47cmの不整形形で，深さは30cmを測る。土坑2は2基の土坑の切りあいの状況を呈している。土坑2基のうち，土坑1は竪穴の北面掘り方ラインに接するタイプであり，壁帯土坑とみられ，支柱穴とは考えにくい。一方，土坑2については，対応するピット等が確認されていないため，その性格は不明である。底部から石製品No.77が1点出土している。出土遺物として，成川式土器の高杯脚部No.76，土坑2底部出土の砥石No.77がある。

#### S I 18 (図19・図20)

S I 18は，周辺の竪穴建物との切りあいにより，立ち上がりは確認できず，床面のみが検出されている。切りあい関係にある建物は，S I 14・S I 17・S I 19・S I 20・S I 21であり，切りあい順は，

(新) S I 14 → S I 18 (旧)，(新) S I 17 → S I 18 (旧)，(新) S I 20 → S I 18 (旧)，  
(新) S I 21 → S I 18 (旧)，(新) S I 19 → S I 18 (旧)，

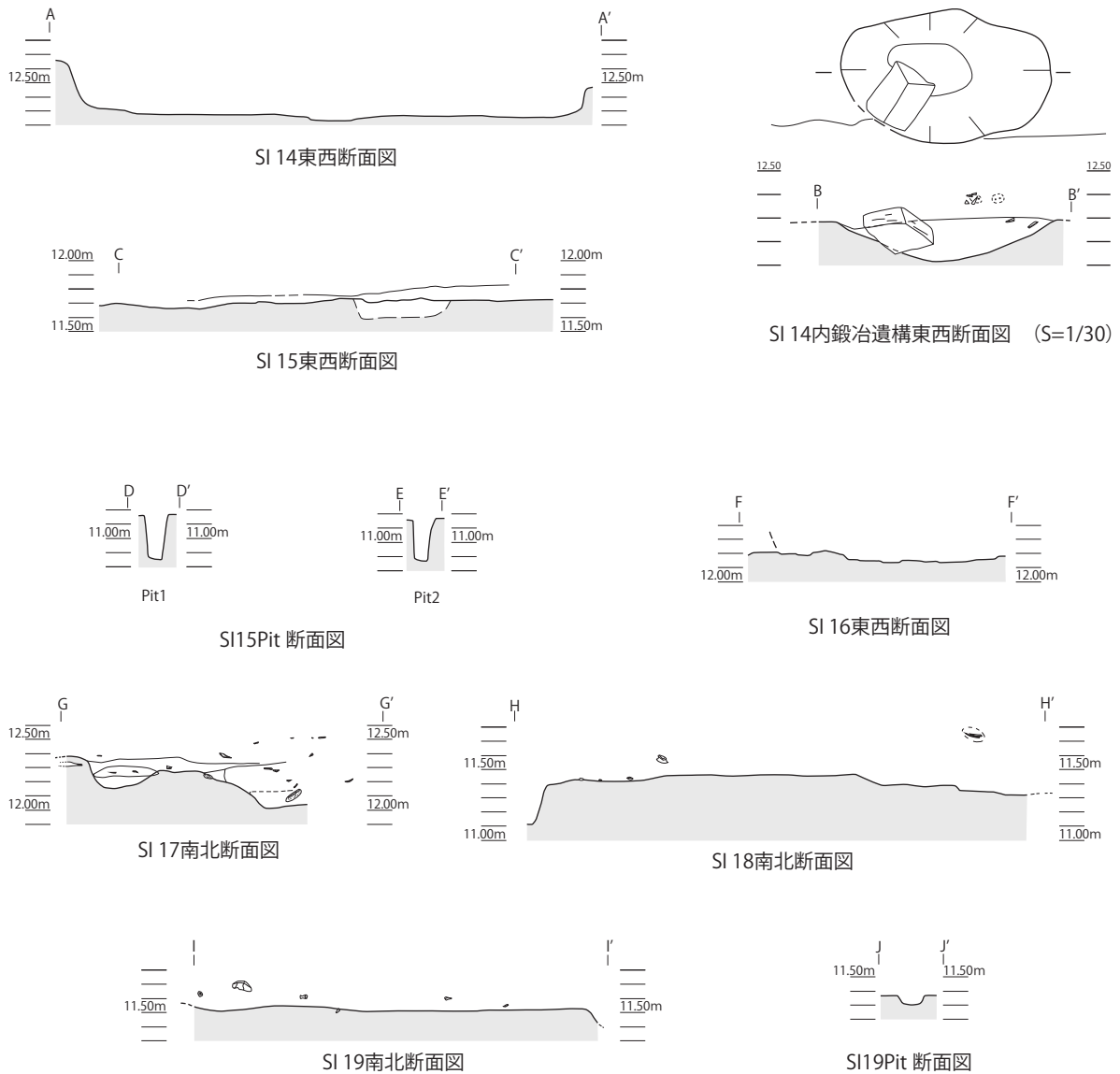


図 20 S I 14・15・16・17・18・19 断面図 (S=1/50)

と考えられる。周囲の建物いずれからも切られているため、S I 18 が周囲の建物群の中で最も古い建物になる。

出土遺物として、成川式土器甕では埋土出土のNo. 78, 床面直上出土のNo. 79, そして、甕脚部のNo. 81・No. 82, 壺の幅広突帯No. 83がある。No. 80 は甕の突帯部分である。

### S I 19 (図 19・図 20・図版 6)

S I 19 は、床面の一部のみが検出された。S I 21 に大半を切られており、S I 16 を切っていると考えられる。

S I 19 と S I 16・S I 21 との切りあい順は、

(新) S I 19 → S I 16 (旧), (新) S I 21 → S I 19 (旧)

と考えられる。

床面には土坑がまとまって 7 基検出されるとともに、これに接続する溝状遺構, その他床面で検

出されたピット3基がある。土坑1は長軸32cm、短軸27cmの略円形で、深さは15cmを測る。土坑2は長軸37cmの略円形で、深さは12cmを測る。土坑3は長軸40cm、短軸40cmの略円形で、深さは46cmを測る。土坑4は長軸26cm、短軸19cmの楕円形で、深さは18cmを測る。土坑5は長軸50cm、短軸46cmの略円形で、深さは16cmを測る。土坑6は長軸35cm、短軸21cmの楕円形で、深さは26cmを測る。土坑7は長軸35cm、短軸15cmの不整形で、深さは5cmを測る。土坑群は相互に切りあい関係が見えることから、繰り返し掘り直したことが考えられる。一方、溝状遺構は土坑5に接続した状態で設けられている。長さ120cm、幅17cm～20cmを測る。深さは12cm前後と浅い。直線的な形状ではあるが、下端が土坑5に近づくとつれ蛇行する形となっている。竪穴建物床面に設けられる溝状遺構の事例は、壁帯溝の例が多く、床面中央付近に設けられたものは橋牟礼川遺跡の調査例では知られていない。建物の全形も検出されていないことから、その性格に関しては言及できない。

Pit 1は長径20cm、短径18cmの略円形である。Pit 2は長径12cm、短径10cmの略円形である。Pit 3は直径18cm、深さ8cmの略円形である。

土坑7基に関しては、溝状遺構との接続関係から、S I 19の付帯遺構とは考えにくく、溝状遺構に伴う遺構と考えられる。

出土遺物として、甕口縁No. 84、成川式土器とみられるミニチュア土器の脚部No. 85、軽石製加工品として埋土中出土の線刻と穿孔のあるものNo. 86、床面直上出土のNo. 87がある。

## S I 20 (図19・図版6)

S I 20は、全体形は不明である。大半をS I 21に切られているが、南西コーナーは直角に近い角度で曲がっており、方形プランと考えられる。竪穴の南北長は $2.5\text{ m} + \alpha$ である。

S I 20とS I 18・S I 21との切りあい順は、

(新) S I 20 → S I 18 (旧), (新) S I 21 → S I 20 (旧)

と考えられる。

付帯遺構は検出されていない。

## S I 21 (図21・図22・図版6)

S I 21は、張り出しを有する方形竪穴建物である。主軸は東西方向であり、竪穴の長辺4.3m、短辺4m、竪穴の検出面からの深さは約30cmを測る。竪穴の北東コーナーに造り出された張り出し部は、竪穴のコーナー部分を約70cm程度外側に拡張して造り出している。床面との段差部分からの奥行1.15m、最大幅が1mを測るが上端は崩れた形状をしている。底部の法量は幅70cm、奥行75cm程度の台形状である。張り出し部分の底部は床面より5cm強落ち込んでおり、内部に不整形の土坑が伴う。不整形の土坑は深さが最大で15cm程度である。

S I 21はS I 19・S I 20・S I 22・S I 23・S I 28・S I 52と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 21 → S I 19 (旧), (新) S I 21 → S I 20 (旧), (新) S I 22 → S I 21 (旧),

(新) S I 21 → S I 23 (旧), (新) S I 21 → S I 28 (旧), (新) S I 21 → S I 52 (旧),

と考えられる。

付帯遺構として、炉跡と考えられる土坑1と壁帯土坑1、ピット9基（Pit 1, Pit 2, Pit 3, Pit 4, Pit 5, Pit 6, Pit 7, Pit 8, Pit 9。Pit 8は壁帯土坑。）が検出された。炉跡と考えられる土坑は床面中央に位置し、長径28cm、短径25cmを測る。Pit 1は長径20cm、短径18cm、深さ28cmの円形である。Pit 2は長径65cm、短径38cm、深さ13cmの略円形である。Pit 3は長径21cm、短径16cm、深さ16cmの楕円形である。Pit 4は長径69cm、短径63cm、深さ21cmの不整楕円形である。Pit 5は長径21cm、短径16cm、深さ16cmの楕円形である。Pit 6は径38cmの不整形、深さ4cmである。Pit 6はきわめて浅いことから、柱穴ではないと考えられる。Pit 7は長径49cm、短径47cmの略円形、深さ8cmである。Pit 8は幅55cm、奥行65cmの長方形、深さ15cmである。Pit 8は竪穴掘り方に接し、かつ辺の中央付近に位置するため、壁帯土坑である。同様の位置に土坑が設けられる事例は、S I - 1・S I 14・S I 15・S I 17・S I 21・S I 22・S I 28・S I 41・S I 46と9例ある。Pit 9は長軸60cm、短軸28cmの不整形、深さ25cmである。Pit 10は長軸13cm、短軸11cmの楕円形である。深さは確認できていない。9基のピットのうち、主柱の可能性のあるのは、Pit 1, Pit 2, Pit 3, Pit 4, Pit 9である。ただ、例えばPit 2やPit 4のように、柱の据え直しを伺わせる断面形状を示すピットもあること、Pit 1とPit 2, Pit 7とPit 9のように掘り直しを示すように接近した事例もあることから、本来3主柱建物であったことが推定できる。古墳時代の主柱穴3の竪穴建物の事例としては、本調査区のSI48、霧島市国分小田遺跡特殊遺構Ⅲ号<sup>(1)</sup>、辻堂原遺跡68号<sup>(2)</sup>がある。また、8～9世紀代の事例では国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡3号建物<sup>(3)</sup>がある。

出土遺物として、成川式土器の甕口縁部No. 88・No. 89・No. 90・No. 91、同突帯部No. 92、同脚台No. 93、同突帯部分No. 92、壺底部No. 95、高杯No. 96・No. 97、同脚部No. 98、坩型土器No. 99、No. 100、鉢No. 102、ミニチュア土器No. 103があり、床面直上資料は、No. 96, No. 99, No. 101, No. 102である。石器は、剥片No. 104、加工痕のある礫石器No. 105、凹石No. 106、砥石No. 107・No. 108、軽石加工品No. 109があり、床面直上資料は、No. 105, No. 106である。

註

- (1) 鹿児島県住宅供給公社 1981 『小田遺跡』
- (2) 吹上町教育委員会 1977 『辻堂原遺跡』
- (3) 指宿市教育委員会 1996 『橋牟礼川遺跡XI』

## S I 22 (図21・図版6)

S I 22は、S I 21・S I 23と切りあい関係にあり、竪穴の北面、東面、西面が部分的に検出され、南側は調査区外に出ている。平面形状は方形プランと考えられる。長軸2.5～2.6m、短軸 $1.2 + \alpha$ を呈する。検出面からの竪穴深さは約20cmを測る。

S I 22のS I 21・S I 23との切りあい順は、

(新) S I 22 → S I 21 (旧), (新) S I 22 → S I 23 (旧)

と考えられる。

付帯遺構は、竪穴の北面掘り方ラインの中央に接する壁帯土坑1、ピット3基、不整形の土坑である。壁帯土坑は幅60cm、奥行40cmの長方形の一边が円弧状になる形態である。Pit 1は長径20cm、短径20cmの不整円形である。Pit 2は長径25cm、短径22cmの略円形である。Pit 3は長径26cm

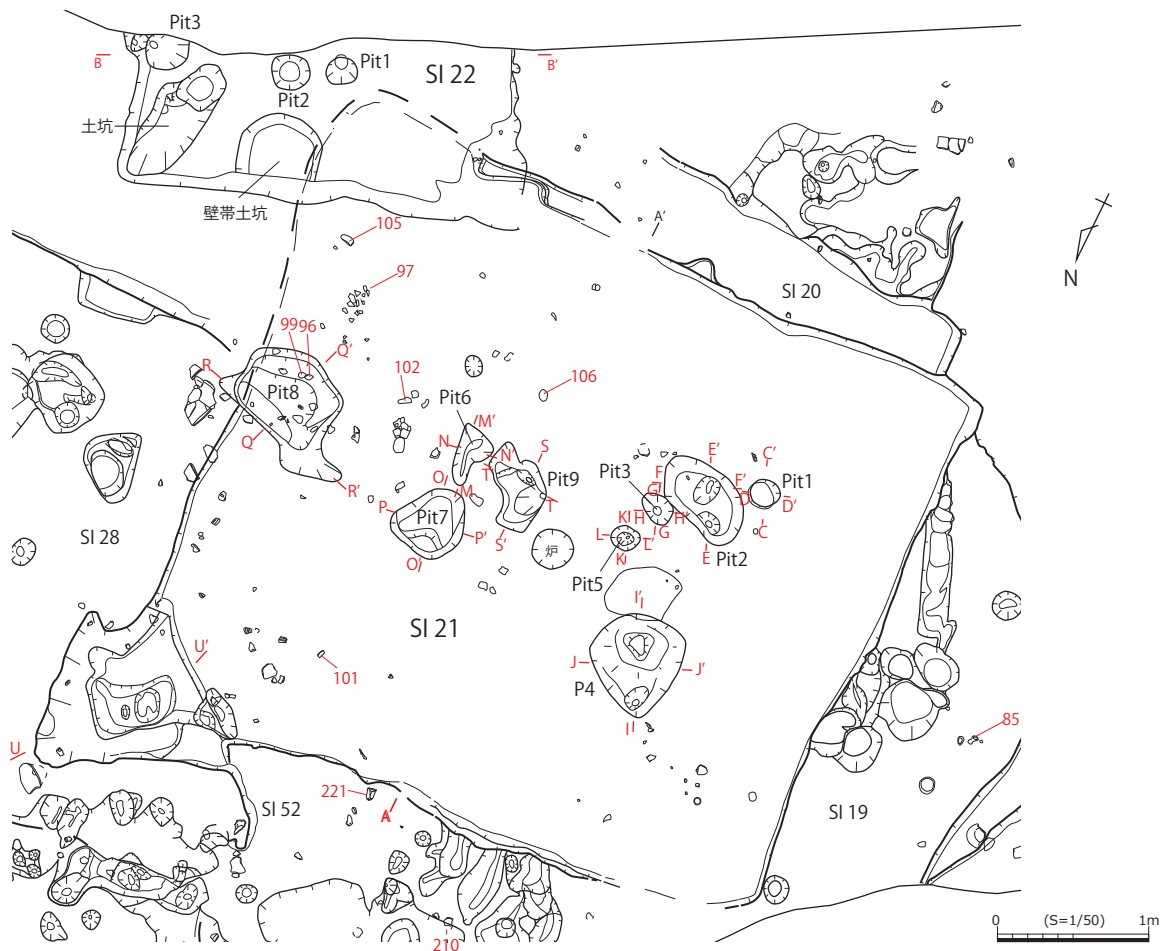


図 21 S I 21・22 平面図 (S=1/50)

の略円形である。不整形の土坑は長さ 90cm，幅 36cmを測る長楕円形であり，略方形のピットと切り合っている。略方形のピットは長軸 34cm，短軸 25cmを測る。

出土遺物として，床面直上出土の鉢または高杯No. 110がある。遺構の切りあい関係からは，S I 22がこの部分では最も新しい建物ということになる。

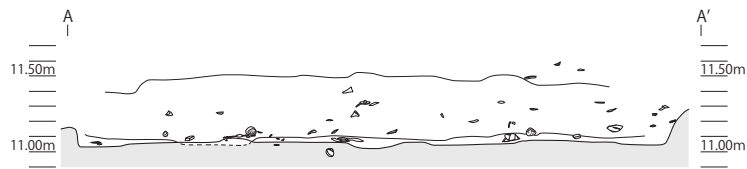
埋土は 9層土を主体とし，10層土ブロックが混入したものとなっている。また貼床が 1層確認されている。

### S I 23 (図 23・図版 6)

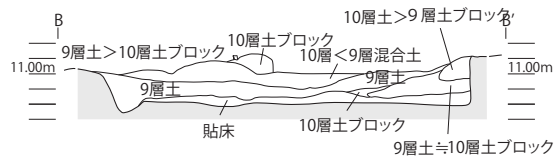
S I 23は，竪穴の北側上端ラインの一部と床面の検出であり，全体形は不明であるが，竪穴の北側上端ラインは直線的であり，方形竪穴建物であると推定できる。検出された竪穴の北側上端ライン長は 2.4 mを測る。

付帯遺構は検出されていない。

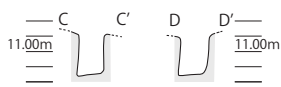
S I 23は S I 21・S I 22・S I 24・S I 26・S I 28と切り合い関係があり，切りあい順は，(新) S I 21 → S I 23 (旧)，(新) S I 22 → S I 23 (旧)，(新) S I 24 → S I 23 (旧)，(新) S I 26 → S I 23 (旧)，(新) S I 23 → S I 28 (旧)



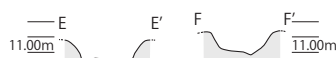
SI 21 南北断面



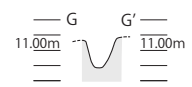
SI 22 東西断面



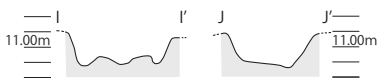
Pit 1 断面図



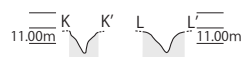
Pit 2 断面図



Pit 3 断面図



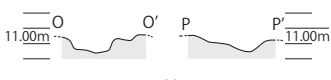
Pit 4 断面図



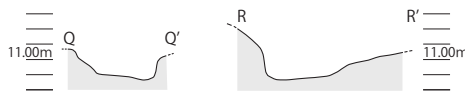
Pit 5 断面図



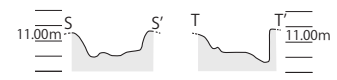
Pit 6 断面図



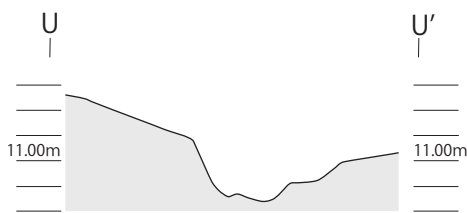
Pit 7 断面図



Pit 8 断面図



Pit 9 断面図



SI 21 残りだし断面図 (S=1/30)

SI 21 内遺構断面図

図 22 S I 21 断面図 (S=1/50)

と考えられる。

出土遺物として、埋土中のミニチュア土器No. 111がある。

### S I 24 (図 25・図版 6)

S I 24 は、方形竪穴建物である。S I 25 との切りあいで、竪穴の東面上端ラインは失われる

とともに、竪穴の南側は調査区外に出ているとみられる。主軸は東西方向とみられ、竪穴の長辺  $2.1\text{ m} + \alpha$ 、短辺  $1.6\text{ m} + \alpha$  を測る。

S I 24 は S I 23・S I 25・S I 26 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 24 → S I 23 (旧), (新) S I 25 → S I 24 (旧), (新) S I 24 → S I 26 (旧) と考えられる。

付帯遺構として、ピット 1 基が検出された。径 20cm, 短径 18cm, 深さ 56cm の略円形である。出土遺物として、埋土中出土の軽石製加工品 No. 112 がある。

### S I 25 (図 25・図版 6)

S I 25 は、方形竪穴建物である。竪穴の北面上端ラインと西面上端ラインが検出されており、北西コーナーは直角に近い角度で曲がる。竪穴の南半分以上が調査区外に出ている。主軸は東西方向とみられ、確認できている竪穴の長辺  $1.8\text{ m} + \alpha$ 、短辺  $1.2\text{ m} + \alpha$  を測る。

S I 25 は S I 24・S I 26・S I 36 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 25 → S I 24 (旧), (新) S I 25 → S I 26 (旧), (新) S I 25 → S I 36 (旧) と考えられる。

付帯遺構は検出されていない。

出土遺物として、埋土中出土の磨製石鏃と考えられる No. 113 がある。

### S I 26 (図 25・図版 7)

S I 26 は、方形竪穴建物である。竪穴の東面、南面、西面が確認されているが、全形は不明である。主軸は東西方向とみられ、竪穴の東西幅は  $3.6\text{ m}$ 、南北幅は短辺  $2.9\text{ m} + \alpha$ 、竪穴の検出面からの深さは約  $12\text{ cm}$  を測る。

S I 26 は S I 23・S I 24・S I 25・S I 27・S I 34・S I 36 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 26 → S I 23 (旧), (新) S I 24 → S I 26 (旧), (新) S I 25 → S I 26 (旧)

(新) S I 26 → S I 27 (旧), (新) S I 34 → S I 26 (旧), (新) S I 26 → S I 36 (旧) と考えられる。

付帯遺構として、床面中央の炉跡、南面に近い部分の土坑 1、南東隅に検出された土坑 2 があり、床面検出ピットは 5 基 (Pit 1, Pit 2, Pit 3, Pit 4, Pit 5) がある。

炉跡と考えられる土坑は床面中央に位置し、長軸 26cm, 短軸 25cm を測る円形で、深さ 8cm を測る。内部には灰が充満しており、周囲の床面にはカーボンが集積しており、その範囲は南北 1m, 東西 95cm 程度の不整形である。炉跡には成川式土器蓋形土器が入り込んだ状況で出土している (図版 7)。蓋形土器の頂部はやや灰色に変色した部分もあり、受熱した可能性も考えられる。土坑 1 は不整形の平面であり、Pit 3 と密接している。土坑 2 は南東コーナーに近い位置にあり、長軸 54cm, 短軸 54cm, 深さ 47cm の隅丸方形である。内部からの出土遺物はない。Pit 1 は長径 23cm, 短径 18cm, 深さ 15cm の楕円形である。Pit 2 は長径 19cm, 短径 18cm, 深さ 45cm の略円形である。Pit 3 は長径 13cm, 短径 10cm, 深さ 12cm の楕円形である。Pit 4 は長径 30cm, 短径 24cm, 深さ 15cm の楕円形である。Pit 5 は長径 25cm, 短径 20cm, 深さ 52cm の不整楕円形である。5 基のピット

トのうち、主柱の可能性があるのは、深さが45cmと52cmであることから、Pit 2, Pit 5が考えられる。また、同様に主軸方向を東西とすると、Pit 2, Pit 4の組み合わせも考えられる。いずれにしても、2主柱型であることは同様である。なお、Pit 2, Pit 5の2基の組み合わせの場合は、それらが形成する軸は竪穴の主軸方向とややずれが出るが、2主柱で構成される建物の可能性を考えておきたい。古墳時代の竪穴建物で方形2主柱の事例は、本調査区では12号、15号、26号、42号があると考えられる。橋牟礼川遺跡Ⅵ区では竪穴建物27基で検出例がない。本調査区の最も西側に位置し、古河川の西側に位置するⅠ区では、検出された34基のうち1基の2号建物が2穴となっている。

出土遺物として、土器では炉跡で出土した成川式土器の蓋No.114-1があり、石器では、凹石No.114、台石No.115、表面に線刻のある軽石製加工品No.116、面取りがされた軽石製加工品No.117がある。

### S I 27 (図26・図版6・8)

S I 27は、方形竪穴建物である。竪穴の東面上端ラインと北面上端ライン、西面上端ラインが確認されており、直角に近い北東コーナーが検出されている。北西コーナーは土坑により切られており残っていないが、竪穴の北面上端ラインと西面上端ラインの位置関係からコーナーを形成することが想定できる。竪穴の東西幅は3.1m、南北幅は1.7m+ $\alpha$ となる。主軸は東西あるいは南北となる。検出面からの竪穴深さは約17cmを測る。

S I 27はS I 26・S I 28・S I 30・S I 34と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 26 → S I 27 (旧), (新) S I 27 → S I 28 (旧), (新) S I 27 → S I 30 (旧)

(新) S I 34 → S I 27 (旧)

と考えられる。S I 26とS I 27とについてであるが、S I 26は竪穴の西面上端ラインが明瞭でないが、S I 27の床を掘り抜き造営されていると考えられる。

付帯遺構として、床面にピット2基が検出された。ピット1は直径15cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。ピット2は直径8cmの略円形を呈し、深さ10cmを測る。ピット1はS I 26の床面と同レベルでの検出であり、S I 27の付帯遺構でない可能性も考えられる

出土遺物は、甕No.118、破損した小型の打製石斧No.119、石核No.120がある。いずれも床面直上で出土している。

### S I 28 (図23・図24・図版6)

S I 28は、周辺の竪穴建物との切りあいにより、立ち上がりは確認できず、床面のみが検出されている。

S I 28と切りあい関係にある建物は、S I 21・S I 23・S I 27・S I 29である。切りあい順は、

(新) S I 21 → S I 28 (旧), (新) S I 28 → S I 23 (旧), (新) S I 27 → S I 28 (旧)

(新) S I 29 → S I 28 (旧)

と考えられる。なお、S I 52との切りあい関係も想定できるが、確認できていない。

付帯遺構として、土坑3基とピット11基(Pit 1, Pit 2, Pit 3, Pit 4, Pit 5, Pit 6, Pit 7, Pit 8, Pit 9, Pit 10, Pit 11)、壁帯土坑とみられる土坑1が検出された。



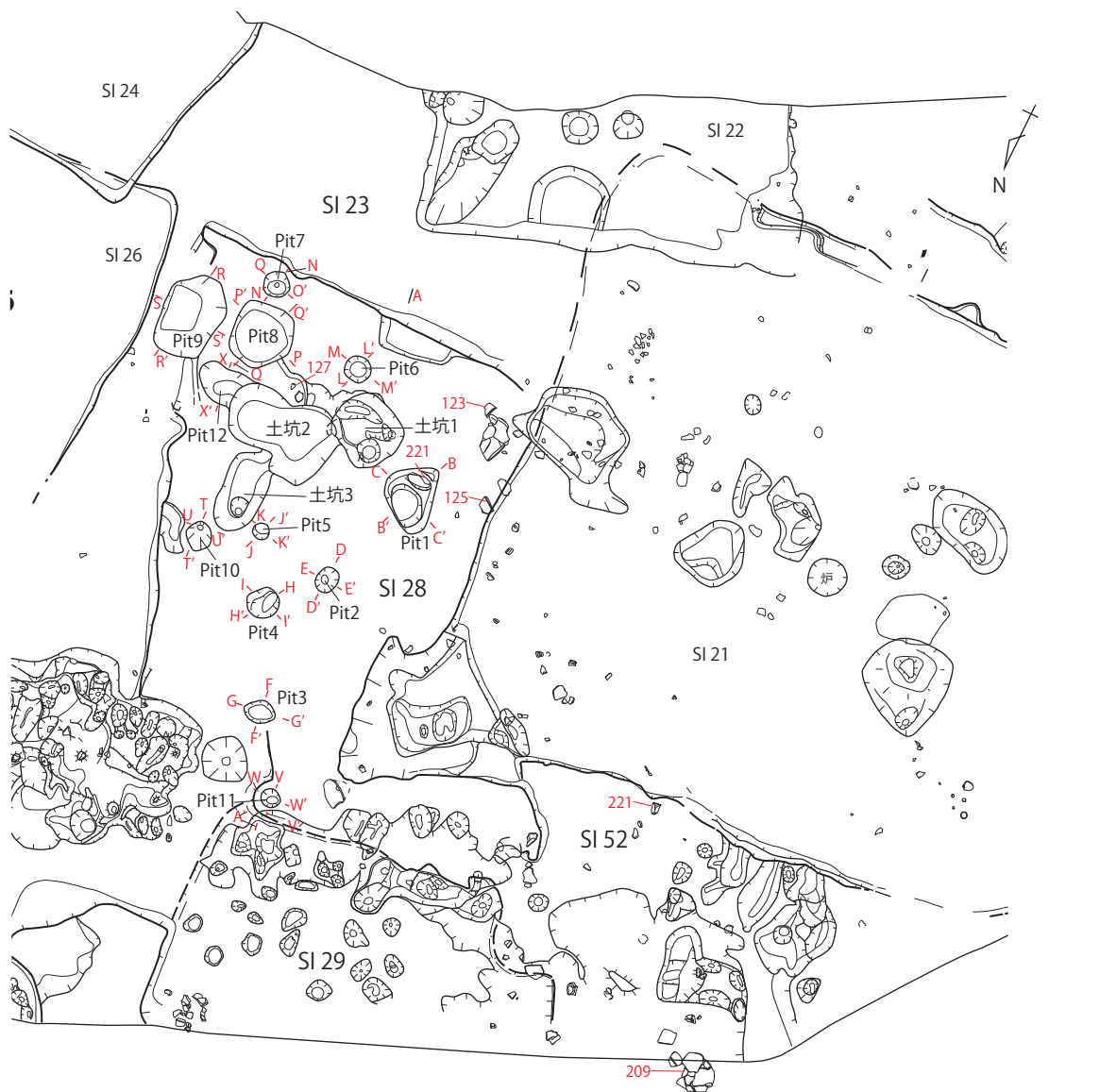


图 23 S I 23·28·29·52 平面图 (S=1/50)

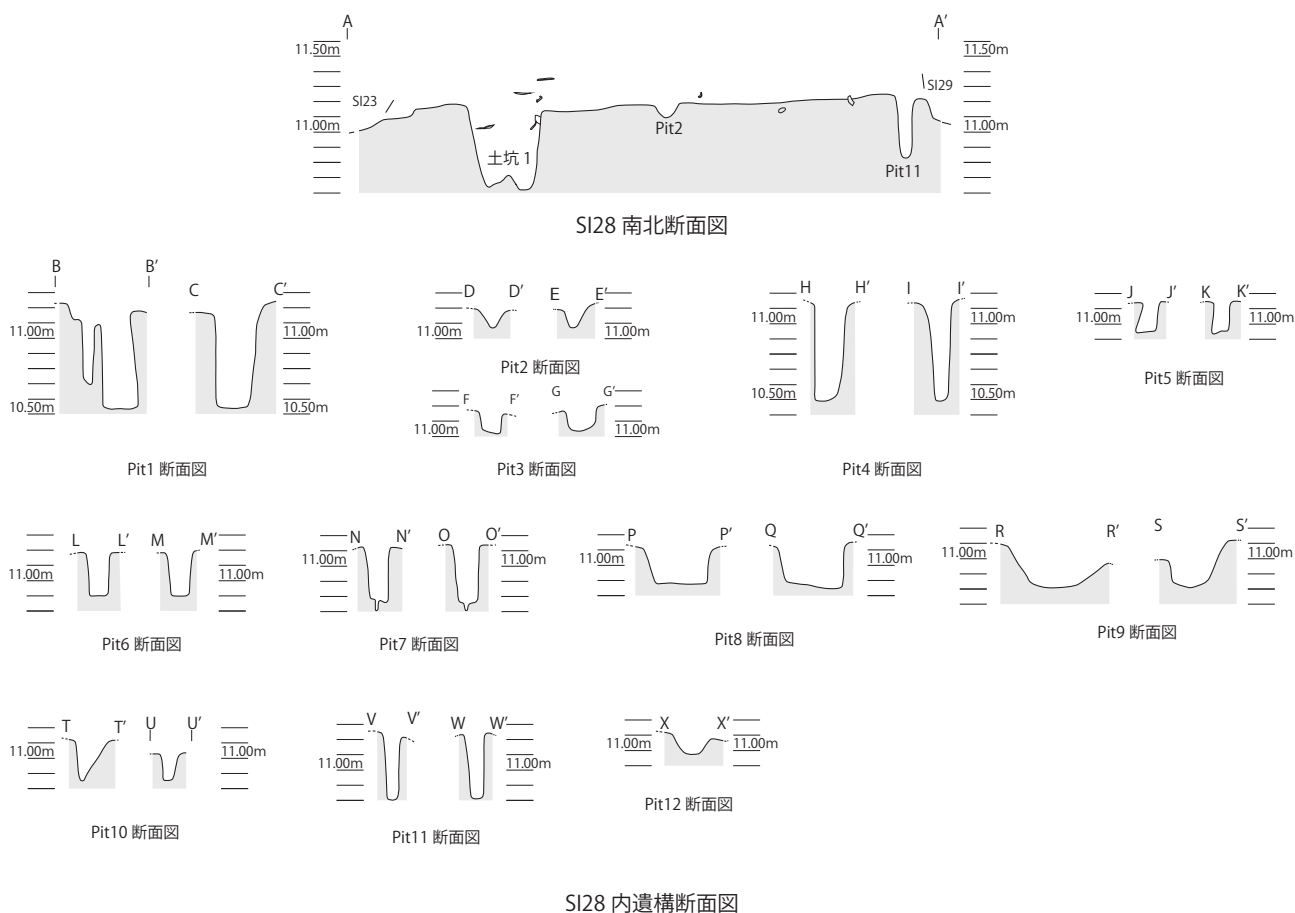
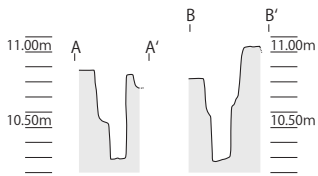
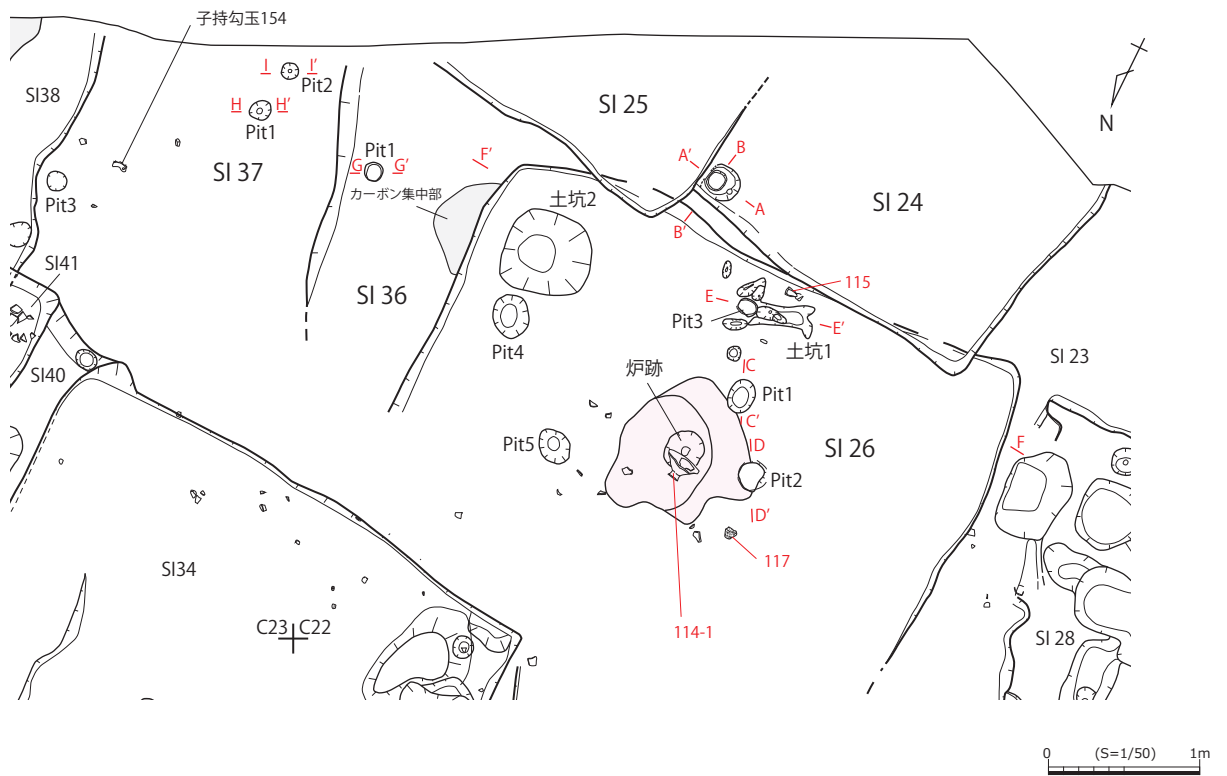


図 24 S I 28 断面図 (S=1/50)

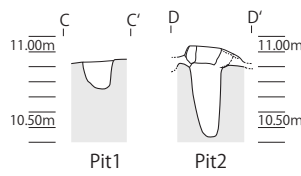
土坑 1 は長軸 46cm, 短軸 40cm, 深さ 52cmを測る。土坑 2 は長軸 76cm, 短軸 52cmを測る。土坑 3 は長軸 60cm, 短軸 32cmを測る。土坑 1 は断面形状からピット 2 基の切りあいと考えられる。一方, 土坑 2・土坑 3 は断面が浅く, 連結したものである。用途については不明である。

Pit 1 は長径 41cm, 短径 38cm, 深さ 60cmの隅丸三角形である。Pit 2 は長径 19cm, 短径 14cm, 深さ 10cmの楕円形である。Pit 3 は長径 22cm, 短径 17cm, 深さ 12cmの不整形円形である。Pit 4 は長径 23cm, 短径 22cm, 深さ 63cmの不整形円形である。Pit 5 は径 11cm, 深さ 19cmの円形である。Pit 6 は径 18cmの略円形, 深さ 27cmである。Pit 7 は長径 20cm, 短径 18cmの略円形, 深さ 40cmである。Pit 8 は長軸 45cm, 短軸 42cmの不整形方形, 深さ 24cmである。Pit 9 は長軸 59cm, 短軸 42cmの不整形方形で, 深さ 30cmである。Pit10 は長軸 22cm, 短軸 18cmの不整形円形で, 深さ 30cmである。Pit11 は長軸 14cm, 短軸 13cmの円形で, 深さ 42cmである。Pit12 は幅 22cmの不整形楕円形で, 深さ 12cmである。ピットの配置から明確な主柱穴は判断できないが, 深さ 20～30cmの深さのピットの中で, 比較的深いピットは Pit 1・Pit 4・Pit 7・Pit11 であり, Pit11 は大きく外れることから 3 穴が三角形の配置であるとみなせる。一方, 同様に 3 主柱の S I 21 では, 3 穴のうち 2 穴を底辺とする三角形の配置となっている。本建物では Pit 1・Pit 4・Pit 7 の配置は直角三角形形状を呈している。このため, 4 穴目の主柱が S I 27 によって切られ, 失われた可能性を考慮したい。

壁帯土坑とみられる土坑は床面南側に位置する。SI23 に切られているが, 方形に近い形状の土坑であること, ピット等との位置関係から, おそらく竪穴南面に接した壁帯土坑の可能性があるこ



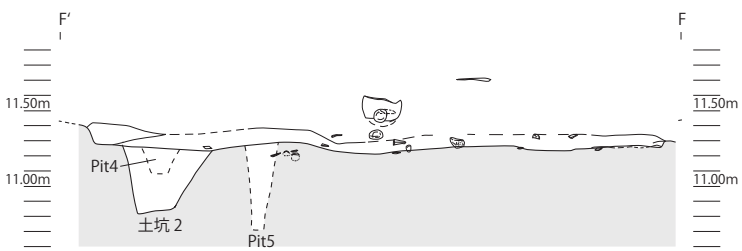
SI24Pit 断面図



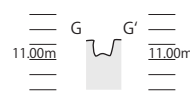
SI26Pit 断面図



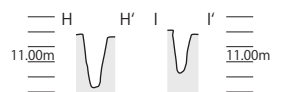
SI26PIT3・土坑1 断面図



SI26 東西断面図



SI36Pit 断面図



SI37Pit 断面図

図 25 S I 24・25・26・36・37 平面図・断面図 (S=1/50)

とから取り上げた。法量は幅 55cm, 残存する奥行は 23cmである。平面形は方形とみられる。

出土遺物として、土器は甕口縁部No. 121, 埋土出土の甕No. 122・123・125, 床面直上出土の甕No. 124, 壺底部No. 126 がある。石器では、磨製石鏃No. 127, 線刻を施す軽石製加工品No. 128 がある。床面直上出土遺物は、No. 124・No. 127・No. 128 である。

### S I 29 (図 23)

S I 29 は、竪穴建物造営時の掘削痕跡とみられるピットが多数確認されるとともに、竪穴の上端ラインが所々確認できている。確認されたのは、東面上端ラインの一部と、南面上端ラインの一部、西面上端ラインの一部である。特に、東面上端ラインでは、調査区範囲で竪穴上端ラインが方向を西に変えており、この部分がコーナーであると想定すると、東西長 2.6 m, 南北長  $1.6\text{ m} + \alpha$  の方形竪穴建物となり、小型の建物と考えられる。また、南面ラインは南西コーナー付近で方向を変え、また西面上端ラインも南面上端ラインと交差する以前に方向を変えることから、南西コーナーではコーナーを作り出さず、一段竪穴内部に入り込んだ形状である可能性が考えられる。

他の遺構との切りあい関係は不明である。

付帯遺構は検出されていないが、南面の竪穴ラインが中央部で張り出し状を呈する。幅 1 m, 奥行 35cmを測る。

出土遺物として、床面直上出土の成川式土器甕No. 129, 埋土出土の埴No. 130, 剝片No. 131, 磨石No. 132 がある。

### S I 30 (図 26・図版 6)

S I 30 は、周辺の竪穴建物との切りあいにより、竪穴の立ち上がりは確認できず、床面のみが検出されている。このため、平面形状や法量に関しては不明である。

S I 30 と切りあい関係にある建物は、S I 27・S I 31・S I 32・S I 34 であり、切りあい順は、(新) S I 27 → S I 30 (旧), (新) S I 31 → S I 30 (旧), (新) S I 32 → S I 30 (旧), (新) S I 34 → S I 30 (旧)

と考えられ、周囲の建物と比較すると S I 30 が最も古い建物と考えられる。

付帯遺構として、ピット 3 基 (Pit 1, Pit 2, Pit 3) が検出された。Pit 1 は長径 30cm, 短径 29cm, 深さ 72cmの円形である。Pit 2 は径 16cm, 深さ 44cmの略円形である。Pit 3 は径 15cm, 深さ 16cmの略円形である。

### S I 31 (図 26)

S I 31 は、大半が調査区外に出ている竪穴建物であり、竪穴の南面・東面・西面上端ラインの一部が検出されている。南面上端ラインでは中央やや西寄りに張り出しが設けられている。南面上端ラインは東側と西側にコーナーを有し、東側コーナーは 90 度に近い角度で曲がっているが、西側コーナーは曲線的に曲がっている。このため、大枠では方形竪穴建物の範疇に入るものと考えられる。竪穴の幅は 2.1 m, 検出面からの深さは 17cm～37cmを測る。

床面には形状・法量とも様々で、多数の凹凸が検出されているが、これは恐らく、竪穴の掘削段



图 26 S I 27 · 30 · 31 平面图 · 断面图 (S=1/50)

階で残された掘削痕跡であると考えられる。床面全体にこれが検出されているということは、調査時に床面形成土までを掘削し、当初の掘削痕跡を検出してしまった結果であると考えられる。おそらく、他の建物と比較して明瞭な貼り床が形成されていなかった可能性が高いと考えられる。

S I 31 は S I 30 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 31 → S I 30 (旧)

と考えられる。

付帯遺構として、南面の張り出しがあり、幅 90cm、奥行 30cm を測る。張り出し内部には、土坑とみられる凹部がある。

### S I 32 (図 27)

S I 32 は、調査区の外に出ている部分以外は他の建物との切り合いが著しい建物であり、竪穴の南面・西面上端ラインの一部が検出されているのみである。竪穴の南西コーナーが検出されており、90 度に近い角度で曲がっていることから、方形竪穴建物であると考えられる。S I 32 の主軸方向は南北あるいは東西とみられるが、不明である。南面竪穴長  $1.2\text{ m} + \alpha$ 、西面竪穴長  $0.5\text{ m} + \alpha$  である。検出面からの竪穴深さは 10cm を測る。

S I 32 は S I 30・S I 33・S I 34 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 32 → S I 30 (旧)、(新) S I 33 → S I 32 (旧)、(新) S I 34 → S I 32 (旧)

と考えられる。

付帯遺構として、竪穴掘り方に接した床面に土坑が検出された。土坑は幅 20cm、奥行 40 cm を計るが、壁帯溝の一部の可能性が考えられる。

### S I 33 (図 27)

S I 33 は、調査区外に大半が出ているとともに、他の建物との切り合いが著しい建物である。検出されたのは、竪穴の西面上端ラインの一部のみである。竪穴の西面上端ラインにはコーナーらしい変換点が見られるが、直後に S I 34 に切られているが、コーナーはほぼ直角に近い角度となるため、建物の平面形状は方形である可能性がある。

竪穴の法量については、西面上端ラインが 85cm 程度検出されているのみである。

S I 33 は S I 32・S I 34 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 33 → S I 32 (旧)、(新) S I 34 → S I 33 (旧)、

と考えられる。

付帯遺構として、床面で検出された周囲の床面より高い部分がある。平面形は先細りの長方形であり、法量は長さ 1.5 m、幅 30cm～40cm、高さ 10cm を測る。この部分からの出土遺物は土器片や砥石などであるが、カーボンが集中するなどの特徴は見られないため、用途は不明である。

S I 33 の出土遺物は、甕口縁部 No. 133 がある。調査時点で建物が掘り込まれた 10 層まで掘削したことで当該層に包含されていた遺物が出土したものとみられる。石器では、加工痕のある剥片 No. 134、楔形石器 No. 135、断面三角形を呈し、頂部に敲打痕が集中する磨石 No. 136、両面に磨面を有し、砥石と考えられる No. 137、砥石あるいは石皿の破片と考えられる No. 138 がある。No. 133 と加工のある剥片 No. 134 を除くといずれも床面直上の出土である。

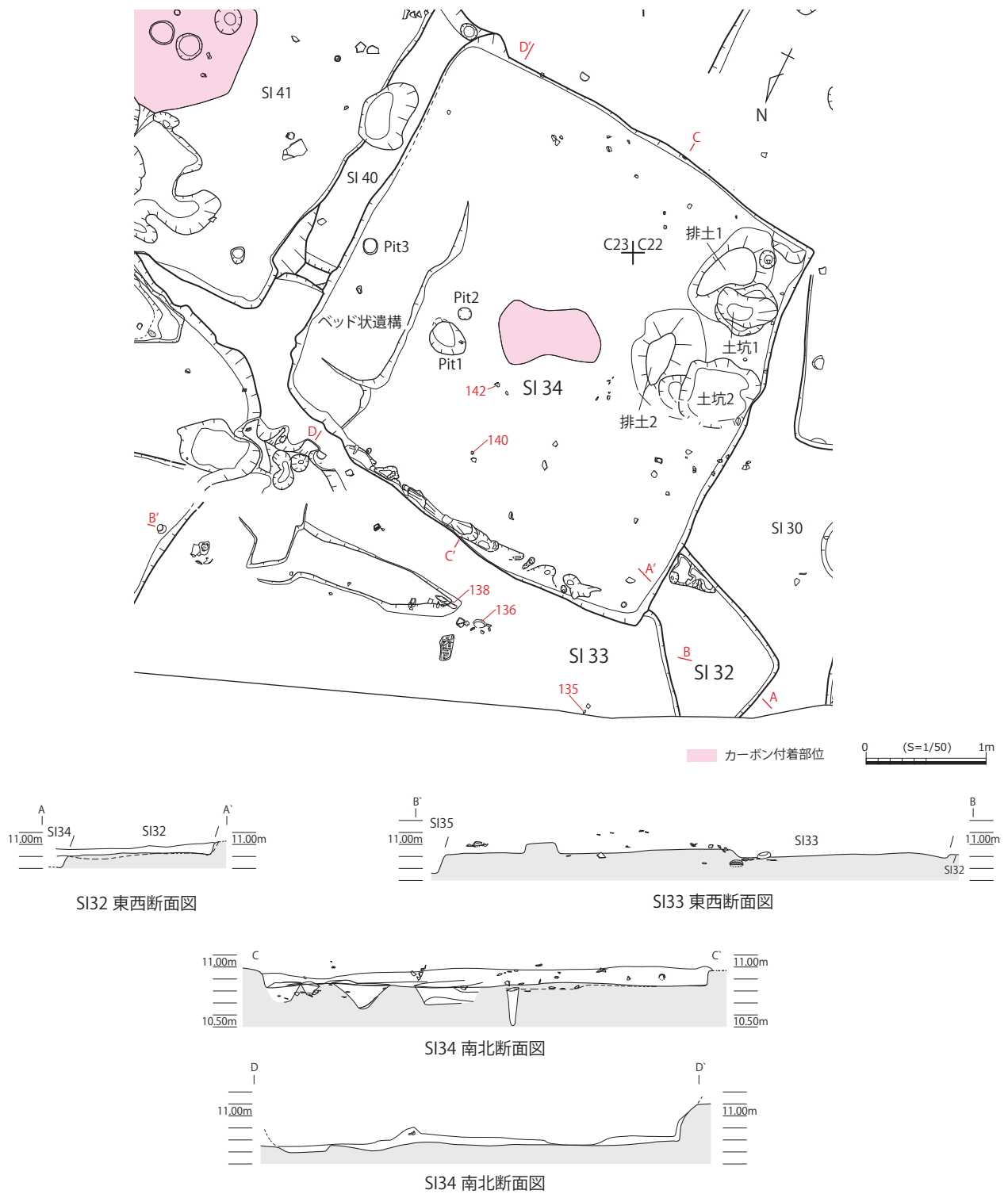


図 27 S I 32・33・34 平面図・断面図 (S=1/50)

なお、No. 136 は沖縄県から鹿児島県島嶼部で事例があるクガニイシに類似しているが<sup>(1)</sup>、磨石＋敲石的な用途の石器であることが考えられる。

註

(1) 中摩浩太郎 1987 「屋久町横峯遺跡出土のクガニイシについて」『鹿大考古』6

### S I 34 (図 27・図版 6・8)

S I 34 は、全体形が判明している方形竪穴建物である。主軸は東西方向であり、東西長 3.48 m、南北長 3.6 m、検出面からの深さは 30cm である。床面には 9 層土と 10 層土の混合土で貼床が施される。

S I 34 は S I 26・S I 27・S I 30・S I 32・S I 33・S I 36・S I 37・S I 40 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 34 → S I 26 (旧), (新) S I 34 → S I 27 (旧), (新) S I 34 → S I 30 (旧),  
(新) S I 34 → S I 32 (旧), (新) S I 34 → S I 33 (旧), (新) S I 34 → S I 36 (旧),  
(新) S I 34 → S I 37 (旧), (新) S I 34 → S I 40 (旧)

と考えられる。このため、この付近では S I 34 が最も新しく造営されたと考えられる。

付帯遺構として、土坑 2 基、ピット 3 基、ベッド状遺構 1 基、カーボン集中箇所がある。

Pit 1 は長径 30cm、短径 25cm、深さ 13cm の不整楕円形である。Pit 2 は長径 12cm、短径 10cm の略円形である。Pit 3 は、ベッド状遺構の上面に設けられ、直径 13cm、深さ 5cm の略円形である。ピットの配置からは支柱はどれになるか判断しがたい。

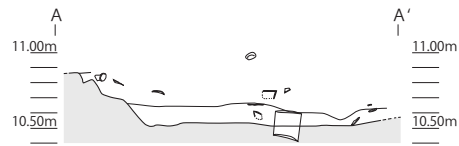
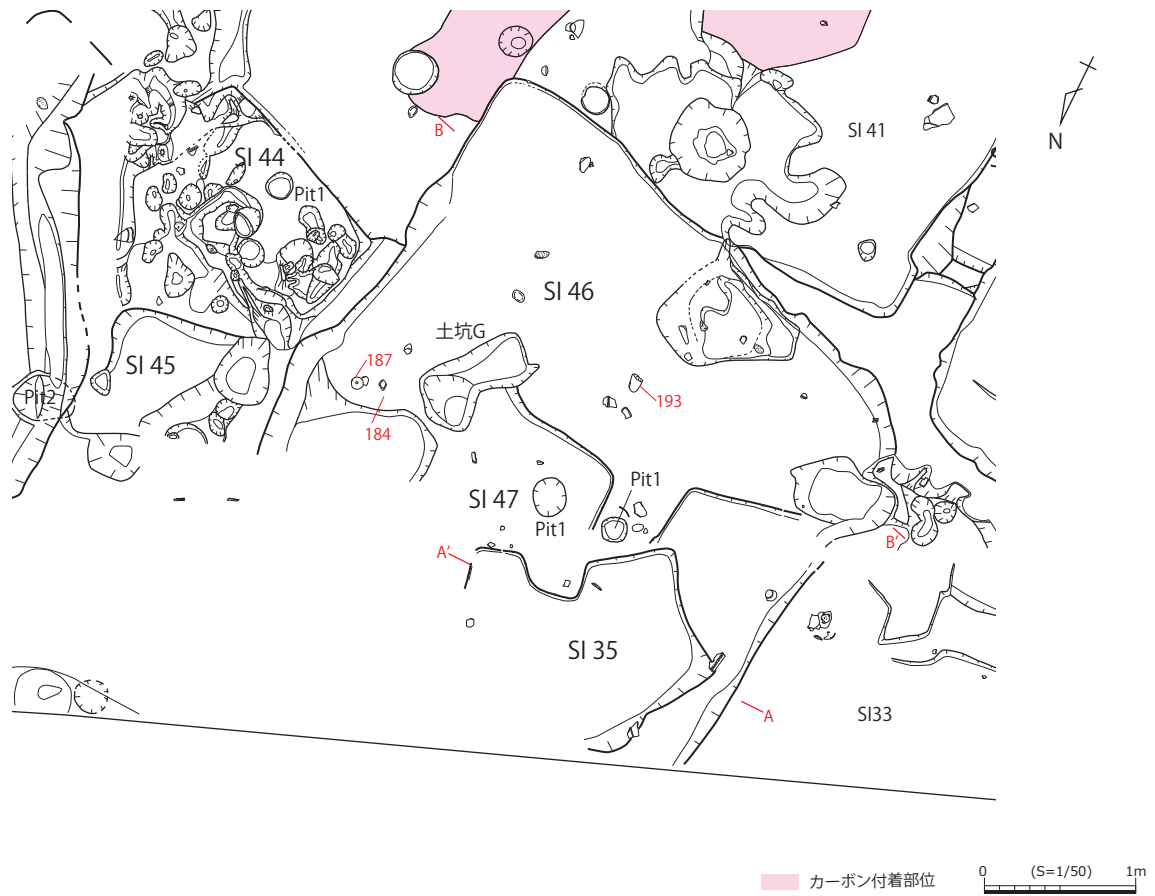
ベッド状遺構は東側竪穴に接し、東コーナー南コーナーに向かって設けられている。奥行 70cm、幅 2.1 m である。東コーナーから 45cm の部分に 3 cm 程度の段が設けられ、南コーナー側の方が高くなっている。カーボン集中箇所は床面中央に、70cm × 50cm の範囲でひょうたん形に確認される。付帯遺構ではないが、床面で検出された土坑 2 基は、西側の竪穴に接して検出されている。土坑の東側に接して土砂が積まれた状況が確認されているが、これは土坑 1・2 を掘削した際の排土と考えられる。したがって、土坑 2 基は建物設置後に掘削されたものと考えられる。そうであれば、床面に掘削土を置いたまま使用することは考えにくいことから、建物廃棄の際等に掘削された可能性もあるところである。

S I 34 の出土遺物としては、成川式土器甕脚部 No. 139・No. 140、壺 No. 141・No. 142 がいずれも床面直上で出土した。壺頸部 No. 141 と甕口縁部 No. 143 は埋土中の出土である。また、磨製石斧の一部の可能性のある磨面を持つ剥片 No. 144 も埋土中出土である。

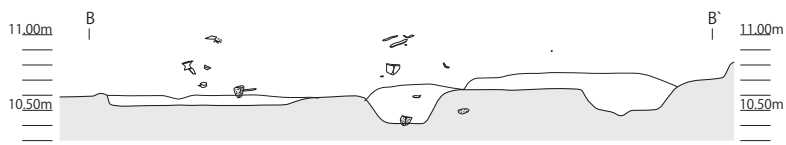
### S I 35 (図 28)

S I 35 は、全体形状は不整形であり、竪穴建物か否かは不明である。付帯遺構は検出されていない。竪穴の南面・西面・北面上端ラインの一部が検出されており、南面上端ラインは中央付近に方形状の凹部がある。南面上端ラインは直角に近い角度で西面上端ラインに至る。また、西面上端ラインは直角に近い角度で南面上端ラインを形成する。南面上端ラインは残存長 1.3 m、西面上端ラインは長さ 90cm、北面上端ラインは残存長 1 m を測る。





SI35 東西断面図



SI46 東西断面図

図 28 S I 35・44・45・46・47 平面図・断面図 (S=1/50)

S I 35はS I 46・S I 47と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 35 → S I 46 (旧), (新) S I 35 → S I 47 (旧)  
と考えられる。付帯遺構は検出されていない。

S I 35の出土遺物としては、甕口縁部No. 145, 甕脚部No. 146, No. 147, 小型の磨製石斧基部No. 148などがある。床面直上資料は、No. 145・No. 146である。

### S I 36 (図 25・図版 6)

S I 36は、他の建物との切り合いが著しい建物であり、竪穴の東面上端ラインの一部のみが検出された。東面上端ラインが直線的であることから、方形竪穴建物であることが想定できる。主軸方向は不明である。検出された竪穴の東面上端ラインは1.6 m程度であるが、本来はこれ以上の規模であると考えられる。

S I 36はS I 25・S I 26・S I 37と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 25 → S I 36 (旧), (新) S I 26 → S I 36 (旧), (新) S I 36 → S I 37 (旧)  
と考えられる。

付帯遺構として床面にピット1基が検出された。Pit 1は径10cmの略円形で、深さは10cmである。また、床面にはカーボン集中部位があり、隣接するS I 26同様に炉跡が設けられていたものと考えられる。

### S I 37 (図 25・図版 6)

S I 37は、他の建物との切り合いが著しい建物であり、竪穴の上端ラインは検出されていない。

S I 37はS I 34・S I 36・S I 38・S I 40・S I 41と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 34 → S I 37 (旧), (新) S I 36 → S I 37 (旧), (新) S I 38 → S I 37 (旧),  
(新) S I 40 → S I 37 (旧), (新) S I 41 → S I 37 (旧)

と考えられる。

付帯遺構として床面にピット3基が検出された。Pit 1は長径12cm, 短径10cm, 深さ29cmの円形である。Pit 2は長径15cm, 短径10cm, 深さ37cmの略円形である。Pit 3は直径11cmの略円形である。

S I 37の出土遺物としては、土器では成川式土器甕No. 149・No. 150, 高杯No. 151, 埴No. 152, ミニチュア土器No. 153がある。石器・石製品では、滑石製子持勾玉No. 154, 磨製石鏃No. 155, 砥石No. 156・No. 157, 軽石製加工品No. 158がある。いずれも埋土中の出土である。

### S I 38 (図 29・図版 8)

S I 38は、他の建物との切り合いが著しい建物であり、竪穴の西面上端ラインのみ検出されている。S I 38の主軸方向は不明である。竪穴の西面上端ラインは長軸1.7 mのみ検出されている。検出面からの竪穴深さは20cmを測る。西面上端ラインは明確な直線ラインではないが、円形竪穴の形状ではないため、方形竪穴建物の一部であると推定できる。

S I 38はS I 37・S I 39・S I 41と切り合い関係があり、切りあい順は、

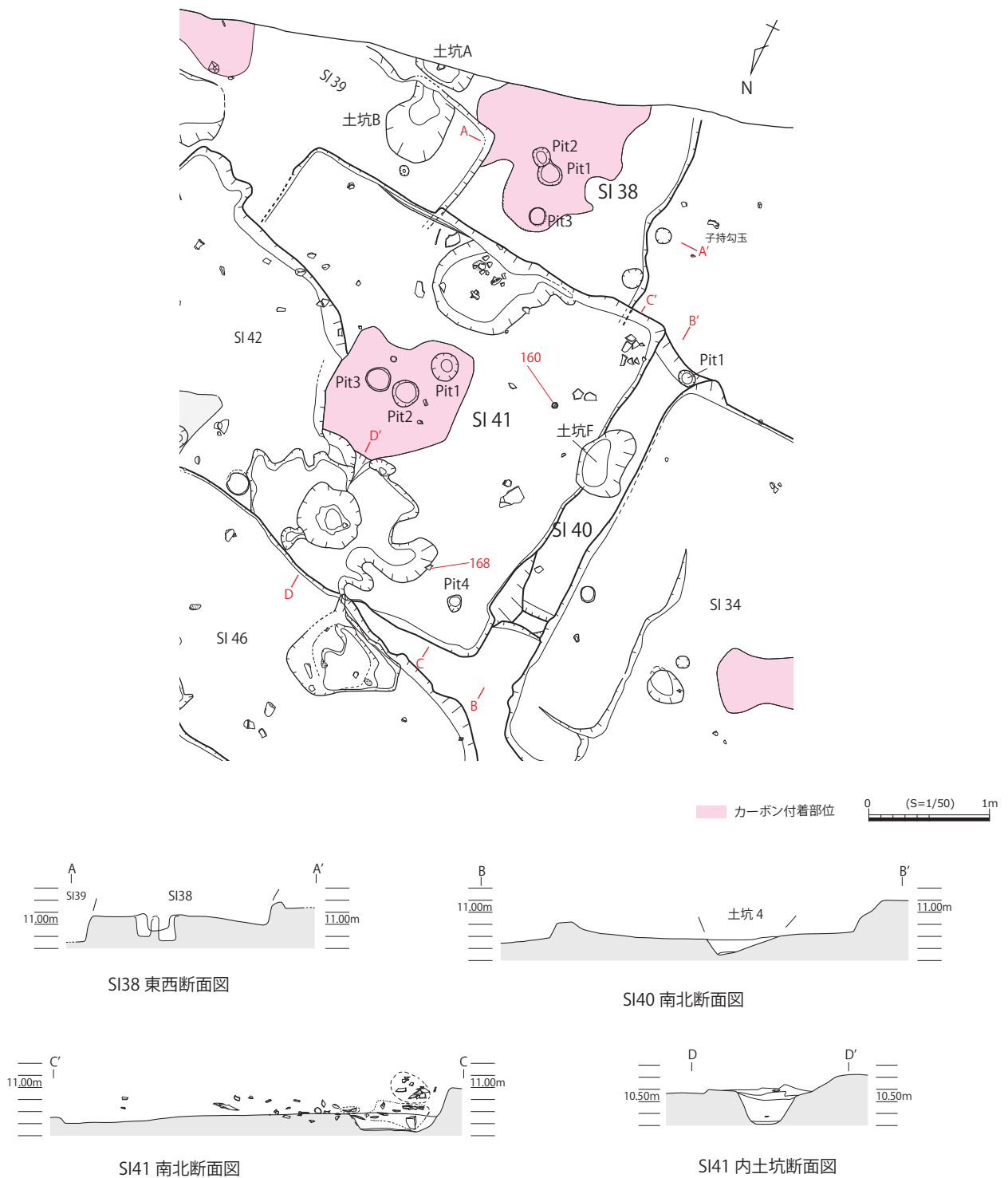


図 29 S I 38・40・41 平面図・断面図 (S=1/50)

(新) S I 38 → S I 37 (旧), (新) S I 39 → S I 38 (旧), (新) S I 41 → S I 38 (旧) と考えられる。

なお, S I 38 の床面東側には, 土坑Aが検出されている。土坑Aは床面を掘り抜き設けられていることから, S I 38 の造営以降に設置された土坑と考えられる。

付帯遺構として, 床面にカーボンが付着した範囲があり, 南北 1.3 m, 東西 1.1 mを測る。S I 38 は調査区外の南側に広がっており, 床面のカーボン付着範囲も広がっていると考えられる。カーボン付着範囲の中央部分に, ピットが3基検出された。Pit 1 と Pit 2 の2基は重なっている。Pit 3 はやや離れた位置にある。Pit 1 は長軸 20cm, 短軸 18cmの楕円形であり, 深さは 15cmである。Pit 2 は長軸 16cm, 短軸 14cmの楕円形であり, 深さ 17cmを測る。Pit 3 は, 長軸 14cm, 短軸 13 cmの略円形であり, 深さは 20cmを測る。

出土遺物は剥片石器No. 159 がある。

### S I 39 (図 30)

S I 39 は, 他の建物との切り合いが著しい建物であり, 竪穴の東面・南面・西面上端ラインの一部が検出されている。南面・西面上端ラインは直角に近いコーナーを作り出しており, S I 39 は方形竪穴建物と考えられる。S I 39 の主軸方向は不明である。竪穴の法量は東西長 3.5 m, 南北長軸  $3 + a$  m である。検出面からの竪穴深さは 18cm を測る。

S I 39 は S I 38・S I 41・S I 42・S I 43 と切り合い関係がある。切りあい順は,  
(新) S I 39 → S I 38 (旧), (新) S I 41 → S I 39 (旧), S I 42 → S I 39 (旧)  
(新) S I 43 → S I 39 (旧), (新)

と考えられる。

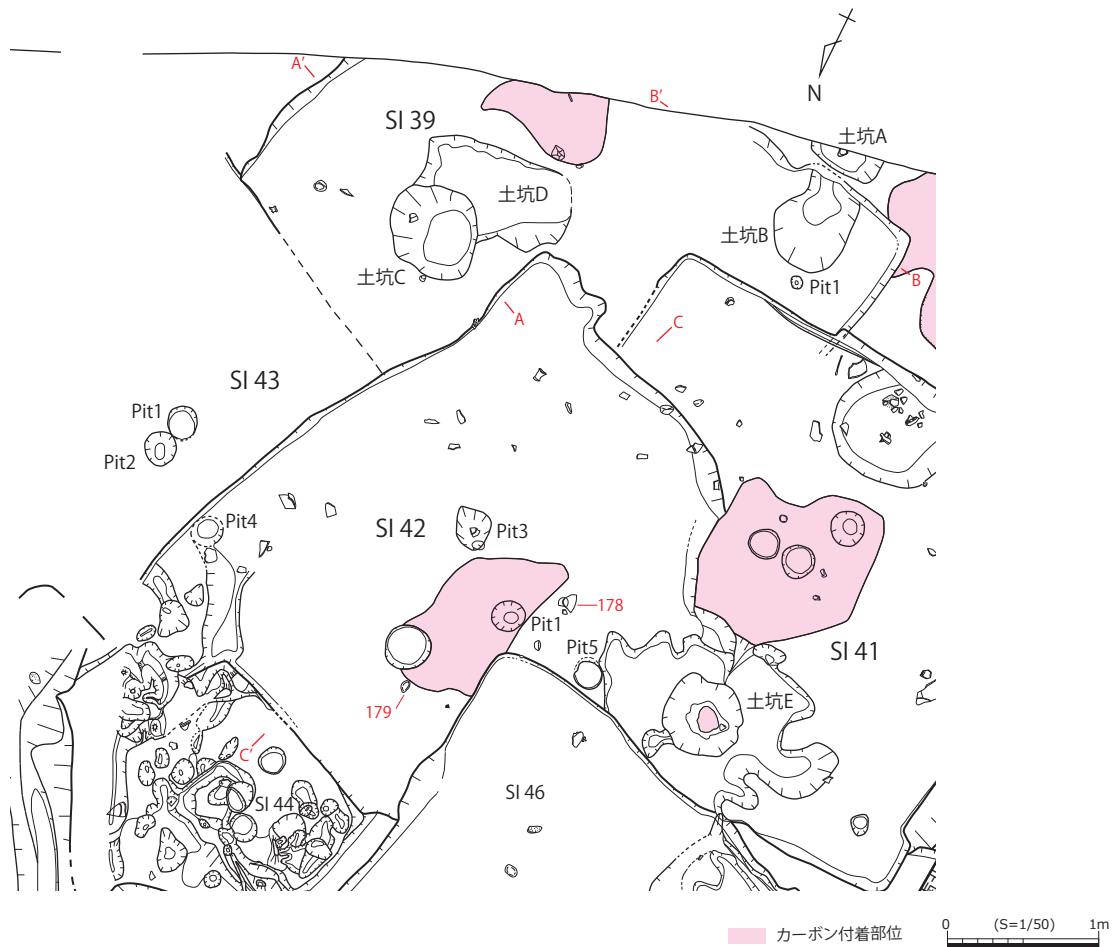
付帯遺構として, 床面にカーボンが付着した範囲があり, 南北 45cm, 東西 85cmを測る。S I 39 の床面の一部は調査区外南側に広がっているが, 床面のカーボン付着範囲も広がっていると考えられる。床面にはピットが1基のみ検出されている。Pit 1 は長径 8 cm, 短径 7 cmの楕円形である。また, 床面には複数の土坑が検出されているが, 床面を掘り抜き設けられていることから, S I 39 の造営以降に設置された土坑と考えられる。

S I 39 の出土遺物としては, 成川式土器甕No. 160, 甕脚部No. 161, No. 162, 鉢脚部No. 163, 石鏃No. 164, 磨石No. 165, 凹石No. 166 がある。床面直上出土遺物は, No. 162, No. 164, No. 165 がある。

### S I 40 (図 29・図版 8)

S I 40 は, 他の建物との切り合いが著しい建物であり, 竪穴の北面・南面上端ラインの一部が検出されているのみである。北面上端ラインと南面上端ラインはおおよそ平行関係にあるように見え, 付帯遺構としてピットが確認できることから, 方形竪穴建物の一部である可能性がある。S I 40 の主軸方向は不明である。確認されている竪穴の幅は最大 2.7 m である。検出面からの竪穴深さは 30cm を測る。

S I 40 は S I 34・S I 37・S I 41, 土坑 F と切り合い関係があり, 切りあい順は,  
(新) S I 34 → S I 40 (旧), (新) S I 40 → S I 37 (旧), (新) S I 41 → S I 40 (旧),



SI 39 東西断面図



SI 42 南北断面図

図 30 S I 39・42・43 平面図・断面図 (S=1/50)

(新) 土坑 F → S I 40 (旧)

と考えられる。

付帯遺構として南側の竪穴立ち上がりにピット 1 基が検出された。Pit 1 は長径 15cm, 短径 12cm の楕円形で, 深さ 15cm を測る。竪穴の立ち上がり部分で検出された。

### S I 41 (図 29・図版 8)

S I 41 は, ほぼ全体形が判明している方形竪穴建物である。主軸は東西方向であり, 東西長 3.2 m, 南北長 3.1 m, 検出面からの深さは 25cm である。床面中央にカーボン集中箇所が検出されている。

S I 41 は S I 38・S I 39・S I 40・S I 42・S I 46 と切り合い関係があり, 切りあい順は, (新) S I 41 → S I 38 (旧), (新) S I 41 → S I 39 (旧), (新) S I 41 → S I 40 (旧), (新) S I 42 → S I 41 (旧), S I 46 → S I 41 (旧)

と考えられる。

付帯遺構として床面にピット 4 基, 壁帯土坑 1 基, 壁帯溝が検出された。

Pit 1 ~ Pit 3 は床面中央のカーボン集中部位にまとまって検出され, Pit 4 は竪穴の北側コーナー付近の床面で検出されている。Pit 1 は長径 24cm, 短径 23cm, 深さ 8cm の略円形である。Pit 2 は長径 23cm, 短径 22cm, 深さ 6cm の略円形である。Pit 3 は長径 20cm・短径 19cm, 深さ 5cm の略円形である。Pit 1 ~ Pit 3 のうち, Pit 3 が土坑炉であるとみられる。Pit 4 は長径 14cm・短径 12cm, 深さ 10cm の略円形である。

壁帯土坑 1 基は南側竪穴掘り方の中央に接して検出しており, 幅 95cm, 奥行 70cm で, つぶれた円形を呈する。壁帯溝は壁帯土坑に接して, 東側に伸びており, 長さ 95cm, 幅 5cm を測る。

ピットの配置からみて, S I 41 は Pit 2 を 1 支柱とした建物である可能性がある。なお, S I 41 の出土遺物としては, 成川式土器甕 No. 167・168, 同脚台 No. 169 のほか, 石包丁片 No. 170, 磨面や敲打痕のある礫石器 No. 171・No. 172・No. 173 がある。

### S I 42 (図 30・図版 8)

S I 42 は, 床面にカーボンの付着部位が検出され, 主軸を東西方向にとると考えられる。また, 竪穴の南東側コーナーと北東側コーナーが検出されている。一方, 北西側のコーナーは他の建物との切りあいにより失われており, 南西側コーナーは, S I 41 との切りあい付近で確認される筈であるが, コーナーは確認されず, 竪穴の上端ラインは不整形となる。竪穴の東面上端ラインは直線的であるのに対して, 南面上端ラインは張り出したのちやや直線的なラインを作り, その後, S I 41 の床面のカーボン付着部位付近で北側へ方向を変え, 再び西側に方向を変える。つまり, 西半はすばまった形状をとっていることになる。このように, S I 42 は東側半分が方形竪穴建物の形態をみせ, 西側半分が方形形状ではなく, 不整形の竪穴となっている。このような形状の竪穴建物の事例については, 南丹波遺跡の半円形半方形の竪穴建物の事例等があり, それらと類似したものである可能性を考えておきたい<sup>(1)</sup>。

S I 42 の法量は竪穴の東側上端ラインの幅が 3.4 m である。奥行きについては, 全体形状が不明であるが, 確認できる範囲では 2.9 m となる。検出面からの竪穴の深さは 25cm となる。南東隅

の張り出しは幅 60cm, 奥行 30cmを測る。

S I 42はS I 39・S I 41・S I 43・S I 44・S I 46と切り合い関係があり, 切りあい順は,  
(新) S I 42 → S I 39 (旧), (新) S I 42 → S I 41 (旧), (新) S I 42 → S I 43 (旧),  
(新) S I 42 → S I 44 (旧), (新) S I 46 → S I 42 (旧)

と考えられる。

付帯遺構として床面にピット 5 基が検出された。Pit 1 は長径 23cm, 短径 20cmの楕円形である。Pit 2 は長径 31cm, 短径 30cmの略円形である。Pit 3 は長軸 31cm, 短軸 25cm, 深さ 29cmの隅丸方形である。Pit 4 は長径 22cm・短径 20cmの略円形である。Pit 5 は長径 21cm・短径 19cmの略円形である。ピットのうち Pit 1 と Pit 2 は土坑炉と考えられる。一方, 配置から主柱とみられるのが Pit 3 と Pit 5 であり, S I 42 は 2 主柱建物である可能性がある

S I 42 の出土遺物としては, 土器では成川式土器甕あるいは鉢脚台No. 174・No. 175, 壺底部No. 176, 高杯No. 177, 同脚部No. 178 があり, 石器では扁平な円礫で表裏に磨面を持つ磨石No. 179 がある。

註

(1) 渡部徹也・鎌田洋昭 2010『南丹波遺跡Ⅱ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 48

### S I 43 (図 30)

S I 43 は, 竪穴の南側上端ラインの一部のみ確認されている。部分的に検出された竪穴の上端は直線的であり, 方形竪穴の可能性を示唆している。S I 43 はS I 39 に切られており, S I 42 に切られている。一部分の検出であり, 法量は不明である。

付帯遺構として床面にピット 2 基が検出された。Pit 1 は長径 22cm, 短径 20cmの楕円形である。Pit 2 は長径 23cm, 短径 20cmの略円形である。

### S I 44 (図 28)

S I 44 は, 床面の該当する部分に造営時の掘削痕跡が多数残っていること, 竪穴の上端ラインのうち南側上端ラインの一部が検出され, それが 90 度に近い角度で曲がるコーナーが検出されていることから, 方形竪穴建物の一部であると考えられる。S I 45 と S I 46 から切られており, 竪穴の大部分は検出できていない。

竪穴の残存法量は南面で 1.3 m, 東面で 0.3 mである。

付帯遺構についてはピット 1 基が検出されており, 長軸 19cm, 短軸 12cmの不整形を呈する。

S I 44 はS I 42・S I 45・S I 46・S I 48と切り合い関係があり, 切りあい順は,  
(新) S I 42 → S I 44 (旧), (新) S I 45 → S I 44 (旧), (新) S I 46 → S I 44 (旧)  
(新) S I 48 → S I 44 (旧)

と考えられる。

床面の掘削痕跡は深さ 10cm弱程度であるが, 1 基のみ 21cmを測り, 平面形が略円形のものがあり, これは付帯遺構のピットであると判断した。Pit 1 は長軸 18cm, 短軸 17cmの略円形であり,

深さは 21cmを測る。

S I 44 の出土遺物としては、成川式土器甕口縁部No.180 がある。

### S I 45 (図 28)

S I 45 は、90 度に近い角度で曲がる竪穴のコーナーの一部のみが検出されているが、方形竪穴建物の一部である可能性がある。竪穴の大部分は検出できていないことから、法量や付帯遺構については部分的な記述にとどまるが、検出された竪穴の上端ラインのうち、南面上端ラインは 1 m、東面上端ラインは 40cmを測る。

S I 45 は S I 44・S I 46 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 45 → S I 44 (旧), (新) S I 46 → S I 45 (旧)

と考えられる。

床面付近にピットや土坑などが検出されているが、S I 45 に付帯するものか不明である。

### S I 46 (図 28・図版 8)

S I 46 は、他の建物との切り合いが著しい建物であるが、竪穴の東面・南面上端ラインが検出されている。また、南東コーナーと南西コーナーが検出されており、方形竪穴建物であることが確認できる。S I 46 は主軸を南北にあるいは東西にとるとみられる。竪穴の東西幅 3.4 m, 南北幅  $2.25\text{ m} + \alpha$  である。検出面からの竪穴深さは 10cm を測る。

S I 46 は S I 35・S I 41・S I 42・S I 44・S I 45・S I 47 と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 35 → S I 46 (旧), (新) S I 46 → S I 41 (旧), (新) S I 46 → S I 44 (旧),

(新) S I 46 → S I 45 (旧), (新) S I 47 → S I 46 (旧), (新) S I 46 → S I 42 (旧)

と考えられる。

付帯遺構として床面にピット 1 基と壁帯土坑 1 基が検出された。Pit 1 は長軸 19cm, 短軸 17cm の略円形で、深さは 18cmを測る。壁帯土坑は南面竪穴掘り方に接しており、幅 85cm, 奥行 65cm, 床面からの深さ 6 cm程度を測り、三角形の平面形を呈する。壁帯土坑の床面にはカーボン等は見られないが、軽石製加工品等の出土がある。

S I 46 の出土遺物としては、成川式土器甕口縁部No.181・No.182・No.183, 同底部No.184, 高杯坏部No.185・No.187, 同脚部No.186, 坩胴部No.188・No.189, 磨製石器No.190, 磨石No.191, 凹石No.192, 石皿No.193, 砥石No.194, 磨面を有する軽石製加工品No.195 がある。床面直上出土遺物は、No.181, No.184, No.187, No.188 がある。

### S I 47 (図 28)

S I 47 は、90 度に近い角度で曲がる竪穴のコーナーの一部のみが検出されていることから、方形竪穴建物の一部であると考えられる。竪穴の大部分は検出できていない。このことから、法量や付帯遺構については部分的な記述にとどまるが、検出された竪穴の南面上端ラインは 1 m, 西面上端ラインは 40cmを測る。



S I 47はS I 35・S I 46と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 35 → S I 47 (旧), (新) S I 47 → S I 46 (旧)  
と考えられる。

床面付近にピットや土坑などが検出されているが、S I 47に付帯するものか不明である。

S I 45はS I 35・S I 46と切り合い関係があり、切りあい順はS I 46とは明瞭で、  
(新) S I 45 → S I 46 (旧)  
であるが、S I 35との切りあい関係は、上端ラインが接していないため明瞭ではないが、(新)  
S I 35 → S I 47 (旧)  
の可能性があると考えられる。

付帯遺構として床面にピット1基が検出された。Pit 1は長径25cm, 短径19cmの楕円形を呈する。

### S I 48 (図31・図32・図版9)

S I 48は、張り出しを有する円形竪穴であるが、平面形はやや細長い円形を呈するように見える。竪穴の最大径は4.5mを測り、検出面からの竪穴深さは80cmを測る。かなり大型の竪穴であるが、支柱穴とみられる4穴のピットは竪穴掘り方に接して設けられている。4支柱タイプで円形竪穴の掘り方と支柱が重なっているものとして、宮之前遺跡調査で検出された2号建物跡がある。この竪穴建物は「方形+円形」2段掘りの竪穴建物であり、方形竪穴の床面に支柱を設けた後に、円形竪穴を掘削したものであり、円形竪穴の掘り方に支柱穴が重なっていた。S I 48もおそらく同様な建物と考えられ、円形竪穴の外に方形竪穴が設けられた可能性が考えられる。方形竪穴の掘り方が非常に浅いものであったことから、方形竪穴の検出ができなかった可能性が考えられる。

S I 48はS I 44・S I 49・S I 50と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 48 → S I 44 (旧), (新) S I 49 → S I 48 (旧), (新) S I 50 → S I 48 (旧)  
と考えられる。

付帯遺構として上記の竪穴掘り方とだぶった支柱とみられるピット4基と床面にピット10基、壁帯溝が検出された。また、円形竪穴の南面に張り出しが設けられている。支柱穴と考えられるピット4基は、Pit 1～Pit 4である。Pit 1は長径32cm, 短径28cm, 深さ89cmの略円形である。Pit 2は長径43cm, 短径30cm, 深さ50cmの楕円形である。Pit 3は長径32cm, 短径28cm, 深さ14cmの略円形である。Pit 4は長径45cm・短径40cmの略円形である。Pit 5は長径19cm・短径17cm, 深さ21cmの略円形である。Pit 6は長径20cm・短径18cm, 深さ34cmの略円形である。Pit 7は長径20cm・短径19cm, 深さ31cmの略円形である。Pit 8は長径23cm・短径21cm, 深さ16cmの楕円形である。Pit 9は長径14cm・短径14cm, 深さ11cmの略円形で、Pit10と切りあい関係にある。Pit10は長径16cm・短径13cm, 深さ10cmの略円形である。Pit11は長径22cm・短径20cm, 深さ12cmの楕円形である。Pit12は長径28cm・短径25cm, 深さ13cmの約円形である。Pit13は長径16cm・短径15cm, 深さ9cmの楕円形である。Pit14は長径21cm・短径18cm, 深さ7cmの楕円形である。

S I 48の支柱と考えられるピットは4穴(Pit 1・Pit 2・Pit 3・Pit 4)があるが、Pit 2とPit 3は近接しており、掘り直しの可能性があると考えられる。そうであれば、S I 48は3支柱建物となる。

張り出し部分は部分的な検出であるが、幅80cm, 奥行き1m程度とみられる。

壁帯溝は検出範囲ではすべての竪穴下端で確認されている。西面では下端幅が15cm程度と広い

が、南面から東面では下端幅数cmと狭くなっている。壁帯溝断面形状は逆台形やV字状あるいはU字状断面を呈する。南面の壁帯溝は張り出し部分に接続している。このため、建物床面の排水用溝とした場合、張り出し部分に水が流れ込んでしまうことが考えられるため、この例では排水施設とは考えにくい。

S I 48の床面出土遺物としては、成川式土器甕脚部No. 196・No. 197、加工痕のある石器No. 198、舟形軽石模造品No. 199、石核とみられる石器No. 200がある。

#### S I 49 (図 31・図 32・図版 9)

S I 49は、大半が調査区外に出ており、検出されたのは竪穴の一部である。竪穴形状から張り出しを有する円形竪穴であると考えられるが、S I 48と比較してより正円に近い円形を呈するようみえる。法量は不明であるが、検出された竪穴の幅は2.9 mを測る。竪穴の深さはS I 48床面から11cm程度である。

S I 49はS I 48・S I 50と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 49 → S I 48 (旧)、(新) S I 49 → S I 50 (旧) である。

付帯遺構として、幅62cm、奥行99cmの張り出しがある。張り出し部分の深さは検出面から30cmを測り、S I 49床面から20cm下る。張り出し床面にはピット1基が検出されている。ピットは直径15cm、深さ15cmであり、平面形は略円形を呈する。張り出し部分では、完形の蓋形土器等の遺物が集中して出土しており、底部に木炭の堆積層が最大で10cm厚で確認された。

#### S I 50 (図 31・図 32・図版 9)

S I 50は、調査区的最東端で検出された竪穴建物である。他の建物との切り合いが著しい建物であり、また、床面の大半が調査区外に出ている。竪穴の南面上端ラインの一部が検出されており、南面上端ラインは直線的であり、方形竪穴建物である可能性がある。そうであれば、主軸方向は南面上端ラインに平行または直交する方向であると考えられる。竪穴の南面上端ラインは $1.9\text{ m} + \alpha$ 、検出面(S I 49)からの深さは5cm程度を測る。

S I 50はS I 48・S I 49と切り合い関係があり、切りあい順は、

(新) S I 50 → S I 48 (旧)、(新) S I 49 → S I 50 (旧)

と考えられる。

付帯遺構として床面にピット2基が検出された。Pit 1は長径12cm、短径10cmの楕円形である。Pit 2は長径17cm、短径10cmの略円形である。

S I 50の出土遺物としては、成川式土器ミニチュア土器脚部No. 202、同壺底部No. 203、打製石斧No. 204、敲石No. 205、凹石No. 206、砥石No. 207がある。

#### S I 51 (図 18・図版 5)

S I 51は、他の建物との切り合いが著しい建物であり、竪穴の南面・西面上端ラインの一部が検出されている。直角に近い北西コーナーが検出されており、方形竪穴建物であると考えられる。検出された竪穴の上端ラインは長軸 $1.65\text{ m} + \alpha$ である。検出面からの竪穴深さは10cmを測る。

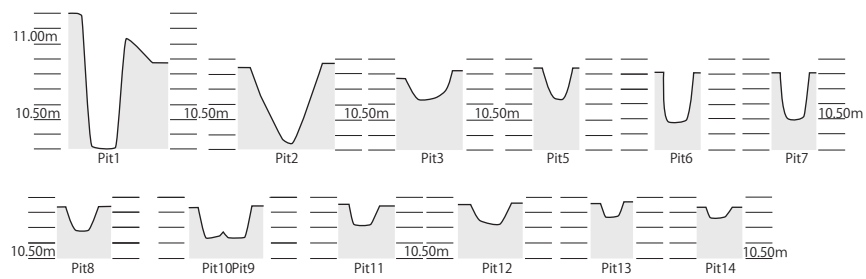
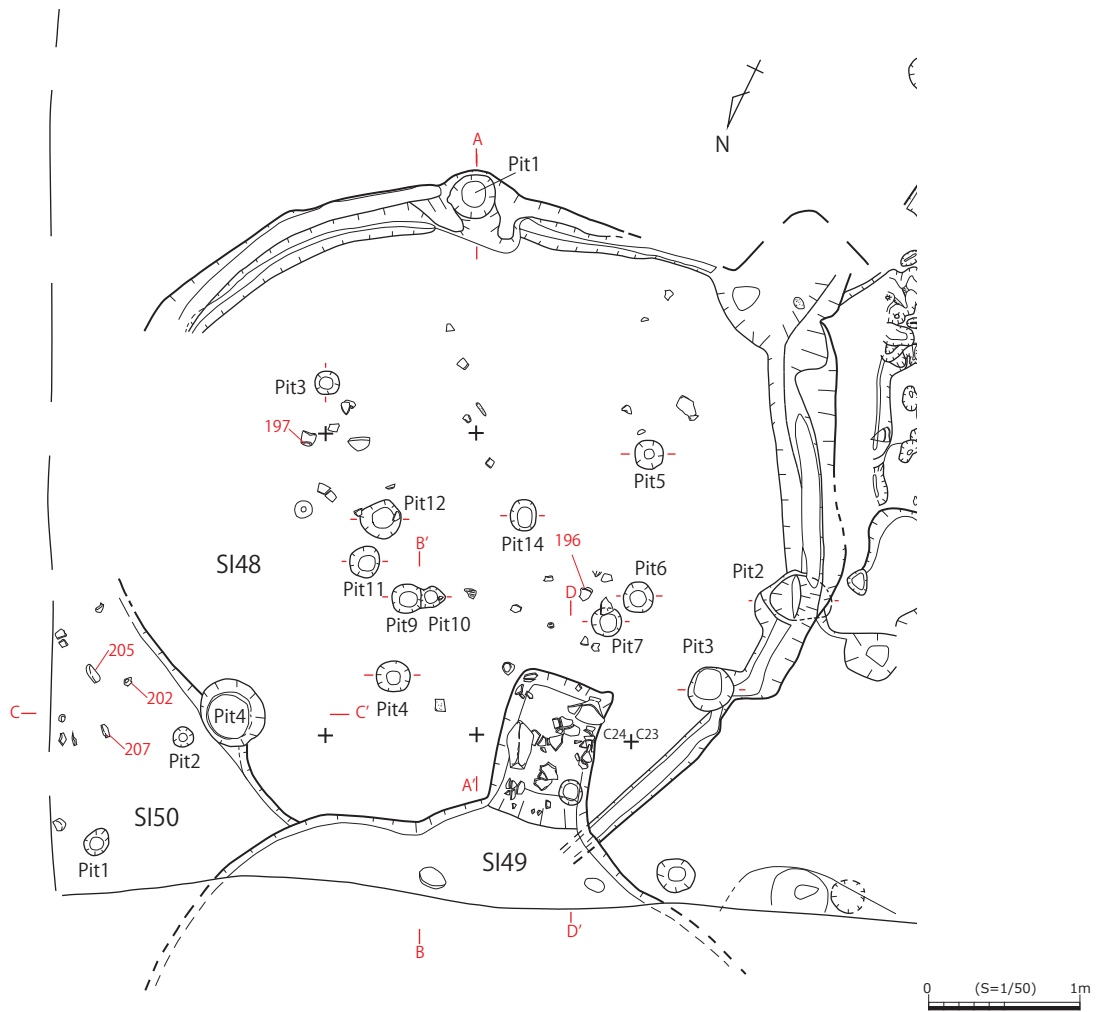
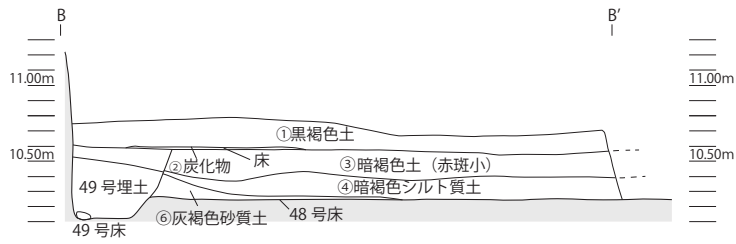


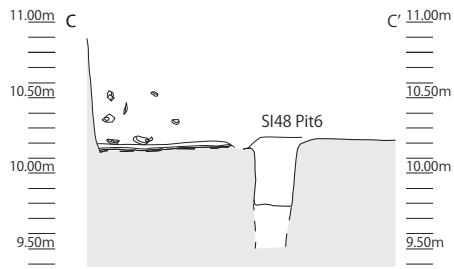
図 31 S I 48・49・50 平面図・S I 48 ピット断面図 (S=1/50)



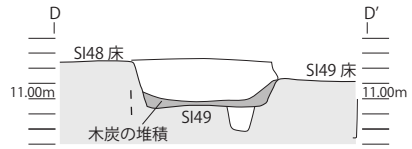
SI48 南北断面図



SI48・SI49 南北断面図



SI50 東西断面



SI49 張り出し南北断面

図 32 S I 48・49・50 断面図 (S=1/50)

S I 51 は S I 8 ・ S I 9 ・ S I 11 ・ S I 12 と切り合い関係があり、切りあい順は、  
(新) S I 8 → S I 51 (旧)、(新) S I 9 → S I 51 (旧)、(新) S I 51 → S I 11 (旧)、  
(新) S I 12 → S I 51 (旧)

と考えられる。

付帯遺構は検出されていない。

## S I 52 (図 23)

S I 52 は、床面の大部分を S I 21 から切られている。竪穴の上端ラインは東側に若干残るのみで、床面が若干検出されている。このため、平面形状や法量は不明である。

S I 52 は上述のように床面の大部分を S I 21 から切られている。また、周囲の竪穴建物 S I 28 ・ S I 29 と切り合い関係が想定されるが、明確な切りあい順は不明である。

付帯遺構は、ピットが考えられるが、周辺に複数のピット等が分布しており、この遺構に伴うものか判断できない。

出土遺物として、成川式土器甕 No. 208、同口縁部 No. 209、同胴部 No. 210、甕脚台 No. 211、No. 212、No. 213、No. 214、壺頸部 No. 215、底部 No. 216、高杯杯部 No. 217、埴 No. 218、No. 219 がある。石器では、磨石 No. 220 ・ No. 221、石包丁形軽石加工品 No. 222 がある。

上記のうち S I 52 の床面直上遺物のうち古墳時代に帰属する遺物は、No. 209、No. 212、No. 215、底部 No. 216、No. 217 である。

## ② 土坑

古墳時代の遺構として V 区では土坑 7 基が検出された。以下、土坑 A ～土坑 G とし、その内容について記載する。

### (土坑 A) (図 30)

S I 39 の南側に隣接して土坑 A が検出された。大半は調査区外にあり、全体形状は不明であるが、幅 50cm を測る。

### (土坑 B) (図 30)

S I 39 床面で検出された。長軸 60cm、短軸 50cm、S I 39 床面からの深さ 6cm の不整形土坑である。

### (土坑 C) (図 30)

S I 39 床面で土坑 D と切りあう形で検出された。長軸 62cm、短軸 57cm、S I 39 の床面からの深さは 18cm を測る。平面形状は隅丸形状を呈する。土坑 D を切って設置されている。埋土中から成川式土器高杯の杯部片、炭化種子が出土した。

#### (土坑D) (図 30)

S I 39 床面で土坑Cと切りあう形で検出された。長軸 1 m、短軸 65cm、S I 39 の床面からの深さは 12cmを測る。平面形状は隅丸長方形を呈する。土坑Cに切られている。

#### (土坑E) (図 30)

S I 41 と S I 42 とを切って設置された土坑である。また S I 46 から切られている。建物の新旧関係は、(新) S I 46 → S I 41 → S I 42 (旧) であるため、土坑の設置時期は、S I 41 以降で S I 46 以前ということになる。

土坑Eは不整形の平面であり、中央に略円形の土坑を有する二重構造になっている。中央の土坑底部にはカーボンが付着していた。

土坑の法量であるが、不整形の上段部分は東西幅 1.6 m、南北幅は 1.1 m程度であるが、土坑の北側は S I 46 によって切られているため、本来の法量は不明である。中央に設けられた略円形の土坑は長軸 53cm、短軸 51cmを測る。

#### (土坑F) (図 29)

土坑Fは S I 40 の床面で検出された。S I 40 を切っている S I 41 の立ち上がりをも同時に切っていることから、時期的に S I 41 造営以降に設けられたものと考えられる。

平面形状は不整楕円形であり、長軸 59 m、短軸 37 m、S I 40 の床面からの深さ 15cmを測る。遺物は、下段床面から石器が出土したほか、埋土中から土器片が出土している。

#### (土坑G) (図 28)

土坑Gは S I 46 の床面で検出された。S I 46 を切っていることから、時期的に S I 46 造営以降に設けられたものと考えられる。

平面形状は隅丸方形+長方形であり、隅丸方形の部分は長軸 46 m、短軸 35 mを測り、長方形の部分は長軸 45cm、短軸 35cm、全長は 83cmを測る。隅丸方形の部分が一段深く、S I 46 の床面からの深さ 13cmを測り、長方形部分は 6 cmを測る。

遺物は、下段床面から石器が出土したほか、埋土中から土器片が出土している。

### ③ 溝状遺構 (図 19)

S I 19 床面に溝状遺構が検出されている。これは、また S I 19 の床面を切る形で造営されており、S I 21 に切られている。直線状に 1.2 m程度検出されており、7基集中した土坑に接続している。幅は 20cm、深さ 12cmを測る。遺構の切りあい全体形は確認されておらず、性格は不明である。

出土遺物は凹石No. 223 がある。

溝状遺構は S I 21 に切られており、それ以前の造営と考えられる。

## (2) 遺物

### ① 竪穴建物跡出土遺物

#### S I -1 (図 33, 図版 14)

1は甕もしくは鉢の口縁部である。内湾する形態で、端部は丸みをもつ。内外面とも横方向のミガキがみられる。淡橙色に発色する。

2は剥片である。石包丁破片の可能性もある。

#### S I 3 (図 34, 図版 14)

3は袋状鉄斧である。全長 5.2cm, 刃幅 3.5cm, 基部幅 0.9cmを測る。基部の半分は袋部とも折損しているが、袋部が残存している。袋部の長さは 3.0cm, 幅は 0.7cmである。袋部と刃部の境界は不明瞭で、刃部から基部に緩やかに連続する無肩タイプとなっている。

4は青銅製鈴である。潰れているが、長軸 2.0cm, 短軸 1.5cm, 厚さ 1.5mmを測る。鈕は高さ 0.5cm, 幅 0.5cmである。玉が入っているかどうかは不明である。

#### S I 7 (図 35, 図版 14)

5は短頸壺の口縁部である。口縁端部および内面は摩滅が著しい。外面は横方向のナデである。口径は復元で 10.0cmを測る。

6は滑石製模造品である。穿孔がある。勾玉あるいは鏡を模した可能性がある。

7は頁岩製磨製石鏃片である。全面に研磨痕が残る。

8は軽石製加工品である。表裏を面取りしており平滑に仕上げている。

#### S I 8 (図 36・37, 図版 14)

9は甕の口縁部である。端部はコの字を呈し、シャープな作りである。内面にはユビオサエが明瞭に残る。突帯は断面三角形となる。内外面ともミガキ調整で、淡橙色に発色する。

10は外反する甕の口縁部である。端部は丸みをもつ。胎土に暗赤色粒子が含まれる。

11は甕の底部で、平底を呈する。底径は復元径 8.0cmを測る。底部の立ち上がり部分には連続したユビオサがみられる。外面は剥落している。底面の器壁は薄い。

12は壺の口縁部である。山ノ口式と考えられる。端部は凹線の上に円形浮文が貼り付けられる。浮文の径は 0.8cmである。内外面とも雲母が明瞭に見られる。

13は埴の胴部片である。肩部が膨らみをもつタイプで、屈曲部内面には接合線が明瞭に残る。内外面とも淡桃色に発色する。

14は磨製石器の刃部とみられる破片である。頁岩製である。

15安山岩製敲石である。上端と下端に敲打痕が集中する。

16は軽石製加工品である。体部左右に抉りが作り出されている。

17は軽石製加工品である。平面形は三角形を呈する。

18は青銅鏡の破片である。幅 1.2cm, 奥行 1.1cmを測る。縁部から外区にかけての部分であり、端部は丸く収まり、縁部の断面形は緩やかに厚みを増し、稜を作り出し外区にむかって急に落ち込む。縁部最大厚は 0.45cm, 外区最大厚は 0.2cmを測る。

### S I 9 (図 38, 図版 15)

19 はホルンフェルス製の砥石である。断面形は方形を意識したものとうかがえる。長細い形状であり、体部両面に研磨痕が残る。また、砥石面と考えられる面は研磨により窪んでいる。

20 は砂岩製の敲石である。長細い形状で、上端と下端に敲打痕が集中する。

### S I 10 (図 39・40, 図版 16)

21 は口縁部が受口状となる甕である。胴部以下は欠損している。頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられる。口径 20.0cm, 頸部径 19.9cmを測る。内外面とも淡桃色に発色し、口縁部外面には黒斑が見られる。

22 は甕もしくは鉢の口縁部である。端部は欠損している。砂粒が多く含まれており、ザラザラとした質感である。外面は淡橙色である。

23 は甕の口縁部で、端部は欠損しているが内湾する形態である。貼り付け突帯には刻目がみられ、その間隔が広いタイプのものである。指頭による刻目で笹貫Ⅱ式の特徴を有している。

24 は内湾する甕の口縁部で、口縁部下には一条の貼り付け突帯をもつ。刻目の間隔は平均 3.5cmである。端部はコの字でシャープな作りである。外面は淡黄色～灰色に発色する。

25 は甕の脚部で、ハの字に開き、端部は丸みをもつ。脚部内面には黒斑がみられる。底部内面はコゲが薄く付着している。外面は丁寧なナデ調整で平滑に仕上げられる。石英粒子が多く含まれている。

26 は甕の脚部で、底部内面に小さな平坦面がみられる。そのため底面の器壁は薄い。剥落が著しい。径 6mmの白色粒がみられる。

27 は壺の底部で、平底を呈する。底径は復元径 7.8cmを測る。底部外面には黒斑がみられる。立ち上がり部分の器壁は 2.5cmと厚い。内外面とも淡桃色～橙色に発色する。胎土には粒子が多く含まれており、ザラザラとした質感をもつ。

28 は高杯の口縁部で、直線的に大きく開く形態である。端部は丁寧なヨコナデがみられ、端面は M 字にくぼむ。外面は淡桃色に発色するが、一部火襷状に灰色に発色している。他の土器に比べてやや硬質である。

29 は埴の肩部片で、胴部の屈曲部および頸部で欠損している。内面は成形時のユビオサエが明瞭に残る。外面は丁寧なナデ調整がみられ、一部ミガキ状になっている。肩部外面には黒斑が見られる。

30 は胴部下方が屈曲するタイプの埴で、口縁部が欠損している。胴部最大径は 7.2cmを測り、最大径部分に黒斑がみられる。底部は丸底を呈し、内底面には円形のくぼみを持つ。外面には丁寧なミガキ調整がみられる。

31 は鉢口縁部で、底部は欠損している。口径は復元径で 10.0cmを測る。内外面とも淡桃色に発色する。

32 は頁岩製の打製石斧破片である。刃部が欠損している。基部左右に抉りが作られている。

### S I 11 (図 41, 図版 18)

33 はほぼ完形の埴である。胴部は球胴となり、底部は明瞭な底面を持たないが、ほぼ平底である。口径 10.6cm, 器高 13.3cm, 頸部径 7.1cm, 胴部最大径 11.2cmを測り、やや大型である。口縁部は



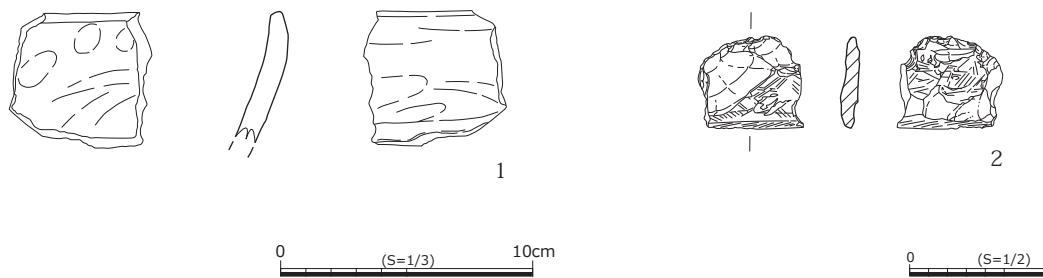


図 33 S I - 1 出土遺物

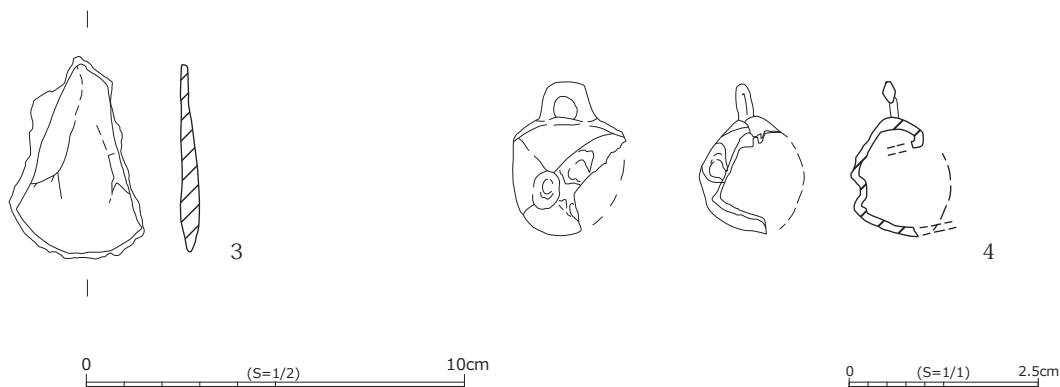


図 34 S I 3 出土遺物

ゆるやかな受口状を呈し、頸部は強く屈曲する。内底面には粘土の盛り上がりが見られる。外面には5cmほどの黒斑が見られる。

S I 12 (図 42 ~ 44, 図版 17)

34 は山ノ口式の甕の口縁部であり、頸部から口縁部にかけて先細りする。頸部内面には強い稜線が見られる。頸部下の突帯の有無については不明である。

35 は直線的に立ち上がる口縁部をもつ甕であり、口縁部にはやや歪みが見られる。端部はシャープである。内外面とも淡橙色に発色し、ザラザラとした質感がある。

36 は内湾する甕の口縁部で、口縁部下に一条の貼り付け突帯をもつ。貼り付け時のユビオサエが見られる。内外面とも丁寧なナデ調整で、淡桃色に発色する。

37 は壺の口縁部で、外反するタイプのものである。口径は復元径 12.0cmを測る。外面には縦方向のナデののち、口縁端部を丁寧なヨコナデで仕上げている。桃色に発色する。

38 は甕の脚部であり、短く開く。脚部径 7.5cmを測る。脚部端面は平坦面をもつ。内面にはコゲ等の使用痕は見られない。

39 は小型壺の底部で、小さな底面をもつ。外面は淡桃色に発色する。

40 は頁岩製の磨製石器である。表面の大部分に研磨痕が残るが、裏面は一部である。

41 は安山岩製の磨石である。表裏面に磨面があり、表面に若干敲打痕が残る。

42 は安山岩製の敲石である。上端下端に敲打痕が集中する。表裏面には磨面がある。

43 は軽石製加工品である。半分に分割した軽石の円礫の表裏面に平坦面を作り出している。また、側面は稜線を作り出すように整形している。また、上端を面取りしている。いわゆる「魚形軽石製加工品」と考えられる。

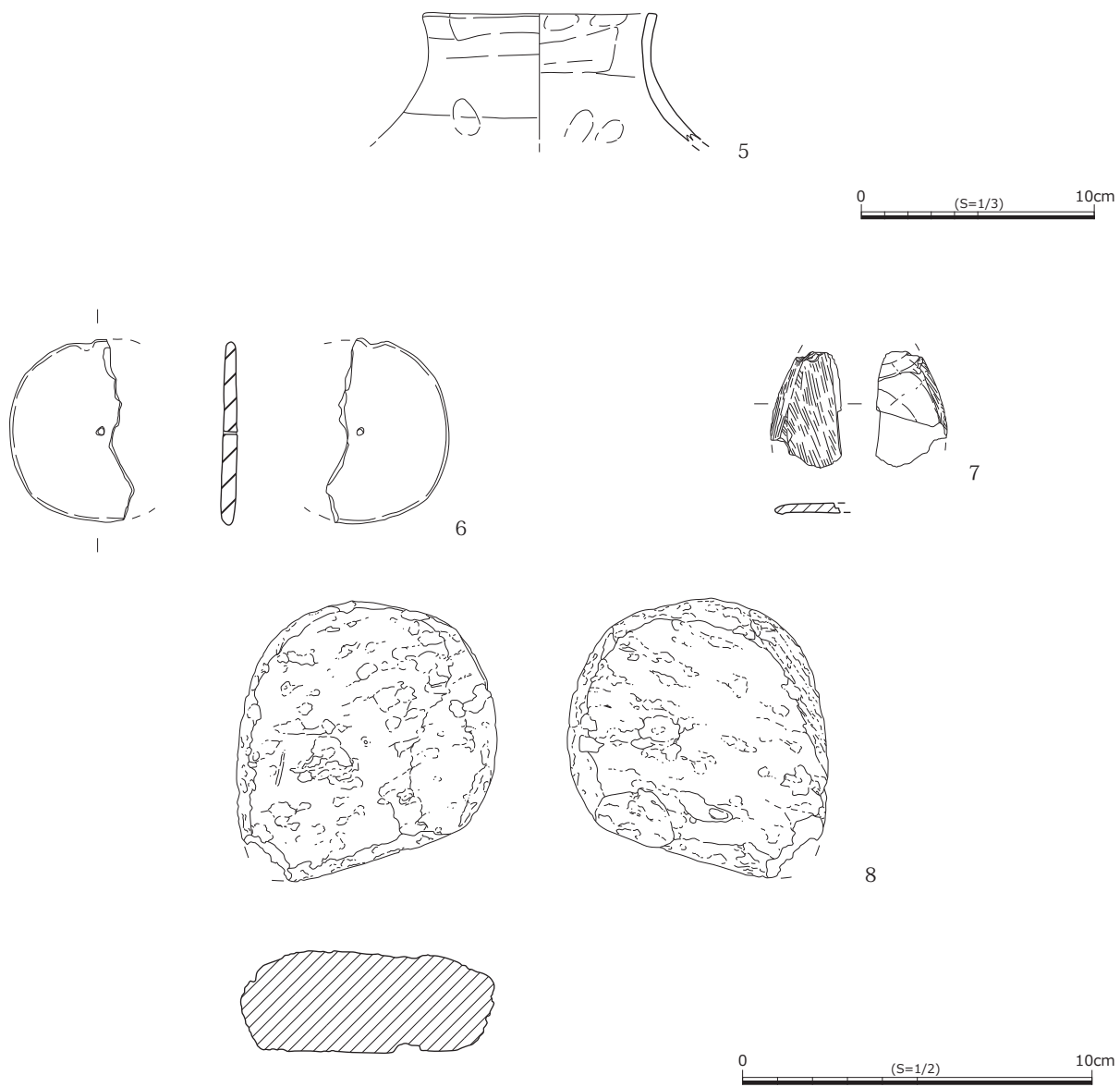


图 35 S 1 7 出土遺物

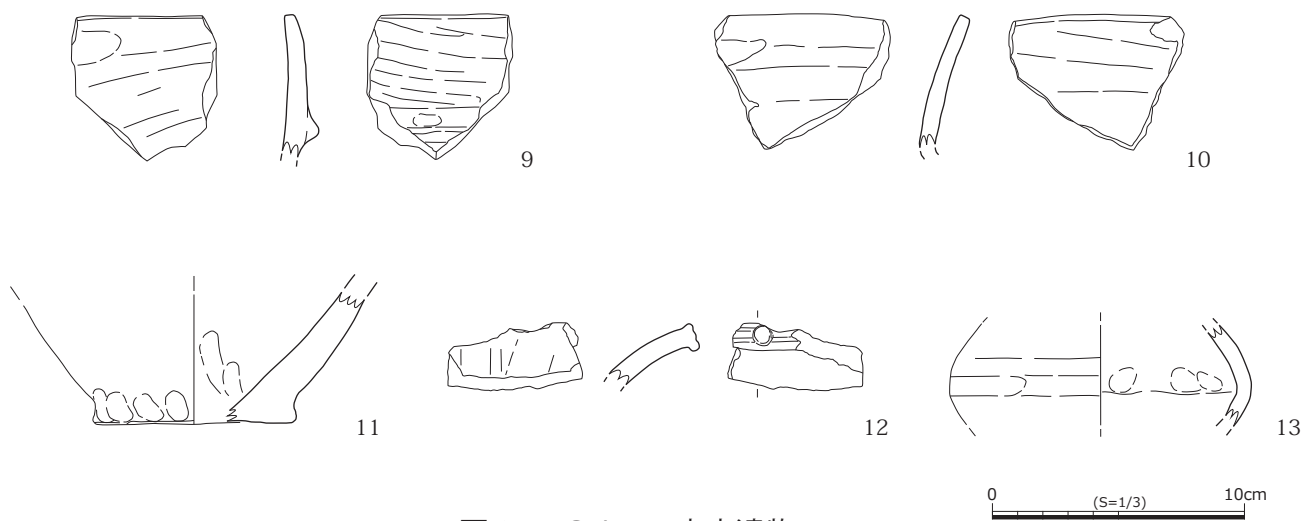
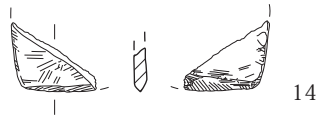
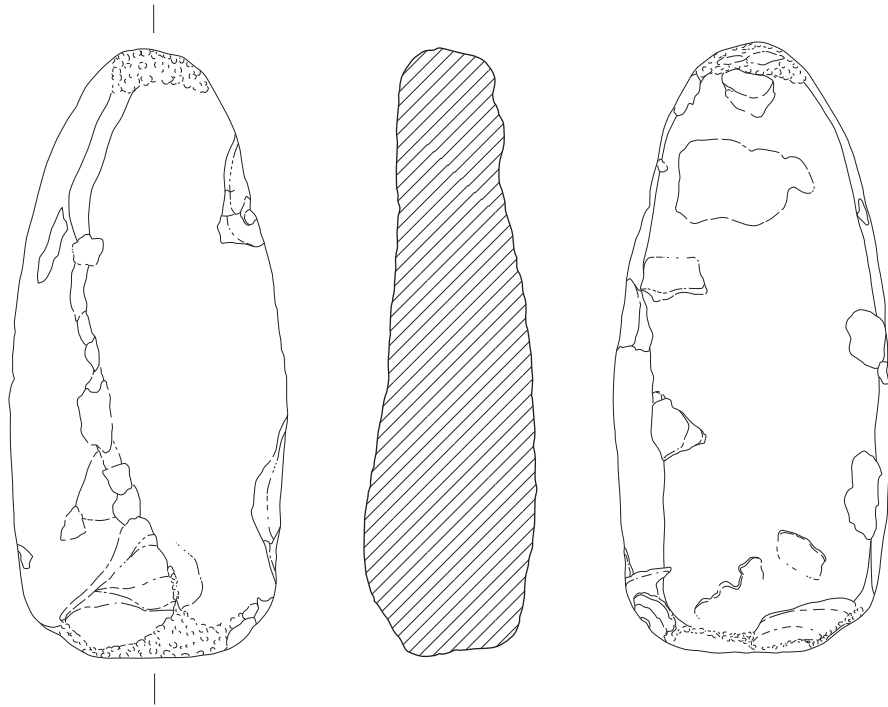


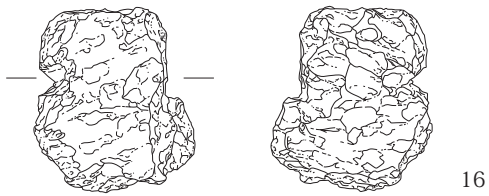
图 36 S 1 8 出土遺物



14



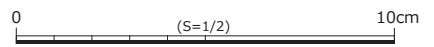
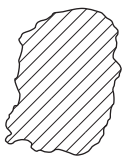
15



16



17



18

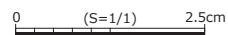
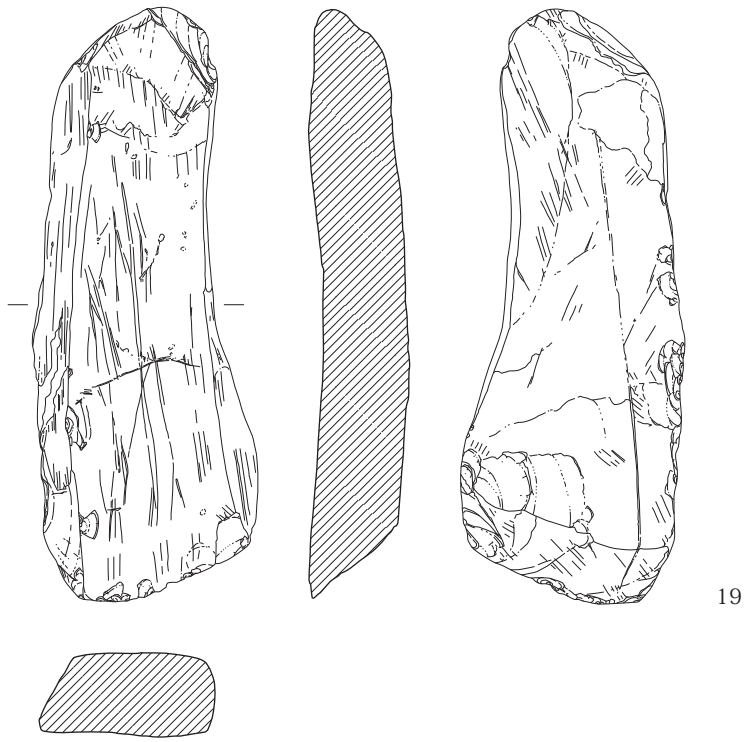
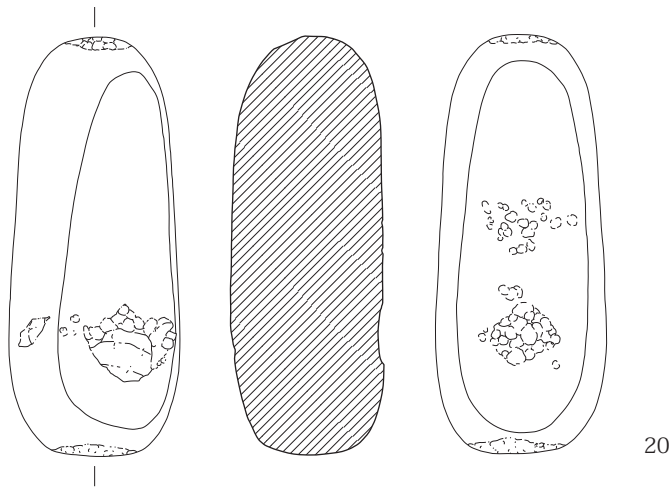


图 37 S I 8 出土遺物



19



20

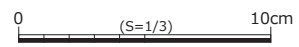


图 38 S I 9 出土遺物

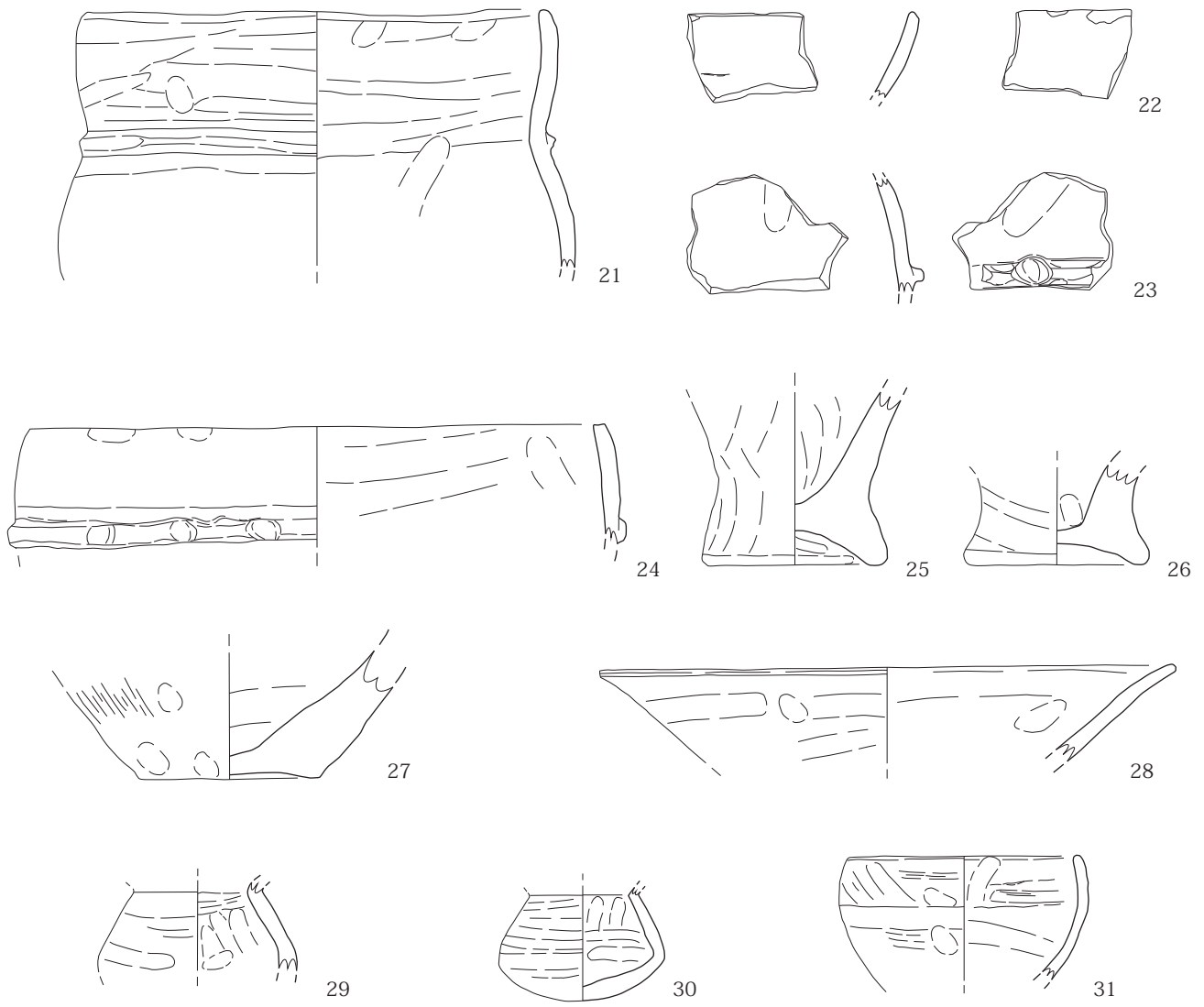
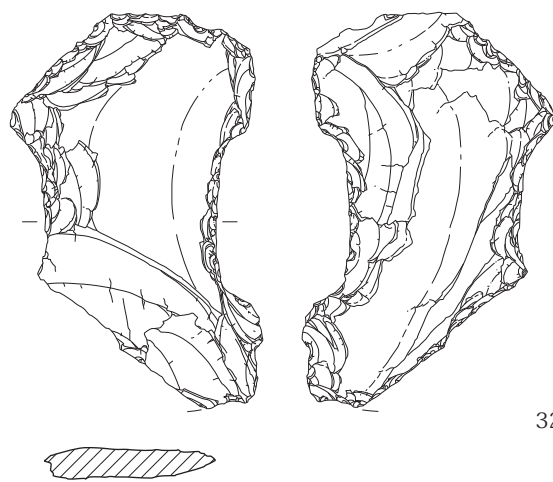


图 39 S I 10 出土遺物

0 (S=1/3) 10cm



32

0 (S=1/2) 10cm

图 40 S I 10 出土遺物

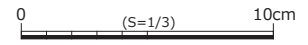
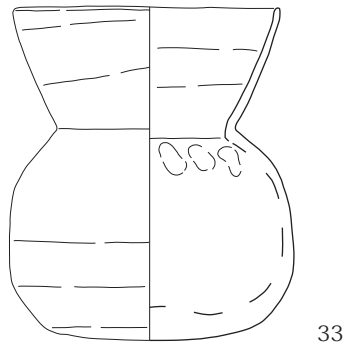


图 41 S I 11 出土遺物

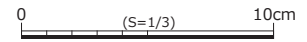
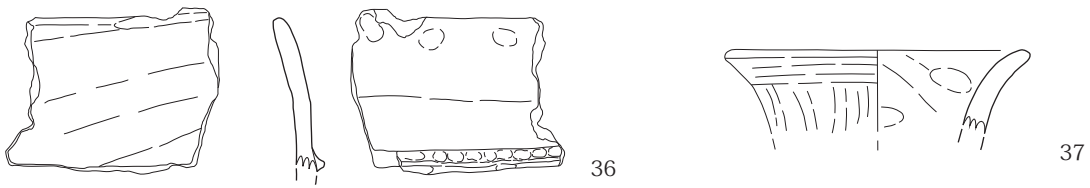
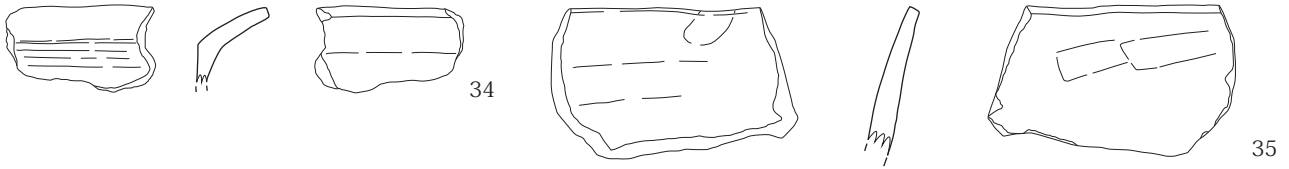


图 42 S I 12 出土遺物

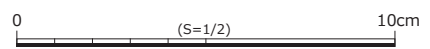
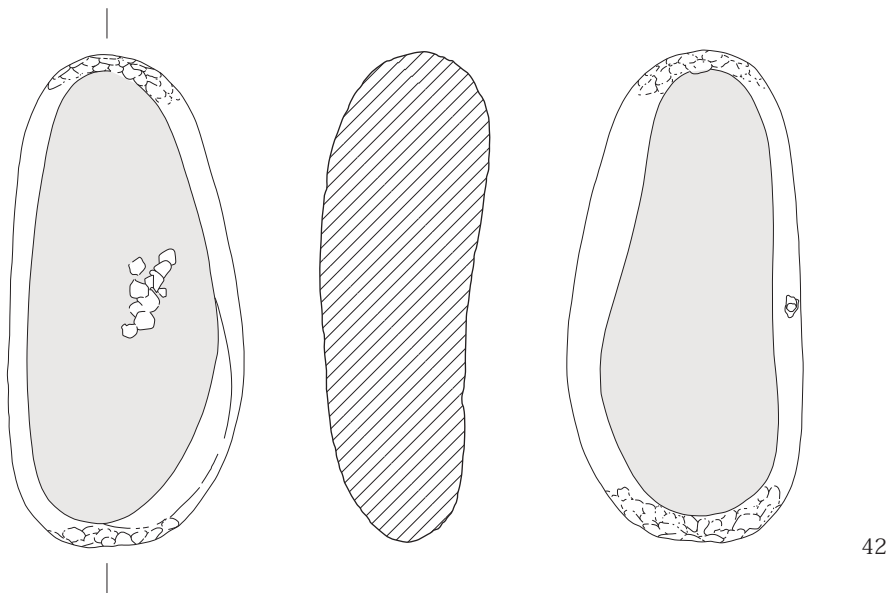
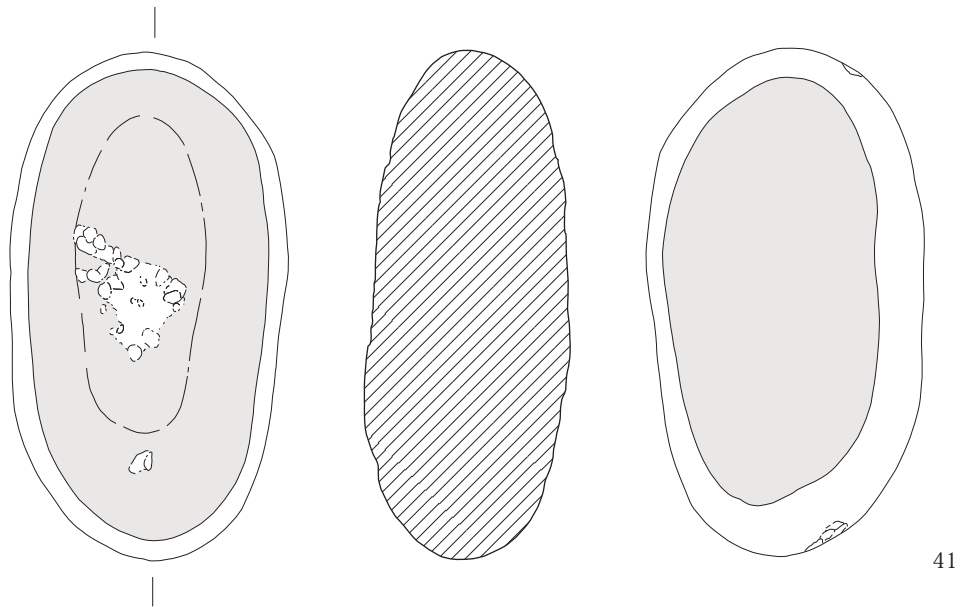
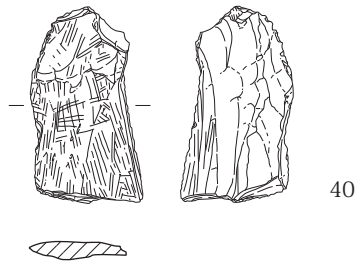


图 43 S I 12 出土遺物

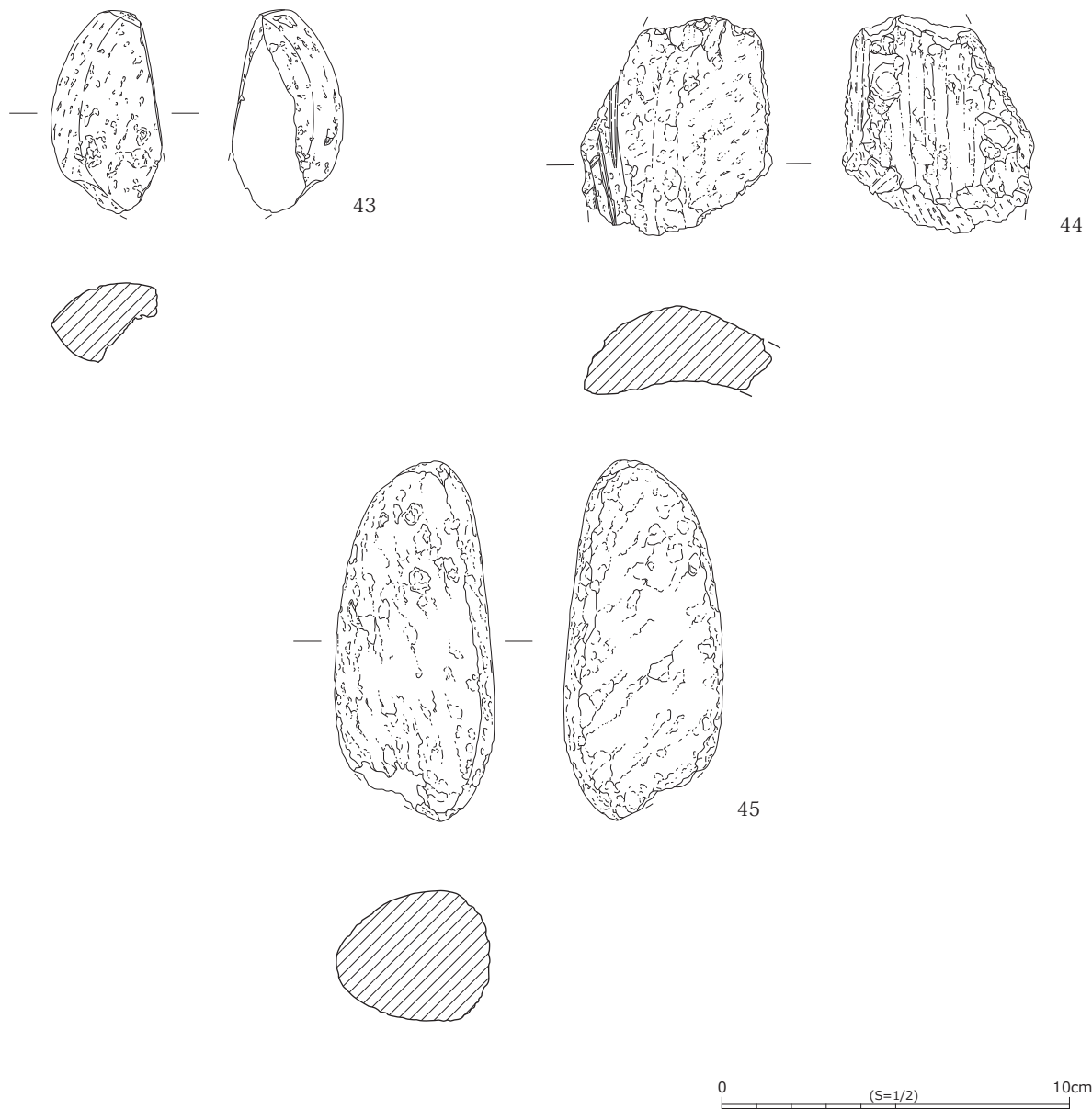


図44 S I 12 出土遺物

44 は軽石製加工品である。裏面に凹部を形成し側面に沈線を施す。

45 は軽石製加工品である。細長い軽石を加工し表裏面に平坦面を形成している。

### S I 13 (図 45・46, 図版 18・19)

46 は甕の口縁部で、わずかに内湾する。口縁部下には断面台形状を呈する貼り付け突帯をもつ。外面は淡黄色、内面は灰色に発色する。

47 は甕の口縁部で大きく内湾する形態である。外面には絡縄突帯がみられる。内外面とも横方向のナデ調整がみられ、一部はミガキ状となる。外面は橙色に発色する。

48 はほぼ平底の脚台で、断面は三角形状となる。外底面には黒斑が見られる。淡橙色に発色する。

49 は丸底壺の底部である。外面には一部黒斑が見られる。内面は全体的に黒斑が見られ、摩滅が著しい。

50 は壺の胴部～底部で、丸底である。内面は赤橙色に発色し、横方向のミガキがみられる。外



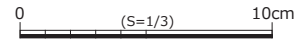
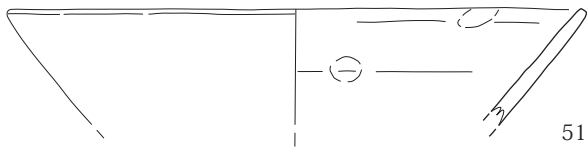
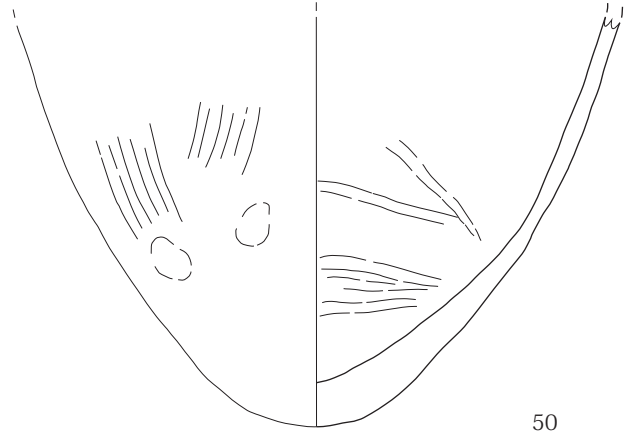
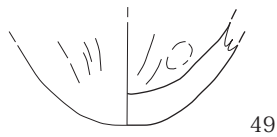
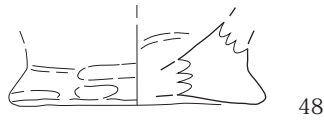
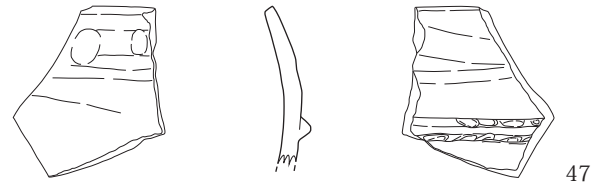
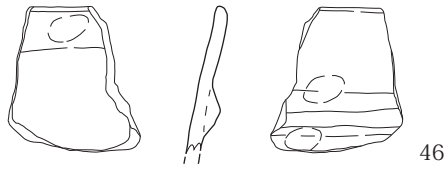


図45 S I 13 出土遺物

面には黒斑が見られる。外底面は著しく摩滅している。

51は高杯の口縁部片で、直線的に開くタイプのものである。砂粒が多く含まれ、外面は橙色に発色する。径3mmほどの白色粒が多く含まれる。

52は頁岩製の剥片であり、一部に磨面がみられる。

53・54は軽石製加工品である。扁平な軽石円礫の一面に凹部を設ける。

#### S I 14 (図47～49, 図版19)

55は内湾する甕の口縁部で、口縁部下に一条の貼り付け突帯をもつ。内面は白色、外面は赤橙色に発色する。砂粒が多く含まれる。

56は甕の口縁部で、断面三角形～台形を呈する突帯が貼り付けられる。内面にはコビオサエが明瞭に残る。内外面とも淡桃色に発色する。石英が多く含まれる。

57は鉢の口縁部である。上面に平坦面をもつもので、口径は復元径15.6cmを測る。白灰色に発色する。

58は安山岩製の台石である。S I 14の鍛冶関連遺構の土坑中から出土しており、金床石とみられる。

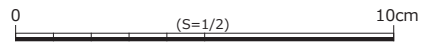
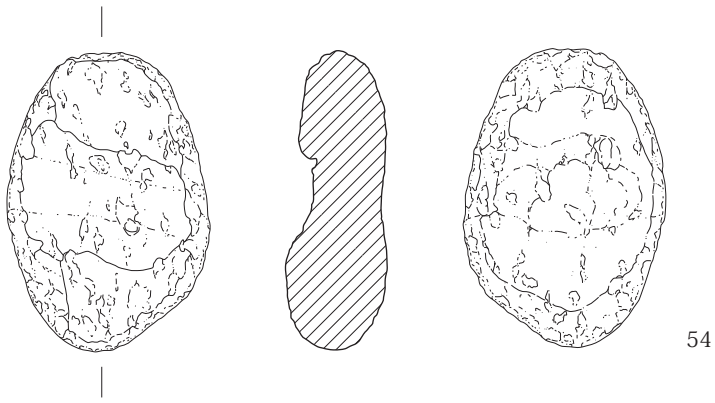
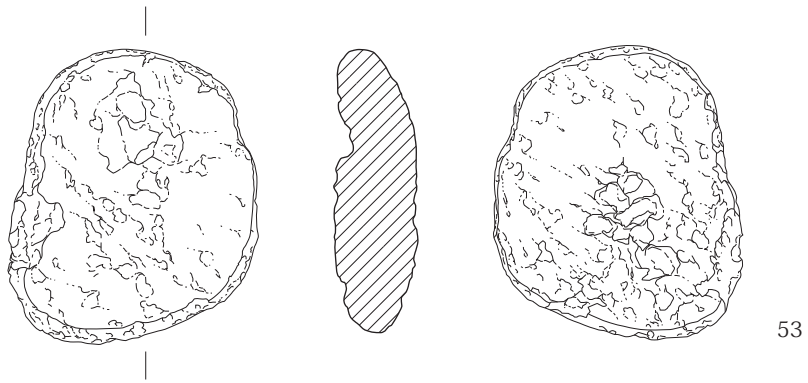
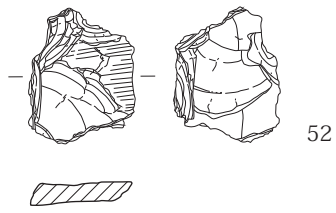


图 46 S I 13 出土遺物

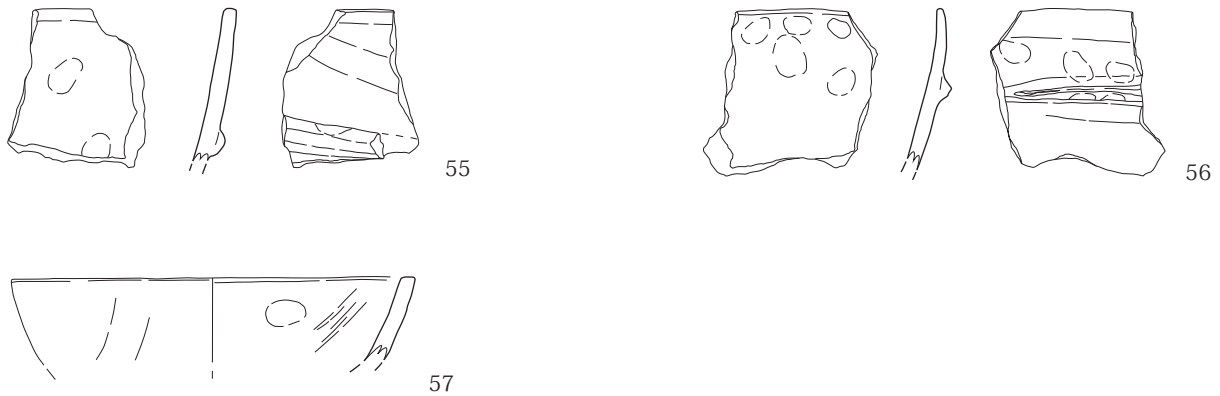


図 47 S I 14 出土遺物

59, 60, 61, 62, 63, 64 は鍛冶滓と考えられる。

### S I 15 (図 50, 図版 20)

65 は甕の口縁部である。逆 L 字状を呈する。

66 は小型の甕あるいは鉢の口縁部片である。端部下に貼り付け突帯を有する。

67 は如意形の口縁部をもつ甕である。砂粒を多く含むが、須恵器のように硬質である。内外面とも淡橙色に発色する。

68 は甕の口縁部で、外面には横方向の丁寧なミガキがみられる。口縁端部には黒斑がある。口縁部下には一条の突帯を有し、刻目が施される。刻目の間隔は広く、刻目原体は指頭である。

69 は壺の胴部片で、突帯が貼り付けられる。突帯の幅は 2.8cm を測り、いわゆる幅広突帯と呼ばれるものである。突帯表面には 4 条の沈線で表現した鋸歯文がみられる。内面は剥落が著しい。

70 は高杯の口縁部である。口縁部はゆるやかに外反する。外面は淡黄色に発色するが、一部火礫のように灰色に発色する部分がある。内外面とも丁寧なナデ調整である。

71 は高杯である。杯部が丸みをおび、口縁部が直線的に立ち上がり、脚部がゆるやかに開く。内外面とも赤色顔料の塗布がみられる。口径 21.9cm を測る完形品である。

72 は高杯の脚部である。復元径 9.4cm を測る。端部は内外面とも黒斑がみられる。外面は赤色顔料の塗布がみられる。

73 はそろばん玉状の胴部をもつ坩である。胴部最大径は復元径 11.0cm を測る。外面は丁寧なナデ調整が見られる。

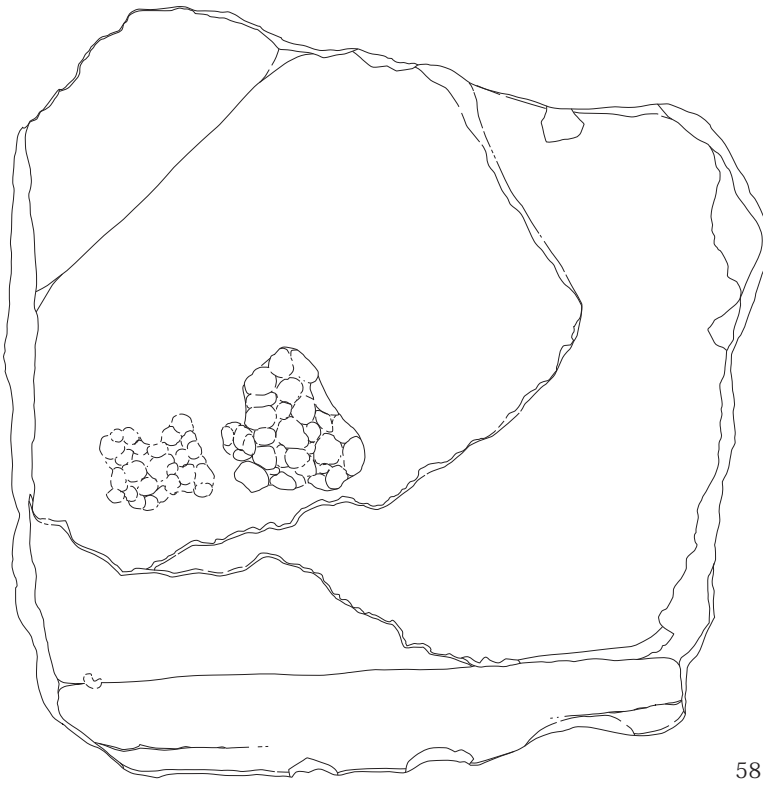
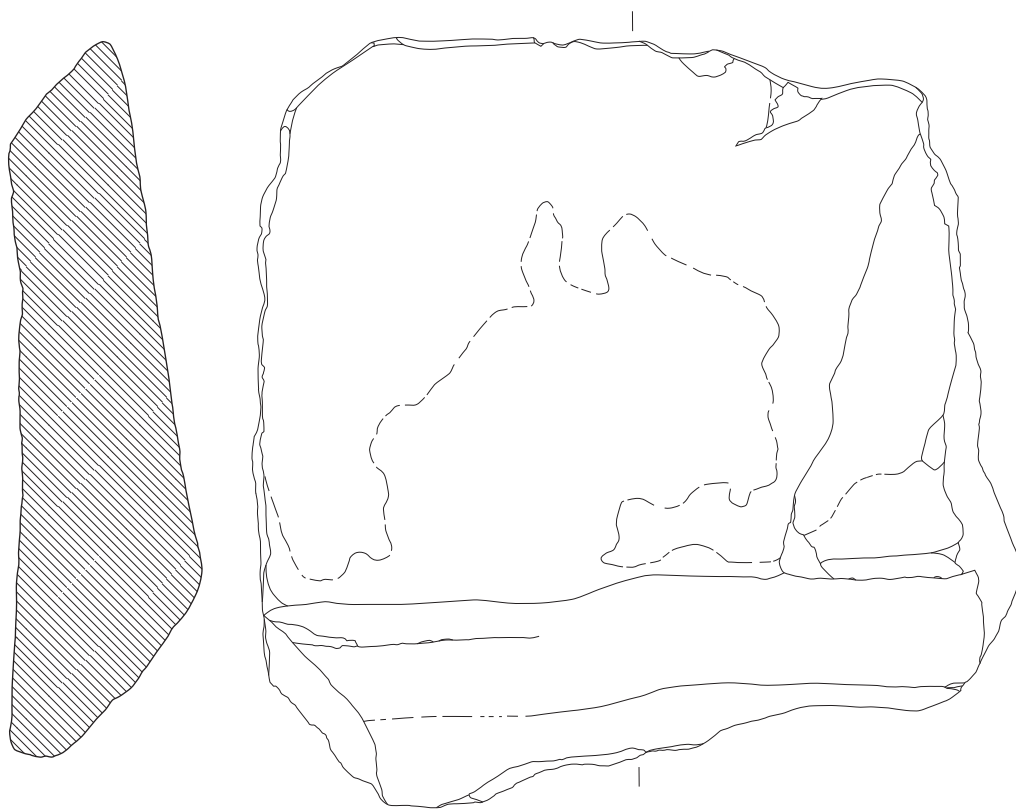
### S I 16 (図 51, 図版 20)

74 は高杯の杯部で、口縁部は欠損している。脚部との接合面で剥落しており、粘土塊を充填する形で接合されていたと考えられる。接合部径は 5.2cm を測る。胎土には砂粒を多く含み、内外面とも桃色に発色している。

75 は甕の口縁部である。口縁部は歪みが大きくうねりがみられる。また成形時のユビオサエも多い。内面下部には黒斑が見られる。

### S I 17 (図 52, 図版 21)

76 は高杯の脚部である。断面が三角形状になる端部で、器壁が厚い。胎土もザラつきがみられる。



58

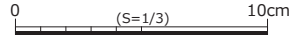


圖 48 S I 14 鍛冶遺構 出土遺物

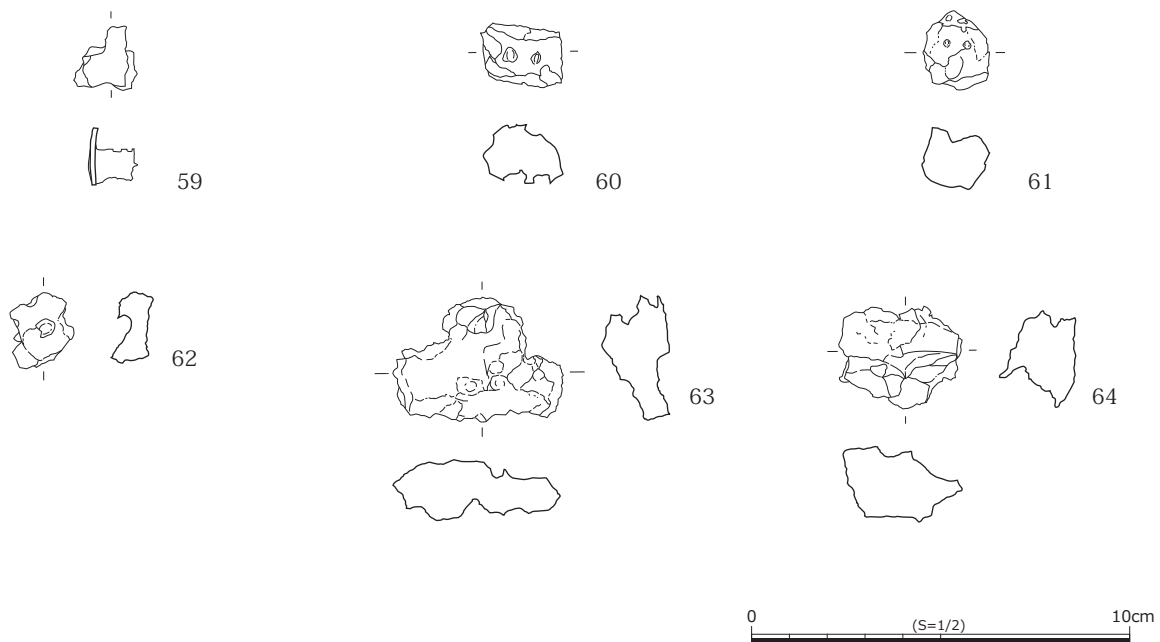


図 49 S I 14 鍛冶遺構 出土遺物

77 は頁岩製の砥石である。表裏と側面を面取りし、砥面として利用している。

#### S I 18 (図 53, 図版 21)

78 は甕の口縁部で、口縁下部に貼り付け突帯を有する。この突帯にはユビオサエが明瞭に残る。また、突帯は接合しない。内面には成形時のユビオサエが確認できる。全体的に砂粒が多く、ザラザラした質感である。

79 は甕の口縁部から胴部で、突帯の貼り付けは見られない。内外面とも淡黄色に発色するものである。

80 は大型甕の突帯部である。断面三角形で、斜め上方に伸びるタイプのものである。突帯端部は M 字にくぼむ。

81 は小型の甕の脚部から胴下半部である。胴下半部は丸みをもつ。脚部は短く伸びるものであり、一部には黒斑が見られる。やや硬質な作りである。

82 は甕の脚部で、くびれた平底を呈する。底径は 8.0cm を測る。底面にはユビオサエが明瞭に残り、脚部成形時の接合線もみられる。

83 は壺の胴部片で、突帯が貼り付けられる。この突帯は幅 3.0cm を測る幅広突帯である。突帯表面には、4 条の沈線で表現した鋸歯文がみられる。

#### S I 19 (図 54, 図版 22)

84 は甕の口縁部で、頸部で強く屈曲する。頸部下には断面三角形の突帯が一条見られる。外面は丁寧なヨコナデで仕上げられ、器面には雲母の粒子がみられる。

85 はミニチュア土器であり、内外面とも黒斑が見られる。甕を模したものと考えられ、脚台も丁寧に表現されている。

86 は軽石製加工品である。穿孔を施し、表裏に線刻を施す。平面形は人形を意識したのか、左右側面の挟りから上部の幅を狭く整形するとともに、頂部を円形に整形している。

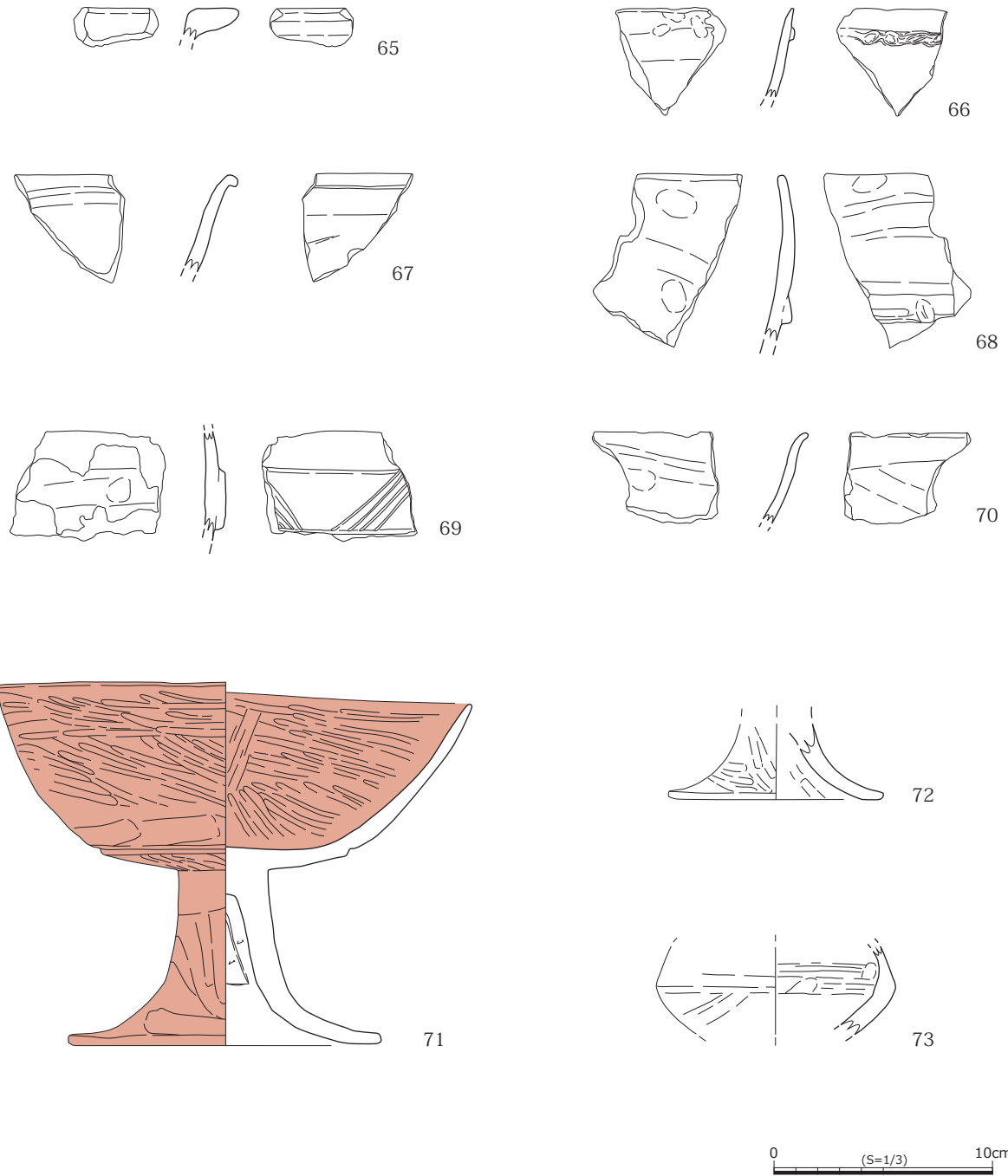


图 50 S I 15 出土遺物

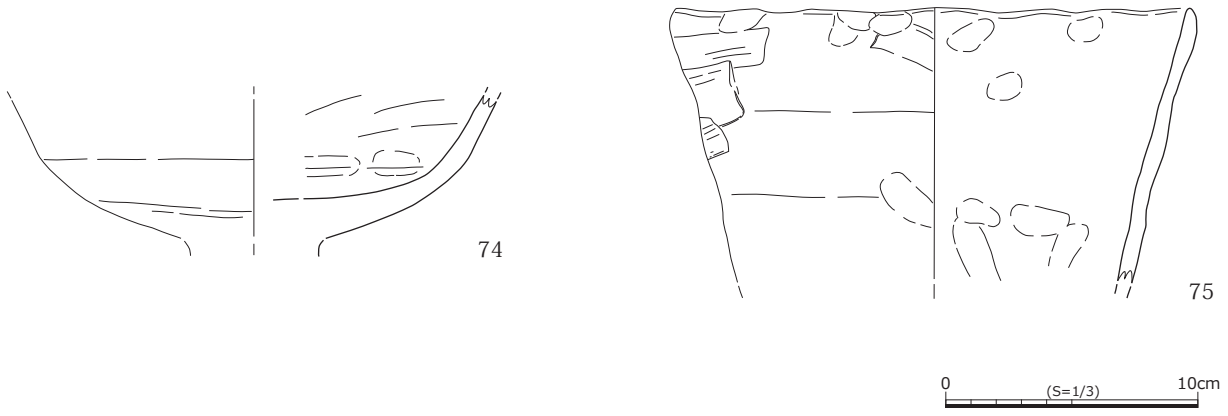


图 51 S I 16 出土遺物

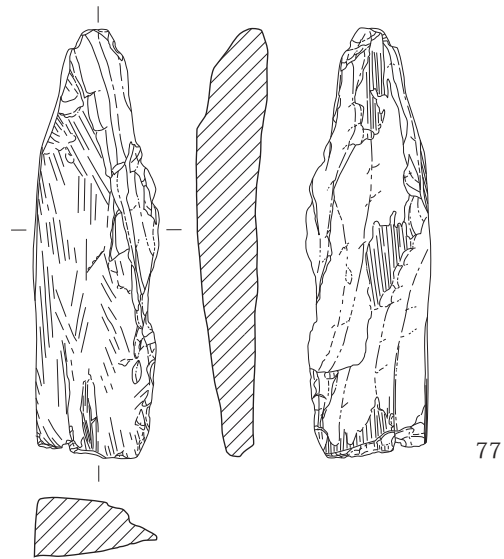
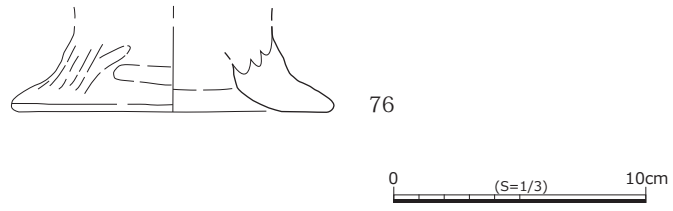
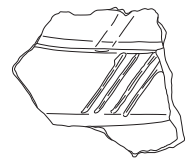
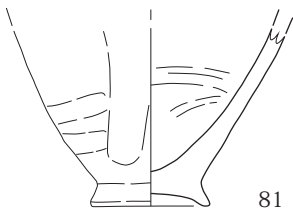
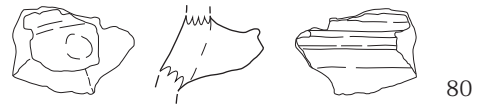
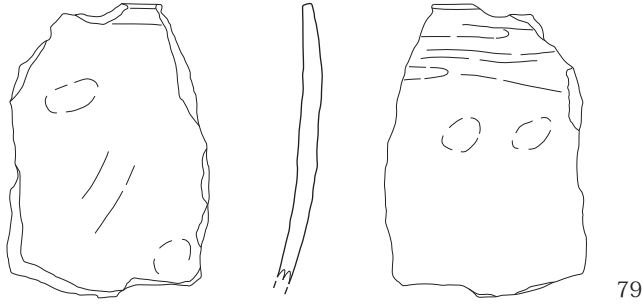
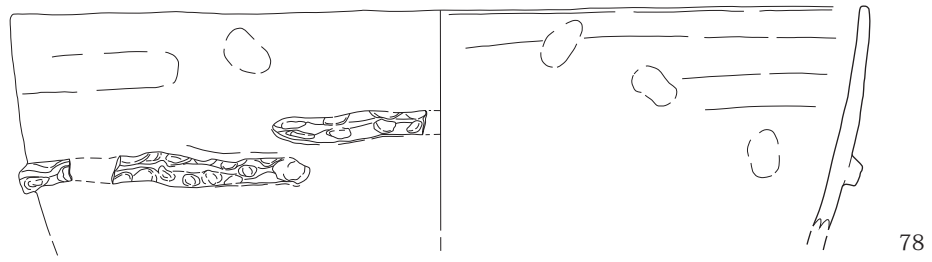


图 52 S I 17 出土遺物



0 (S=1/3) 10cm

图 53 S I 18 出土遺物

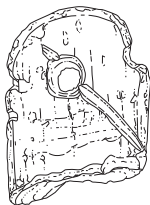
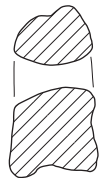
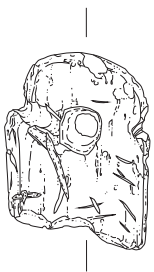


84

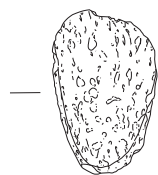


85

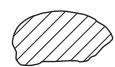
0 (S=1/3) 10cm



86



87



0 (S=1/2) 10cm

图 54 S I 19 出土遺物



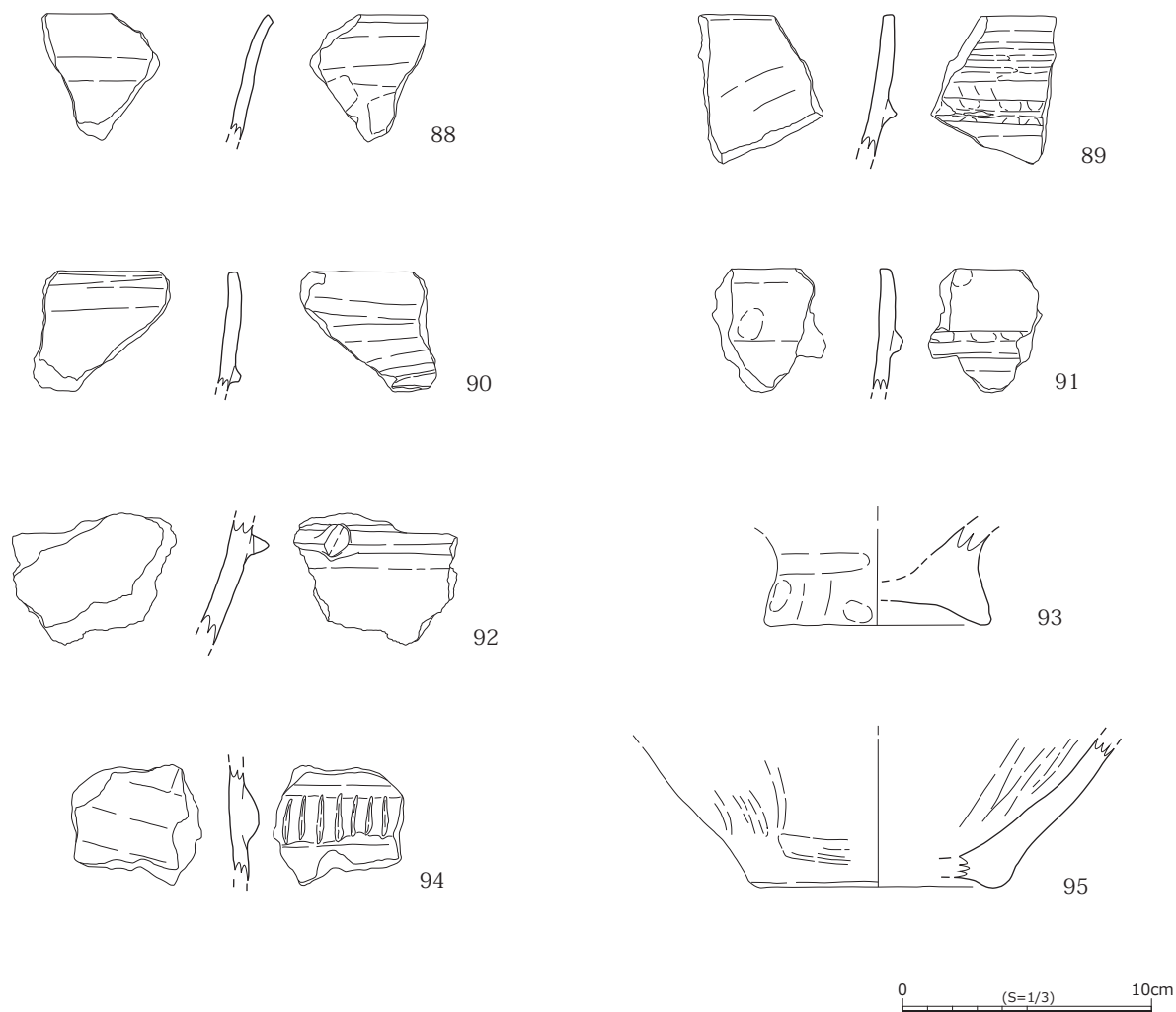


図 55 S I 21 出土遺物

87 は軽石製加工品の破片である。

S I 21 (図 55 ~ 58, 図版 22・23)

88 は甕の口縁部で、端部がゆるやかに外反する。口縁端部はコの字になる。

89 は内湾する甕の口縁部で、端部はシャープに仕上げられる。突帯は断面三角形となる。口縁部外面には横方向の丁寧なミガキが見られる。

90 は内湾する甕の口縁部で、口縁部下に一条の突帯をもつ。

91 は甕の口縁部で、口縁部下に一条の突帯をもつ。この突帯は断面が台形状となる。粒子が多く含まれている。

92 は甕の突帯部で、突帯には刻目が施される。突帯の原体は木製工具によるものと考えられる。淡紫色に発色する。

93 は甕の脚部で、上げ底状となる。脚部断面は三角形で、成形時のユビオサエがみられる。

94 は壺の胴片で、表面には突帯が貼り付けられる。この突帯は幅 2.7cm で、表面には刻目がみられる。内外面とも橙色に発色し、砂粒を多く含む。

95 は壺の底部で、底径は復元径で 10.0cm を測る。底面はやや上げ底状となる。内外面とも幅 5mm のミガキが縦方向に入る。このミガキは底部外面にもみられる。

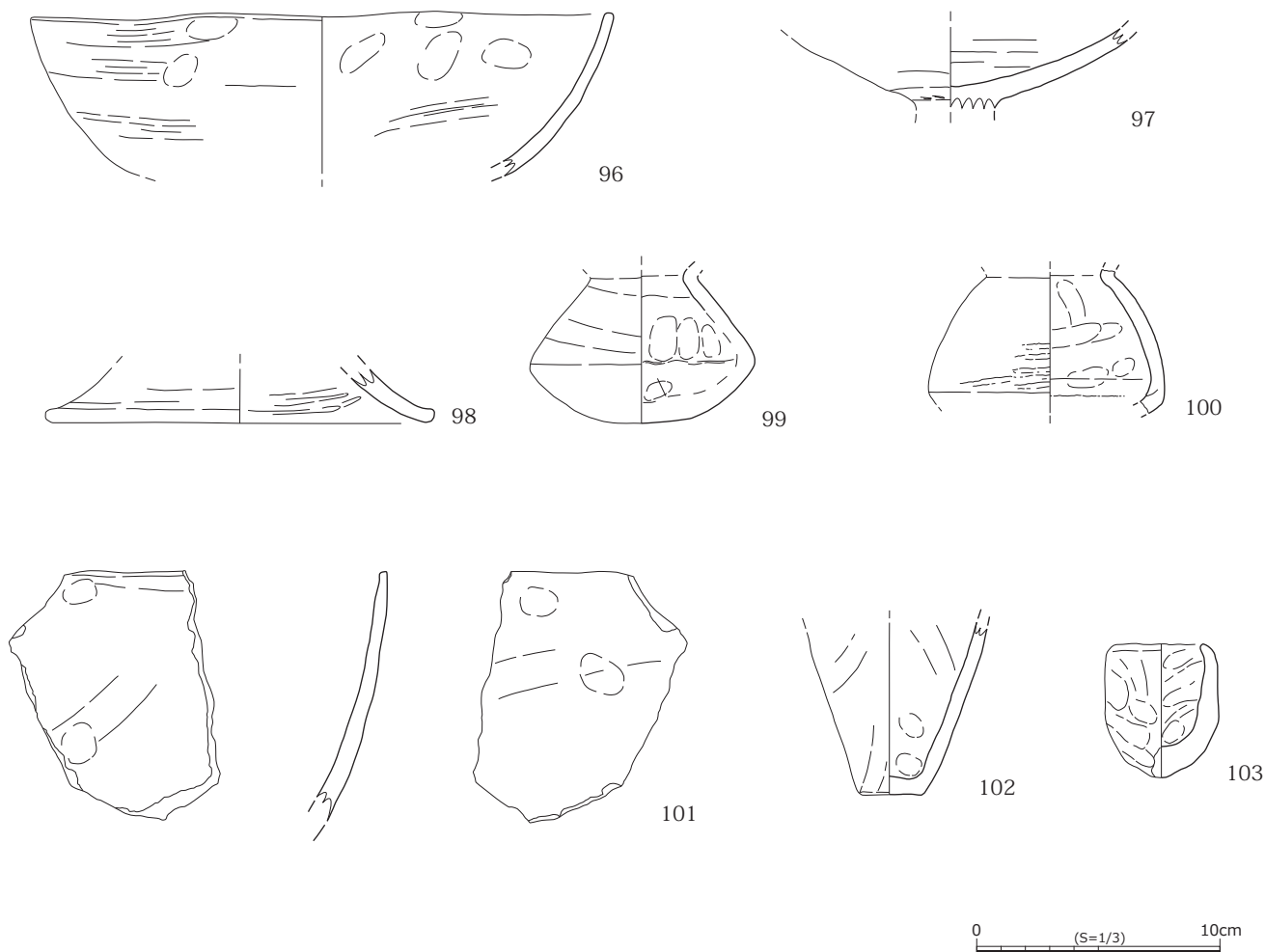


図 56 S I 21 出土遺物

96 は口径 24.0cmを測る高杯の口縁部である。内外面とも成形時のユビオサエが残り、器面にやや歪みがみえる。胎土は精良ではなく、甕などによくみられる砂粒を多く含むものである。内外面ともナデ調整で、一部ミガキ状に見える部分がある。

97 は高杯の杯部である。脚部との接合部および口縁部は欠損している。内面の中心は剥落が著しい。外面は橙色に明るく発色しているが、赤色顔料の塗布はみられない。

98 は高杯の脚端部である。端部は丸くおさまられる。復元径で 16.0cmを測る。内面は全面黒斑が見られる。

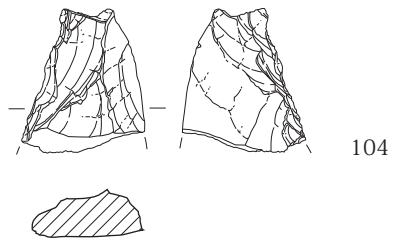
99 はそろばん玉状の胴部をもつ柑で、底部はゆるやかな平底となる。底径 5.6cm、胴部最大径 9.3cmを測る。胴部最大径部分には、黒斑の付着がみられる。器面全体は赤色顔料の塗布はみられないが、赤黒く発色している。内底面はユビオサエにより強くくぼむ。

100 は柑の肩部で、膨らみをもつタイプである。頸部及び胴部最大径部分で剥落している。淡桃色から白灰色に発色しており、やや軟質である。

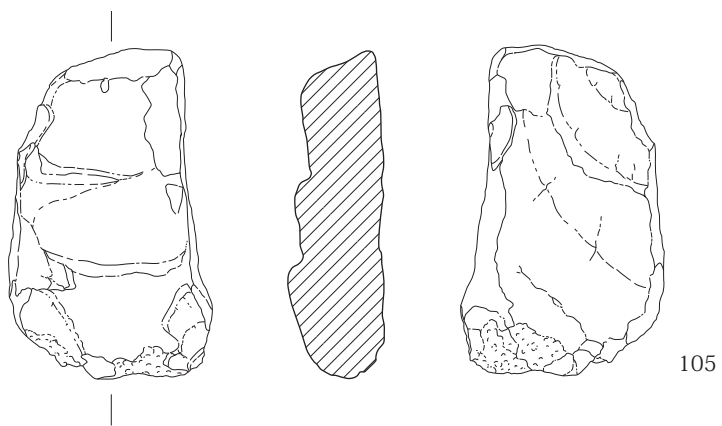
101 は甕あるいは鉢の口縁部片である。端部は丸みをもつ。内外面とも灰色に発色しており、一部が火襴状にみえる。

102 はコップ形の鉢で、底部は平底となる。底径 2.4cmを測る。底端部は丸い。内外面ともナデ調整で、胎土には砂粒が多く含まれる。

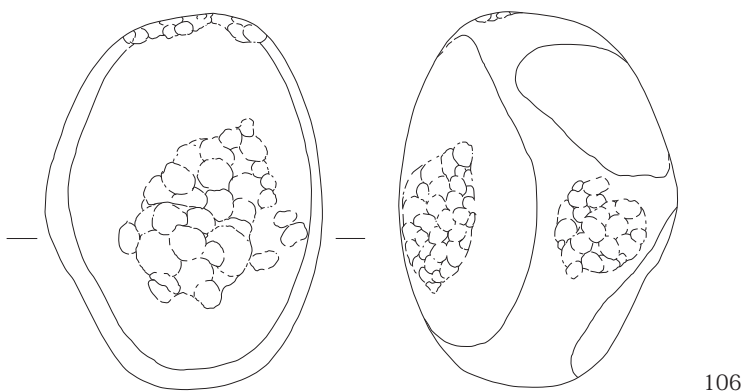
103 はミニチュア土器で、口径 3.9cm、器高 5.5cmを測る。外面はユビオサエが多く見られ、器



104



105



106

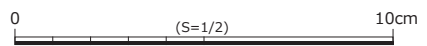
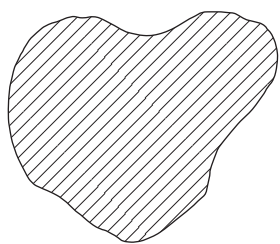


图 57 S I 21 出土遺物

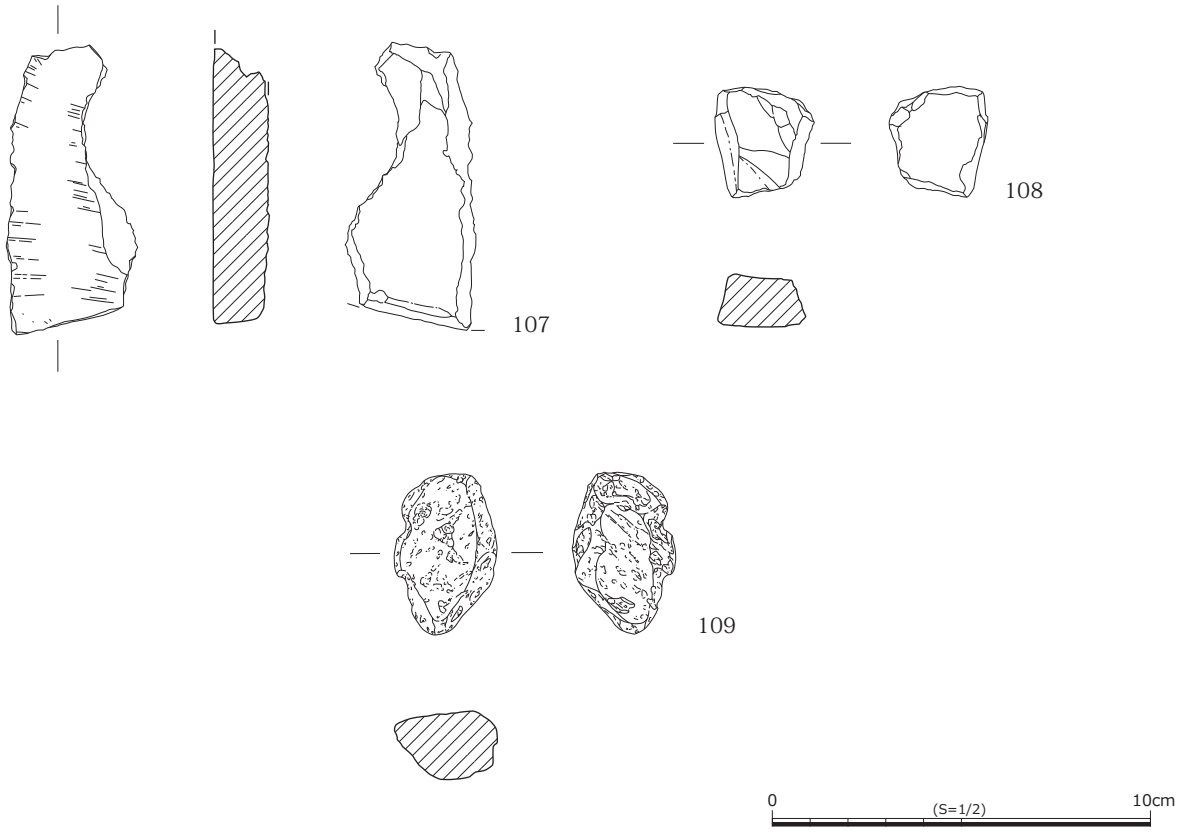


图 58 S I 21 出土遺物

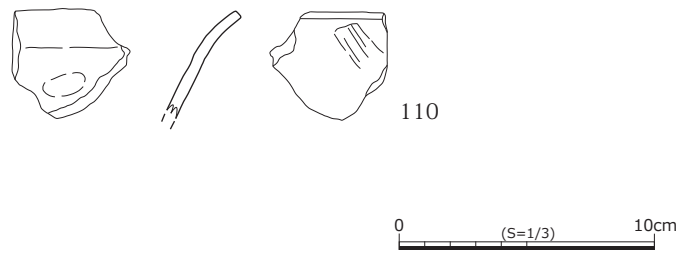


图 59 S I 22 出土遺物

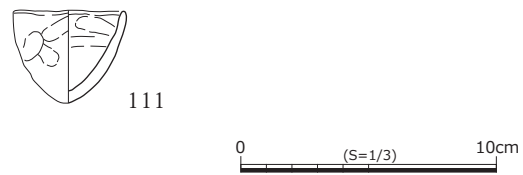
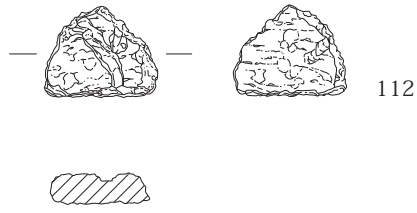


图 60 S I 23 出土遺物



112

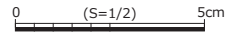
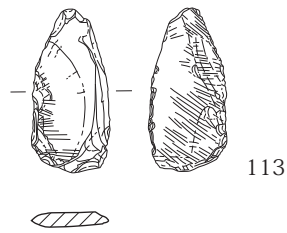


图 61 S I 24 出土遺物



113

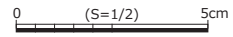
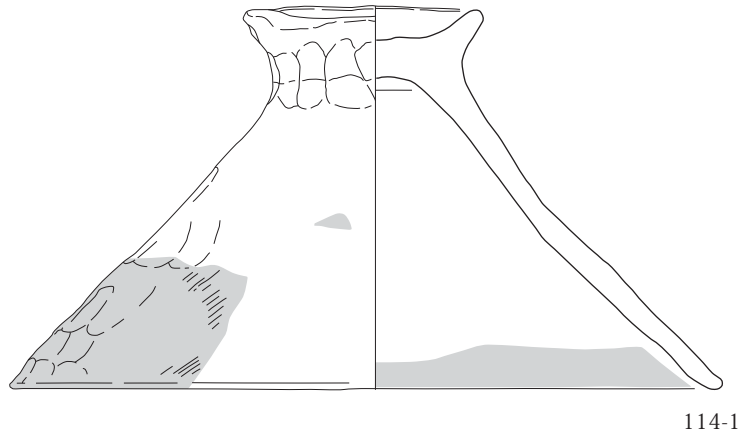


图 62 S I 25 出土遺物



114-1

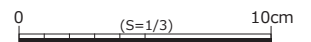


图 63 S I 26 出土遺物

面全体が歪んでいる。外面は全体的に黒斑が見られる。

104 は、ホルンフェルス製の可能性がある加工痕のある剥片である。片側面に二次剝離痕がみられる。

105 は砂岩の礫に、加工痕のある礫石器である。

106 は安山岩製の凹石である。凹面が2面あり、上端部に敲打痕が集中する。

107・108 は砂岩製の砥石である。

109 は軽石製加工品である。側面に凹部が2カ所設けられる。

#### S I 22 (図 59)

110 は外反する口縁部をもつ鉢あるいは高杯である。

#### S I 23 (図 60, 図版 24)

111 はミニチュア土器で、ほぼ完形である。口径 4.2cm, 器高 3.6cmを測る。底部は尖底である。器壁のゆがみは比較的少ない。

#### S I 24 (図 61, 図版 24)

112 は軽石製加工品である。平面三角形に整形され、表面に線刻が残る。

#### S I 25 (図 62, 図版 24)

113 は頁岩製の磨製石鏃と考えられる。表面に剝離面が大きく残るが側部にかけて研磨痕があり、裏面は全面が研磨面となっている。先端はつぶれている。

#### S I 26 (図 63～65, 図版 24)

114-1 は蓋である。ツマミ接合部にユビオサエが残っており、ススが付着する箇所もある。端部内外面は灰色に変色している部分がある。口径 28.8cmを測る。

114 は安山岩製の凹石である。表裏に敲打痕が残るが、表面に凹部がみられる。

115 は安山岩製の台石である。表裏両面に敲打痕の集中部位がある。特に表面には平坦面を広くとっている。

116・117 は軽石製加工品である。116 は表面を平坦に整形し、線刻が4本施され、裏面には線刻が1本施されている。117 は面取りが施される。

#### S I 27 (図 66, 図版 25)

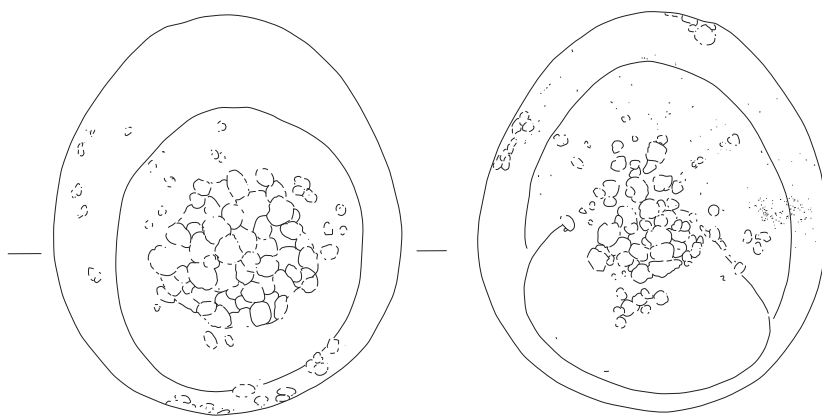
118 は甕の口縁部で、わずかに外反する。端部はコの字を呈し、口縁部外面は丁寧なヨコナデがみられる。

119 は小型の頁岩製磨製石斧の基部と考えられる。刃部は折損している。

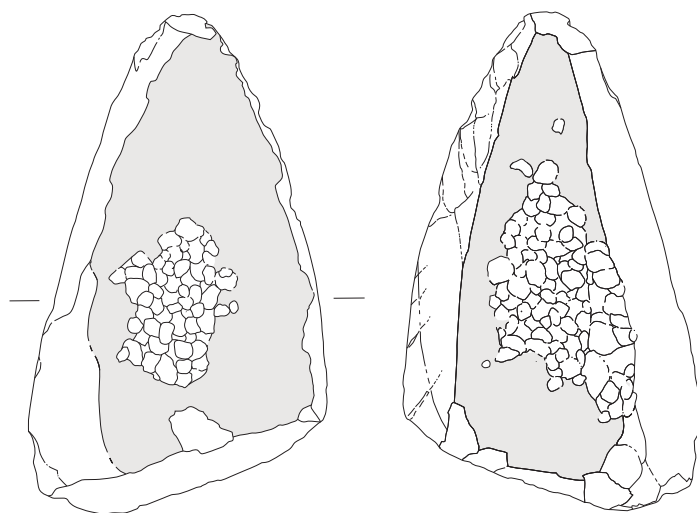
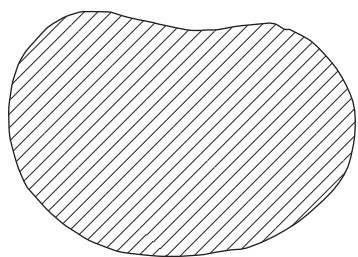
120 は軽石製加工品である。断面は三角形状を呈する。

#### S I 28 (図 67, 図版 25)

121 は屈曲の強い甕の口縁部で、内面には強い稜線がみられる。頸部から口縁部にかけて先細りし、口唇部はM字のくぼみをもつ。頸部下には一条の突帯がみられる。内外面ともに雲母粒子



114



115

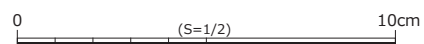
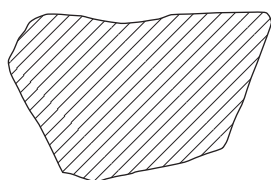


图 64 S I 26 出土遺物

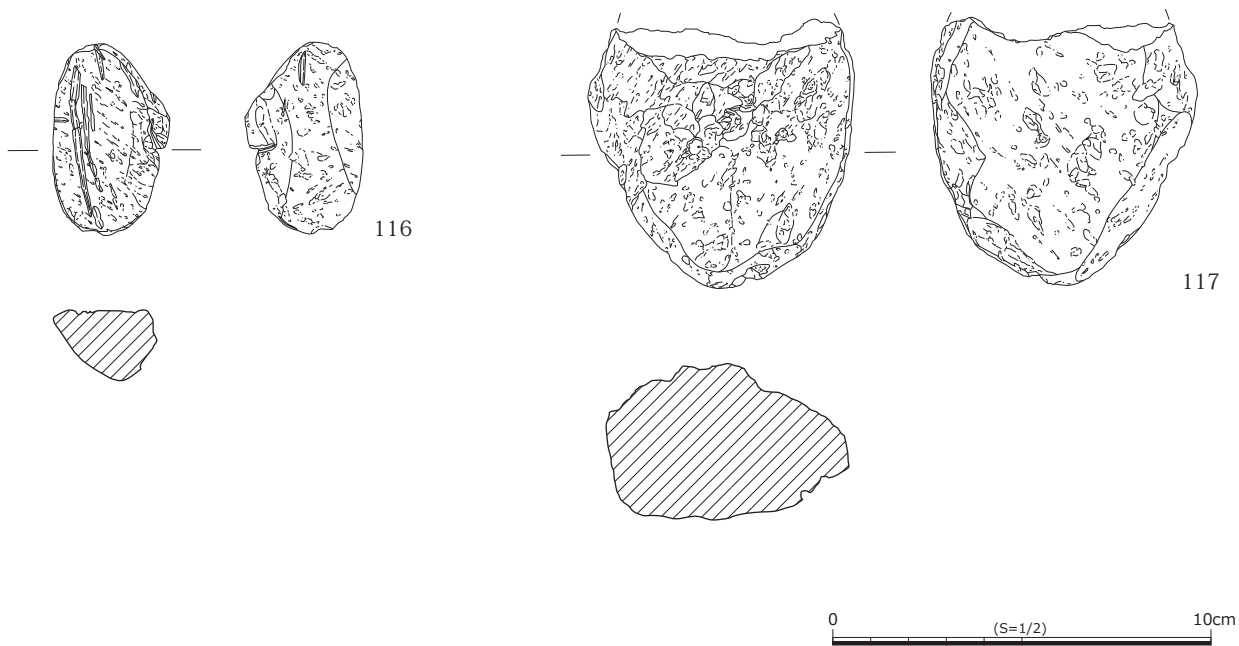
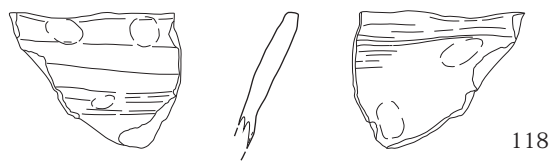
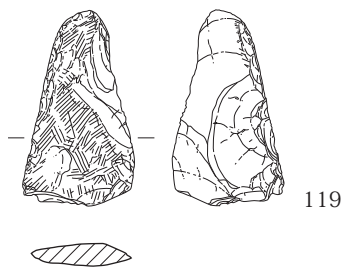
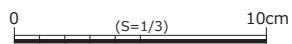


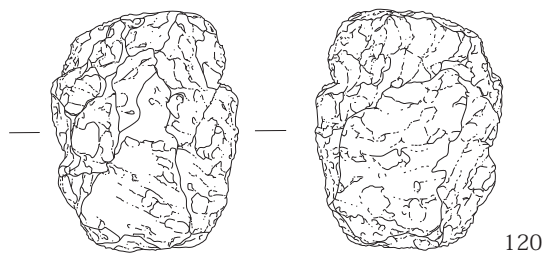
图 65 S I 26 出土遺物



118



119



120

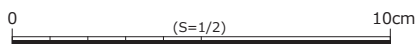


图 66 S I 27 出土遺物



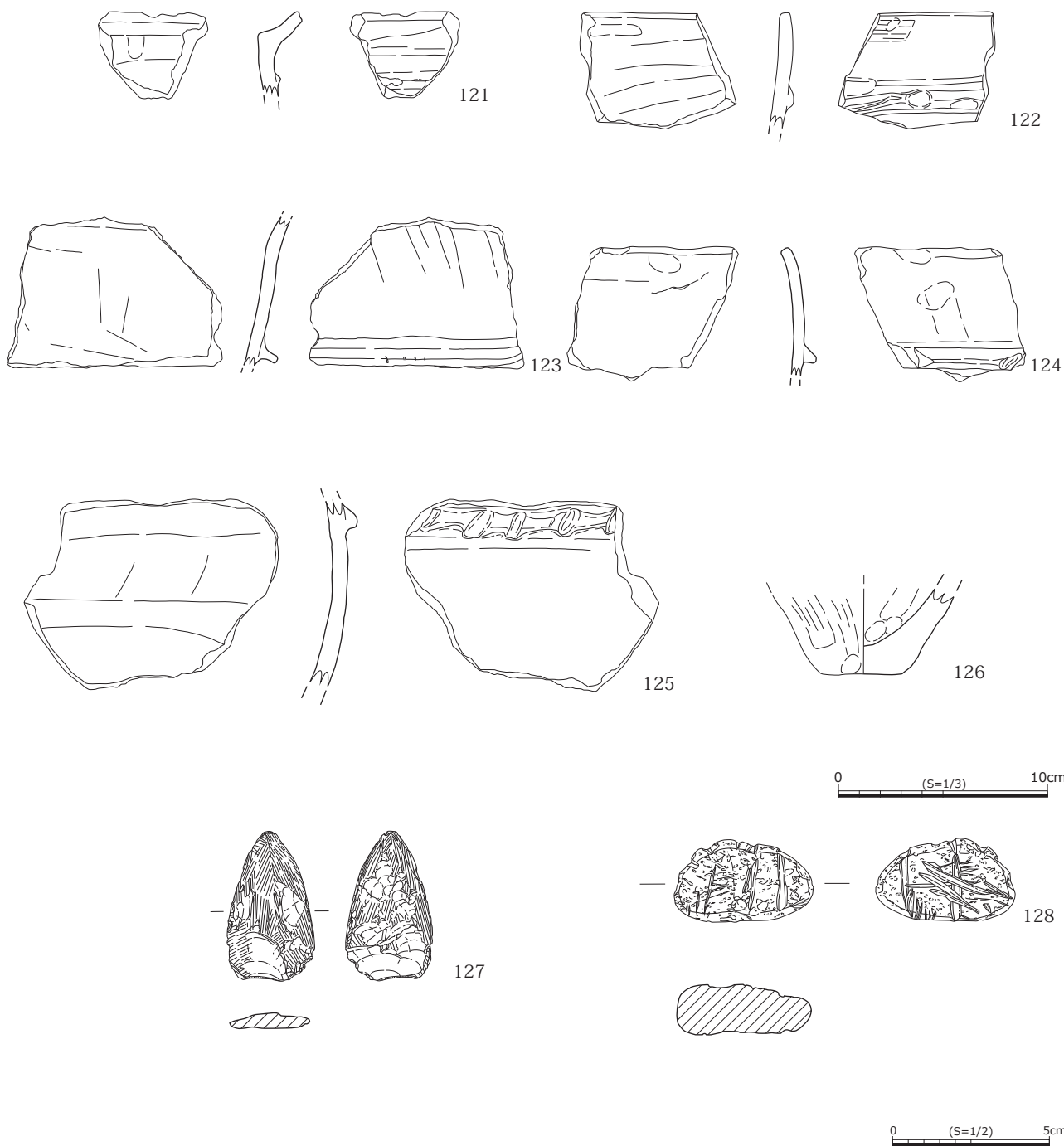
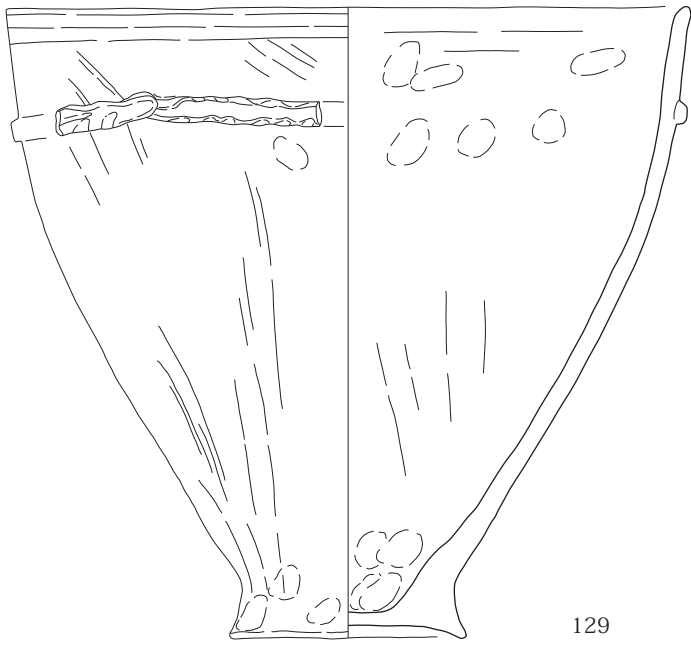
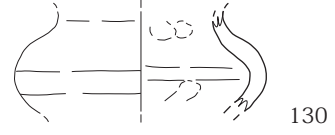


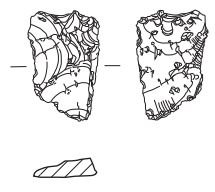
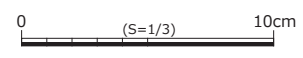
图 67 S I 28 出土遺物



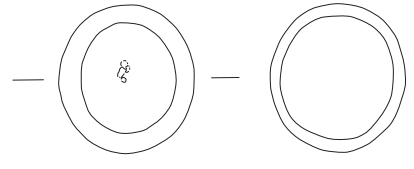
129



130



131



132

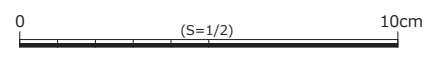


图 68 S I 29 出土遺物



133

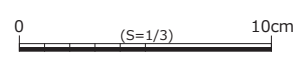


图 69 S I 33 出土遺物

が目立つ。

122 は甕の口縁部で、一条の突帯をもつ。突帯には刻目が施され、刻目の間隔は広いものである。石英粒子を多く含む。

123 は甕の口縁部片で、端部は欠損している。一条の突帯をもち、断面はゆるやかな断面三角形を呈する。やや硬質な作りで、外面は桃色に発色する。

124 は甕の口縁部で、内面はユビオサエが明瞭に残る。口縁部下には一条の突帯が貼り付けられる。

125 は甕の突帯部である。突帯は強いヨコナデによって貼り付けられたのち、木製工具を原体とした刻目が施される。この刻みにより突帯の粘土が盛り上がっている。内面は淡赤色に発色している。

126 は壺の底部で、平底である。底径は 3.8cm を測る。器壁は 2 cm ほどでやや厚い。

127 は頁岩製の磨製石鏃である。基部が一部破損している。

128 は軽石製加工品である。表裏を面取りし、線刻を施す。線刻に関しては、表裏共に縦方向の線刻を基調にし、裏面には斜め方向の線刻を加えている。

#### S I 29 (図 68, 図版 26)

129 は口縁端部がわずかに外反する甕である。底部は上げ底状となる。口径 27.1cm, 器高 25.0cm, 脚部径 9.2cm を測る。口縁部下には一条の突帯をもち、突帯の接合部を正面に見た場合、左側が上になる。口唇部は丁寧なヨコナデがみられる。内底面は強いユビオサエが連続しており、底面の器壁が非常に薄くなっている。

130 は柑の胴部片であり、胴部は丸みをもつ。胎土は精良であり、全体的に淡黄色に発色する。胴部最大径は復元径 9.4cm を測る。

131 は黒曜石製の加工のある剥片である。

132 は安山岩製磨石である。

#### S I 33 (図 69 ~ 71, 図版 26・27)

133 は甕の口縁部で、頸部内面が非常に強く突出している。端部は丸くおさめられる。胎土は砂粒を多く含み、淡桃色に発色する。

134 は頁岩製の側面に加工痕のある剥片である。

135 は鉄石英製の楔形石器である。

136 安山岩製の頂部に敲打痕が集中する磨石である。磨面が 3 面あり断面三角形形状を呈する。

137 は砥石である。断面長方形に整形し、表裏面に磨面がある。138 は砥石あるいは石皿の破片と考えられる破片である。

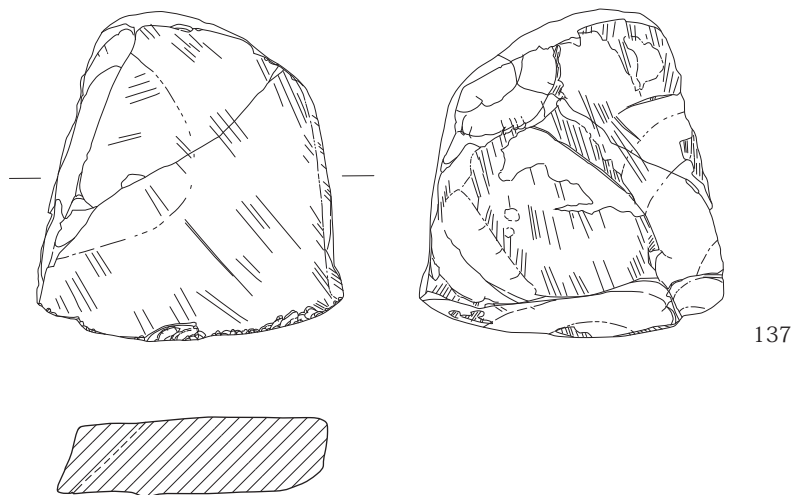
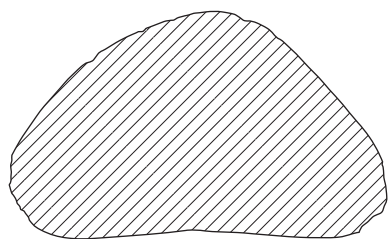
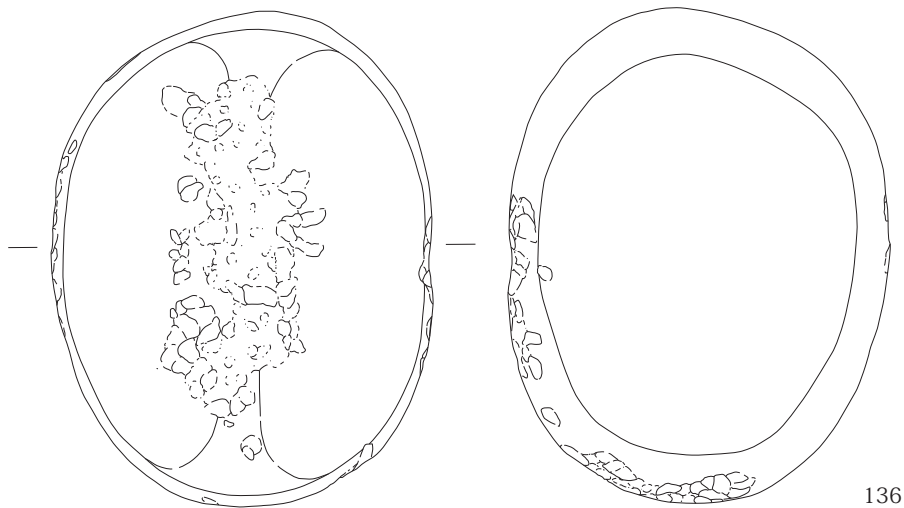
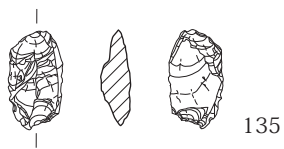
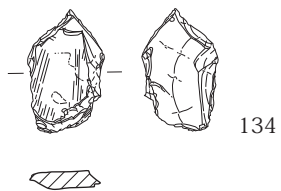
#### S I 34 (図 72, 図版 27)

139 は甕の脚部であり、踏ん張るようにして開くタイプのものである。脚部内面は全体的に黒斑が見られる。

140 は上げ底状の甕底部で、内底面の器壁が非常に薄い。外面は淡桃色に発色する。

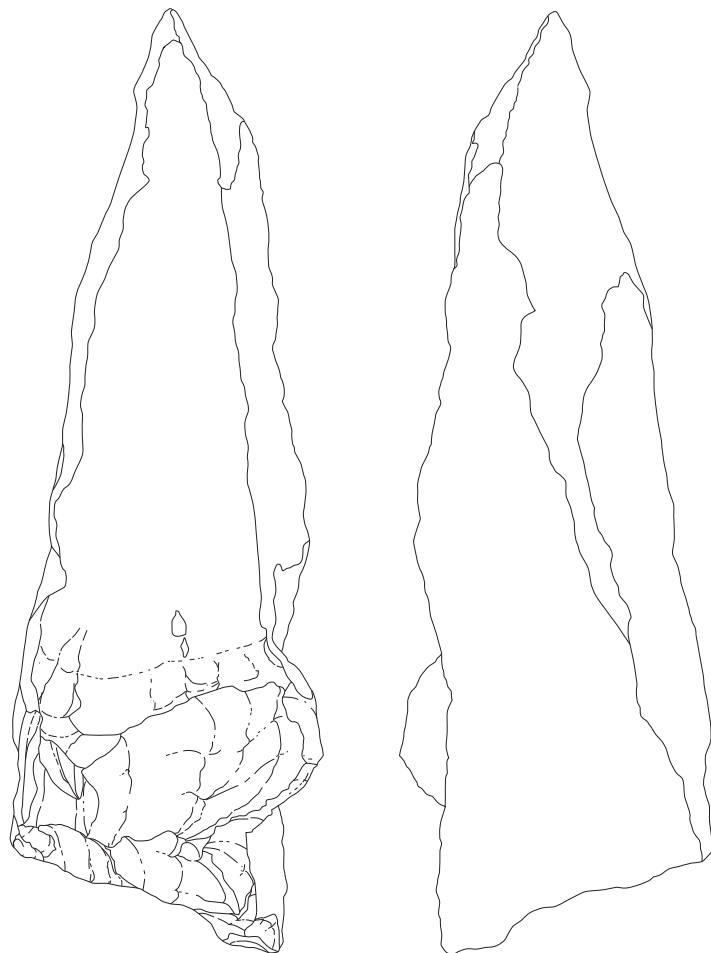
141 は壺の頸部で、外面には一条の突帯を有する。外面には火礫状の発色が見られる。

142 は壺の底部で、底径は復元径 7.2cm を測る。外面全体に黒斑が見られる。



0 (S=1/2) 10cm

图 70 S I 33 出土遺物



138

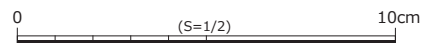
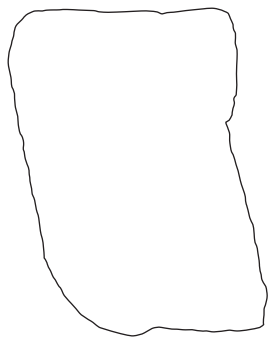


图 71 S I 33 出土遺物

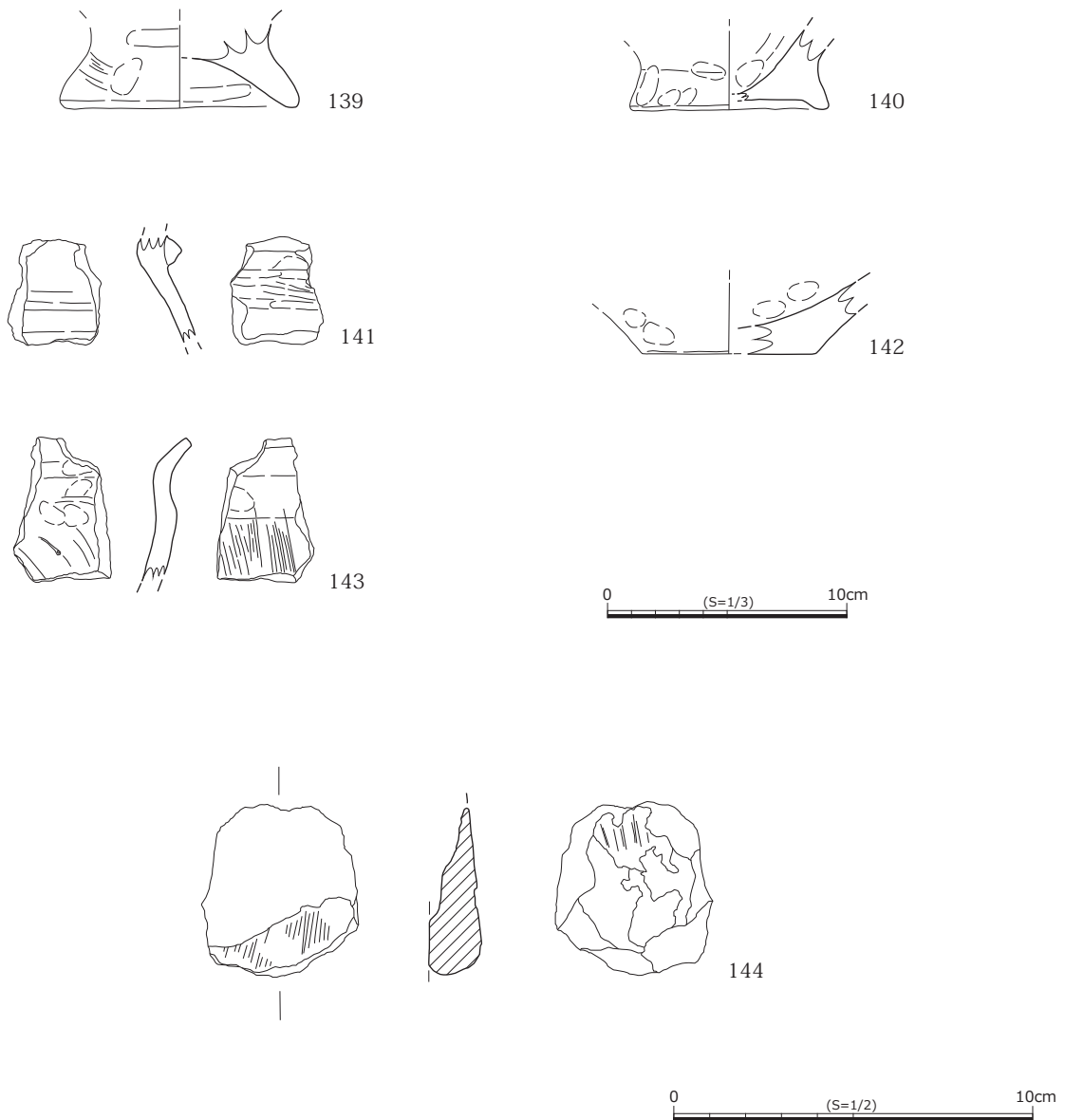


図 72 S I 34 出土遺物

143 は小型甕の口縁部で、頸部で緩やかに屈曲する。胴部外面には薄いハケメが確認できる。  
 144 は磨面を持つ破片である。磨面は緩やかに窪むため、磨石等の一部である可能性がある。

S I 35 (図 73, 図版 27)

145 は甕の口縁部で、口径 21.8cmを測る。口縁部下には一条の突帯を有する。外面全体には黒斑が見られる。内面は淡桃色に発色し、一部火礫状の発色が見られる。

146 は甕の脚部で、接地面に面をもつタイプである。接地面の幅は 1.7cmほどである。脚端部はシャープな作りである。

147 は甕の脚部で、全体的に灰色に発色し、軟質である。表面は剥落している部分が見られる。

148 は頁岩製の磨製石斧基部の可能性があり、両面に研磨が残る。

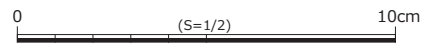
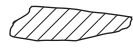
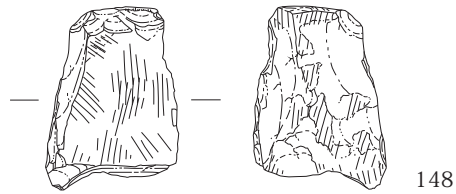
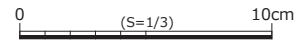
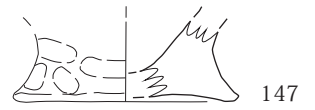
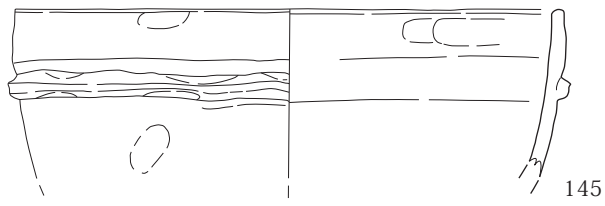


图 73 S I 35 出土遺物

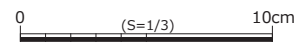
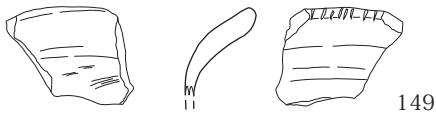
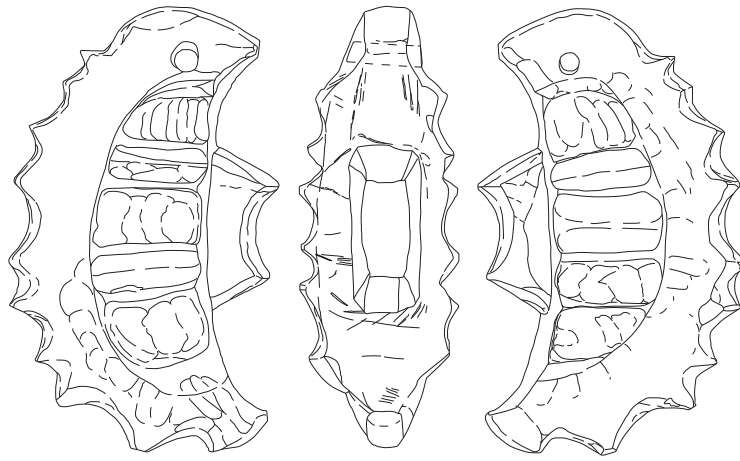
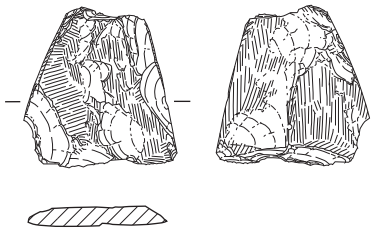
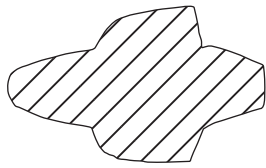


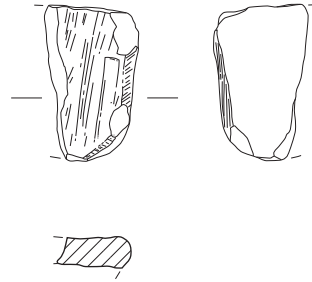
图 74 S I 37 出土遺物



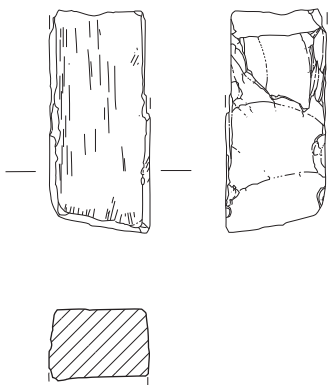
154



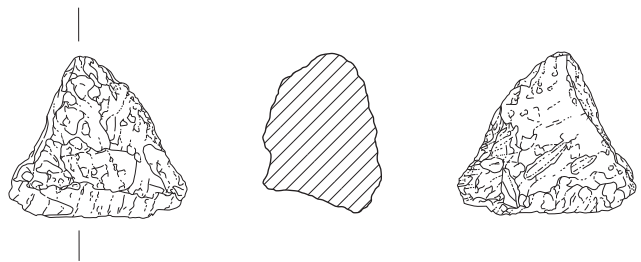
155



156



157



158

0 (S=1/2) 10cm

图 75 S I 37 出土遺物



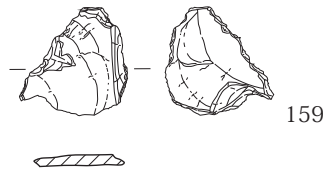


図 76 S I 38 出土遺物

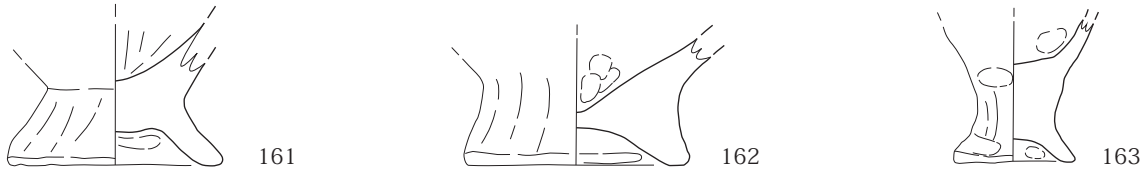
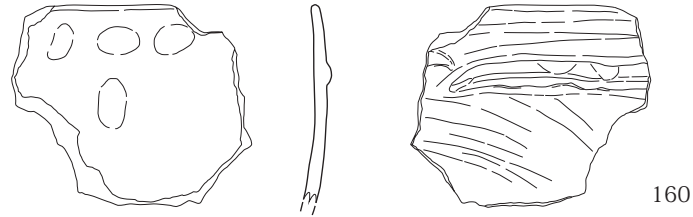


図 77 S I 39 出土遺物

S I 37 (図 74・75, 図版 28・29)

149 は甕の口縁部である。頸部が緩やかに外反し、頸部の器壁は非常に薄い。口縁部は厚みをもち、口唇部には刻目が施される。

150 は小型甕の口縁部である。端部は M 字にくぼむ。頸部下は欠損しているが、くの字に屈曲するものと考えられる。

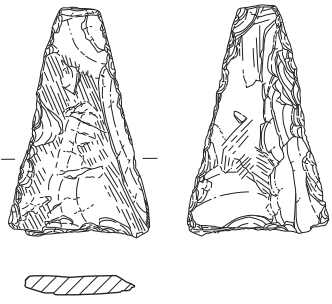
151 は小型高杯の脚部である。脚部径は 5.6cm, 脚部高は 3.7cm を測る。脚端部は欠損部が多く判然としないが、丸みを持ったものと考えられる。外面はやや赤黒く発色する。

152 は坩の底部片で、底部は丸いが中心に径 0.7cm の乳頭状突起をもつ。平坦面で設置することはできない。器壁は非常に薄い。内面中央には円形のくぼみをもつ。

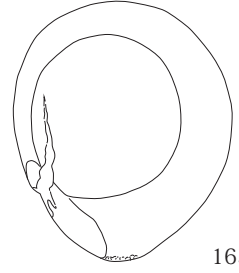
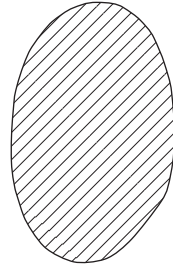
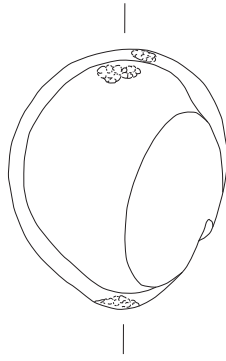
153 はミニチュア土器の底部片である。外面は歪みが大きく、ユビオサエが明瞭に残る。底部は丸底になる。

154 は滑石製子持勾玉である。全長 8.9cm, 幅 (前後の厚さ) 5.1cm, 厚さ (左右の厚さ) 3.1cm, 重さ 122 g を計る胴部断面は楕円形を呈し、頭尾両端は鋭角化する。

腹部に 2 個、背部に 10 個、両側面にそれぞれ 6 個ずつの合計 12 個の突起を有する。腹部の 2 個数の突起は鱗状をなすが、背部の突起は連続し、間隔の短い山形になっている。突起は、削り出してつくられており、勾玉の形からは、離脱した感がある。

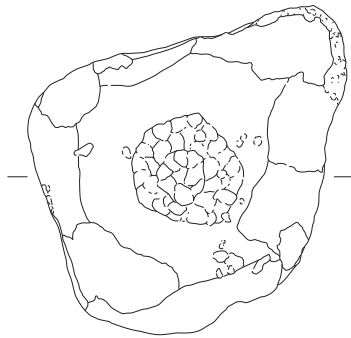


164

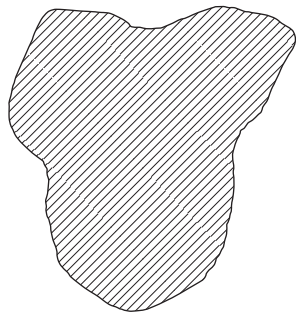


165

0 (S=1/2) 10cm



166



0 (S=1/3) 10cm

图 78 S I 39 出土遺物

全体の整形は、工具による丁寧な面取りの後、研磨にて最終調整が行われている。また、頭部には直径 4mm の穿孔が施されており、幅 3mm の紐擦れ痕が確認できる。

155 は頁岩製磨製石鏃である。先端が折損している。

156・157 は砥石である。156・157 は砂岩製である。157 は平・断面ともに方形であり、4面に砥面のある丁寧な作りとなる。

158 は軽石製加工品である。平面三角形を呈し、厚さは 3.12cm を測る。

### S I 38 (図 76, 図版 29)

159 は頁岩製の加工痕のある剥片である。

### S I 39 (図 77・78, 図版 29)

160 は甕の口縁部である。口縁部下に一条の突帯をもち、この突帯は接合しない。不接合面を中心にした場合、右側の突帯が左側の突帯を切っている。内外面とも淡桃色に発色する。

161 は接地面が平坦となる脚部で、脚部径 7.9cm を測る。脚内面の天井形態は平坦である。

162 は甕の脚部で、外面はひび割れが多い。白～桃色に発色し、やや軟質である。内底面は中心が大きくくぼむ。

163 は小型鉢の脚部で、やや接合部が間延びしているもので、ワイングラス状になる。接地面に平坦面をもつ。

164 は頁岩製の磨製石鏃である。先端部が折損している。

安山岩製の礫石器として、165 の磨石、166 の凹石がある。

### S I 41 (図 79・80, 図版 30)

167 は甕の口縁部で内湾する。端部は内面にわずかに折り返した箇所がみられる。口縁部下の突帯は断面台形である。

168 は短頸の甕で、頸部から上方へ直線的にのびる口縁部をもつ。口径は復元径 10.0cm を測る。内面は丁寧なナデ調整で平滑に仕上げられる。

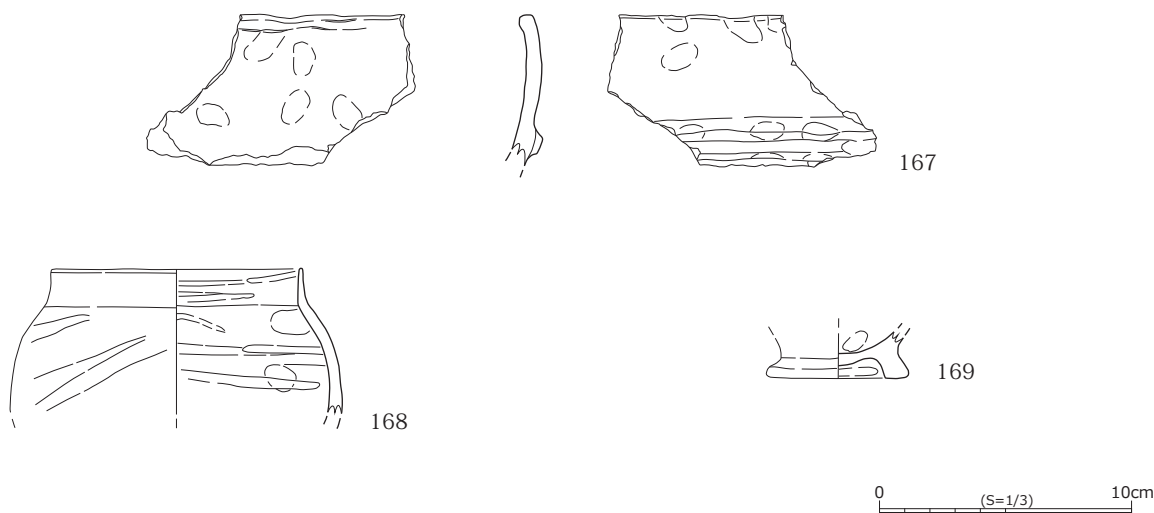


図 79 S I 41 出土遺物

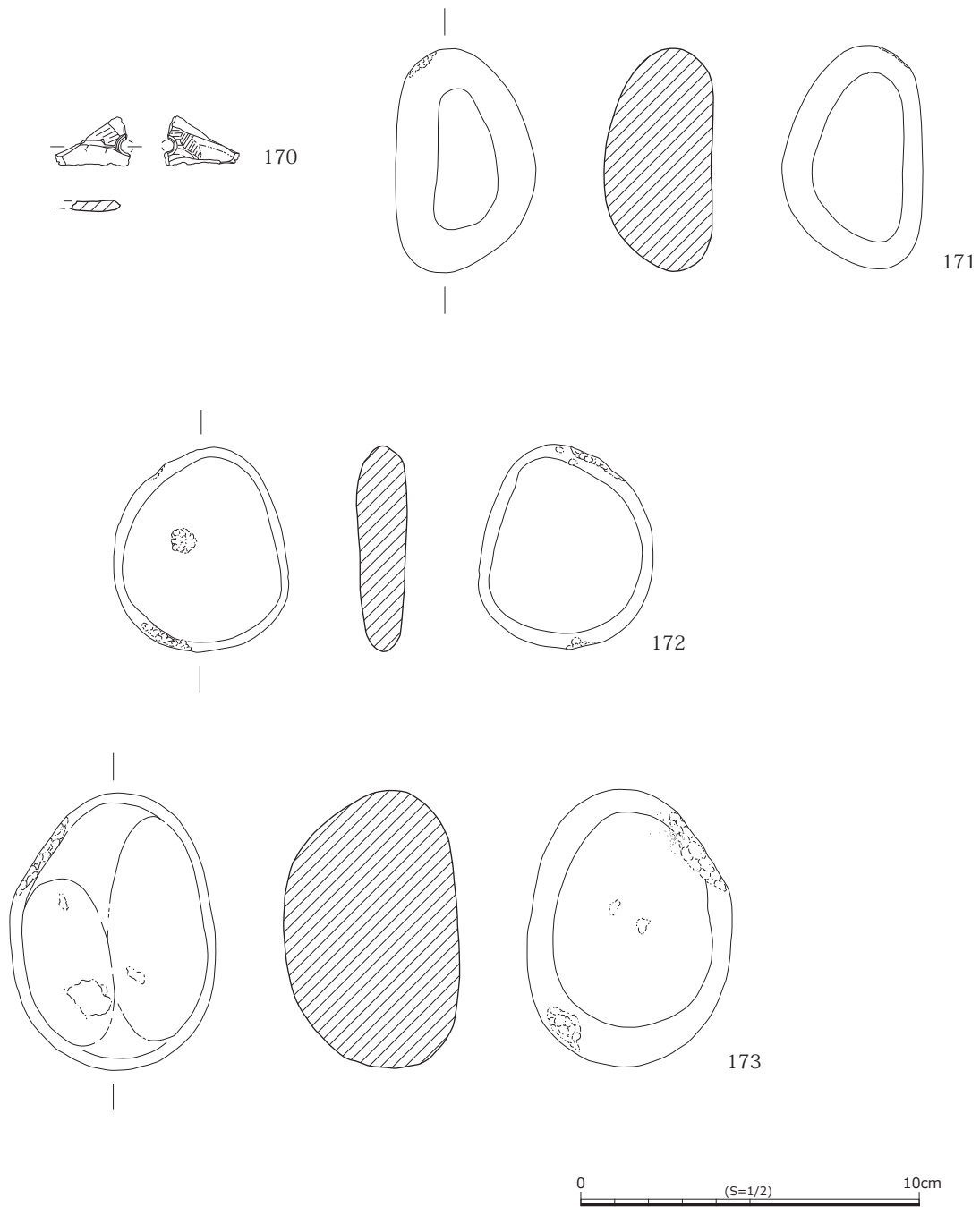


図 80 S I 41 出土遺物

169 は高台状になる甕の脚部で、接地面が平坦となる。脚部径 5.7cm を測る。

170 は頁岩製石包丁破片である。表裏に研磨がみられ、穿孔がある。

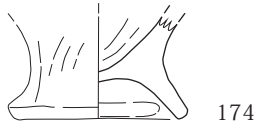
安山岩製の礫石器として、171・172・173 の磨石がある。173 は上部側面に敲打痕がみられる。

S I 42 (図 81, 図版 30・31)

174 は甕の脚部で端部は丸みをもつ。

175 は短く開く甕の脚部である。器部の器壁は薄い。内面には黒斑がみられる。

176 は壺の底部である。丸底を呈する。底部外面は摩滅が著しく、砂粒が多く露出している。



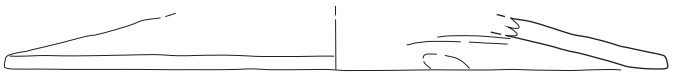
174



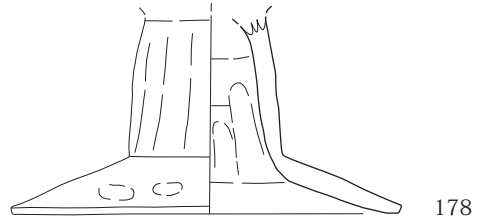
175



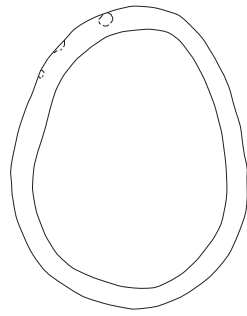
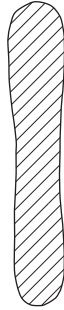
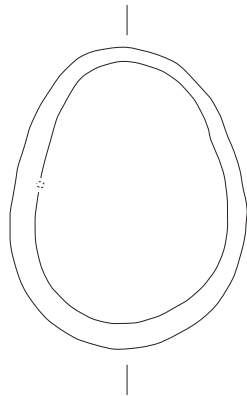
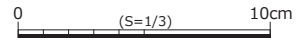
176



177



178



179

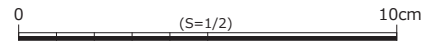
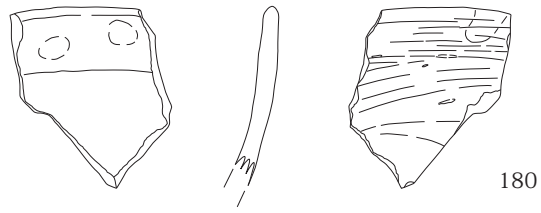
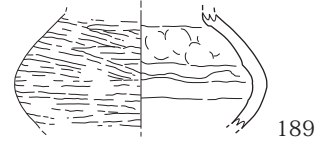
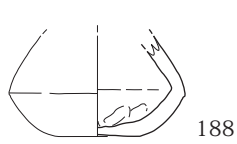
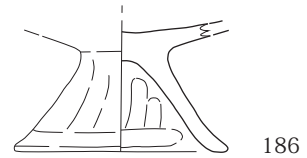
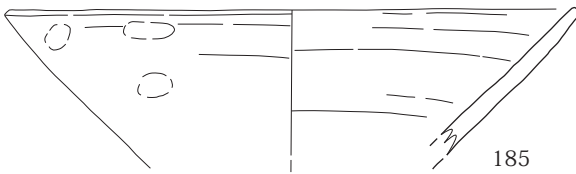
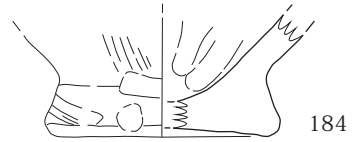
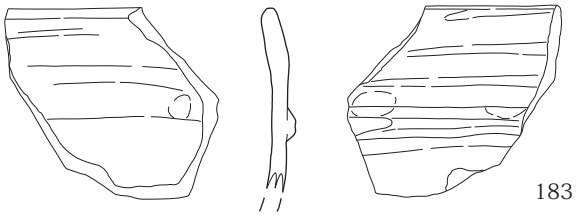
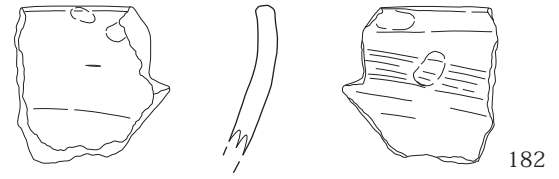
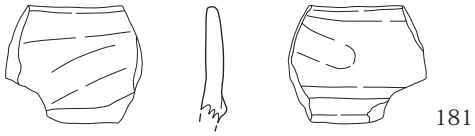


图 81 S I 42 出土遺物



0 (S=1/3) 10cm

图 82 S I 44 出土遺物



0 (S=1/3) 10cm

图 83 S I 46 出土遺物

内面は黄橙色に発色する。

177 は高杯の脚部である。大型高杯のものと考えられ、脚部径 26.2cmを測る。途中で大きく屈曲する形態であると考えられ、その部分で剥落している。端部には黒斑が見られる。砂粒が多くザラザラとした質感である。

178 は筒部がエンタシス状になる高杯の脚部で、脚部径は復元径で 15.7cmを測る。筒部の最大形は 5.7cmである。脚部は非常に強く屈曲する。表面は丁寧なナデ調整で仕上げられる。

179 は安山岩製磨石である。表裏が磨面であり、いずれの面も中央部分がややくぼむ。

#### S I 44 (図 82, 図版 31)

180 は甕の口縁部で端部は丸みをもつ。外面は横方向の強いナデがみられる。

#### S I 46 (図 83 ~ 85, 図版 32)

181 は甕の口縁部で、貼り付け突帯をもつ。内外面とも白灰色に発色する。

182 は無文の甕である。端部は丸い。

183 は甕の口縁部で内湾する。突帯は断面台形状となる。内外面ともミガキ調整がみられる。内外面とも橙色に発色するが、外面の一部には火襷状の発色が見られる。

184 は上げ底状の甕の脚部であり、脚部径 9.2cmを測る。脚部の断面は三角形状であり、平底の甕に貼り付けた接合線が断面で明瞭に観察できる。

185 は高杯の杯部で、直線的に開くものである。口径は 22.8cmを測る。外面は全体的に白桃色に発色するが、口縁端部のみ白色に発色する。意図的なものであるかは判断できない。

186 は小型高杯の脚部である。脚部径 8.5cm, 脚部高 4.0cmを測る。胎土は精良で、砂粒はそれほど多くない。内外面とも白桃色に発色する。杯部は椀形になると考えられる。

187 は高杯もしくは椀の口縁部である。口径 13.9cmを測る。器壁は非常に薄く、端部は丸みをもつ。内外面とも淡桃色に発色するが、内面の一部に火襷状の発色がみられる。内外面とも幅の広いミガキ調整がみられる。

188 はそろばん玉状の胴部をもつ罎で、胴部は強く屈曲する。胴部最大径 7.0cmを測る。底部はゆるやかな平底である。

189 は胴部が丸みをもつ罎で、胴部最大径 10.0cmを測る。内面には接合線が明瞭に残る。内外面とも幅 3mmほどの横方向のミガキがみられる。

190 は頁岩製磨製石器である。

191・192 は礫石器であり、191 は安山岩製磨石、192 は花崗岩製凹石の破片である。

193 は安山岩製の石皿である。

194 は砂岩製砥石と考えられる。細長い石材の表裏面に磨面があり、両面とも砥面と考えられる。

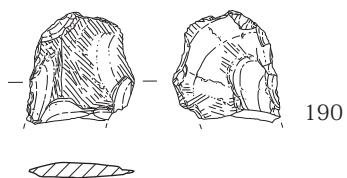
195 は軽石製加工品である。面取りにより断面三角形状を呈する。

#### S I 48 (図 86, 図版 32)

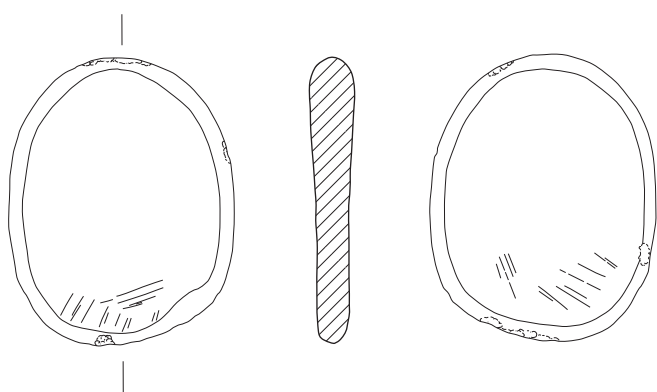
196 は小型甕の脚部で、上げ底状である。器部内面は黒斑がみえる。

197 は踏ん張る形態の甕脚部で、脚部径 9.0cmを測る。丸底甕に脚部を接合した様子がよく観察できる。

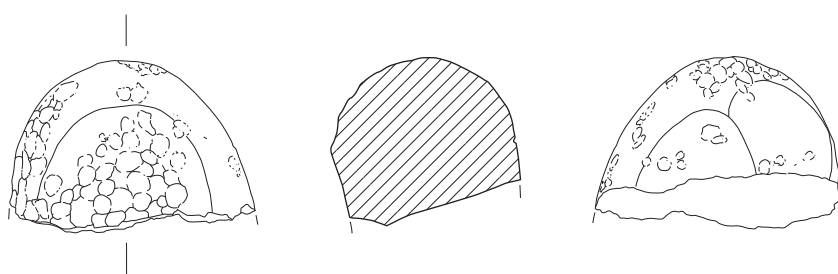
198 は砂岩製の加工痕のある石器である。裏面は主要剥離面となっているが、表面は剥離が 3



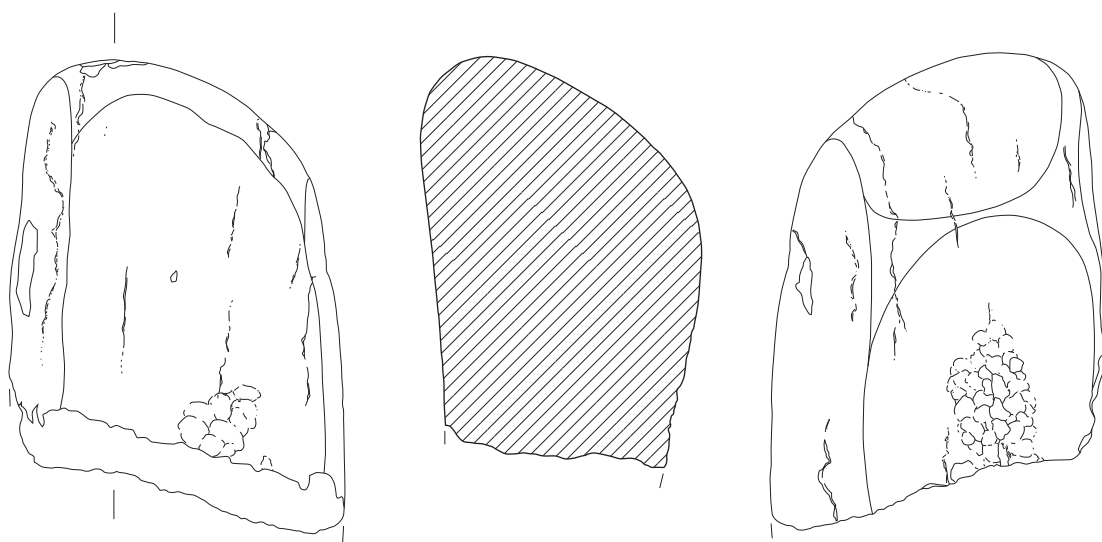
190



191



192



193

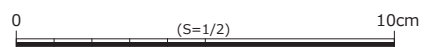


图 84 S I 46 出土遺物



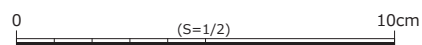
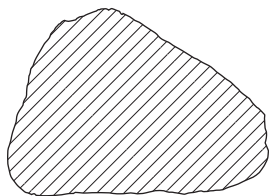
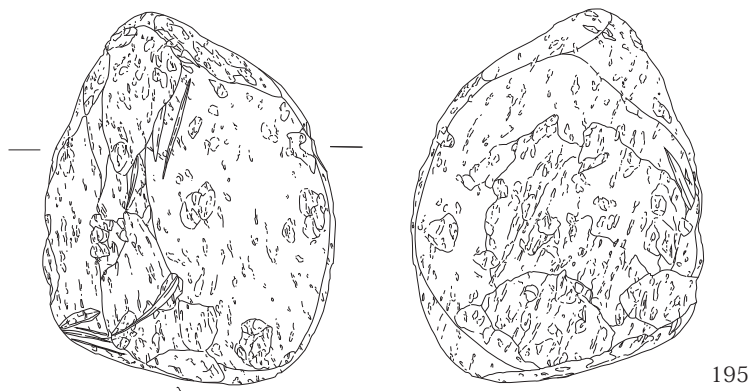
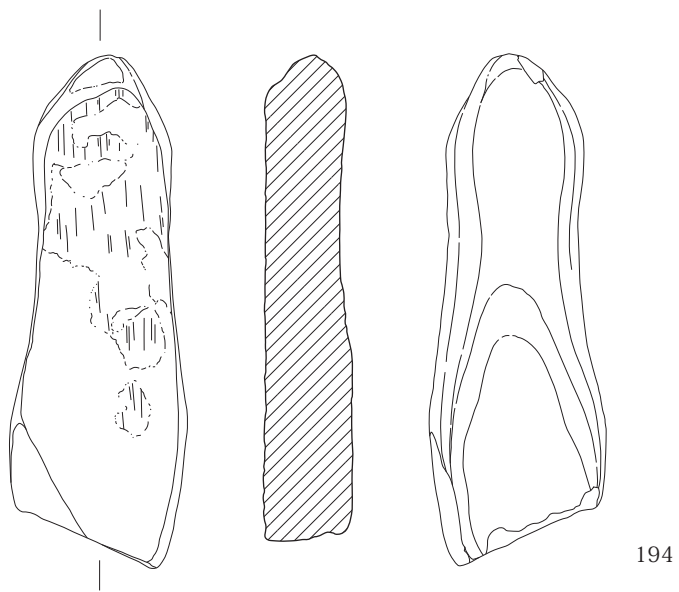
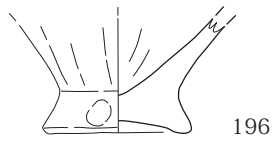


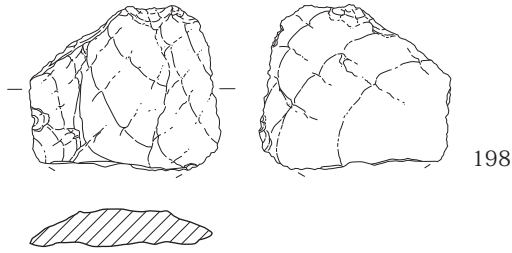
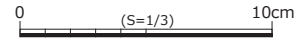
图 85 S I 46 出土遺物



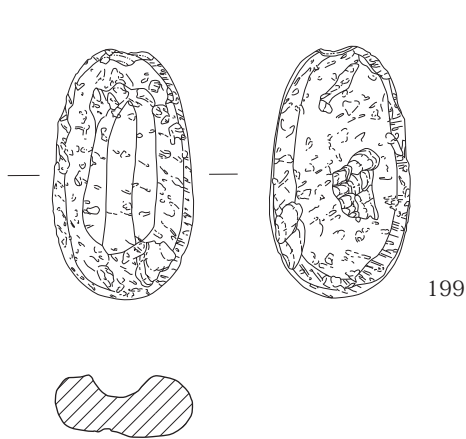
196



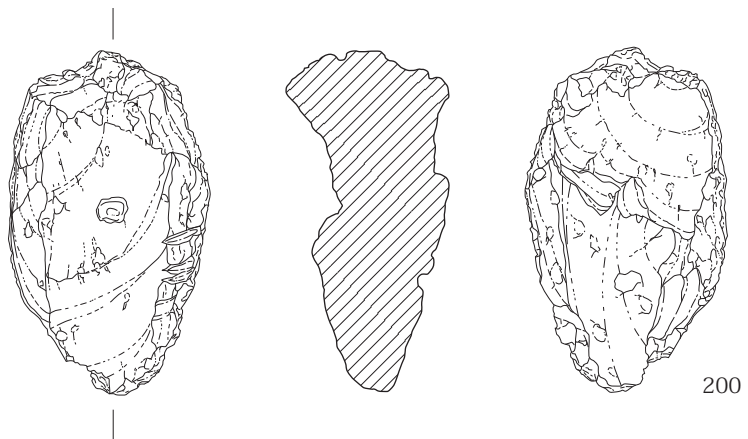
197



198



199



200

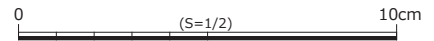


図 86 S I 48 出土遺物

枚重なりあっている。

199 と 200 は軽石製加工品である。199 は小型で長細い軽石礫の表面に凹部を設けることで、舟形を表現しており、「舟形軽石加工品」と考えられる。200 は大きな剝離痕が残り，表面に穿孔の痕跡らしきものがみられる。

S I 49 (図 87, 図版 33)

201 は甕の胴部～底部破片である。内外面ともナデ調整が施される。

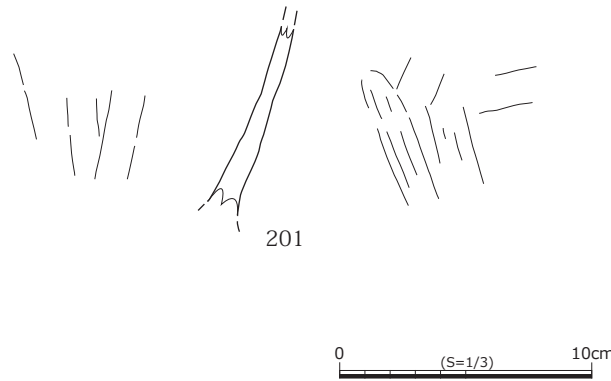


図 87 S I 49 出土遺物

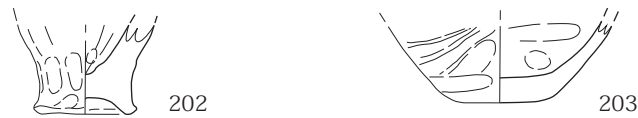


図 88 S I 50 出土遺物

#### S I 50 (図 88, 図版 33)

202 はミニチュア土器である。甕を模したものと考えられ、歪みの大きな脚部が表現されている。外面にはユビオサエが明瞭に残る。

203 は小型壺の底部である。端部がゆるやかな平底をもち、底径は 3.6cmを測る。壺の内面には黒斑が見える。

#### S I 50 (図 89, 図版 33)

204 はホルンフェルス製の打製石斧基部である。

205・206 は礫石器であり、205 は安山岩敲石である。上端下端部に敲打痕が集中する。206 は凝灰岩製凹石である。側面にも敲打痕が集中する。

207 は頁岩製の砥石である。使用回数が多かったためか、砥面がすり減り薄くなっている。

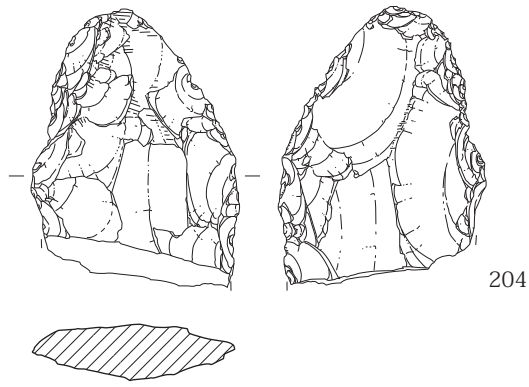
#### S I 52 (図 90～92, 図版 34)

208 はくの字に屈曲する小型甕の口縁部である。頸部から口縁部にかけて先細りする。

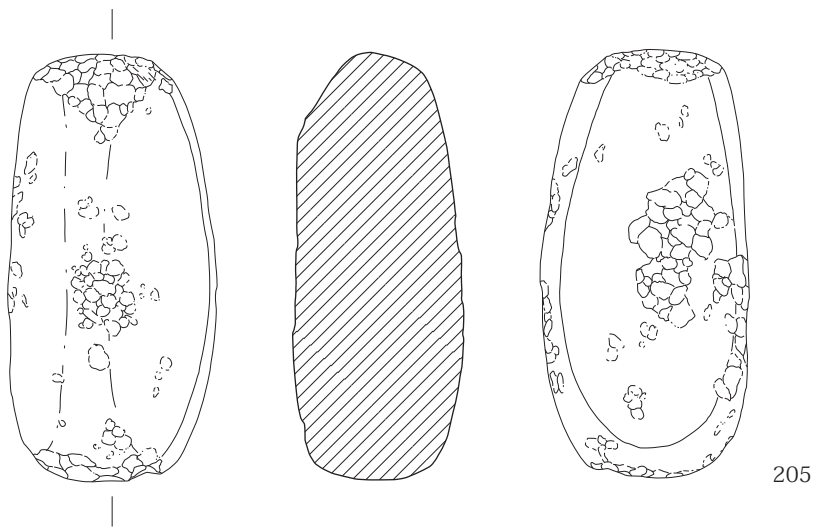
209 は口縁部がゆるやかに外反する甕である。口縁端部は丸みをもつが、口縁部は指頭により歪みが大きい。頸部外面には突帯をもつ。胴下部は縦方向の強いナデがあり、外面は摩滅が著しい。

210 は甕の頸部から胴部である。頸部外面には断面三角形を呈する突帯が貼り付けられる。砂粒が多く含まれていることからザラザラとした質感である。内面は斜め方向の工具ナデがみられる。

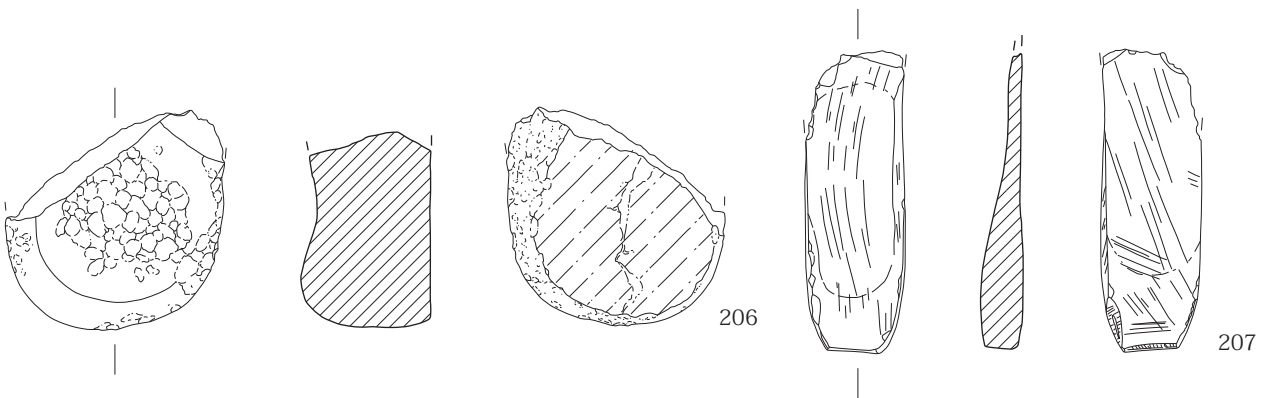
211 はハの字に開く甕の脚部で、脚部径は復元径で 8.0cmを測る。器部との接合面で剥落している。脚部内面は指頭による歪みがみられる。全体的に黄土色に発色する。



204



205



206

207

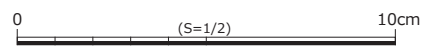
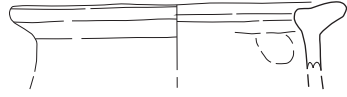
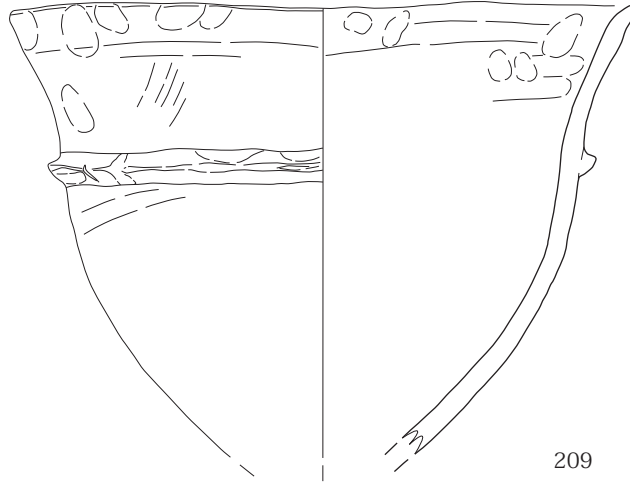


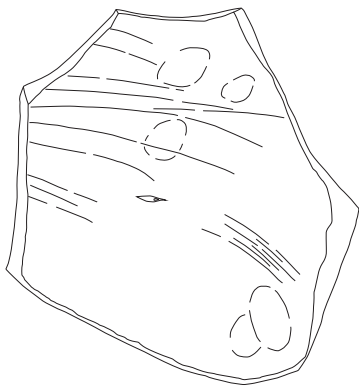
图 89 S I 50 出土遺物



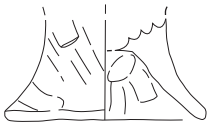
208



209



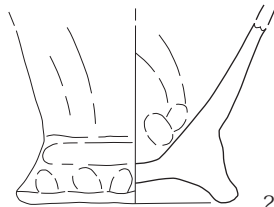
210



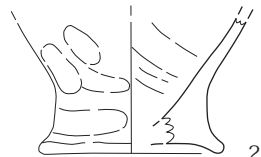
211



212



213



214

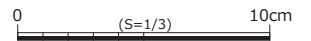


图 90 S I 52 出土遺物

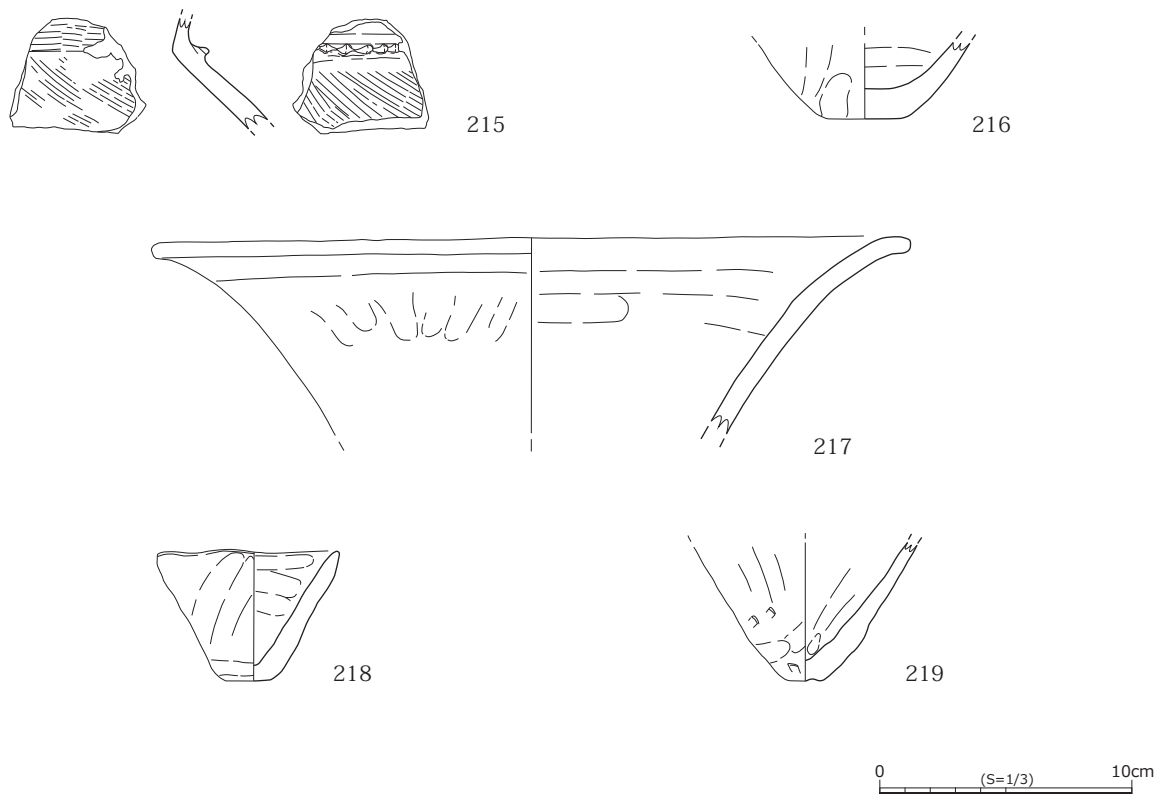


図 91 S I 52 出土遺物

212 は直線的に開く甕の脚部で、内外面とも成形時のユビオサエが明瞭に残る。

213 は甕の脚部で、平底の甕に脚部を接合している。内底面はユビオサエにより強くくぼむ。砂粒を多く含み、全体的に赤橙色に発色する。

214 は脚部が短く開くもので、ほぼ上げ底状となる。内面は丁寧なナデで平滑に仕上げられる。

215 は壺の頸部で、頸部はくの字に強く屈曲する。頸部外面には細い刻目突帯が貼り付けられ、丁寧な刻目が施される。内外面とも 1 mm 単位のハケメが明瞭に残る。径 3 mm ほどの白色粒を多く含み、発色も他の土器と異なることから搬入品の可能性がある。

216 は小型壺の底部で、平底となる。底径は 2.4cm を測る。内外面とも淡桃色に発色する。

217 は大きく外反する高杯で、口径は復元径で 30.0cm を測る。口縁端部は丁寧なヨコナデが見られる。

218 はコップ形の鉢で、完形品である。口径 7.3cm、器高 5.1cm、底径 1.7cm を測る。底部はゆるやかな平底で、自立する。口縁部周辺には黒斑が見られる。

219 は小型壺の底部である。底部外面は摩滅が著しく、器面の歪みもみられる。

220・221 は安山岩製礫石器である。220 は磨石である。表裏面だけでなく側面も磨面を作りだしている。221 は凹石である。表裏側面の 3 面に凹部がある。

222 は軽石製加工品である。断面形状は刃部を有する形状であり、「石包丁形軽石加工品」とされている。

## ② 溝状遺構出土遺物 (図 93)

223 はホルンフェルス製の凹石である。礫石器の表裏に敲打痕が集中する凹部が作り出されている。

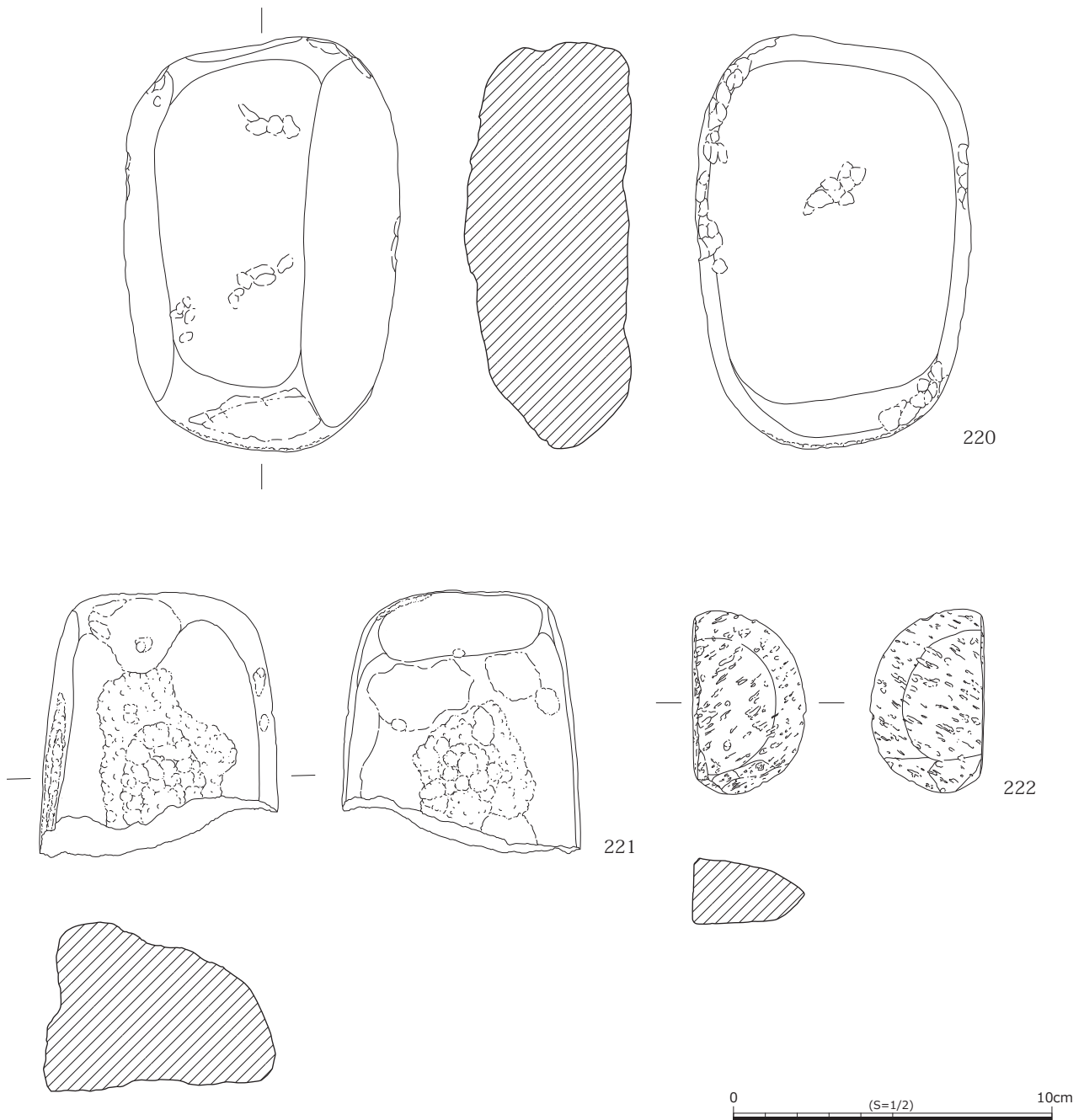


図92 S I 52 出土遺物

③ 8層出土遺物 (図94, 図版35)

224 は高杯の脚部である。直線的な筒部から脚端部に向かってハの字に開く。脚部径は 12.6cm を測る。外面は赤色顔料がみられる。脚部内面には黒色物質が厚く付着しており、とくに筒部は濃密である。そのため、脚部を転用して何かの容器に使っている可能性もある。

225 は頁岩製の石鏃である。片側の基部が折損している。本来は抉りをもたない三角鏃であったと推定される。

226 は安山岩製の台石と考えられる。表面には研磨痕が若干みられる。

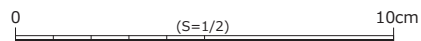
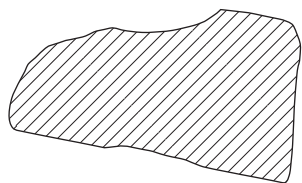
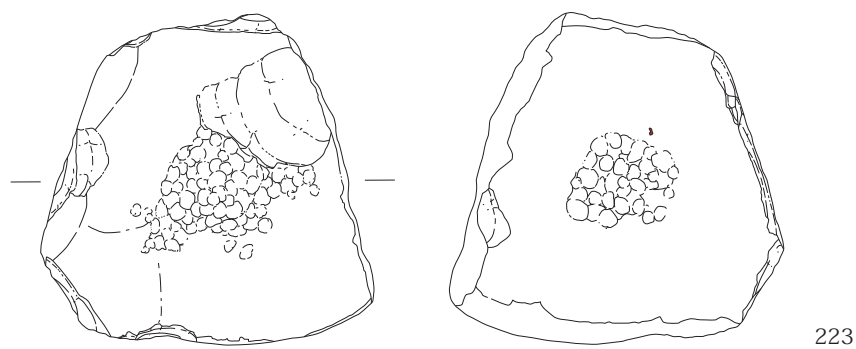


图 93 溝埋土 出土遺物

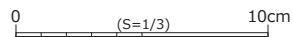
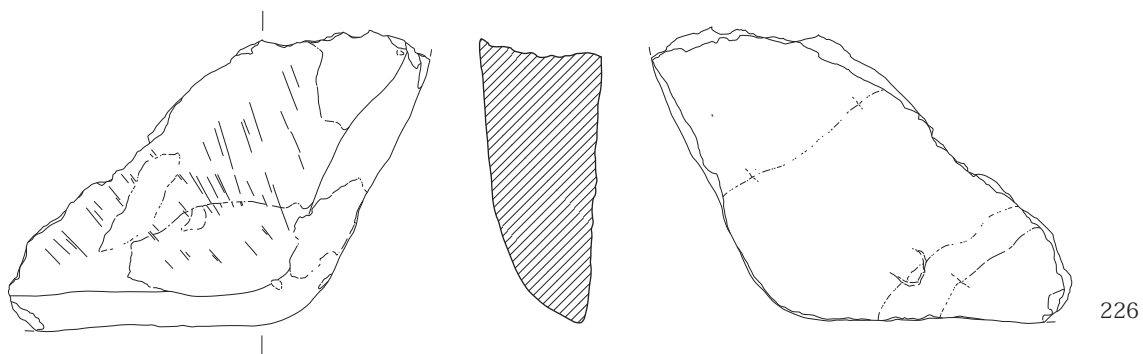
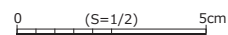
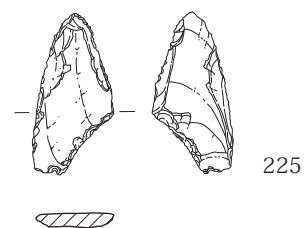
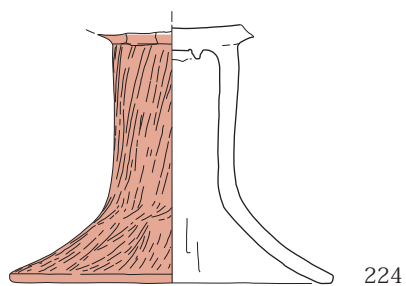


图 94 8層 出土遺物



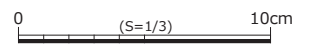
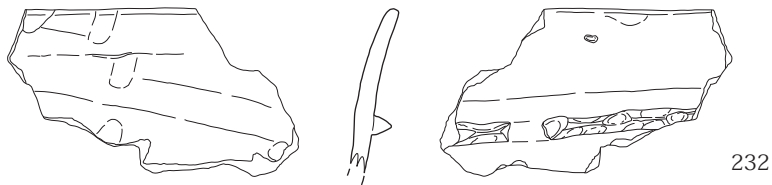
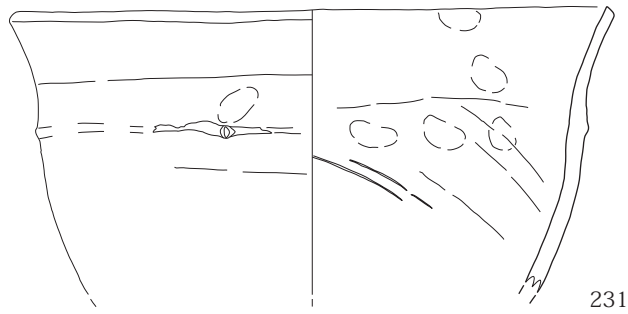
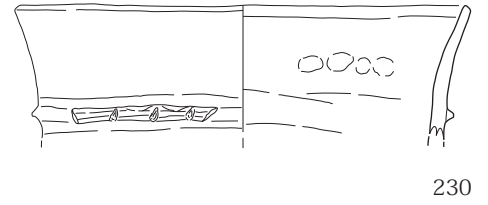
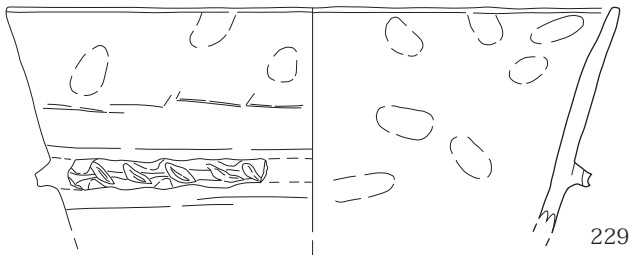
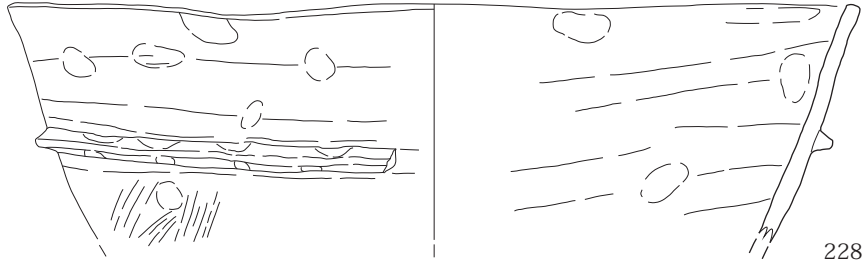


图 95 9 層 出土遺物

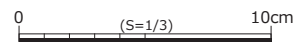
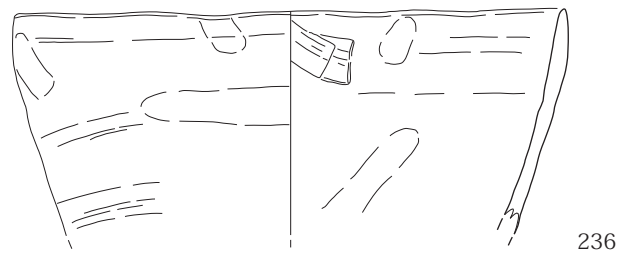
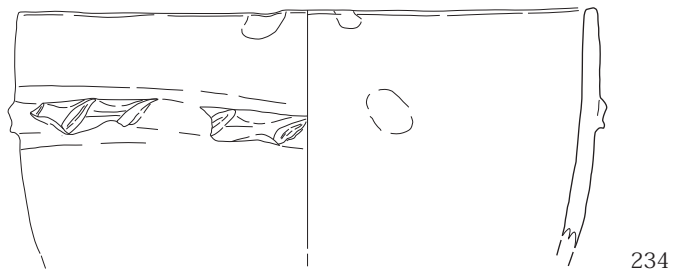
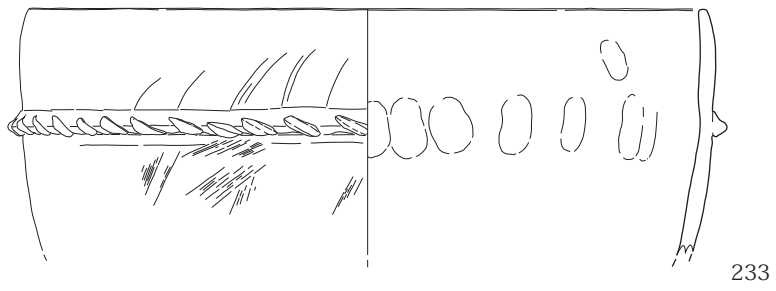
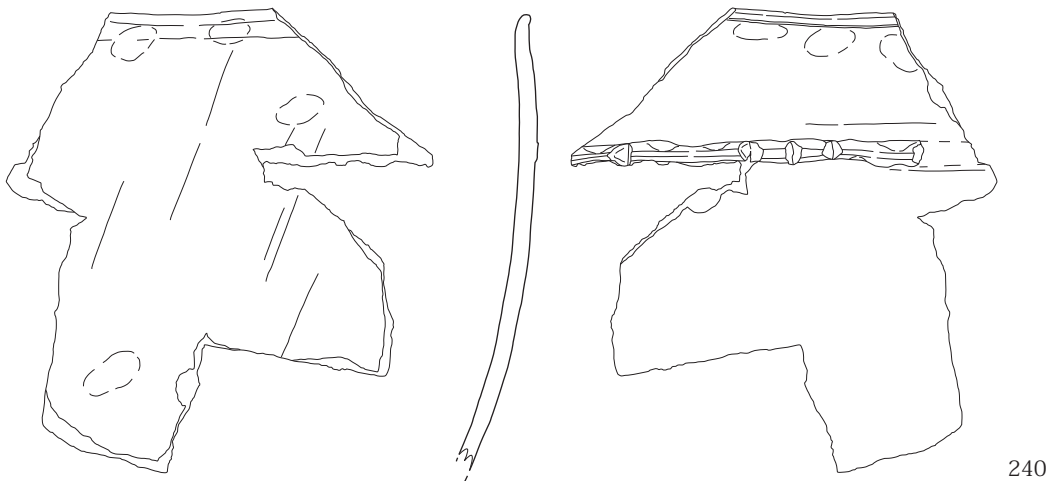
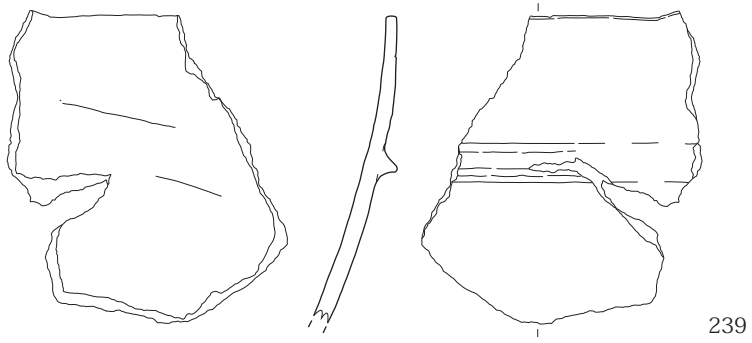
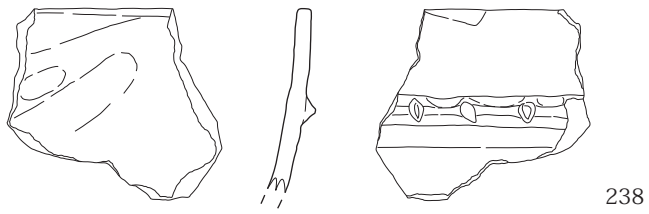
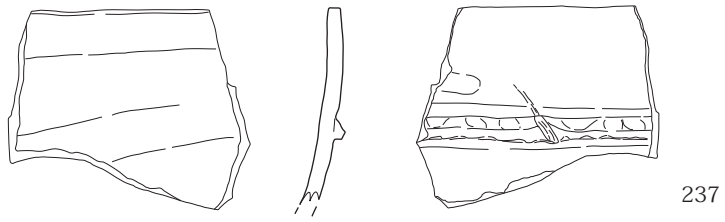
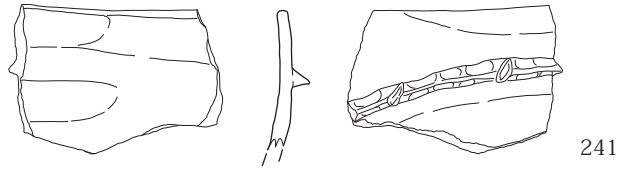


图 96 9 层 出土遗物

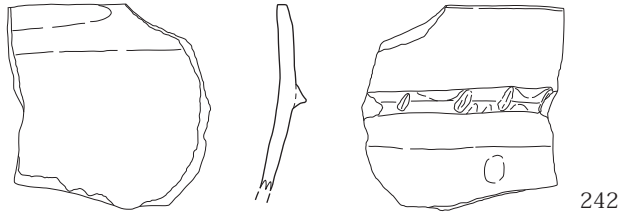


0 (S=1/3) 10cm

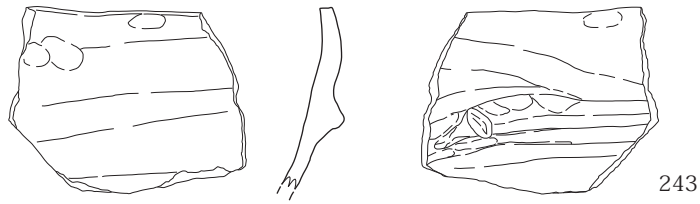
图 97 9 層 出土遺物



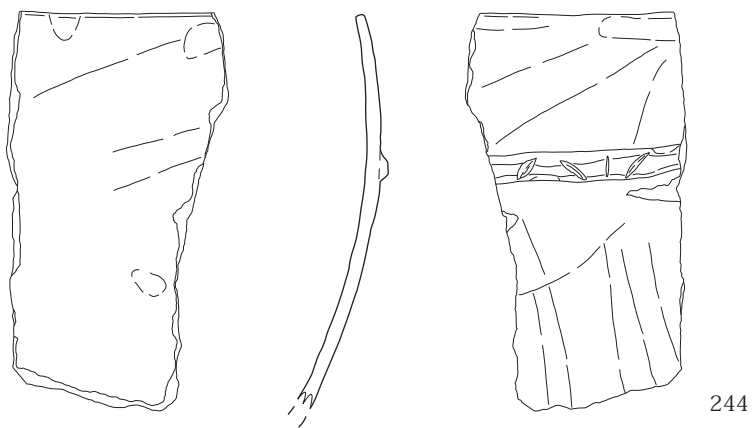
241



242



243



244

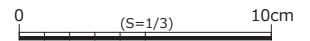
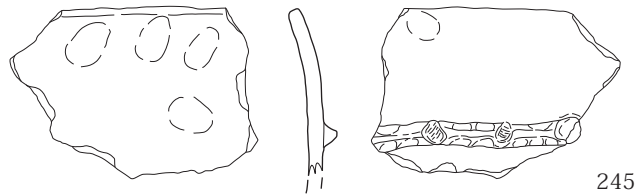
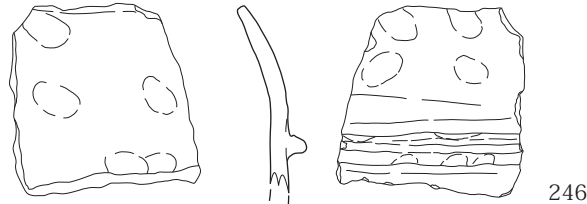


图 98 9 层 出土遺物



245



246

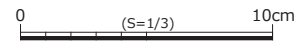


図 99 9 層 出土遺物

④ 9層出土遺物 (図 95 ~ 116, 図版 35 ~ 44)

227 は甕の口縁部で、先細りする形態である。上面に平坦面をもつ。口縁部外面は丁寧なヨコナデがみられる。黄土色に発色する。

228 は口縁部がわずかに外反する形態の甕で、口縁部下に一条の突帯を有する。突帯は断面が半円~台形状を呈する。

229 は口縁部がバケツ状に開くタイプの甕で、口縁部下には刻目突帯を有する。全体的に橙色に発色し、器面はザラザラとした質感をもつ。口径は復元径で 24.3cm を測る。

230 は口縁部が外反する甕で、器面にやや歪みがみられる。突帯は丁寧なヨコナデで貼り付けられたのち、刻目が施される。口縁部外面に楕円形の圧痕がみられる。

231 は口縁部がゆるやかに外反する甕で、頸部内面にはわずかに稜線がみられる。胎土には砂粒が非常に多く含まれており、内外面ともザラザラとした質感である。

232 は口唇部がコの字を呈するもので、端部の作りはややシャープである。丁寧なヨコナデで突帯が貼り付けられる。

233 は内湾する甕で、口縁部下に一条の突帯をもつ。突帯には刻目が施される。内面には黒斑の付着が見られる。また、成形時の連続したコビオサエが明瞭に見られる。外面は淡桃色、内面は白灰色に発色する。

234 は甕の口縁部で、口唇部はコの字を呈する。口唇部は丁寧なヨコナデで仕上げられる。突帯が貼り付けられ、突帯には斜め方向の刻目が施される。刻目原体は木製工具である。刻目内部には布目らしき痕跡も見ることから、木製工具に布を巻きつけたものと考えられる。内外面ともナデ調整がみえる。

235 は甕の口縁部である。口径は復元径 28.4cm を測る。口縁部外面は横方向のミガキ調整、胴部は縦方向のナデ調整がみえる。突帯は断面三角形となる。外面の口唇部から突帯にかけて、白色物質の付着がみられる。

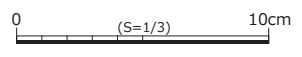
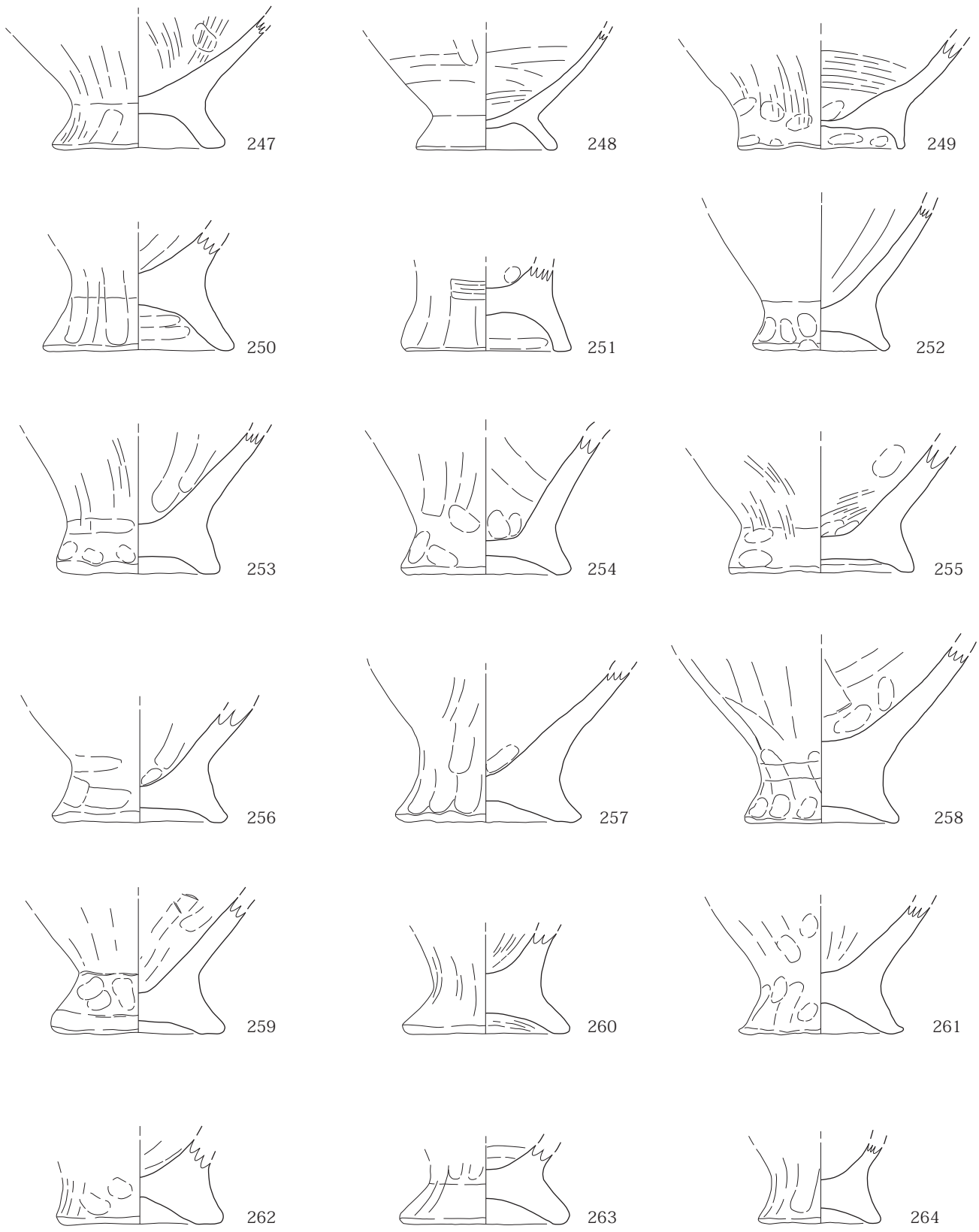


图 100 9 層 出土遺物

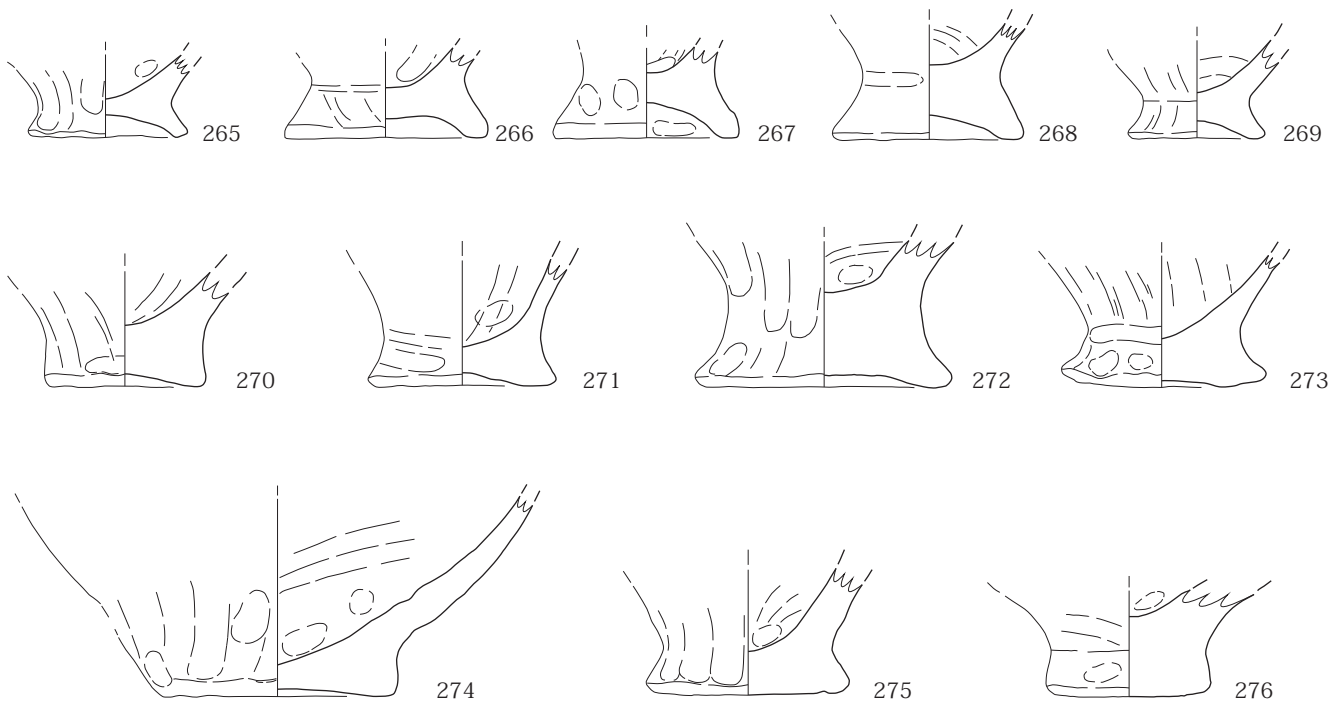


图 101 9 层 出土遗物

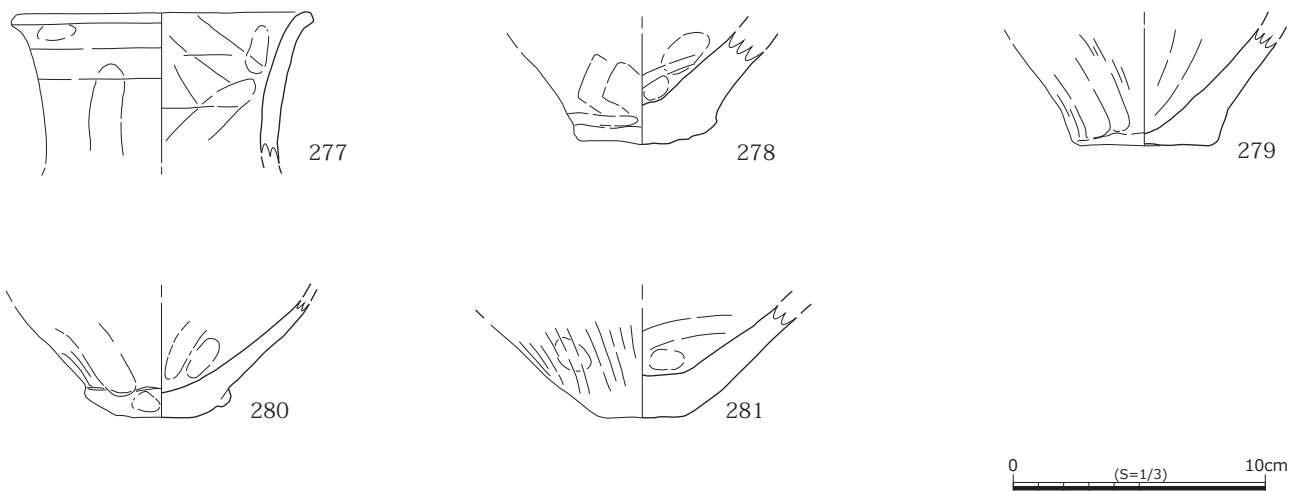
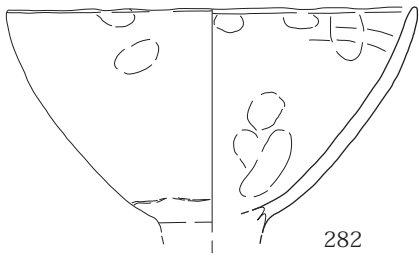
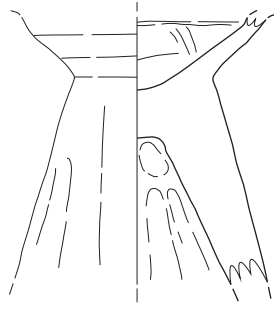


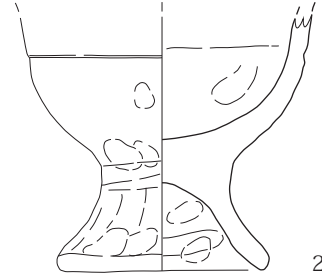
图 102 9 层 出土遗物



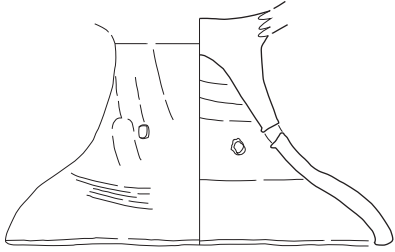
282



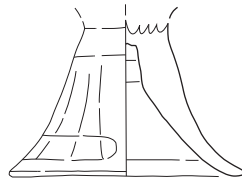
283



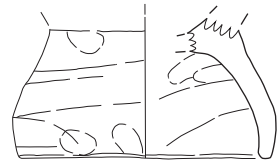
284



285



286



287

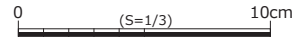
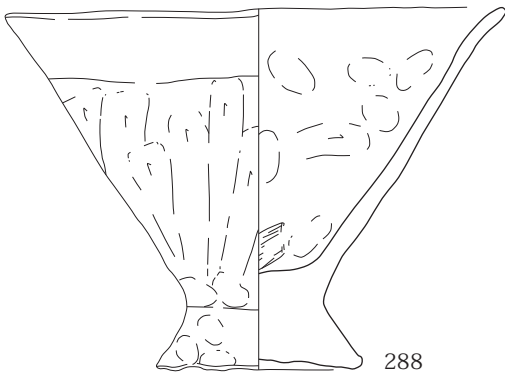
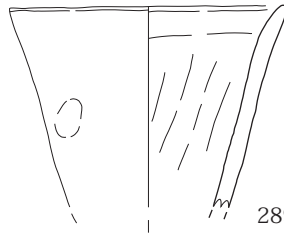


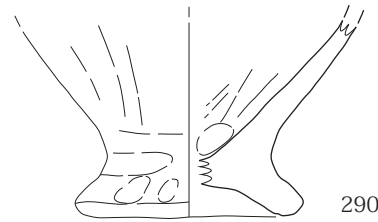
图 103 9 層 出土遺物



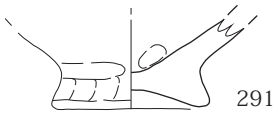
288



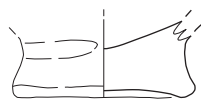
289



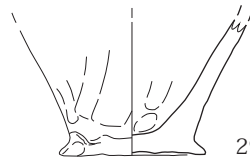
290



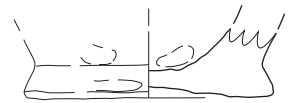
291



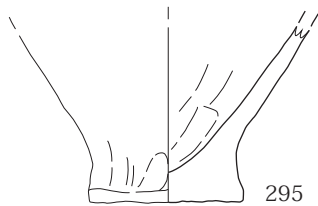
292



293



294



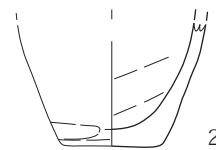
295



296

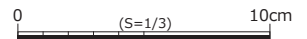


297



298

图 104 9 層 出土遺物





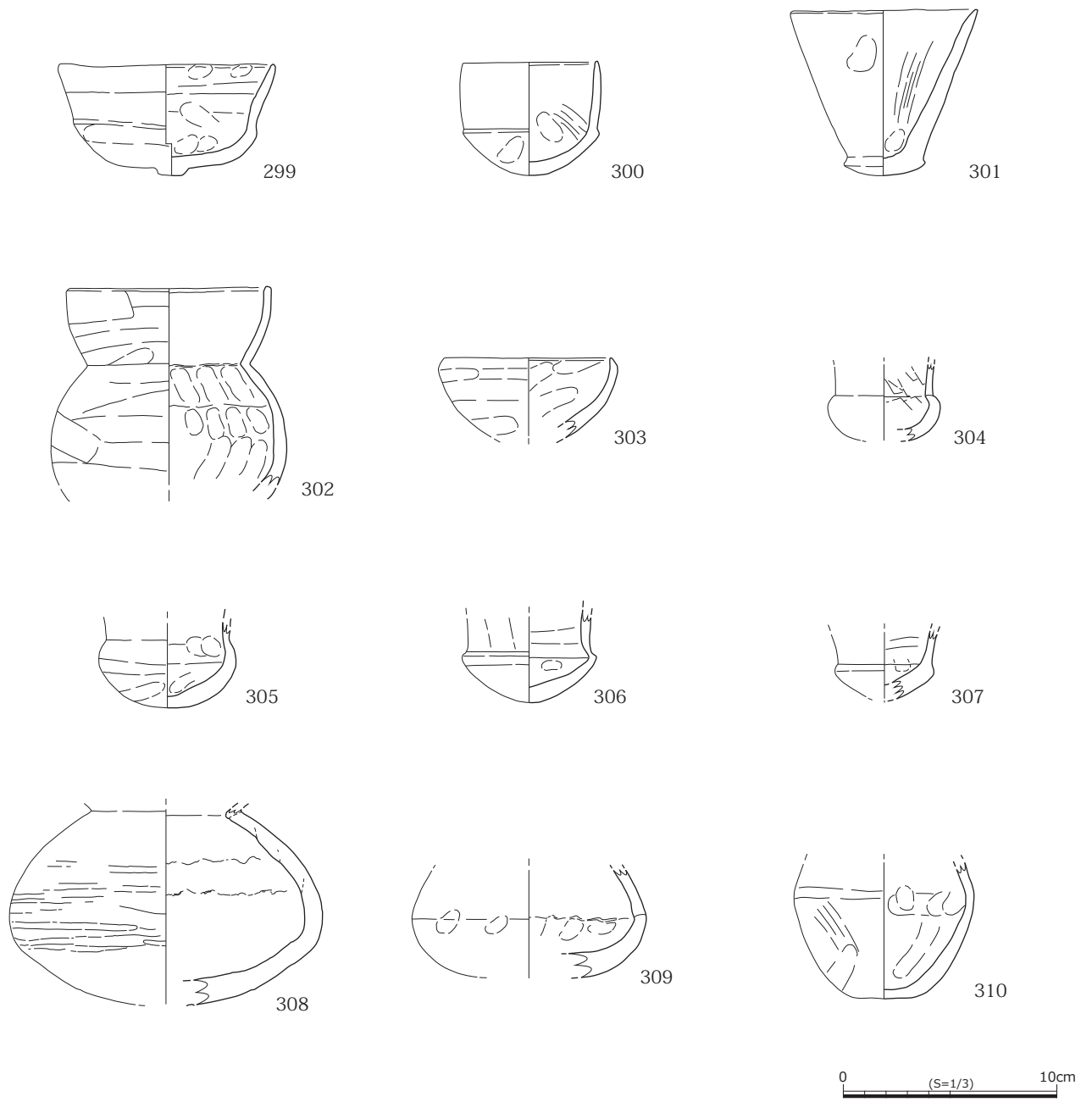


图 105 9 層 出土遺物

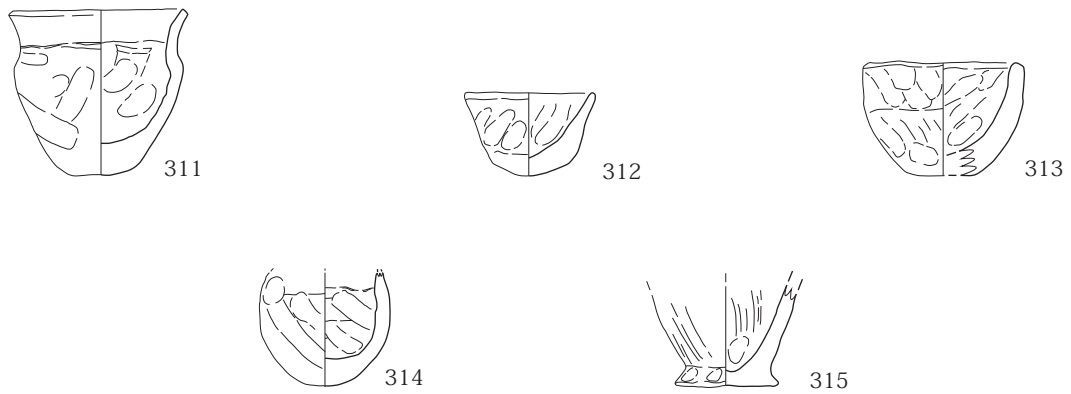


図 106 9層 出土遺物

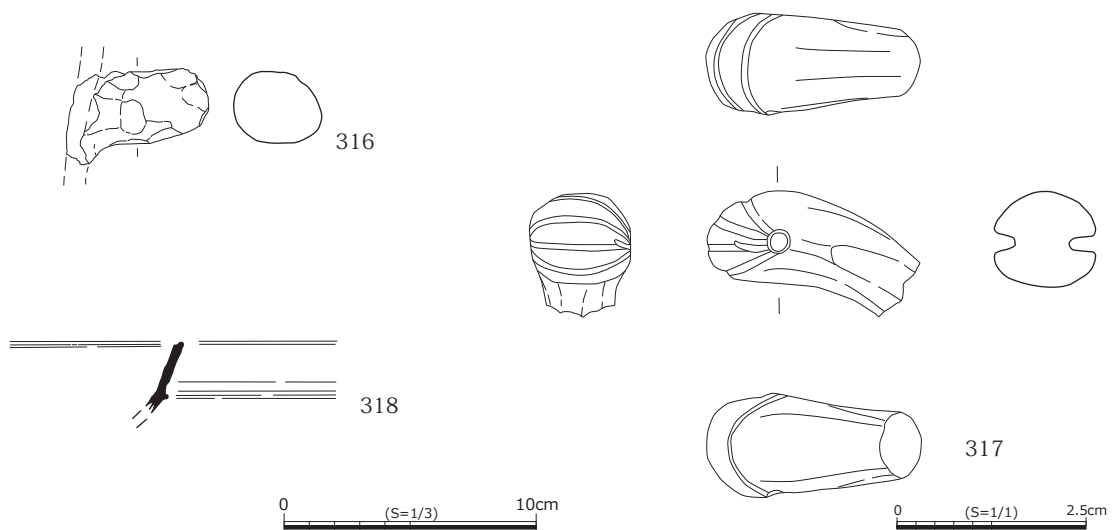


図 107 9層 出土遺物

236 は無文の甕である。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部は先細りする。内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げられるが、器面はやや歪みをもつ。

237 は口唇部がシャープなコの字を呈する甕で、口縁部下に一条の突帯をもつ。突帯には刻目がみられ、その刻目は一部器面まで及んでいる。内外面とも淡桃色に発色する。

238 は甕の口縁部である。一条の突帯をもち、突帯には刻目が施される。刻目の原体は指頭によるものと考えられる。内面には口唇部近くまで白色物質が付着しているが、内容物であるかはわからない。

239 は口縁部にやや歪みが見られる。突帯はやや低い位置に貼り付けられ、断面形は三角形となる。突帯は一部剥落している。口唇部の器壁はやや薄い。砂粒が多く含まれ、表面はザラついている。

240 は口唇部が外方へ屈曲するタイプの甕で、口縁部下には一条の突帯が貼り付けられる。突帯には刻目があり、3点の刻目は間隔が均等だが、他の刻目はまばらである。内外面ともナデ調整である。

241 は突帯が左下へ大きく曲がるもので、おそらく接続しない突帯になると考えられる。突帯

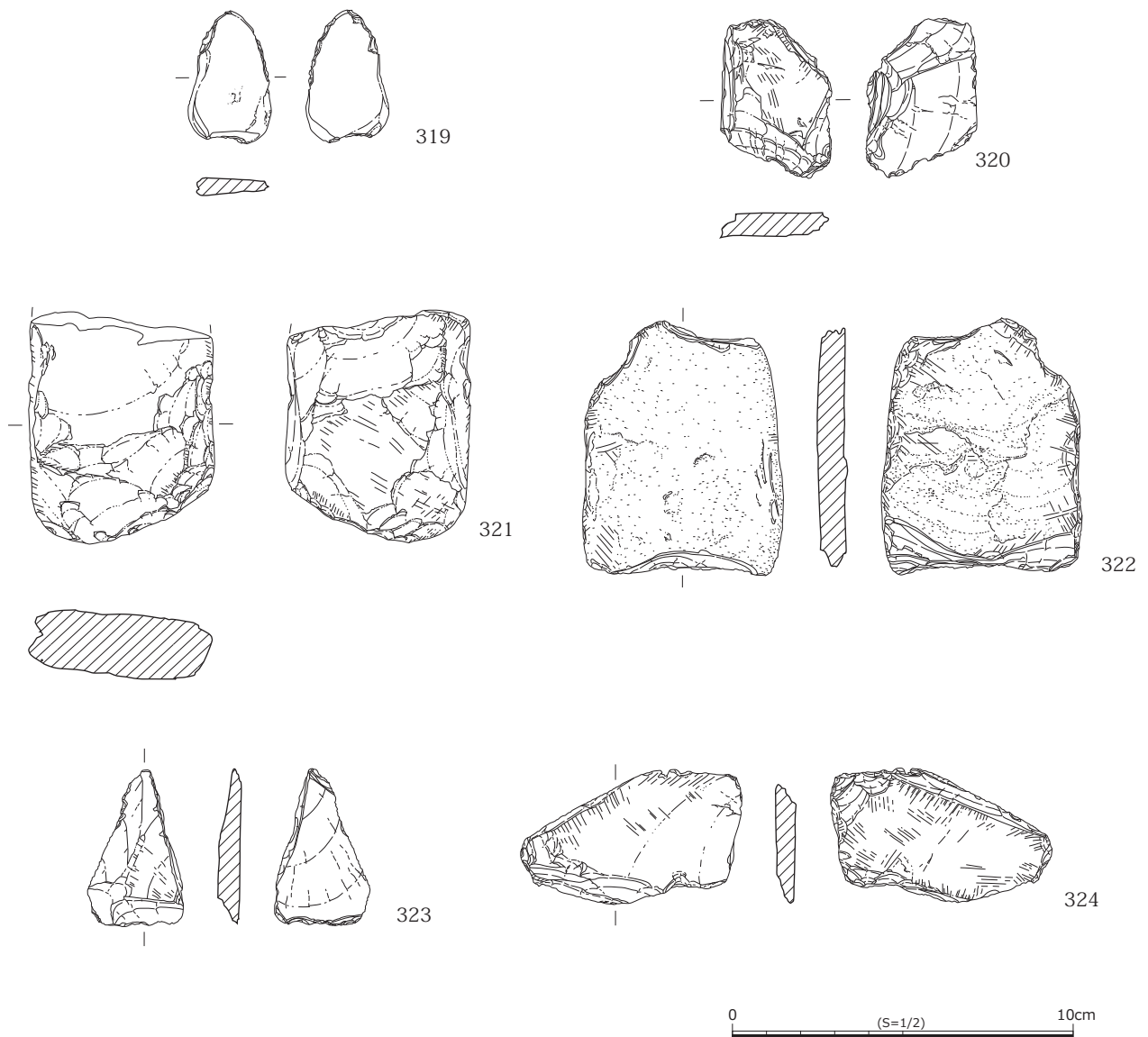


図 108 9層 出土遺物

の刻目の間隔は4～5cmと広い。

242はやや丸みをもつ甕で、最大径部分に突帯が貼り付けられる。この突帯には刻目が施される。内外面とも白桃色に発色する。

243は器壁が厚い甕で、口縁部内面には明瞭なユビオサエがみられる。口縁部下に突帯を有し、外面を見た場合、突帯が左側へ大きく下がる形となる。おそらく接合しない突帯になるものと思われる。突帯に施された刻目の間隔は広い。

244は大きく内湾する甕で、内外面ともナデ調整で平滑に仕上げられる。口縁部下に突帯をもち、突帯には刻目が鋸歯状に施文される。

245は甕の口縁部で、一条の突帯をもつ。突帯には刻目がみられ、刻目内部には布目のような痕跡が残る。内面にはユビオサエがみられる。

246は大きく内湾するタイプの甕で、口縁部下に下垂気味の突帯が貼り付けられる。突帯の上下端は丁寧なヨコナデがみられる。

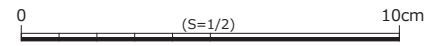
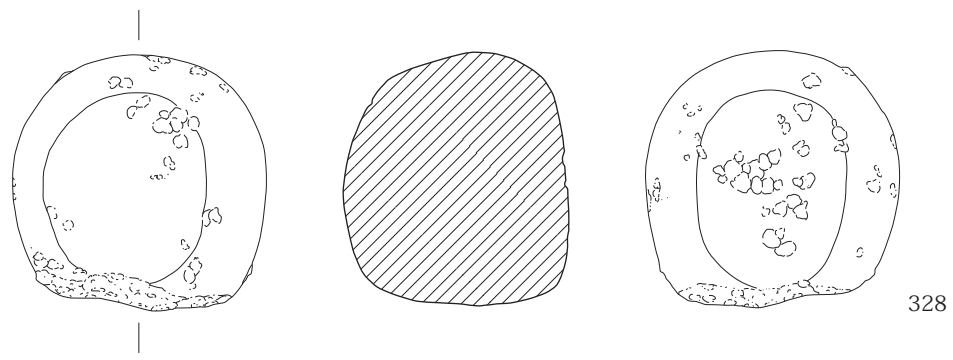
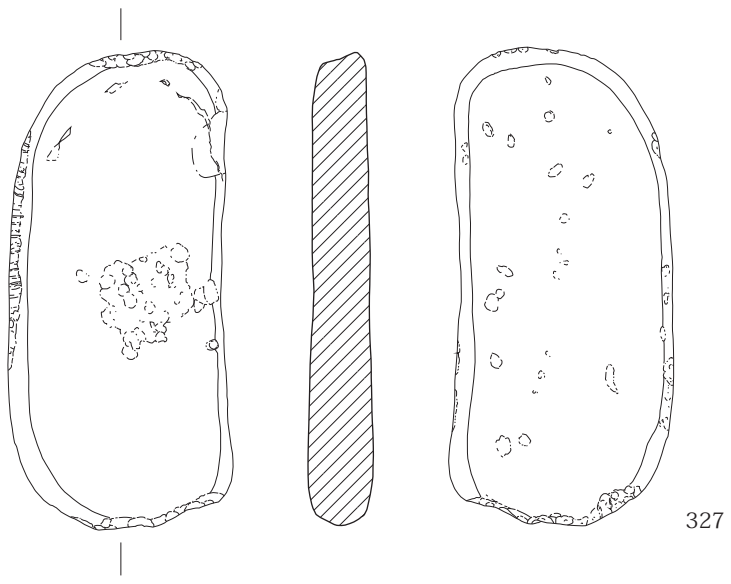
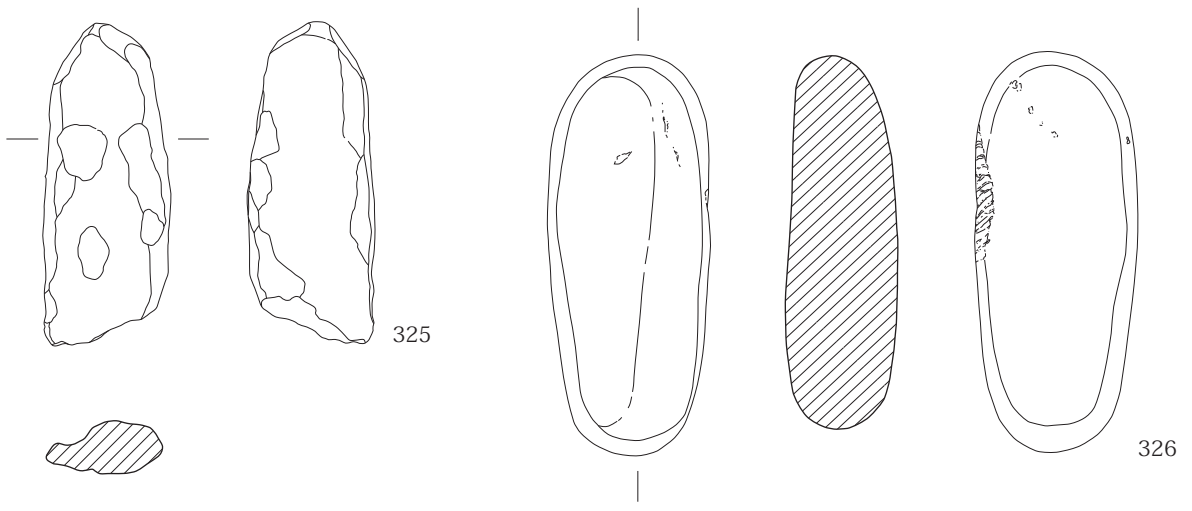


图 109 9 层 出土遗物

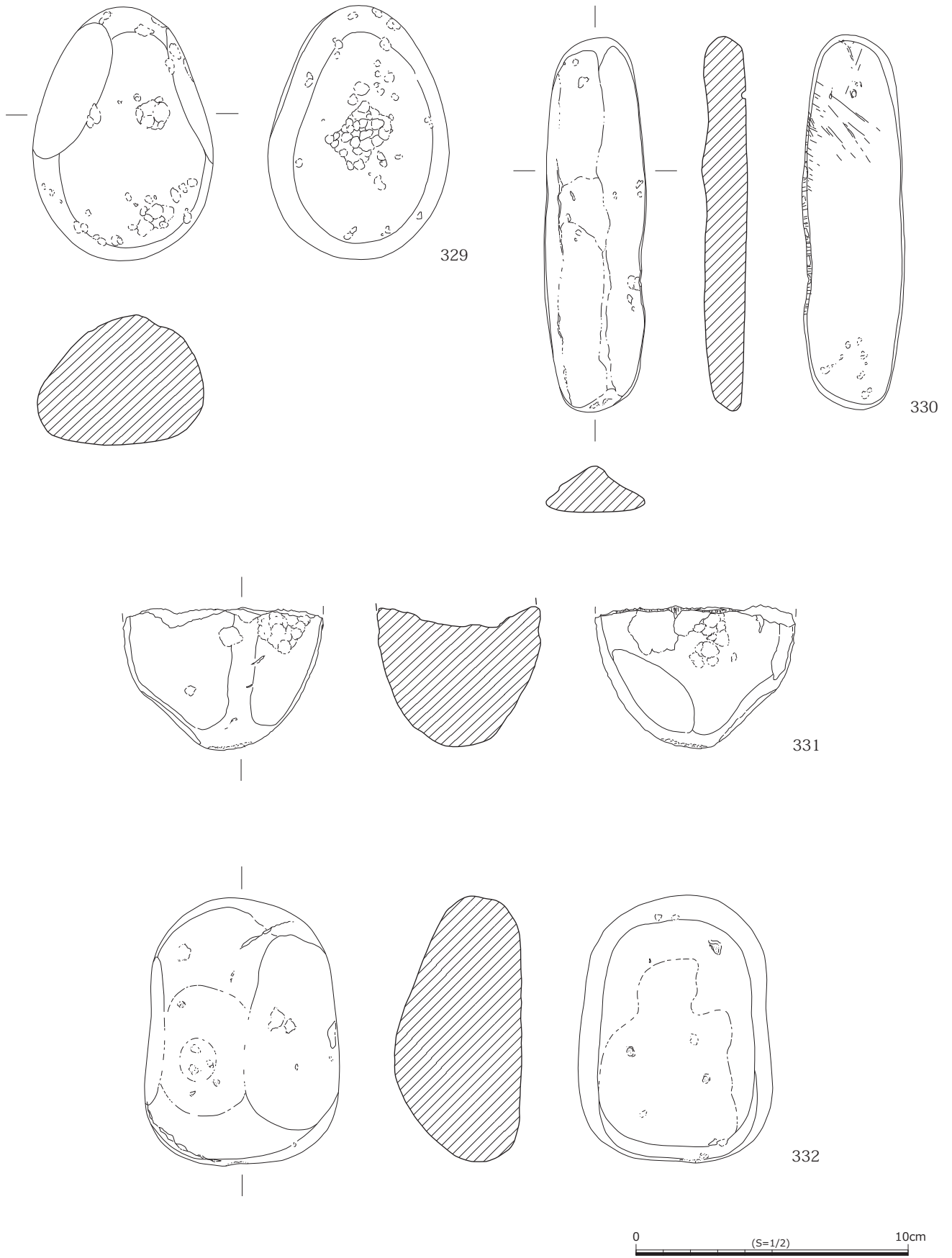


图 110 9 層 出土遺物

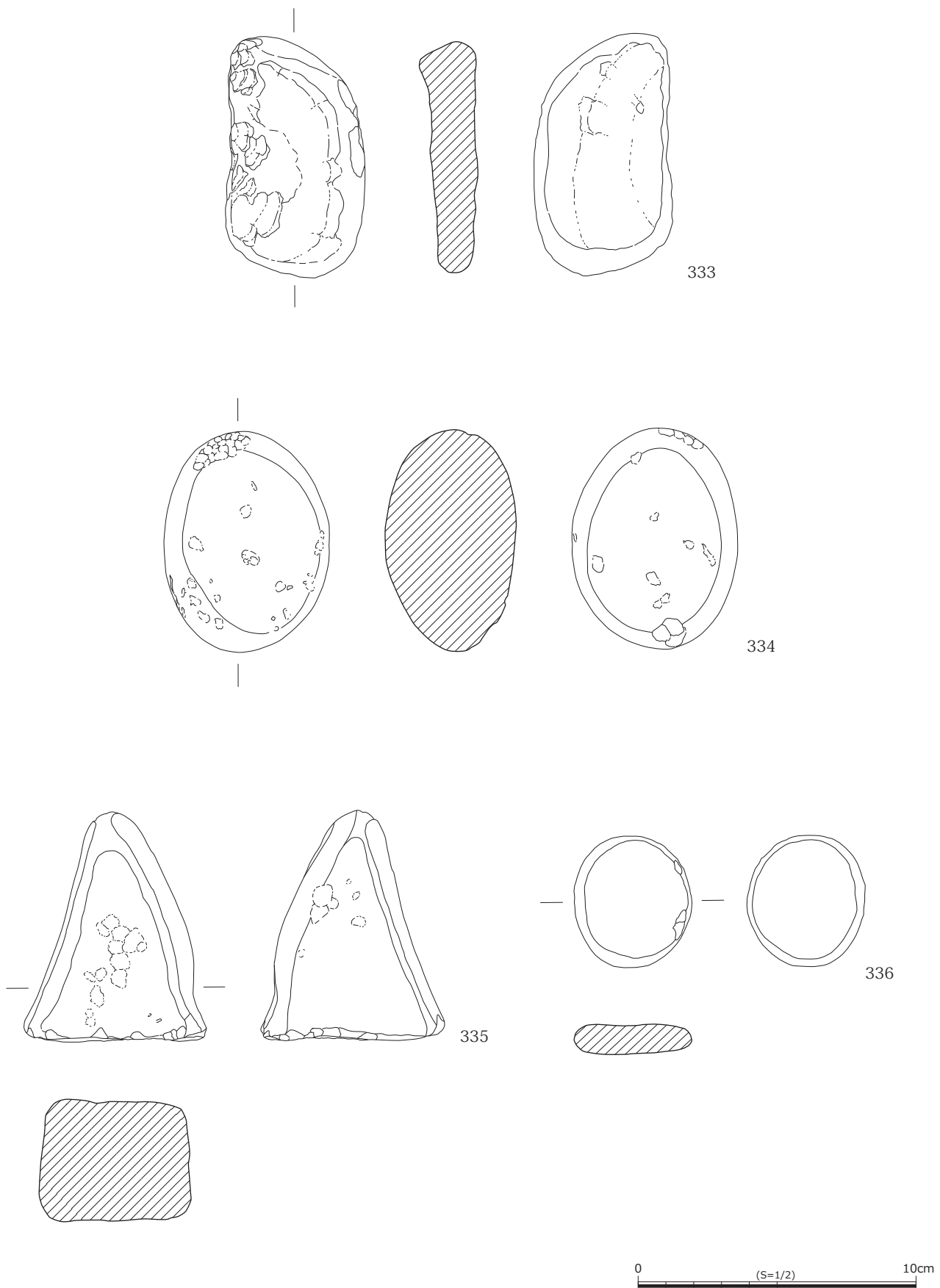
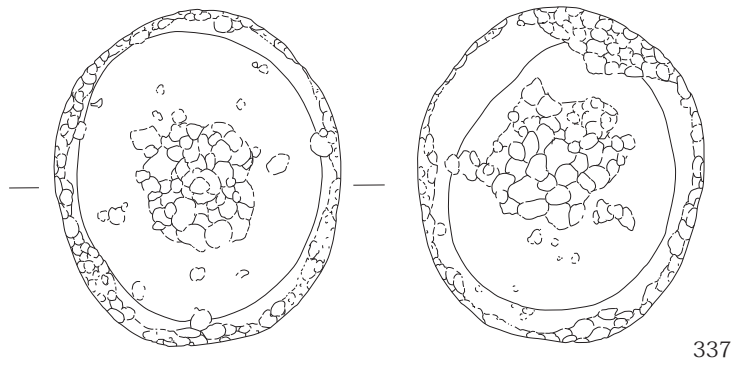
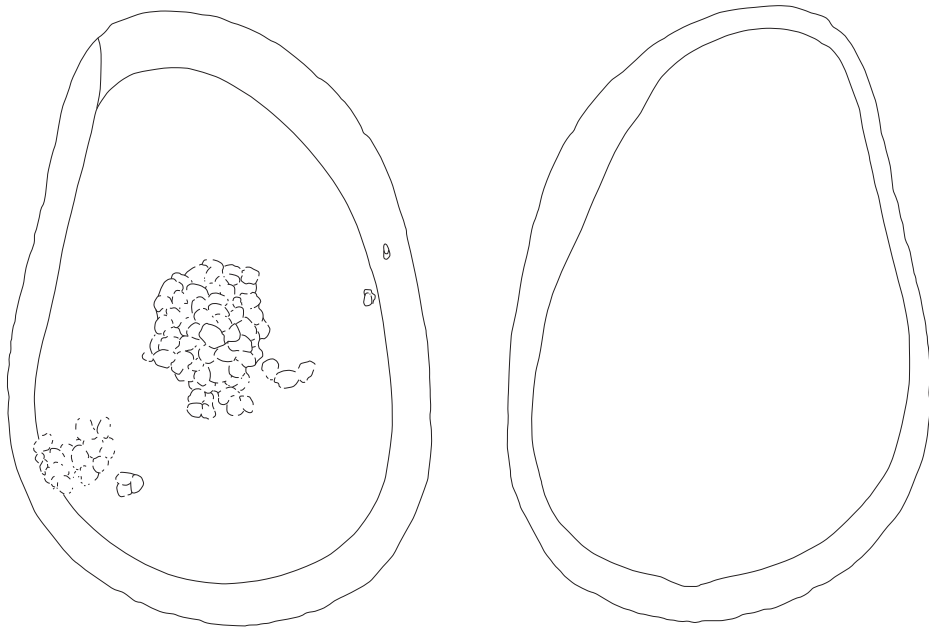
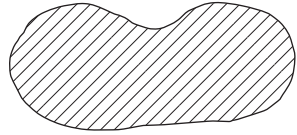


图 111 9 层 出土遗物



337



338

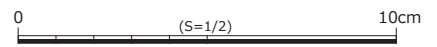


图 112 9 层 出土遗物

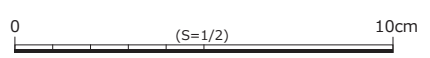
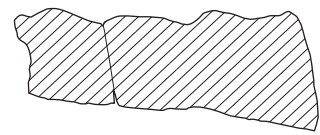
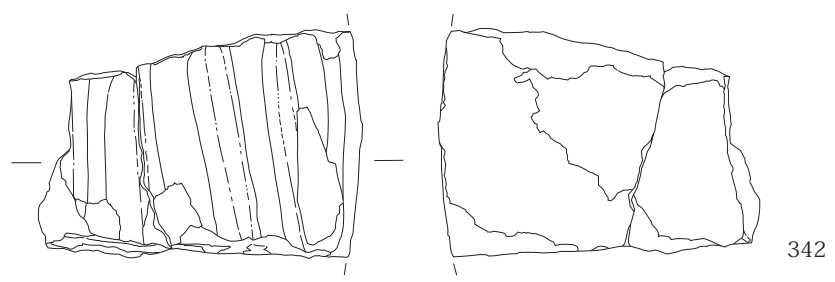
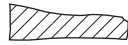
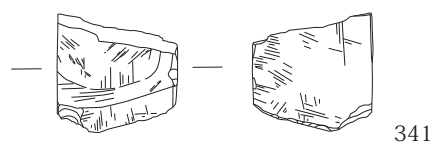
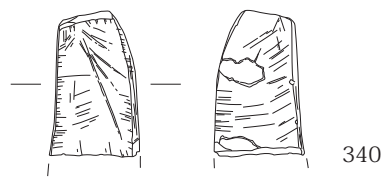
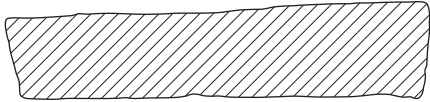
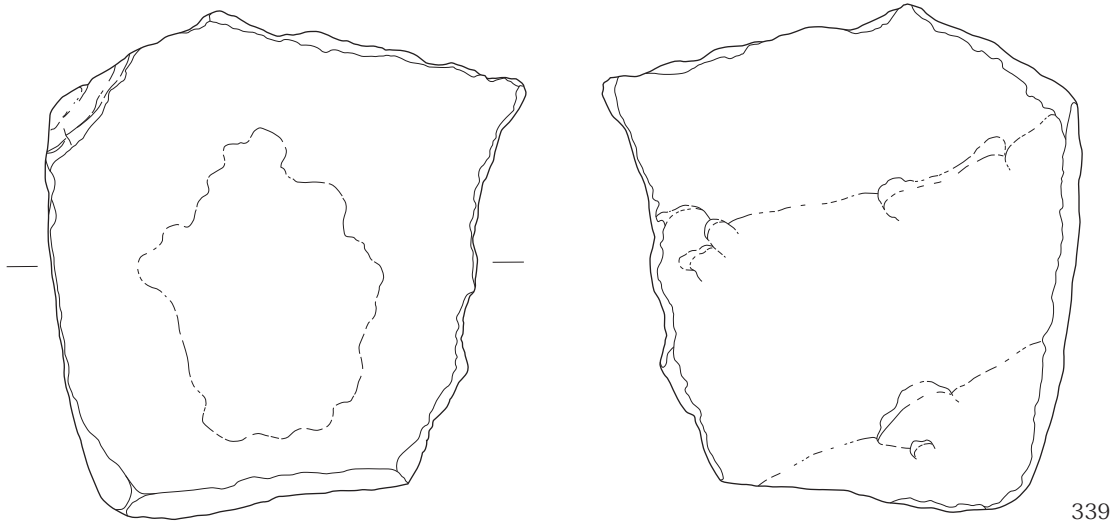
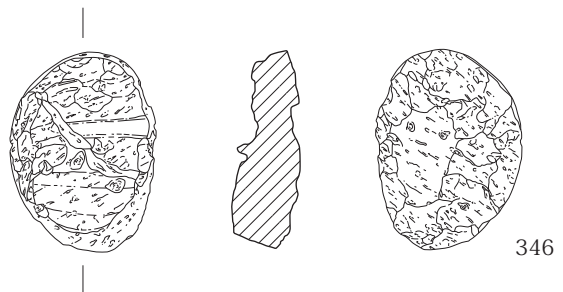
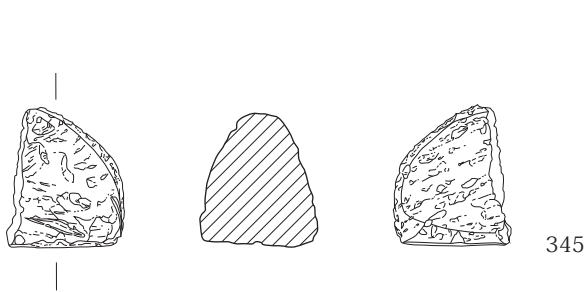
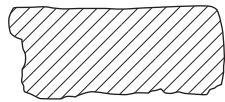
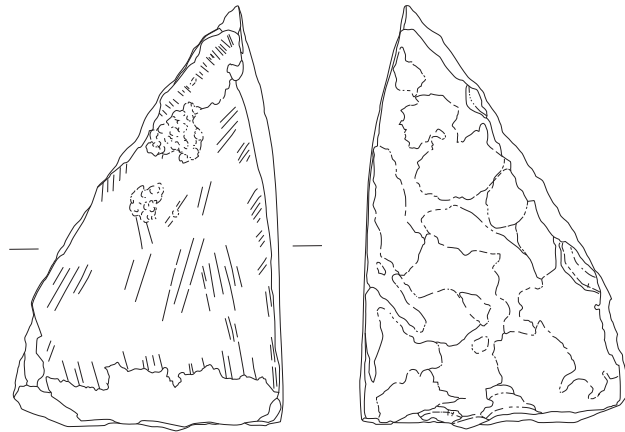
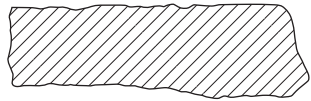
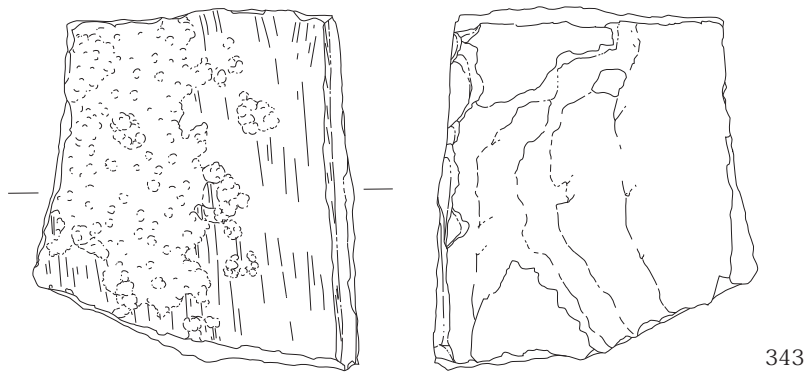


图 113 9 层 出土遗物





0 (S=1/2) 10cm

图 114 9 层 出土遗物

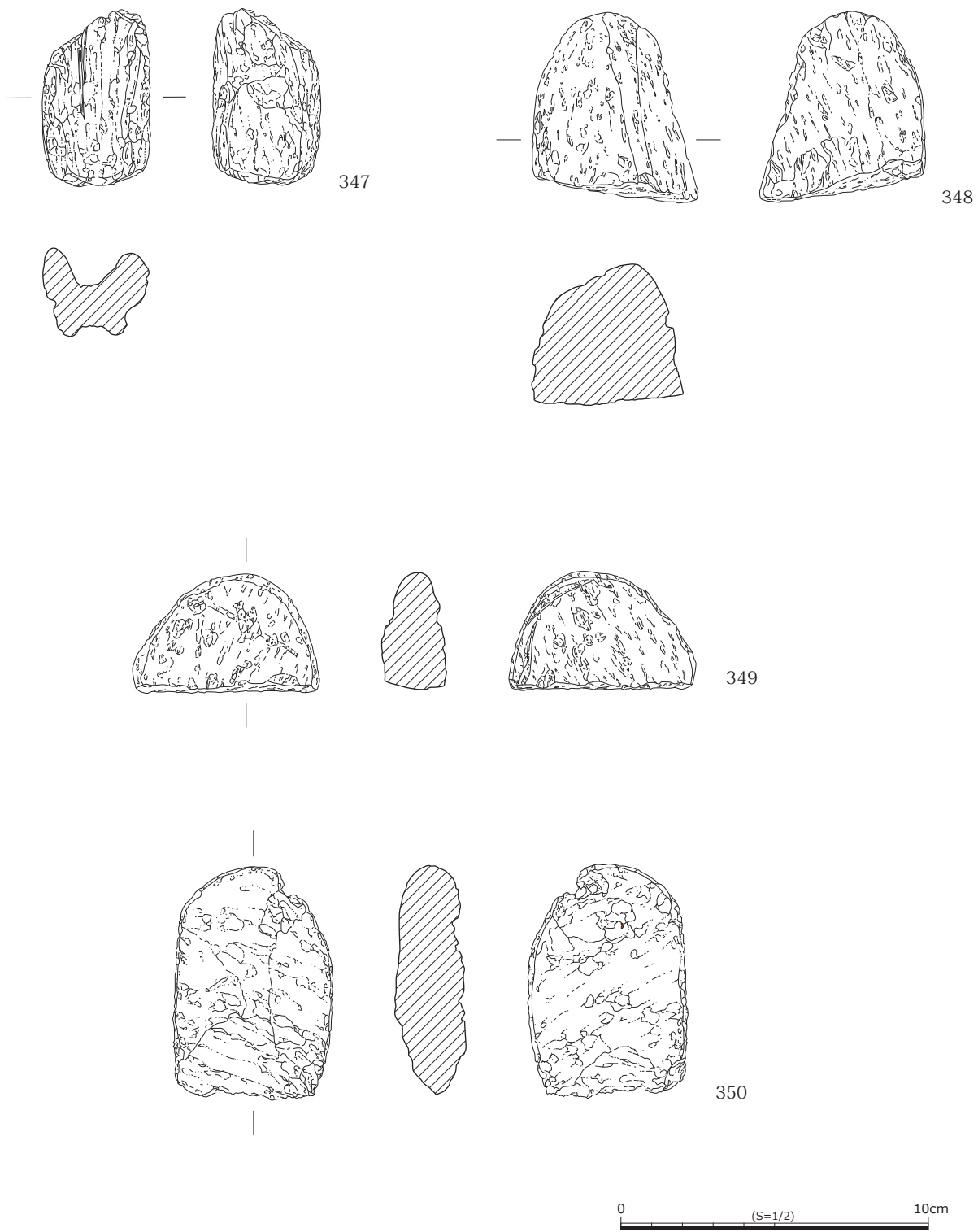


图 115 9 層 出土遺物

247 から 276 は甕の脚部である。

247 は接地面が平坦となるもので、脚内部の天井部形態は丸い。器部内面は丁寧なナデ調整がみられる。

248 は胴下部が丸みをもつもので、器壁は薄い。脚部はハの字に開き、脚部の天井は下方へ突出する。脚接合部の外面にはススが濃密に付着する。

249 は直線的に伸びる脚部で、粘土を付加している一部が剥落している。内底面は強いユビオサエがみられ、器壁は非常に薄い。

250 は脚部径 10.0cmを測るもので、脚天井部は丸い。底部内面は赤く発色する。

251 は踏ん張る形で開くもので、接地面は幅 1 cmほどの平坦面を有する。接地面を平滑にしたため、内面へ粘土の突出がみられる。

252 は胴下部が丸みをもつもので、脚部は断面三角形を呈する。

253 は底部内面の器壁が非常に厚く、重い。接地面には藁のような植物質の圧痕がみられる。

254 は底部内面に平坦面をもつもので、器壁の厚さが 6 mmほどになる。内外面とも白桃色～灰色に発色する。

255 は平底甕に断面三角形の脚部を貼り付けたもので、破断面で接合線が明瞭に確認できる。

256 も平底甕に脚部を接合したもので、脚部内面には明瞭に接合線が残る。

257 は脚部の器壁が厚いもので、脚部径は 9.7cmを測る。外面には脚接合時のユビオサエが明瞭に残る。

258 は脚接合部の器壁が 3 cmほどあるもので、脚部は短く開く。脚部は先端に向かって先細りする。内面には黒斑が見られる。

259 は脚接合部外面に接合線が明瞭に残るもので、脚部径 9.2cmを測る。胴下部は直線的に立ち上がる。脚部接地面は平坦面をもち、接地面には藁状の繊維質痕が残る。

260 は大きく開く脚部で、脚部内面は丁寧なナデ調整がみられる。底部内面には黒斑が見られる。

261 はハの字に開く脚部で、端部がわずかに盛り上がる。外面は白く発色する。

262 は短く開く脚部で、接地面は平坦となる。内外面とも褐色に発色する。

263 は脚部内面全体に黒斑が見られる。

264 は小型甕の脚部で、あまり開きはみられない。

265 は砂粒を多く含み、ザラザラとした質感である。断面は青灰色となる。

266 は接地面が平坦となるものである。この平坦面を作り出しているのは、最外層に付加した粘土で、内側に折り返すような形で貼り付けられている。内外面とも部分的に白色物質の付着が見られる。

267 は小型甕の脚部で、外面はひび割れや剥落が目立つ。

268 は器面全体に黒斑が見られる。やや踏ん張った形態である。

269 の脚部断面には接合線が明瞭に残る。小型の甕である。

270 はほぼ上げ底状の底部をもつもので、器面は大きく剥落している。

271 は平底甕に断面三角形の脚部が貼り付けられるもので、断面には明瞭に接合線が残る。脚部内面にはユビオサエがみられる。

272 は大きく下方へ突出した底部をもつ平底の甕に、脚部が貼り付けられたものである。白色粒子を多く含む。脚部内面は全体的に黒斑が見られる。

273 はくびれた平底状になるもので、底面には木葉痕がみられる。胴下部は丸みをもって立ち上がる。

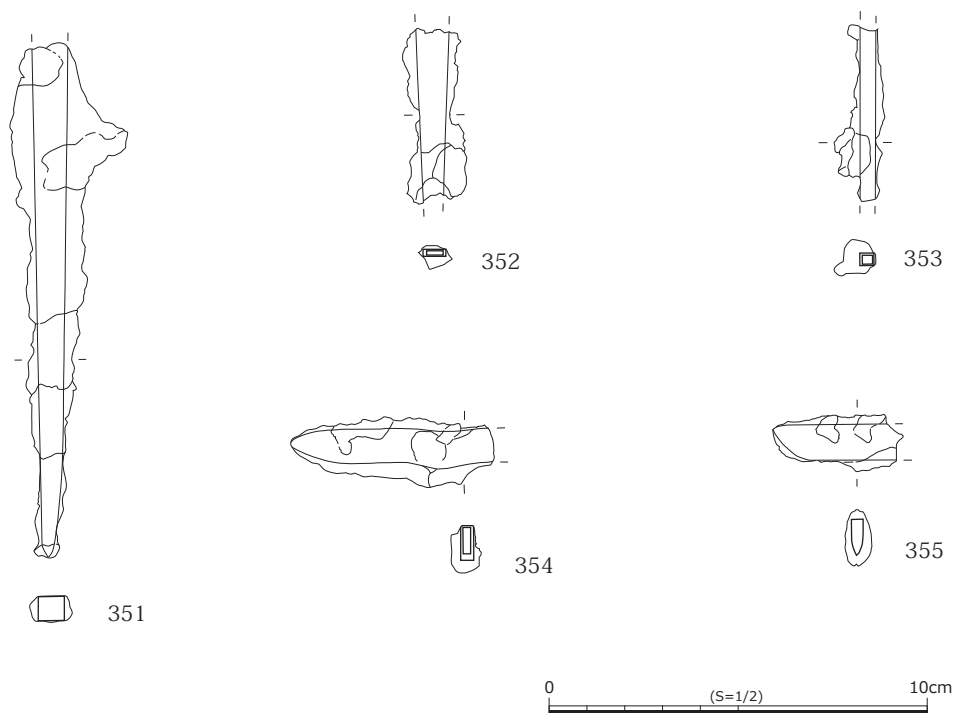


図 116 9層 出土遺物

274 は底径 9.4cmを測るもので、胴下部は丸みをもつ。底面には工具ナデの痕跡が残る。

275 は平底甕に断面三角形の脚部が貼り付くもので、断面で接合線が明瞭に確認できる。

276 は下方に底部が突出するもので、断面には粘土を付加した痕跡がみえる。

277 は壺の口縁部で、外反しながら立ち上がる。口縁部は丁寧なヨコナデが施される。口径は復元径で 12.0cmを測る。

278 は底面に円盤形の粘土を付加したものである。底径 5.5cmを測る。内外面とも黒斑がみられる。

279 は底部内面に強いナデがみられ、器壁が薄い。

280 は底面に円形の粘土を付加したもので、接合線が明瞭に残る。底面は著しく摩滅している。

281 は底径 3.6cmの壺で、外面は丁寧なナデ調整で平滑に仕上げている。

282 は椀形の高杯で、口径は復元径 16.2cmを測る。器壁は非常に薄い。脚部との接合部がわずかに残存している。内外面ともナデ調整である。

283 は高杯の脚部から杯部で、筒部は器壁が 2 cm以上あり、厚い。杯部は口縁部との接合部で剥落している。

284 は脚部高が 4.0cmと低めの高杯で、杯部はコップ形である。杯部外面には段を有する。内外面とも淡桃色に発色するが、外面の一部は火襻状に灰色に発色する。

285 は袋状に広がる高杯の脚部で、脚部径 15.4cm, 脚部高 9.0cmを測る。脚部中位に径 4～5 mmの穿孔を 5 孔もつ。焼成前穿孔で、外面からの穿孔である。砂粒を多く含みザラザラとした質感である。

286 は小型高杯の脚部で、脚部径 9.4cm, 脚部高 6.2cmを測る。脚接合部で欠損しており、接合時の粘土塊が一部残る。胎土は 285 と比して精良であり、砂粒等も細かい。内面には黒斑がみられる。

287 は甕の脚部で、強く踏ん張る形をとる。

288 は直線的に開き、口縁部近くで外反する鉢で、脚台を有する。脚台の形は断面三角形となる。  
289 は鉢の口縁部で胎土は精良である。外面には黒斑が見られる。口径は復元径で 11.0cm を測る。  
290 は甕あるいは鉢の脚部である。脚部は接合線が明瞭に残る。底部に少しずつ粘土を付加している。

291 は短く開く脚部で、胴下部は大きく開くと考えられる。

292 は上げ底状の脚部で、短く開く。内外面ともナデ調整である。

293 は底部に脚台状の粘土を貼り付けたもので、器面の歪みは大きい。ユビオサエが明瞭に残る。

294 は脚部内面に強いナデが明瞭に残る。

295 はくびれた平底になるもので、底径 5.8cm を測る。

296 は小型の鉢あるいは壺の底部で、径 3.4cm の平底をもつ。胴部は丸みをもって立ち上がる。

297 は丸底の鉢あるいは壺である。内外面とも淡桃色に発色する。

298 はコップ形の鉢で、底端部はシャープな作りである。

299 はほぼ完形の埴で、口径 10.0cm、器高 5.2cm を測る。底部は丸底状であるが、外底面中央に径 1.7cm の乳頭状突起をもつ。自立はしない。杯部は段を有する。内外面ともナデ調整である。

300 はほぼ完形の埴で、口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がる。立ち上がり部分には段を有する。口径 6.3cm、器高 5.3cm を測る。底部は丸底となる。口縁部外面には黒斑を有する。内外面とも淡桃色に発色するが、あまりザラつきはみられない。

301 は口縁部が大きくデフォルメされた埴で、口径 8.7cm、器高 7.8cm、口縁部の長さ 7.3cm を測る。口縁部の立ち上がりには段が見られ、底部は丸底となる。

302 は口縁部が受け口状となる埴で、口径 9.6cm、頸部径 7.6cm を測る。頸部は強く屈曲し、肩部内面には整形時のユビオサエが連続して残る。内外面とも淡桃色に発色し、器面全体はナデ調整で仕上げられる。

303 は猪口形の埴で、口縁部は内湾する。口唇部は先細りとなる。

304 は丸みをもった胴部をもつ埴で、胴部最大径 5.3cm を測る。底部は丸底となり、底部付近には径 2.5cm ほどの黒斑が見られる。

305 は胴部最大径 6.4cm を測る。頸部から口縁部は欠損しているが、おそらく緩やかに外反しながら長く伸びる口縁部をもつと考えられる。

306 はやや尖底気味の埴で、口縁部の立ち上がりには明瞭な段を有する。口縁部は内傾しながら立ち上がる。307 も同様である。

307 は胴部が大きく発達した埴で、楕円球状になる。胴部最大径は 14.6cm を測る。内面には接合線が複数確認できる。外面は淡桃色に発色し、黒斑がみられる。

308 は胴部の膨らみが緩やかな埴で、下膨れ状になる。底部は丸底と考えられる。胴部内面には接合線が明瞭に残る。

309 は平底の小型壺で、胴部から肩部にかけて接合線がみえる。

310 は平底の甕を模したミニチュア土器と考えられる。東原式によく見られる口縁部形態を有する。底径は 3.0cm を測る。

312 は口径 5.1cm、器高 3.3cm のミニチュア土器である。ユビオサエが明瞭に残り、底部から胴部にかけて黒斑が見られる。

313 もミニチュア土器で、口径 5.9cm である。淡桃色に発色する。

314 は胴部が丸みをもったミニチュア土器である。口縁部は欠損している。

315 は平底の甕を模したミニチュア土器で、底部は脚台状となる。底径 4.1cm を測る。

316 は鍋あるいは甗の把手である。胎土は他の甗と同じく砂粒を多く含むもので、模倣品と考えられる。

317 は土製勾玉で、孔から頂に放射状に 4 本の沈線が施される丁字頭勾玉である。胴部の上半で折損しており、尾は残っていない。頭部の孔は貫通していない。孔部分での幅は 1.4cm、厚さは 1.3cm を測り、頭部の断面形は楕円形を呈するが、胴部での幅は 0.9cm、厚さは 0.8cm を測り、断面形はほぼ円形となる。このため、頭部を扁平に近い形状に仕上げ、胴部にかけて急に細く作り出している。全体形は緩やかな曲線を描いている。頭部はにぶい橙色であり、胴部にかけて灰白色を呈する。

318 は須恵器甕口縁部片である。二重口縁であり、第一口縁の口唇部は斜めに立ち上がる。第二口縁の下部で破損しているが、第二口縁と頸部との境に、稜線を持つ三角形の突帯を一条巡らす。頸部は緩やかにすぼまる形状である。

319 は頁岩製磨製石鏃である。基部に若干の二次加工が施され、凹部が形成されている。

320 は頁岩製で加工痕のある剝片である。

321・322 は打製石斧の破片と考えられる。321 は基部であると考えられる。322 は頁岩製の扁平打製石斧片の可能性があるが、表面は自然面が残る。

323 は頁岩製打製石鏃未成品である。

324 は頁岩製の打製石器であり、鎌のような使用がされたと考えられ、下部に湾曲する刃部が見られる。

325 は砂岩製石器である。機種は不明である。

326・327・328・329・330・331・332・333・334 は礫石器である。326 は砂岩製の磨石、327 は安山岩敲石、328 は安山岩製磨石、329 は安山岩製敲石、330 は砂岩製磨石あるいは敲石と考えられる。331 は安山岩敲石、332 は安山岩磨石、333 は砂岩製とみられる磨石、334 は安山岩製の磨石である。いずれも、磨面と敲打痕を持ち合わせており、複数用途の石器と考えられる。

335 は砂岩製の台石の破片と考えられる。表裏面と一側面に磨面が設けられている。

336・337・338 は安山岩製の礫石器であり、336 は磨石、337・338 は凹石である。

339 はホルンフェルス製の台石であり、表面に茶褐色に変色した部分がある。

340・341・342・343・344 は砥石である。340・341 は小型であり、342 は細長い凹面が並行に 4 カ所確認でき、玉類の砥石と考えられる。343・344 は平坦な作りである。

345・346・347・348・349・350 は軽石製加工品である。345 は底面が平坦であることから、いわゆる「魚形軽石加工品」に類似する。346 は表面に横方向の太い線刻が施される。347 は表面に凹部が作り出されており「舟形軽石加工品」に類似する。348 は面取りが 4 面施され、349 は「魚形軽石加工品」に類似している。350 は表裏に面が作り出されている。

351, 352, 353 は鉄族基部である。351, 353 は断面が正方形を呈するが、352 はつぶれた長方形を呈する。残存長は、351 が 13.65cm、352 が 4.6cm、353 が 4.7cm を測り、断面の鉄部の幅は 351 が 0.6cm × 0.6cm、352 が 0.5cm × 0.2cm、353 が 0.4cm × 0.4cm を測る。

354 は刀子の切っ先にかけての破片であり、片刃であり、基部にかけて刃部が蛇行する。残存長 5.4cm を測り、刃幅が 1cm である。基部付近の断面形は長方形を呈し、高さ 0.9cm、幅 0.3cm を測る。355 は刀子の切っ先にかけての破片であり、刃部の断面形から片刃とわかる。残存長は 3.4cm、刃幅が 1cm である。

## 第5節 古代の遺物（図117～120，図版45～47）

V区に隣接するVI区においては、堀立柱建物が2棟検出されているが、V区の6層中においては、遺構が確認できていない。一方、出土遺物に関しては、成川式土器、土師器、須恵器等に加え、墨書土器、青銅製巡方が出土している。

356はバケツ状に口が開く甕で、口径は復元径28.1cmを測る。口縁部は丸みをもち、大きく歪む。口縁部下には絡縄突帯を有する。内外面とも細いミガキ調整で仕上げられる。

357は甕の脚部で、踏ん張るように開くものである。脚部径9.7cm、脚部高3.0cmである。粗雑なつくりであり、脚接合部には接合時のユビオサエが明瞭に残り、ナデ消してはいない。胴下部は黄土色に発色し、ススの付着も見られる。

358は上げ底状の脚部である。砂粒は古墳時代の成川式土器と比べて多くはない。器面はナデによって平滑に仕上げられる。

359は甕の底部から胴下部である。底部はわずかに上げ底となる。底端部は摩滅が著しい。内外面とも粗いミガキ調整がみられる。内面にはコゲが付着している。

360は平底の杯である。口径13.4cm、器高5.8cm、底径8.6cmを測る。胎土は成川式土器と同様で、砂粒を含むものであり、発色も橙色～黄土色である。須恵器や土師器の杯を模倣したものと考えられる。内外面とも丁寧なナデがみられる。

361は土師器杯の蓋で、円形つまみをもつ。天井部の器壁が1.5cmと非常に厚く、模倣品であると考えられる。

362は高台を有する土師器杯で、高台の接地面はM字にくぼむ。高台高は9mmで、緩やかに開く。外面には回転台成形の痕跡が残る。

363は高台を有する土師器杯で、器壁はやや厚い。高台内面には「府」あるいは「厨」と書かれた墨書が見える。

364は平底の土師器杯で、口縁部がわずかに外反する。口径12.8cm、器高4.2cm、底径8.6cmを測る。

365は平底の土師器杯で、底部は厚い。

366は平底の土師器杯で、口径17.8cm、器高5.0cm、底径10.0cmを測る。回転台成形である。

367はくの字に屈曲する口縁部をもつ土師器甕である。胴部内面は縦方向のケズリがみられる。

368はくの字に屈曲する口縁部をもつ土師器甕で、胴部は欠損しているが球胴形を呈すると考えられる。

369は土師器甕の口縁部片である。

370は土師器甕の口縁部で胴部内面には横方向のケズリがみられる。

371は成川式土器の甕で、内外面とも縦方向の粗いミガキ調整がみられる。口縁部下には一条の突帯を有する。

372は屈曲する口縁部をもち、頸部外面に一条の突帯を有する甕である。土師器甕の要素である形態をもち、成川式土器の要素である突帯をもつことから、「折衷型」に位置づけられてきた資料である（下山1995，松崎2015）。

373は須恵器の杯蓋で、端部は嘴状になる。おおよそ1/6が残存しており、復元で口径18.7cmを測る。

374は須恵器の杯蓋で、頂部には直径2.7cmのボタン状のつまみを有する。おおよそ1/3が残存しており、復元で口径17.3cmを測る。内外面とも褐色に発色し、胎土には直径2mmほどの黒色粒

を含む。

375 は須恵器の杯蓋で、端部はゆるやかに屈曲する。器面の歪みが大きい。

376 は高台を有する須恵器杯で、全体形は箱形を呈する。2/3 が残存している。口径 16.2cm、器高 7.4cm、底径 11.2cm を測る。高台内面はケズリが見られる。黄土色から青灰色に発色する。

377 は高台内面に墨書を有する須恵器杯である。墨書は不明である。

378 は小型の須恵器杯で、口縁部がゆるやかに外反する。器壁は薄い。高台の高さは 3mm と低い。

379 は台形の高台を有する須恵器杯で、高台には接合線が明瞭に残る。

380 は高台を有する須恵器杯で、1/8 が残存している。

381 は断面コの字の高台を有する須恵器杯で、高台部分のみが残存している。やや青黒く発色している。

382 は平底の須恵器杯で、箱形を呈する。口径 13.5cm、器高 3.0cm、底径 10.0cm を測る。

383 は須恵器杯で、おそらく平底を呈すると考えられる。1/8 が残存している。

384 は須恵器高杯で、ほぼ完形である。口径 15.2cm、器高 9.1cm、脚部径 9.6cm を図り、やや歪みをもつ。脚端部は嘴状を呈する。

385 は小型の須恵器壺で、肩部から胴部にかけて残存している。肩部は強く屈曲し、外面には凹線状の窪みが見られる。外面は暗褐色に発色し、内面は黄灰色である。肩部外面には自然釉の付着が見られる。

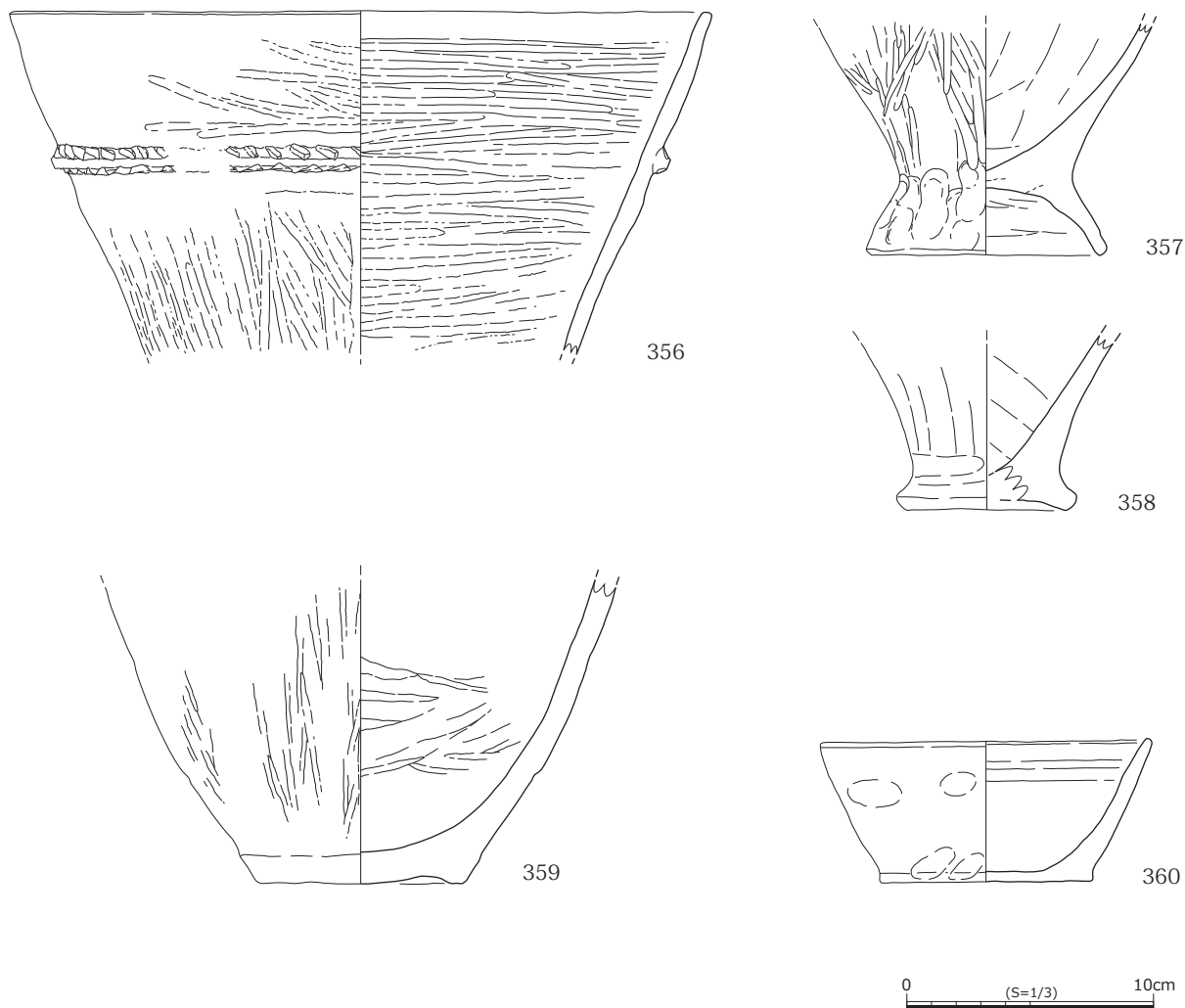


図 117 6 層 出土遺物



386 は砥石破片である。石材は細粒砂岩である。磨面が一部残る。

387 は鉄製の針の可能性のある鉄製品である。長さ 1.3cm, 鉄部幅 0.2cmを測り, 鉄部断面形は略円形を呈する。

388 は青銅製巡方である。復元幅約 5.2cm, 高さ 3.5cm, 厚さ 1.5cmの方形を呈する。明確な垂孔は確認できないが, 残存率の高い左半の上下隅に円形の膨らみがみられ, 垂孔跡の可能性も考えられる。また, 破片にも孔とみられる箇所がみられ, 本来四隅に孔があった可能性を考慮したい。

青銅製帯金具の存続期間に関しては, 腰帯の使用開始が慶雲 4 年 (707) 年であり, 銅製腰帯の使用禁止が弘仁元年(810)年であるため, その間である。なお, 延暦 15 年(796)から大同 2 年(807)の間一時的に禁止されていたため, 707 年から 796 年と 807 年から 810 年の期間とされている(西谷 1997)。したがって, 橋牟礼川遺跡出土の帯金具もほぼ 8 世紀の範疇か, 下っても 9 世紀初頭の遺物と考えられる。

#### 文献

西谷 正 1997 「九州出土の銚帯・石帯地名表」『人類史研究』第 9 号 人類史研究会

下山 寛 1995 「考古学からみた隼人の生活－「隼人」問題と展望－」新川登亀男(編)『西海と南島の生活・文化』pp.169-199 名著出版

松崎大嗣 2015 「成川式土器と古代土師器の「折衷型」－敷領遺跡十町地点出土の資料を中心に－」『Archaeology from the South II－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会

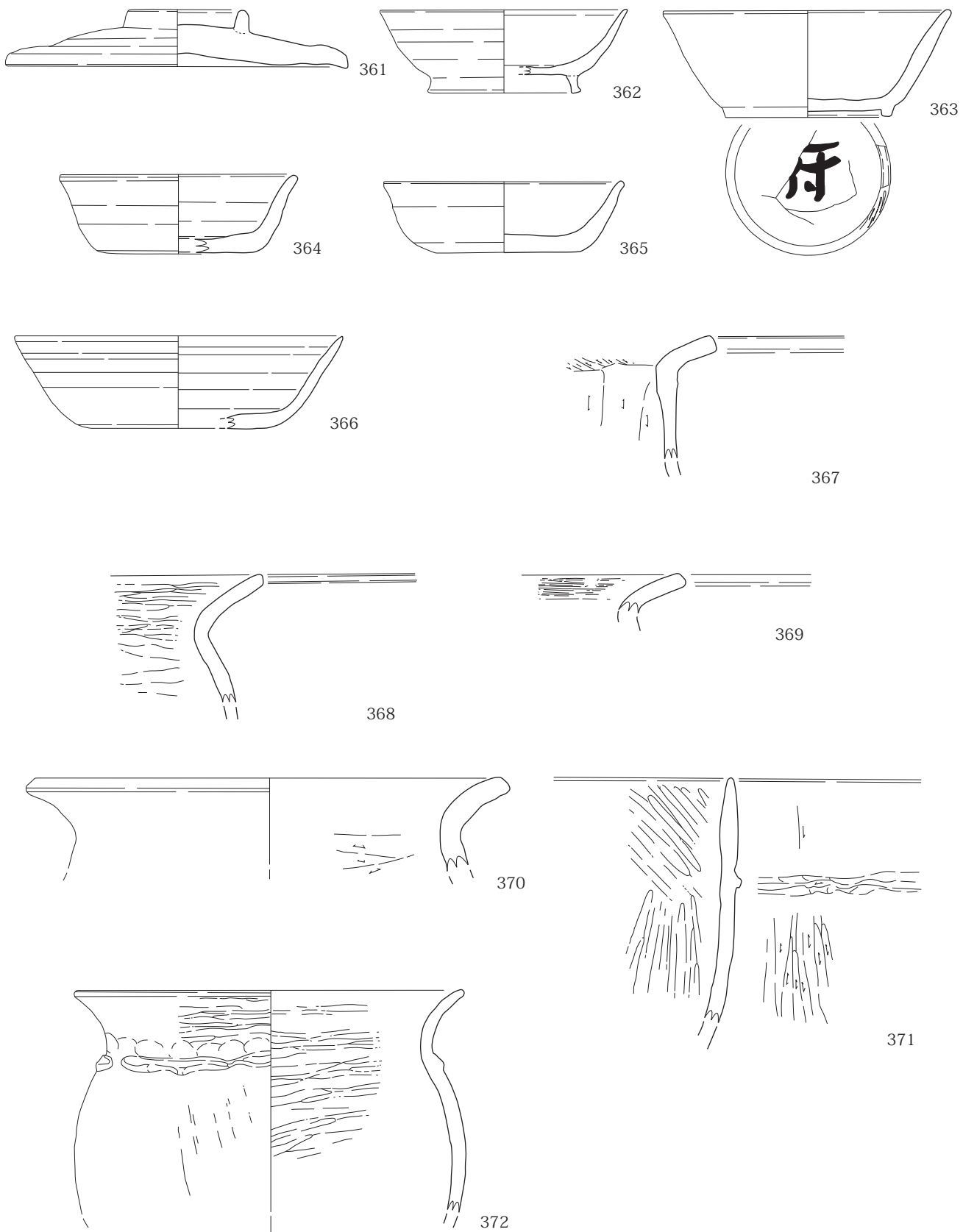
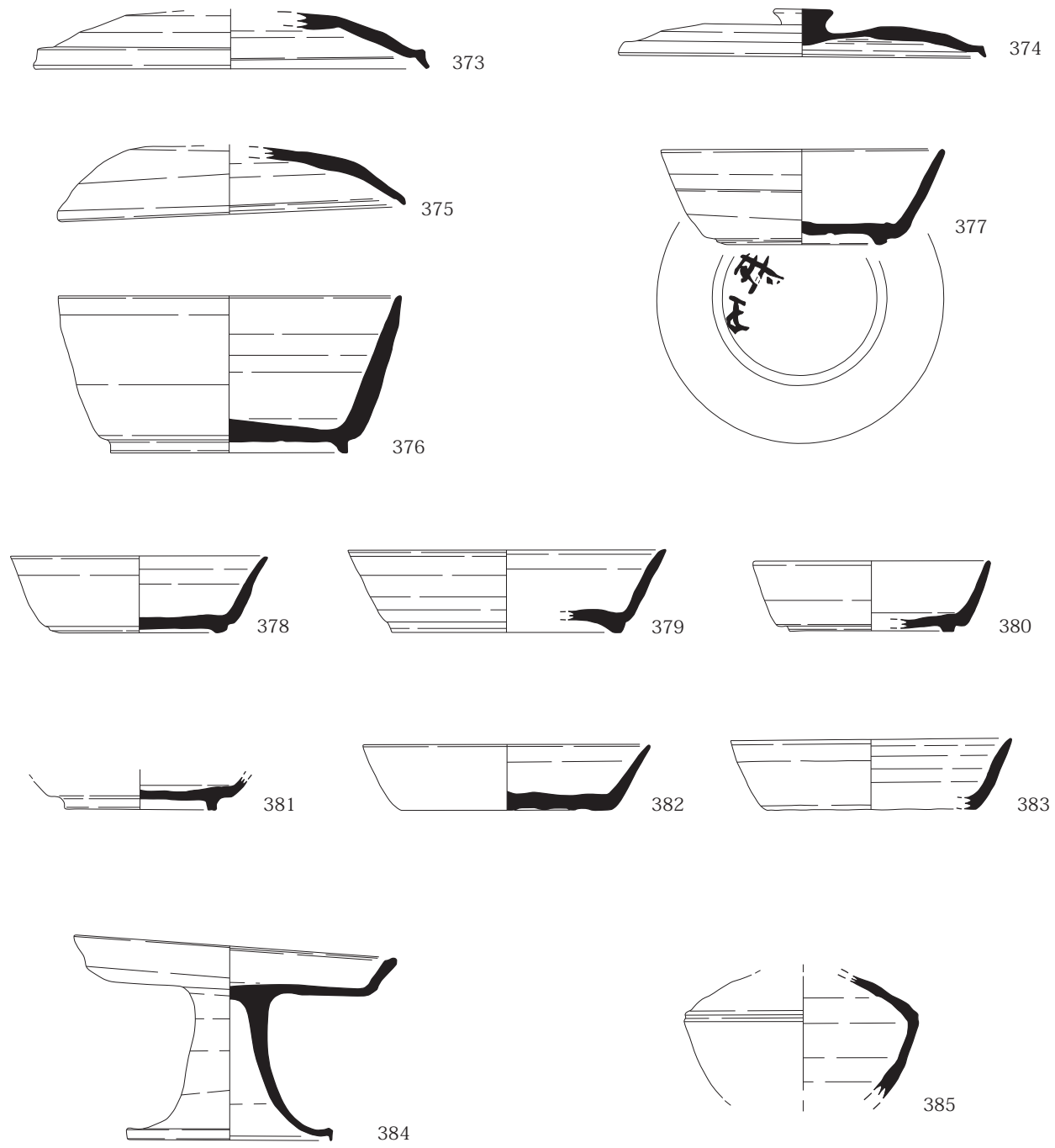


图 118 6 层 出土遗物



0 (S=1/3) 10cm

图 119 6 层 出土遗物

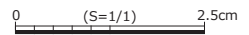
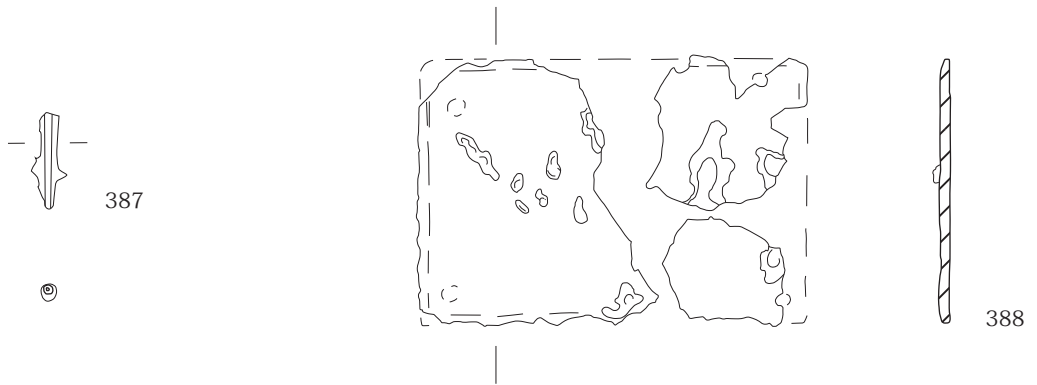
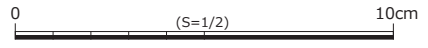
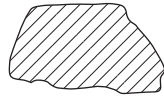
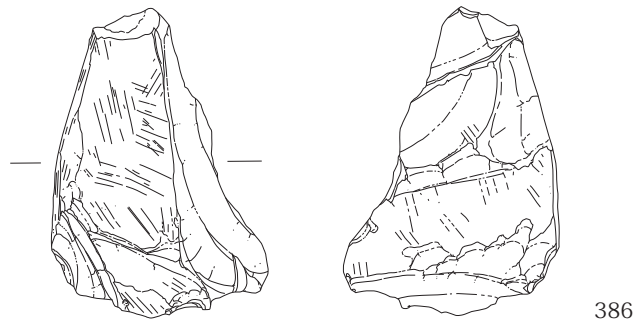


图 120 6 层 出土遗物

## 第6節 西暦874年の遺構と遺物

### (1) 倒壊建物跡(図121～125・図版12～13)

V区東側において検出された平地式建物である。主柱は2間3間の配置で10基あり、建物の法量(主柱芯々距離)は桁行4.5m、梁間3.1mを測る。南西から北東に向けた緩やかな斜面を整地し、平坦面を造り出した結果、建物東側と北側に段差が生じ、周囲の6層上面よりやや高くなっている。段差は最大で5cmメートル程度である。建物の床面は、全体に西から東に緩やかに傾いており、西面と東面で最大10cm程度の高低差がある。また、東側の床面に略長形状の凹部が形成されている。幅65cm、奥行最大25cmを測るこの凹部は、出入口のステップの可能性が考えられる。

建物の床面には、焼土が2カ所検出されたが、土坑状の炉跡は検出されていない。床面の出土遺物は甕形土器口縁部等である。

床面で検出された10基の主柱の法量は、主柱1が長軸12cm、短軸10cm、主柱2が長軸14cm、短軸11cm、主柱3が長軸14cm、短軸12cm、主柱4が長軸14cm、短軸14cm、主柱5が長軸10cm、短軸9cm、主柱6が長軸13cm、短軸11cm、主柱7が長軸13cm、短軸10cm、主柱8が長軸11cm、短軸10cm、主柱9が長軸10cm、短軸9cm、主柱10が長軸20cm、短軸19cmである。主柱3は先行トレンチで深さが50cm程度であることが確認されている。また、主柱10は梁間中央から北側にずれている。これは、該当部分には冒頭で述べた出入口と考えられる段を設けるためにずらしたことも考慮したい。ほとんどの主柱が径10数cmであり、例えばVI区の6層中で検出されたSB8の主柱穴が40～50cm程度であり、SB2の主柱穴が30～40cmである<sup>(1)</sup>ことと比較し、小型であることが言える。この傾向は、同時期の埋没建物である敷領遺跡3号・4号建物でもみられる傾向である。

主柱に加えて、2基のピットが出入口ステップ外側、建物の屋外で検出されている。Pit1は長軸23cm、短軸20cmを測り、Pit2は長軸16cm、短軸15cmを測る。これら2基のピットは配置からみて、建物の庇支え柱の可能性が考えられる。

建物南面に設置したベルトの層位断面状況では、建物外部の5層紫コラ一次堆積層と建物内部の二次堆積層との間に4cm～8cm程度の幅で土壌が5層上面に達して立ち上がっている箇所が2カ所見られる。この土壌は、土色が6層に類似しているが、噴火に伴って降下した固結火山灰層の表面に柱や壁等の木質のものが突き出していた場合、木質の腐食後に上位から土壌が流れ込み、生成された層序と判断できる。したがって、2カ所の土壌の立ち上がりは建物の壁等の痕跡とされている。特に、西側の腐植土部分の形状は、建物床面から弓なりに曲り立ち上がっているが、おそらく、建物の壁が歪曲しやすい部材で作られていたためとされる。

建物内に堆積した二次堆積層(土石流堆積物層)は、土色から大きく2分層できる。上位が暗紫色シルト質土層(層厚23cm)であり、下位が明オリーブ色シルト質土層(層厚17cm)となる。下位の明オリーブ色シルト質土層中には暗紫色シルト質土層の薄い間層が3枚含まれている。間層の下の2枚は2～3cm程度の厚さであり、上の1枚はブロック状を呈する。土色が異なる2層の2次堆積物の堆積状況は、指宿市内の敷領遺跡3号建物跡においても確認されている<sup>(2)</sup>。

橋牟礼川遺跡の倒壊建物内部の二次堆積層の状況は、敷領遺跡の埋没建物内部の二次堆積層の状況と酷似している。このことから、橋牟礼川遺跡においても同様に二度の土石流が発生し、屋内を埋没させたものと考えられる。

なお、倒壊建物外の東側では突帯が付く甕形土器No.389、脚台が付く甕形土器No.391・同口縁部片No.390、甕形土器突帯部分の破片No.392、小壺No.393、須恵器坏身No.394が出土している(図

124)。これらは、5層紫コラ火山灰二次堆積層中から出土している（図123）。須恵器坏身No.394と突帯を持つ甕形土器片No.392は紫コラ火山灰の一次堆積層上部に堆積している二次堆積層中からの出土であり、脚台が付く甕形土器No.391と口縁部No.390は密着しており、二次堆積層中の出土だが、その下部では紫コラ火山灰一次堆積層が抜けており、二次堆積層が6層上面に直接接している箇所での出土である。小壺No.393については一次堆積物層に封入された建物部材跡に接して出土しているが、小壺の直下は明オリブ色の紫コラ火山灰二次堆積物であった。こうした状況から、おそらくこれらの遺物は、建物内にあったものが、紫コラ火山灰堆積後に発生した土石流によって建物外に押し流され、埋没した可能性が高いと考えられる。

建物の東側の5層紫コラ一次堆積物層中では棒状の空洞が複数まとまって確認された。断面形状はいずれも円形であり、並ぶ方向が揃っていること、格子状の構造を成すことから、建物の倒壊により建物の部材あるいは部品が火山灰層中に封じ込められ、材の腐食後に火山灰中に空洞として残されたものと考えられている。部材の本数は15本であり、13本がほぼ同方向に並び、2本は直交に近い角度で交差していた。

空洞の断面は直径5～9cm程度の円形である。建物の桁行に平行した13本の部材の下部に、直交方向の部材痕跡が2本残っているが、1本は13本の部材と類似した径であり、もう1本は直径16cm程とみられる太い木材と考えられる。この状況は、縦棧の細い材を横棧の太い材と細い材が支える構造とみなせないこともない。そう考えると、この建物部材痕跡は建物を構成するまとまった構造物がある程度形状を保ったまま東方向に崩れ落ち、埋没したものと解釈できる。この構造物に関する調査者の記録では、屋根材である可能性と出入口の施設である可能性が考えられるとしている。前者については、平行に並

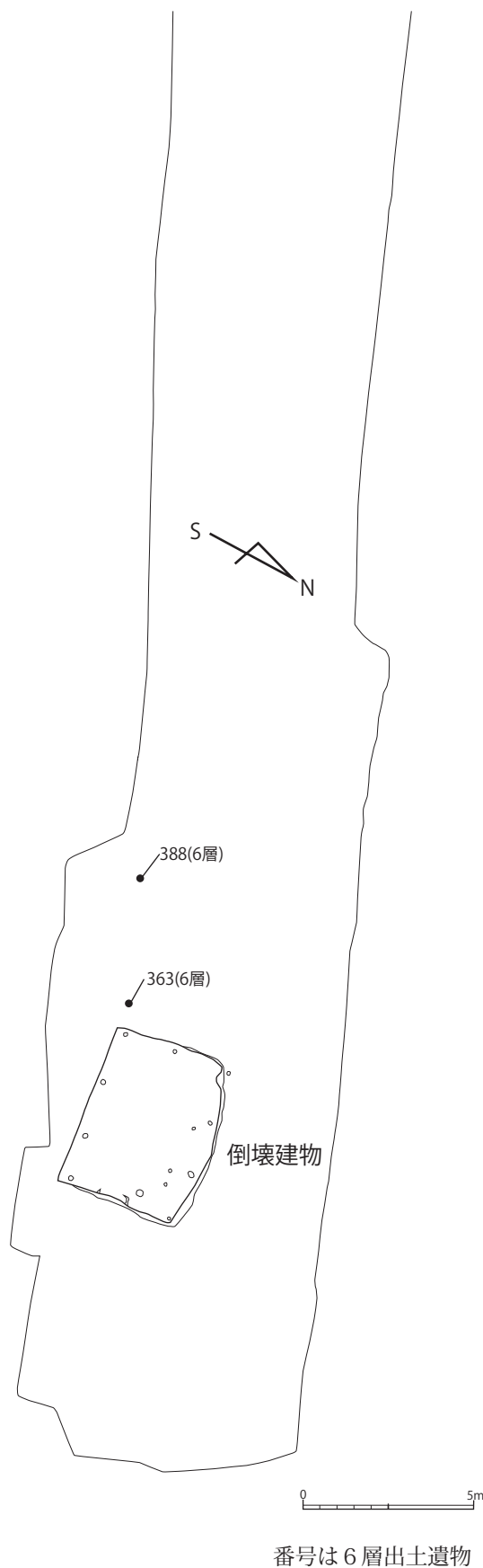


図121 倒壊建物検出位置図 (S=1/200)

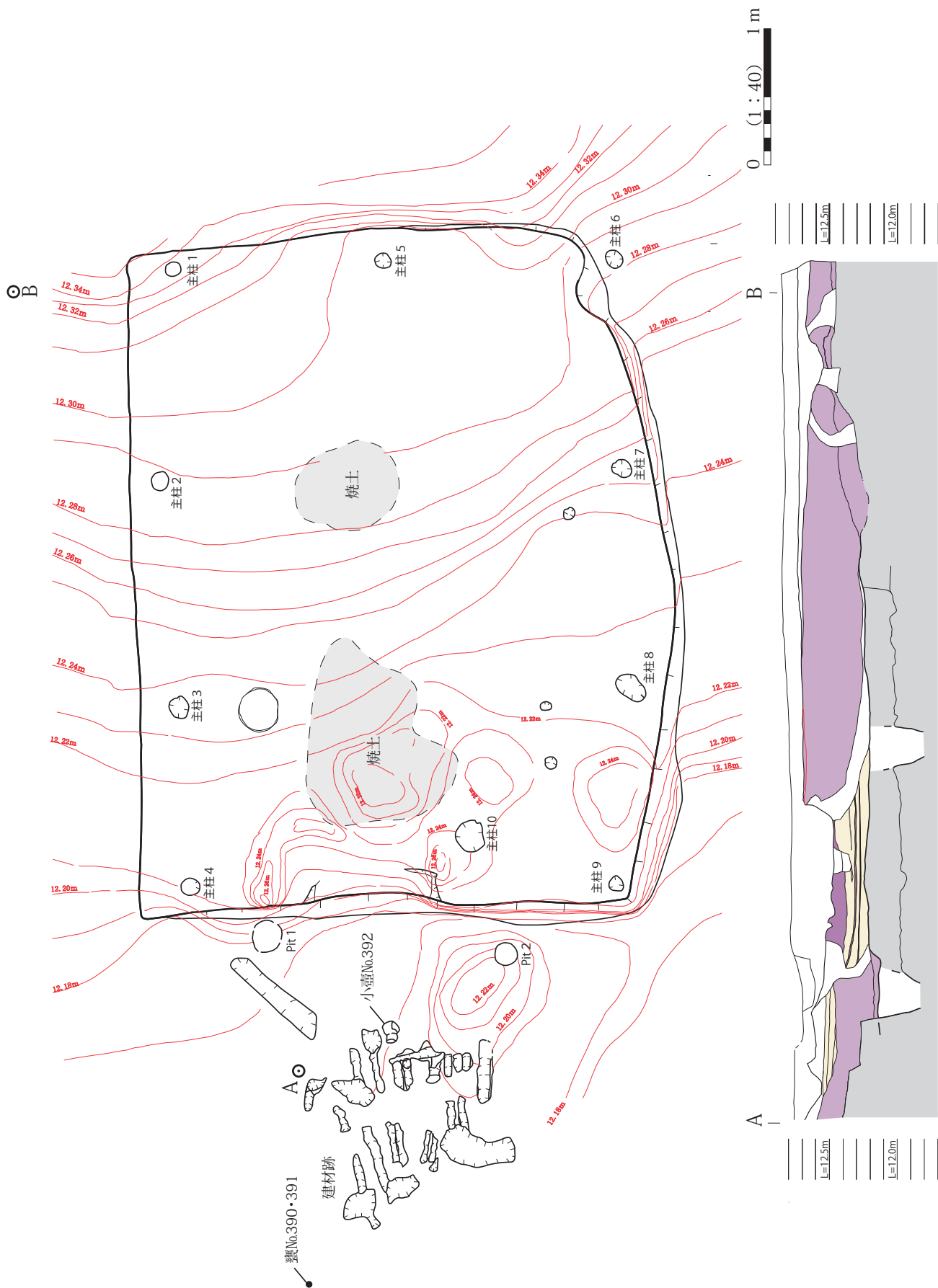


图 122 倒塌建物平面图・层位断面图 (S=1/40)

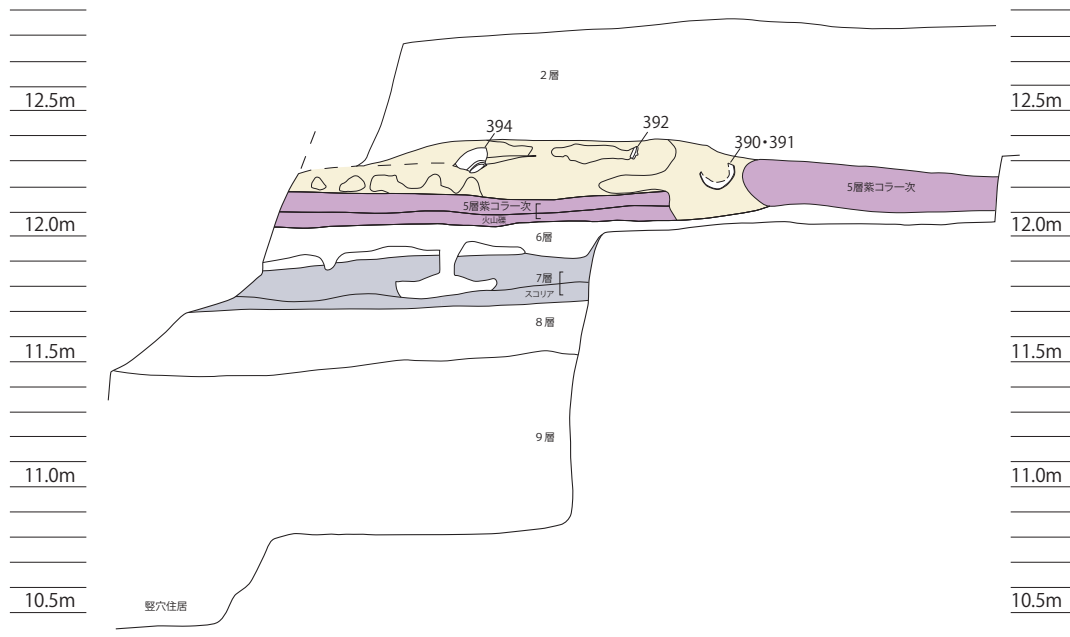


図 123 倒壊建物東側ベルト断面図 (S=1/30)

ぶ 13 本の材が垂木であり、かつ、建物が切妻屋根であると仮定すれば、垂木は建物長軸に直交するはずであるが、実際は平行しているため、屋根材ではなく出入口の施設の可能性があるとしている。だが、本建物が寄棟屋根の建物であれば、屋根の部材である可能性は棄却できない。しかしながら、部材痕跡の検出範囲は梁間に面して幅約 1 m 程度にすぎない。この建物の梁間は 3.1 m であり、寄棟屋根がまとまって崩れ落ちた痕跡であるとする、幅が狭すぎるのである。一方、出入口の施設、扉などと想定した場合、建物壁は曲がりやすい構造であった可能性が層序観察で指摘されており、その場合、板壁などの可能性は棄却される。そのような建物の扉のみが、部材痕跡が示すような木組下地の堅牢な構造物とは考えづらい。

建物の外側には固結した 5 層紫コラ火山灰一次堆積層がみられるが、建物内部には一次堆積層はみられず、2 次堆積層が入り込んでいる状況である。特に、火山灰降下の初期に堆積する火山礫は、建物内には見られず建物外は堆積しているため、建物の屋根によってこの進入が阻まれた結果と考えられる。このような状況から、建物は火山灰降下開始直後においてその場に立っており、土石流発生時点前には倒壊していたことが考えられる。

ところで、建物外部の西側では火山礫層→火山灰一次堆積層が確認できるが、東側では火山礫層が欠落する部分がある (図 123)。その奥行きは 1 m 程度である。このことは、倒壊建物の東面に火山礫層の堆積を妨げる構造物、例えば底などが造りつけられていた可能性を示唆していると考えられる。実際に、この部分は既述の部材痕跡の検出箇所隣接しており、この部材痕跡が庇の一部であったと考え、火山礫がみられないことと整合的である。

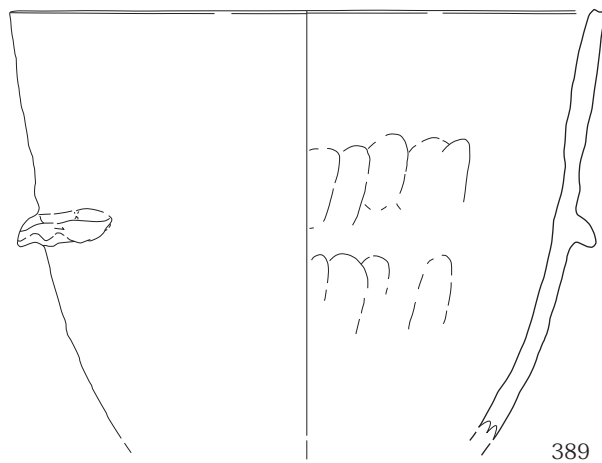
また、小壺 No. 393 が一次堆積物に埋没した建物部材に乗り上げた二次堆積物層中で出土したことから、本建物は開聞岳火山灰降灰によって倒壊し、その後の降雨により発生した土石流が西方向から流れてきて、建物内部の家財が東方向に流し出されたものと想定できる。

#### 出土遺物 (図 124・125, 図版 48～50)

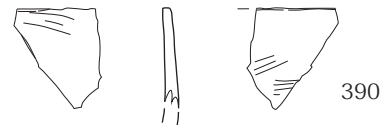
倒壊建物東側の 5 層紫コラ火山灰二次堆積層中出土の遺物について述べる。

甕形土器 No. 389 は、直立した口縁部を有し、口縁部下に一条の突帯を施すものである。突帯上下にはユビオサエが施され、突帯は下方に垂れたような形状を呈する。内外面は黒変しており、器

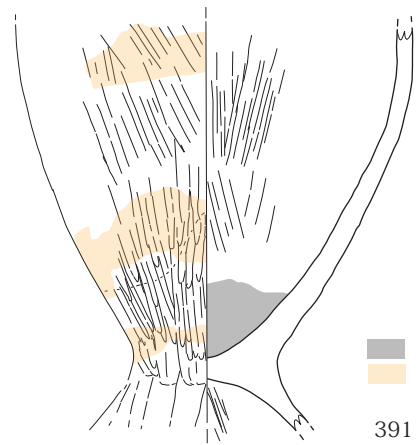




389

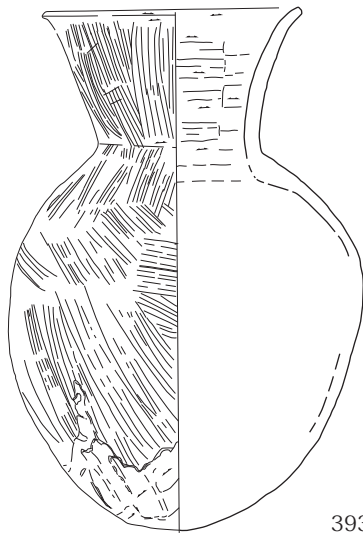


390

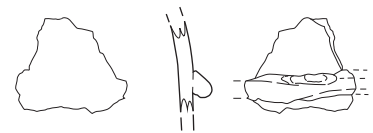


スス付着  
粘土付着

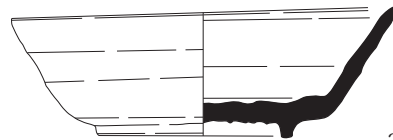
391



393



392



394

0 (S=1/3) 10cm

図 124 倒壊建物東側紫コラ火山灰二次堆積層中出土遺物



図 125 5層紫コラ2次堆積層中 出土遺物

壁は薄く、硬質である。また、器面の歪みが大きい。

No. 390 は甕形土器口縁部片である。やや内湾する形態である。内外面とも黒変しているが、特に外面には著しくコゲが付着している。口唇端に浅いくぼみがあり、沈線状にみえる。No. 391 と密着して出土しており、この口縁部である可能性がある。

No. 391 は、脚台が付く甕形土器胴部下半から脚台にかけての破片であり、口縁部は失われている。残存高さは 15.9cm、胴部最大径は 16.3cm である。全体的に歪んだ作りで、胴部の断面形状は楕円形を呈している。器壁は薄く、硬質であり、胴部下半には縦方向のミガキが確認できる。内外面ともに黒変しており、内面底部にはコゲがみられ、脚台内部もススが付着する。脚台上半の外面と脚台内部には被熱による白色化がみられる。また、外面下半と脚台上部には粘土が帯状に付着している。付着した粘土の状況は敷領遺跡 3 号建物の竈に乗っていた土師器鍋のものと類似している。

No. 392 は突帯を持つ甕形土器の突帯部分の破片である。突帯は上面にユビオサエが残っており、突帯断面形は下に垂れた形状である。内外とも黒変している特徴は、上記の甕形土器と同様である。

No. 393 は成川式土器に類似した小壺の完形品である。倒壊建物東側の紫コラ火山灰一次堆積物層中で検出された建物部材痕に乗り上げた二次堆積物層中から出土した。高さ 20.8cm、胴部径 14.0cm を測り、口縁部復元径は 10.2cm である。胴部は歪んでおり、最大径の位置が左右でずれるとともに、丸底の底部も中心線からずれている。全体に「指宿色」とされるピンクがかかった色調である。外面は工具による調整痕がよく残り、底部付近には粘土が厚く残っている。

No. 394 は須恵器坏身の完全品である。口径 14.9cm、底部径 10.0cm、高さ 5cm であり、口縁部はハの字に開く。高台は底部のやや内側に付き、短く直立する。口縁部の外反具合は、第 6 層中出土の須恵器より大きくなっている。

上記の、小型の甕形土器に脚台がついた No. 391 は内面が焦げで真っ黒であり、外面にもスが多量に付着している。硬質な作りであるが、雑な作りであり、敷領遺跡 3 号出土の成川式土器の「敷領式」と極めて類似している。また、甕形土器 No. 389 や甕形土器突帯部分の破片 No. 392 も極めて類似したものである。これらは成川式土器の「敷領式」の範疇に入るものと考えられる。松崎大嗣氏は「敷領式」を成川式土器で最新の様式としている。特徴として、①甕の単一形式、②脚台を有する、③器壁が薄く、硬質、④器面の歪みが大きい等としている<sup>(3)</sup>。No. 389 も松崎氏の②～④と合致している。ただ、小壺 No. 393 は同様に一次火山灰層に乗り上げた明オリーブ色の二次堆積物層からの出土であるとともに、完全品であり、かつ建物内部に最も近接した箇所からの出土である。このことは、この遺物が下位包含層の所産とは考え難いこと、本建物に帰属していた可能性が高いことを示している。

これらのほかに、紫コラ二次堆積層中出土と考えられる遺物の出土がある (図 125)。No. 395 は

小型の須恵器長頸壺の胴部破片である。復元胴部径は11cmとなる。ロクロ成型であり、胴部下半に一条の連続刻み文がある。外面には自然釉がみられる。

No. 396 は須恵器破片である。器種は不明、内面に青海波文がみられる。

註

(1) 指宿市教育委員会 2018 『指宿駅西部土地地区画整理に伴う発掘調査報告書 Vol. 2 橋牟礼川遺跡 (VI区・VII区)』

(2) 指宿市教育委員会 2015 『敷領遺跡・松尾城跡Ⅲ・その他市内遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第55集

(3) 松崎 大嗣 2021 「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学研究』18

## (2) 畝跡 (図8・9)

V区の6層上面において、畝遺構が検出されていることが、写真で確認できるが、平面形状の記録がなされていないことから、層位断面図で確認できた内容をここに記述する。

北壁・南壁において、5層紫コラ火山灰層直下の6層上面が畝状に上下する箇所が複数確認されている(図8・9)。南壁では、最西端から畝頭と考えられる凸部が6か所あり、その間に畝間溝と考えられる凹部が6か所確認できる。畝頭を①～⑥と呼称すると、各畝間溝の幅は畝頭①で1.2m+ $\alpha$ 、畝頭②で1.7m、畝頭③で1.4m、畝頭④で1.25m、畝頭⑤で1.2m、畝頭⑥で1.4mを測る。一方、北壁では調査区中央付近で畝頭と考えられる凸部が2か所、畝間溝と考えられる凹部は2か所確認できる。この西隣は近現代の溝の造営により削平されているため、全形は不明である。北壁の畝頭を⑦～⑧と呼称する。各畝間溝の幅は畝頭⑦が1m、畝頭⑧が0.8mを測る。畝頭①～⑥と畝頭⑦・⑧とは直線距離で18m程度である。I区で検出された畝跡では畝長が最大6.5m程度であるとともに、北壁と南壁で畝間溝間幅が異なっていることから、同一畝が連続したものではないと考えられる。

## (3) 道跡

南壁断面では、畝頭⑥から3mほど東側では畝遺構がなく、6層上面が急に高くなった直後に40cm程度緩やかに落ち込み、再びやや高まる形状を呈する。二つの高まりの幅は3.5m程度である。このような形状から、高まりの間の窪んだ部分は道跡である可能性が考えられる。これまで橋牟礼川遺跡の6層上面で検出されたこのような遺構の例として、平成2・3年度下水道敷設に伴う調査区④トレンチと隣接するXI区において大型の道跡が検出されている。6層上面が3.5m程度の幅で窪んだ底部を道としているが、東側立ち上がり部分の6層上面が土塁状に高まる部分が検出されている<sup>(1)</sup>。道は北西方向に直線的に伸びていると考えられている。道跡上端の間隔は3.8mを越え、道幅は3m程度と考えられており、上記の6層上面の高まり幅とサイズにおいて類似している。下水道敷設に伴う調査区④及びXI区で検出された道跡とV区の道跡とは約60m程度離れているが、方向的に連続する可能性が高いと考える。そうであるとすると、北西方向に伸びる直線的な道が6層上面に造営されていたことになる。

註

(1) 指宿市教育委員会 2016 『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第56集

## 第4章 分析

### 第1節 古墳時代竪穴建物

ここでは、53基検出された竪穴建物について、平面プラン、法量、柱穴数、壁帯土坑、相互の切り合い関係について分析する。なお、検出状況から建物の可能性が低いと考えられるものも含まれていることもあらかじめ断っておく。

(平面プラン)

V区の53基について、平面プランを「方形プラン」、「円形プラン」、「方形+円形プラン」、「その他」、「不明」に分類し、種別毎にその数量をカウントした(表3)。なお、「その他」については、S I 42の半分が方形で残り半分がすぼまった形状である不整形のものと推定されるものを入れた。また、不明に関しては、切り合いが著しいため平面プランが判明していないものを入れた。

分類別の数量とパーセンテージは、

「方形プラン」	40基 75.5%
「円形プラン」	3基 5.7%
「方形+円形プラン」	2基 3.8%
「その他」	1基 1.9%
「不明」	7基 13.2%

である。

なお、上記の方形プランのうち、S I 21は方形プランで竪穴コーナーに張り出しを有する唯一の形状であるが方形プランに含めた。円形プランのうち、S I 10とS I 49の2基は張り出しを有するが円形に含めた。また、上記は橋牟礼川遺跡VI区・VII区の報告書<sup>(1)</sup>と数量が異なっているが、今回昭和63年当時の現場図面の記載を入念に確認した結果、床面のみの検出でも建物として記録されたものを含めたため、数が50基から53基に増加した。また、平面プランに関しても再確認し数量の異同が生じている。

一方、西側に接するVI区における平面プラン種別毎の数量と比率については、以下ようになる。

「方形プラン」	22基 84.6%
「円形プラン」	0基 0.0%
「方形+円形プラン」	0基 0.0%
「その他」	2基 7.7%
「不明」	2基 7.7%

V区とVI区においては、竪穴建物平面プランは8割程度が方形プランである。不明を除くとほぼ9割が方形プランとなる。このため、古墳時代における一般的な建物形態は方形プランのものであることがいえる。一方、V区とVI区との大きな違いは、V区には「円形プラン」、「方形+円形プラン」があるが、VI区にはこれらが全く見られないことである。2つの調査区は東西に接続しており、同一調査区といえる範囲となっている。調査範囲は略南北長約85mであることから、同一集落範囲であることが考えられる。この状況において、上記のような相違が発生することに関しては、以下のような原因が考えられる。つまり、「円形プラン」、「方形+円形プラン」に関しては、

- A 本来数量が少ない
- B 時期が異なる、または時期が限定されている

Aに関しては、

	長軸	短軸	平面形	主柱数	付帯遺構	カーボン範囲
SI-1	3.4		方		土坑2(1基が火処)、壁帯土坑1	有
SI1	?		方?			
SI2	2+ $\alpha$		方		土坑1	
SI3	5.7	4.5+ $\alpha$	方+円	4	床面に土坑1(埋土にC)、張り出しに土坑3	有
SI4	2.5+ $\alpha$		方			
SI5	3.3	1.4+ $\alpha$	方			
SI6	0.9+ $\alpha$		方			
SI7	1+ $\alpha$	0.3+ $\alpha$	方?			
SI8	4.9+ $\alpha$	4.2	方?	4?6?	ピット8、土坑1、壁帯溝	有
SI9	3.8	2+ $\alpha$	方	?	ピット21	
SI10	2.6+ $\alpha$	2.4+ $\alpha$	円+張出		間仕切り状遺構、壁帯溝、張り出し、土坑1	
SI11	?	?	不明			
SI12	3.9		円	2?	ピット6、土坑1	
SI13	2.1+ $\alpha$	1+ $\alpha$	方			
SI14	3.6	3+ $\alpha$	方		鍛冶遺構(壁帯土坑)	
SI15	2.5+ $\alpha$		方	2	ピット2、土坑1(壁帯土坑)	
SI16	1.7+ $\alpha$	1.5+ $\alpha$	方			
SI17	2.2	2.1	方		土坑2(壁帯土坑1)	
SI18	?	?	不明			
SI19	?	?	不明		ピット3、土坑7?	
SI20	2.5+ $\alpha$		方			
SI21	4.3	4	方+張出	3	炉跡1、壁帯土坑1、ピット9	
SI22	2.5	1.2+ $\alpha$	方		土坑2(壁帯土坑1)、ピット3	
SI23	2.4	?	方?			
SI24	2.1+ $\alpha$	1.6+ $\alpha$	方		ピット1	
SI25	1.8+ $\alpha$	1.2+ $\alpha$	方			
SI26	3.6	2.9+ $\alpha$	方	2	炉跡1、土坑3、ピット5	有
SI27	3.1	1.7+ $\alpha$	方		ピット2	
SI28	?	?	不明	4?	土坑3、ピット11、壁帯土坑?1	
SI29	2.6	1.6+ $\alpha$	方			
SI30	?	?	不明			
SI31	2.1		方?		張り出し(土坑1付帯)	
SI32	1.2+ $\alpha$	0.5+ $\alpha$	方?		土坑1	
SI33	0.85+ $\alpha$		方?		用途不明の高まり	
SI34	3.6	3.48	方		土坑2、ピット3、ベッド状遺構1	有
SI35	1.3+ $\alpha$	0.9+ $\alpha$	方?			
SI36	1.6+ $\alpha$		方?		ピット1	有
SI37	?	?	不明		ピット3	
SI38	1.7+ $\alpha$		方?		ピット3	有
SI39	3.5	3+ $\alpha$	方		ピット1	有
SI40	2.7+ $\alpha$		方		ピット1	
SI41	3.2	3.1	方	1	ピット4、壁帯土坑1、壁帯溝	有
SI42	3.4	2.9+ $\alpha$	その他	2	ピット5	有
SI43	?	?	方?		ピット2	
SI44	1.3+ $\alpha$	0.3+ $\alpha$	方		ピット1	
SI45	1+ $\alpha$	0.4+ $\alpha$	方			
SI46	3.4	2.25+ $\alpha$	方		ピット1、壁帯土坑1	
SI47	1+ $\alpha$	0.4+ $\alpha$	方			
SI48	4.5		方+円?	3	ピット14、張り出し、壁帯溝	
SI49	2.9+ $\alpha$		円+張出		ピット1、張り出し	
SI50	1.9+ $\alpha$		方?		ピット2	
SI51	1.65+ $\alpha$		方?			
SI52	?	?	不明			

表3 古墳時代竪穴建物属性集成表

- ・方形プランとは用途が異なっており、多数建設する必要性が少ない
- ・方形プランが本地域において一般的であった中で、他地域から伝来、あるいは搬入された型式であるため、数量が少ない

の2種が考えられる。

Bに関しては、

- ・南丹波遺跡で検出された「花卉型建物」の事例のように、造営時期が限定されていた。
- ・該当時期における集落規模が小さかったため、多数残されなかった

といったものが考えられる。

なお、「円形プラン」、「方形+円形プラン」のそれぞれの数量が少ない原因は、相互に同じであるとは限らない。特に、「方形+円形プラン」の竪穴建物に関しては、指宿市内の宮ノ前遺跡の事例も含め、単純な方形プランと比較して数量が少ない傾向があることが指摘されている。さらに、このプランの建物はV区にはあり、VI区にないという相違があり、これについて時期的な要因が指摘されている<sup>(2)</sup>。

一方、円形プランに関しては、古墳時代前期の「花卉型建物」は、基本的なプランが円形であること、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡において奈良・平安時代の円形建物の事例があることなどから、時期に関わらず造営されるプランである。このように、両形態の建物に関しては、それぞれに検討する必要があると考えられる。

註

(1) 指宿市教育委員会 2018 『橋牟礼川遺跡（VI区・VII区）』

(2) 指宿市教育委員会 2016 「第3項 古墳時代の調査のまとめ」『橋牟礼川遺跡総括報告書』

### (建物の規模)

V区で検出された竪穴建物 53 基のうち、竪穴法量が少なくとも一辺、または直径が判明しているものは、S I - 1・S I 3・S I 5・S I 8・S I 9・S I 12・S I 14・S I 17・S I 21・S I 22・S I 23・S I 26・S I 27・S I 29・S I 31・S I 34・S I 39・S I 40・S I 41・S I 42・S I 46・S I 48 の 22 基である。このうち、不整形の S I 42 を除く 21 基に関して、その法量について検討する。なお、竪穴のほぼ全形が残存しており、その法量に関しても言及できる例は、S I 12・S I 17・S I 34 のわずか 3 基に過ぎない。このため、方形プラン一辺の法量が判明している事例に関しても、以下のような方法を用いて分析を実施する。

方形プランの建物については、判明している一辺の法量に仮に 0.92 を乗し、不明であるもう 1 辺の法量を推計し、想定面積を算出する。この 0.92 に関しては、鹿児島県内の古墳時代竪穴建物のうち、V区の竪穴建物の帰属時期を考慮し、古墳時代前期を除く時期の、法量が判明している方形竪穴建物 125 基の長辺と短辺の縦横比平均値を算出したものである<sup>(1)</sup>。

図 126 は、方形竪穴建物の実測面積に想定面積を加え昇順に表記したグラフである。グラフからは、方形竪穴建物の床面積は約 4 m<sup>2</sup>～約 7 m<sup>2</sup>の A グループ、約 9 m<sup>2</sup>～約 13 m<sup>2</sup>の B グループ、それ以上の面積の C グループに分かれることがいえる。方形プラン最大の約 30 m<sup>2</sup>の S I 3 は方形+円形プランである。2 番目の S I 8 は他の方形プランではあるが、唯一の長方形プランの建物である。

次に、円形プランは 3 基である。このうち、S I 12 は直径 3.9 m であり、床面積としては方形プランの B グループと同等の面積である。

一方、S I 48は、円形堅穴の掘方に主柱が重複することから、方形+円形プランとした。円形堅穴部分の直径は4.5 mであり、この部分だけでも他の円形堅穴中最大規模である。同じ方形+円形プランであるS I 3は、円形部分が3.1 m前後であるから、S I 48は1.4倍の法量である。S I 48の堅穴がS I 3の方形と円形堅穴の比率と同縮尺であるとする、S I 48の方形部分は一辺8.2 m程度の巨大な方形建物であることになる。そこまででないにしても、例えば円形堅穴部分の外側に50cm幅の方形堅穴が伴うと仮定しても、S I 3よりもやや大型となり、方形堅穴の床面積のCグループに分類されることになる。

また、S I 49は調査区外に大半が出ているが、円形堅穴部分は、S I 48と同じ円形堅穴に張り出しを持つタイプであり、確認できた部分がS I 48と同程度の規模であることが想定できる。おそらく、S I 49も方形+円形の平面プランを呈していたことが推定される。したがって、S I 49もS I 48同様に大型の建物であった可能性がある。

建物の規模に関する分析からは、V区の堅穴建物は、床面積が約4㎡～約7㎡のAグループ（小型）、約9㎡～約13㎡のBグループ（中型）、それ以上の面積のCグループ（大型）の3分類できた。方形プラン以外の形態の建物に関しても、円形プランのS I 12はBグループに、方形+円形プランのS I 48とS I 49はCグループに分類された。大型のCグループには、長方形プランのS I 8も含まれている。

ここで、Cグループの5基（S I 3・S I 8・S I 21・S I 48・S I 49）の調査区内での所在箇所についてみる。S I 3・S I 8は調査区西隅に位置し、（新）S I 8→S I 3（旧）の切り合い関係にある。S I 21は調査区中央に1基、S I 48・S I 49は調査区東隅に位置し、（新）S I 48→S I 49（旧）切り合い関係にある。注意したいのは、Cグループ5基のうち、4基が西と東に分れ、切り合い関係にあることである。後段で堅穴建物の切り合い関係と造営順に関して触れるから、ここでは詳述は避けるが、Cグループの大型建物は、その造営位置について何らかの意図が働いていた可能性がうかがえるのではないだろうか。

#### （柱穴数）

V区の堅穴建物53基のうち、主柱穴数が確認あるいは推定できるものは、S I 9・S I 12・S I 15・S I 21・S I 26・S I 28・S I 41・S I 42・S I 48の9例である。主柱穴数は、1穴、2穴、4穴等であり、2穴のものが4例、1穴が1例、4穴が3例となる。なお、4穴のものにはS I 9のように4穴もしくは6穴の可能性を検討すべき事例を含めている。

なお、主柱穴数については、堅穴建物の床面積が大きいほど数が増えるという大まかな傾向が窺え、「方形+円

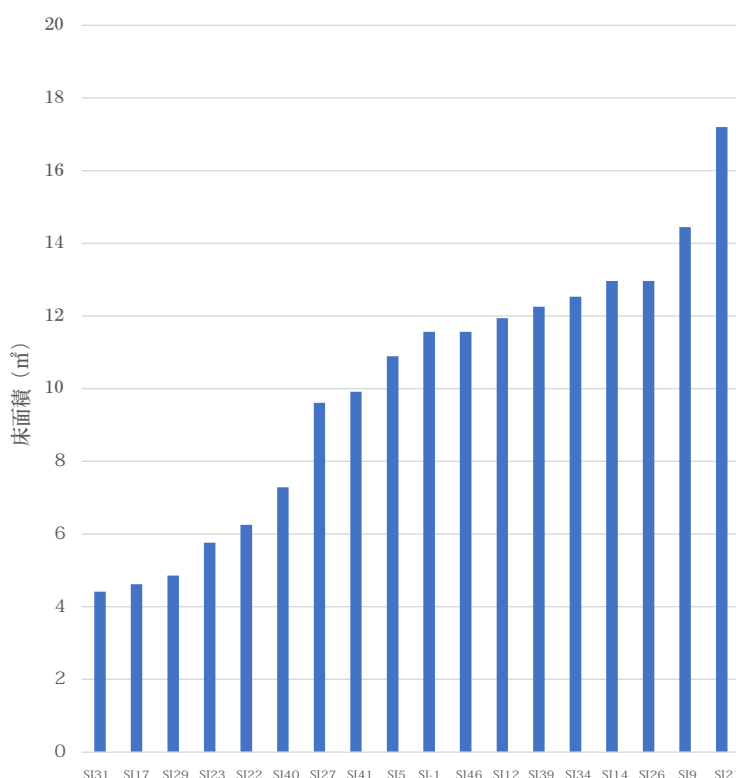


図 126 方形堅穴建物面積比較グラフ

形プラン」と考えられるS I 3とS I 48のように床面積が特に大きいものに関しては、3主柱と4主柱となっている。また、S I 8やS I 21のように方形ではあるが、床面積が方形プランの中でずぬけて大きくなると、主柱穴数が同様に3穴以上となることを示している。このことに関しては、従来も指摘されているように、部材長の制約等から床面積を大きくするためには、主柱数を増やし、中心軸型から平行枠型に変更する必要性からと考えられる。

#### (壁帯土坑と張り出し)

壁帯土坑はS I - 1・S I 14・S I 15・S I 17・S I 21・S I 22・S I 28・S I 41・S I 46の9例で検出されている。壁帯土坑のうち、性格が確認できるのは、台石が入っており、床面直上で鉄滓が出土しているS I 14であり、鍛冶関連遺構としている。規模は、幅90cm、奥行53cm、深さ15cmの楕円形で、断面形状は浅いボール状を呈する。この壁帯土坑が最大規模に近く、他の7例はこれより小型で、S I - 1が幅45cm、奥行35cm、S I 14が幅90cm、奥行53cm、S I 15が幅75cm+ $\alpha$ 、奥行60cm、S I 17が幅50cm、奥行46cm、S I 21が幅55cm、奥行65cm、S I 22が幅60cm、奥行40cm、S I 28が幅55cm、残存する奥行は23cm、S I 41が幅95cm、奥行70cmで、S I 46が幅85cm、奥行65cmとなる。基本的には奥行に対して幅が広い形状のものが多く、S I 21のみが奥行が長くなる。平面形状は、楕円形・逆台形・隅丸方形・三角形・つぶれた円形など、様々である。出土遺物は、S I 14を除くと、S I 46で軽石製加工品の出土があるが、性格を示すようなものはほぼない。床面にカーボン等の集積も記録されていない。何らかの作業用スペースと考えられるが、不明確である。

一方、張り出しを有する例は、S I 3・S I 10・S I 21・S I 29・S I 31・S I 42・S I 48・S I 49の8例である。円形竪穴に付帯するものは、S I 3・S I 10・S I 48・S I 49であり、方形竪穴に付帯するものは、S I 21・S I 29・S I 31である。

円形竪穴に付帯するものはいずれも幅より奥行が長く、舌状や長形状を呈する。土坑が伴い、S I 49で蓋形土器完形品が出土したように遺物が集中して出土している。また、S I 49の床面には木炭が層をなしている。

方形竪穴に付帯するものでは、S I 21・S I 42はコーナー部分に付帯するが、S I 29・S I 31は掘方ライン中央に付帯する。方形竪穴に付帯するものでは、S I 21を除き、幅が60cm～1mと幅が奥行の2倍程度であるという特徴がある。方形竪穴に伴う幅の広い張り出しは、底部が床面と同様の高さであるものがあり、その形状からは建物の出入り口を想定できる。一方、円形竪穴S I 3・S I 10・S I 48・S I 49の4基と方形竪穴S I 21に伴う張り出しに関しては、S I 3・S I 10が床面より張り出し底部が高く、残りは床面より張り出し底部が低い。張り出しの用途に関しては、S I 49では底部に木炭が堆積していることが確認されているが、床面に炉が検出されている建物においては、炉の外側の床面にカーボンが広がっている事例が見受けられる。これに対して、S I 49の張り出しに接した床面ではそのような状況は確認されていないから、張り出しが炉として使用された結果、底面に木炭層が形成されたと断定しがたい。また、木炭層の上位からは蓋型土器の完形品や石製品などが出土するなど、物置などの用途も考慮する必要がある。

#### (切り合い関係)

V区では竪穴建物の切り合いが著しく、かつ、それらの建物に関しては、層位断面や出土遺物から造営時期の差異を明確にできないことから、平面的な切り合い関係から新旧関係を分析した。分析は次の視点から行った。





視点A：切られている建物が切っている建物よりも一段階古い建物である

視点B：他の建物を切って造営されているが、他の建物から切られない建物は、切り合い関係にある建物群の中で最も新しい時期に造営された

視点C：竪穴同士の距離が近く、垂木の配置や屋根の取り合い等から、同時期に存在したと考えるのは無理なものについては、相互に新旧関係がある

なお、上記の「一段階古い」がどの程度の時間的距離かは不明であること。また、例えばA・B・Cの3基について、AをBとCが切っていた場合、BとCの新旧関係はそれら以外の遺構との切り合い関係や距離関係から推定するしかないことなど限界も多いが、建物同士の切り合い関係から膨大な建物遺構の大まかな造営の流れを推定するには有効と考えた。また、この分析は竪穴建物の造営から廃棄までのタイムスパンはほぼ一定であるとの仮定の上に成立していることを明記する。

図127は全竪穴建物について、相互の切り合い関係を表記したものである。図の上方が新しく、下方に行くほど古い建物を示している。切り合い関係は赤矢印で表記し、矢印が向いた方が古いという表現である。また、「建物の規模」の項で設定した大型の竪穴建物であるCグループは□で囲んだ。そして、建物同士が切り合い関係にはないが、きわめて近接して検出されているもの同士については、破線で表記した。

上記の視点Bからは、以下の8基が各建物群の中で最も新しい時期に造営されたことになる。

S I 12・S I 22・S I 25・S I 29・S I 31・S I 34・S I 35・S I 49

なお、S I 29とS I 31は竪穴同士の距離が60cm程度と隣接しており、垂木の配置や屋根の取り合い等考えると、同時期に存在したと考えるのは無理があり、相互に新旧関係を形成するものと考えられる。

ここでは、仮に、S I 29を新と、S I 31を旧と位置づけておく。なお、図127ではS I 29を最新のグループに入れたが、一段階古いグループに入れても矛盾は生じない。また、S I 31はS I 29より一段階古いグループに入れたが、近接しすぎているS I 32と同時期に存在することが困難という判断から、S I 32より一段階以上新しいという想定によるものである。さらに、S I 29を最新のグループに入れたことに関しても、想定範囲であると明記しておく。

また、S I 35は幅が $1.3\text{ m} + \alpha$ 、奥行が90cmと面積が狭小すぎることから、他の建物と同様の性格と判断するのが難しいところである。S I 35に切られるS I 47も同様である。このため、図127には「？」を付し、S I 46より新しい段階に表記した。したがって、最新のグループは、

S I 12・S I 22・S I 25・S I 29・S I 34・S I 49

の6基である。6基それぞれに最初に切られた建物は、

S I 8・S I 21・S I 24・S I 31・S I 46・S I 50

の6基である。この6基から切られた建物は、

S I 3・S I 10・S I 20・S I 26・S I 33・S I 42

の6基ある。この段階で、S I 25とS I 34の枝がS I 26で交差する。6基から切られた建物は、

S I 1・S I 5・S I 9・S I 19・S I 23・S I 27・S I 32・S I 41・S I 45

の9基である。この9基から切られた建物は、

S I 2・S I 6・S I 16・S I 28・S I 36・S I 39・S I 40・S I 48・S I 52

の9基である。この9基から切られた建物は、

S I - 1・S I 7・S I 15・S I 38・S I 43

の5基である。この5基から切られた建物は、

S I 4・S I 13・S I 30・S I 37・S I 44・S I 51

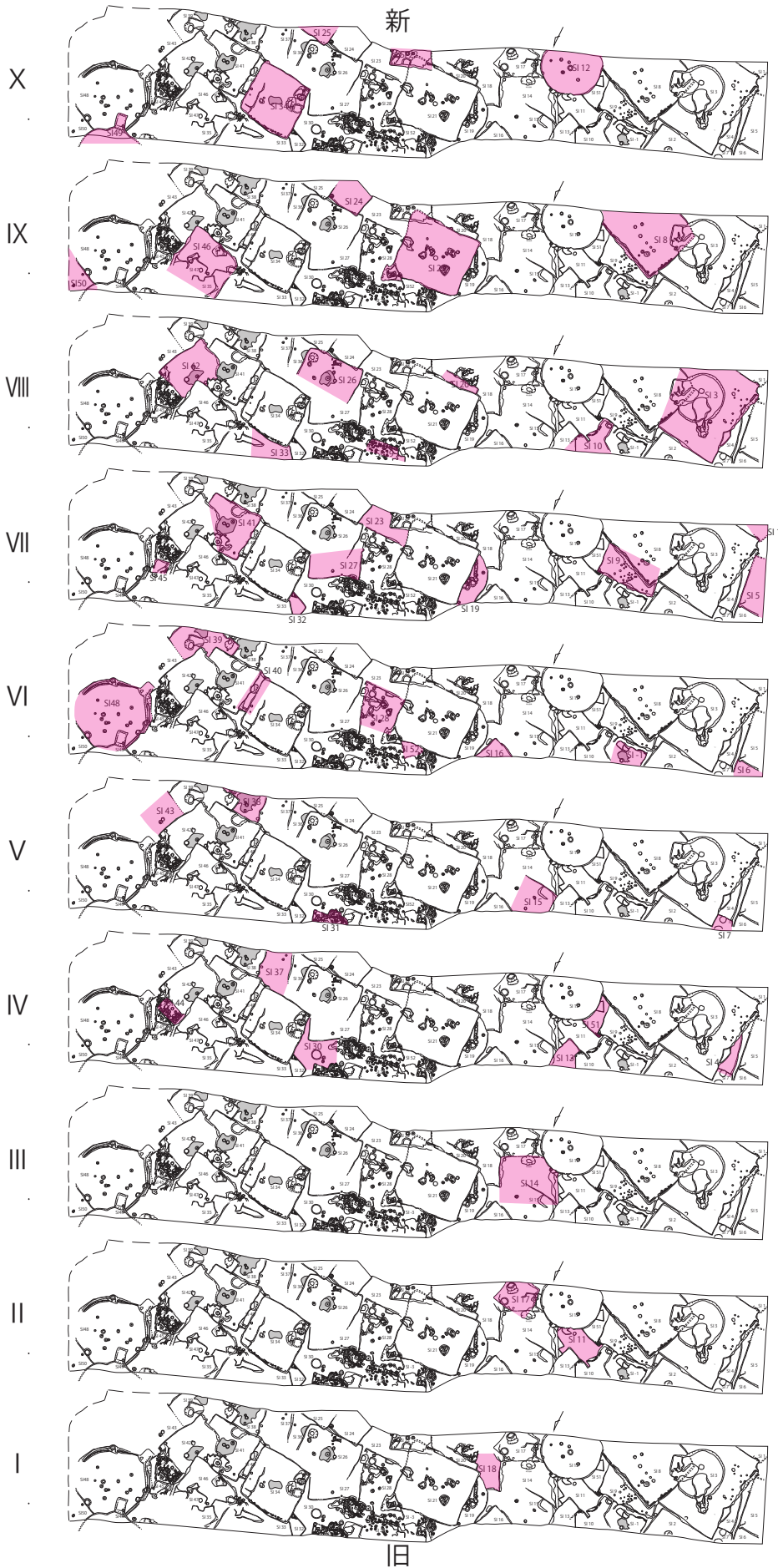


图 128 古墳時代豎穴建物造営模式図

の6基である。次の段階は

S I 14

の1基である。次の段階は

S I 11・S I 17

の2基である。そして、切り合い関係で最も古い建物と考えられるのが、

S I 18

である。なお、S I 18は建物群の切り合い関係で最も古いだけであり、例えば、3段階前に収束した調査区東側のS I 30・S I 37・S I 44の3基はS I 18より必ずしも新しい時期の建物とは言い切れない。あくまで、切り合い関係にある建物群の中での新旧関係を示しているにすぎない。

さて、これまで記述したように、建物間の前後関係には微調整を行う余地はあるものの、切り合い関係や近接関係から考えると、同時期に存在しえない関係性があり、これらを総合的に考慮すると全建物の造営期間は、10期に分けられることになる。もちろん、各期の間が時間的に同一間隔とは言い切れないし、同一期に所属する建物同士が完全に共時関係にあるとは言い切れないが、V区で検出された53基の竪穴建物は10段階の時間を経て、形成された遺構群であるとはいえるものと考えられる。

また、各期において、5～9基程度の竪穴建物が共存した可能性が考えられる。そして、「方形+円形」プランなどで大型のCグループの建物は、VI期以降における各期に1基ずつ、かつその場所がほぼ特定の場所に造営されている可能性が考えられる。それ以前の段階について、Cグループに位置づけられる大型の竪穴建物が存在するかどうかに関しては、切り合いが激しく、判断ができないところである。

この建物造営過程を視覚化するため、試みとして平面図に落とし込んだのが、図128である。これからは、「方形+円形」プランなどで大型のCグループの建物が、隣接するVI区において検出されていない要因として、この類型が時期的に偏っていることと、この類型の建物の配置が特定の位置に偏ることといった二つのことが考えられ、同一集落内とみられるV区とVI区では、V区への偏り傾向があったと見られるのである。

註

(1) 中摩浩太郎 1999 「南部九州古墳時代の竪穴建物類型の変異に関する一考察」『人類史研究』11

## 第2節 西暦874年の倒壊建物

(倒壊建物の埋没状況からみた被災過程)

既述したが、橋牟礼川遺跡倒壊建物（以下「倒壊建物」と表記）と共時の被災建物として、敷領遺跡から複数の建物跡が確認されている。このうち、3号建物では建物内部の埋没状況が詳細に観察でき、その埋没過程に関して、図129のような火山災害の過程を模式的に想定した<sup>(1)</sup>。

- ・噴火開始。降灰が続き、建物外部が火山灰で埋没
- ・降雨開始。一度目の土石流が発生
- ・土石流は建物の出入口から流入。その勢いは、土師器甕を持ち上げ、石の炉壁に衝突させ、破損（ひび割れ）させる程度。須恵器横瓶は床面を数m移動
- ・直後に何か落下衝突しカマドが崩壊。土石流は建物床全面を10cm程度埋め収束
- ・火山灰降下はその後も継続。建物外はトータルで30cm程埋没。二度目の土石流が発生

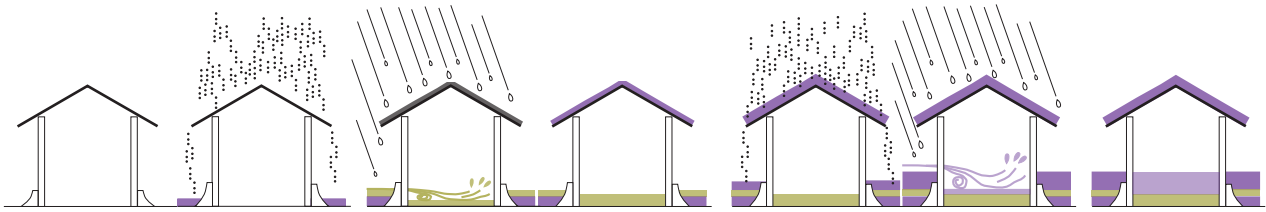


図 129 敷領遺跡埋没過程

・建物内部は土石流流入で、20cm弱埋まり、完全に埋没

敷領遺跡 3号建物のこの埋没過程を、倒壊建物の埋没状況と比較してみる。

倒壊建物は一度目の土石流発生前に倒壊したと考えられる。このことは、埋没部材を覆った紫コラ一次堆積層上に接して二次堆積層に覆われた小壺が出土したことや、建物東側の一次堆積物上部に堆積した二次堆積物中から完形の須恵器杯身などが出土していることから確認できる。屋根に堆積した火山灰の重量で、建物の細い柱は傾き、あるいは折れ曲がり、建物壁も折れ曲がった。その後、一度目の土石流が発生し、建物内部の家財を流し出し、17cm程度の厚みの二次堆積物層が建物内部を埋め、二回目の土石流で建物内部が完全に埋没した。

倒壊建物と3号建物の埋没は同一の過程を経たものとみられる。ただ、2者では下記のような条件の差から埋没結果の相違が発生したと考えられる。

- ①降下火山灰層の層厚が倒壊建物周囲では50cm程度、3号建物周辺では30cm
- ②倒壊建物は3号建物のような周堤状の土壁で囲まれておらず、かつ建物が倒壊した状況であり、土石流はどこからでも内部に流入し得たこと
- ③倒壊建物の西側約100mの地点で、かつ、標高がやや高い場所に、流下方向を南西から急に北西方向に変える河川があり、土石流がこの河川から直接流れてきたことが考えられる。一方、3号建物付近にはそのような河川が確認されていないこと

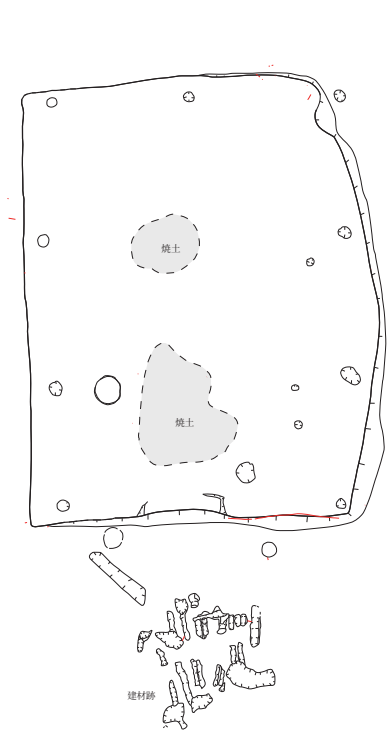
上記の条件差により、下記の相違が発生したと考えられる。

- ①層厚の相違による屋根への加圧が異なり、建物に倒壊有無の差が生じた
- ②倒壊建物では土石流が河川から直接建物内に流れ込み、3号は土石流が入口幅に限定され流入したことから、建物内で流速の減退が発生
- ③倒壊建物では河川が接近しており、オーバーフローした土石流が直接入りこんだが、②を含めて流速は3号より早く、家財は屋外に押し流されるなど影響がより大きくなった。

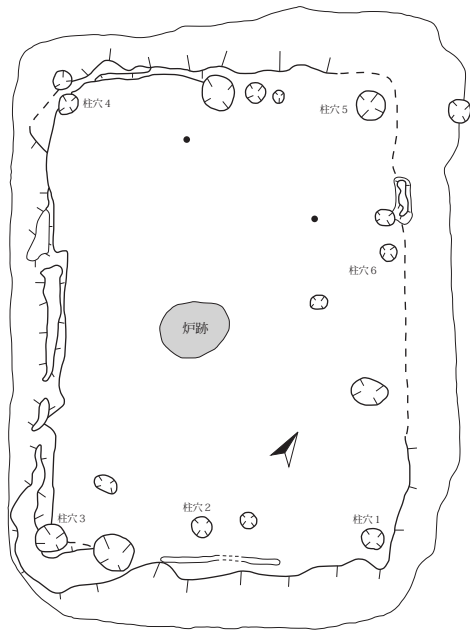
#### (指宿地域における同時期の建物規模と構造に関する比較分析)

倒壊建物は、開聞岳噴火に伴う火山災害により倒壊した。その構造は、柱配置が2間×3間であり、桁行4.5m、梁間3.1mを測る。土地の整地範囲は長軸4.9m、短軸3.9mを測る。出入口は東側の梁間に設けられ、出入り口とみられるステップがある。このため、この部分の棟柱は中心軸からずれて設置されているようである。建物が設置された位置は、南西から北東に向かって地面が緩やかに傾斜し、建物北東隅を中心に整地することで、北東隅が5cm程度の段差を持ち、南西隅がレベルとなる微細な土壇状の地形を造営している。火処は床面に設けられたとみられ、焼土が確認されている。

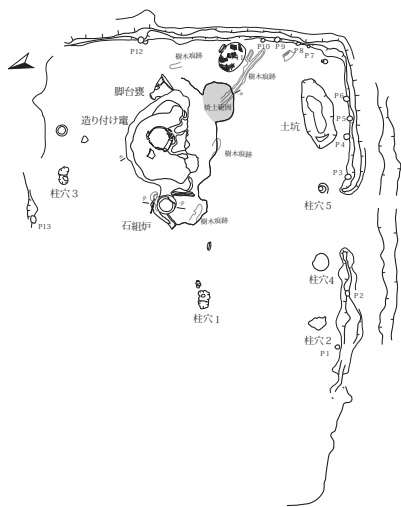
これまで指宿市内において、874年旧暦3月4日の開聞岳噴火に伴う火山災害により埋没した建物が、6例確認されている<sup>(2)</sup>。このうち、向吉遺跡で確認された埋没建物は建物のコーナーのみの確認となっていることから、今回比較対象から外した。



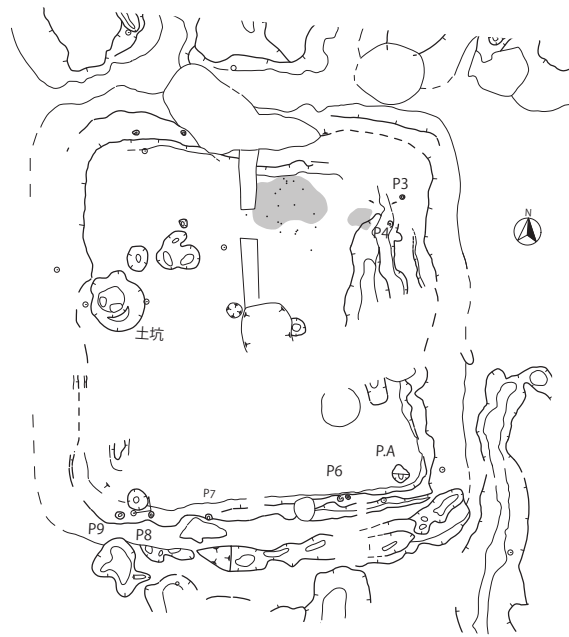
橋牟礼川遺跡倒壊建物



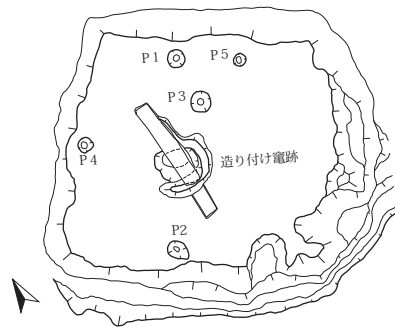
敷領遺跡1号建物



敷領遺跡3号建物



敷領遺跡4号建物



敷領遺跡2号建物

0 (1:85) 1m

図130 倒壊建物・埋没建物比較 (S=1/85)

図 130 は、紫コラ火山灰及び土石流によって埋没した建物の事例である。倒壊建物以外の 4 例はいずれも敷領遺跡の事例である。

敷領遺跡 1 号建物は、柱配置は 2 間×3 間とみられ、桁行 4.9 m 梁間 3.6 m を測る。出入口は西側の桁行中央に設けられ、ステップが造り付けられている。建物自体は、高さ 20cm～25cm の土壇を造成した上に建築されている。建物壁に向かって土を若干盛りかけている。火処は床面に浅い土坑炉が確認されている<sup>(3)</sup>。

敷領遺跡 2 号建物は、ピットが 5 基確認されているが、4 隅には配置されておらず、極めて浅いことから簡易的な上屋構造を伴った「作業場」等の建物と推定されている。建物は上面長軸 3.0 m × 短軸 2.6 m の略方形の土壇上に建築されている。出入口は不明であるが、東側の土壇斜面にステップのような壇が造り付けられており、土壇の南面から東面中央にかけて、深さ 5 cm 程度の浅い溝が方形に配置されている。土壇は、北辺が最大の段差であり、高さ 15cm、西辺が 5～8 cm 程度である。火処は床面中央に設けられた土壁を持つ炉であり、西面のみ土壁がない。土壁残存高は 10cm 程度であるが、3 号建物の事例から竈の可能性も考慮する必要がある。土壇上には、紫コラ火山灰一次堆積物の火山礫は堆積せず、フォールユニットを形成する火山灰層のみが堆積していた。このため、上屋構造は火山礫の堆積は阻害しても、火山灰の堆積は阻害できない程度のものであったと考えられる<sup>(4)</sup>。

敷領遺跡 3 号建物は、柱穴が確認されているが、南側桁行の中央出口左右に 2 穴とこれと並んで 1 穴、北側桁行に 1 穴、床面中央やや西よりに 1 穴検出されているのみである。2 号建物の事例のように浅い柱穴の可能性もありうるが、柱配置は不明である。主柱穴から計測した梁間は 2.9 m である。ただ、建物壁に 6 層土を 26cm 程度盛りかけた周堤状の土壁が全周を囲んでいると考えられ、周堤内法が示す建物規模は、長軸 5.1 m × 短軸 3.5 m の隅丸長方形と考えられる。出入口は南側の桁行中央に設けられ、周堤状の土壁が建物内側にやや入り込んでいる。建物床面は、外部地表と 3 cm 程度の段差しかなく、周堤状の土壁から 20cm 程度はなれ、深さ 1.5cm 程度の浅い溝状遺構が設けられている。火処は、サスを入れた土で形成したカマド、石組炉であり、さらにあと 1 基、土を盛り上げた遺構が層位断面に見えていた。カマドと石組炉は建物主軸に沿った床面に設置されており、調理用施設を中心とした建物である可能性も考えられている<sup>(1)</sup>。

敷領遺跡 4 号建物は、床面南西隅と南東隅に柱穴 2 基が確認されているが、柱配置は不明である。梁間 3.0 m を測る。出入口に伴う遺構は確認されていないが、北側と南側の建物外部には畠が設けられており、東側には畠はなく平坦面となっているため、出入口はこの方向と考えられている。建物自体は、高さ 20cm～23cm の土壇を造成した上に建築されている。建物壁に向かって土を若干盛りかけている。明瞭な火処は確認されていないが、北端床面に炭化物集中箇所がある<sup>(5)</sup>。

5 例について、建物の設置における土地の整地や改変、建物の規模などについて述べる。

敷領遺跡 1 号建物では土壇を設け周囲より建築場所を 20cm～25cm 高く設定しているが、これは建物内への雨水侵入を防ぐ目的と考えられる。雨水侵入防止のための構造設置の点から分類すると 5 例は、(A) 土壇を明瞭に設けるもの、(B) 土壇は設けず、周堤状の土壁と溝を設けるもの、(C) 整地程度のものであるものの 3 種に分類できる。

A は、敷領遺跡 1 号・2 号・4 号建物であり、B は敷領遺跡 3 号建物、C は倒壊建物である。これらから、敷領遺跡では、明確に土壇等の施設を設ける必要性があったことがうかがえる。さらに、1 号・4 号では、建物壁に土を盛りかけ、補強を施している。その原因に関しては、敷領遺跡が橋牟礼川遺跡と比較して、標高が低い平地の立地であり、敷領遺跡ではそのような施設の設置により、浸水対策を講じる必要性があったことが考えられる。

次に、建物の規模についてである。建物の支柱構造が確認されているのが、倒壊建物と敷領遺跡1号建物であり、2間×3間の柱構造である。それ以外の事例に関しては、不明瞭な点が多い。敷領遺跡2号建物は火山礫の堆積がないことから、上屋はあったことは確かなものの、構造は明確になっていない。3号建物に関しても、支柱はあるものの、隅柱が確認されていない。4号建物は隅柱1対が確認されたが、対面の隅柱が確認されていない。このように建物構造に関しては十分な言及はできないが、最も建物の規模が大きい1号建物には他の建物と明らかに異なる点がある。柱穴のサイズが示す柱のサイズである。倒壊建物は、柱穴直径は10数cmであり、敷領遺跡3号では、柱穴底部で柱径が10cm程度と確認できる。敷領遺跡2号と4号においても支柱が小型であるから、用いられた柱自体が細いものであることを示している。一方、1号建物は上端径が40cmと大型の柱穴もあり、特に柱穴の下端径はおよそ25cm程度にそろっている。このため、柱サイズで他の建物のそれを大幅に上回っており、柱材自体が他の建物より明らかに大きなものを用いたことを示していると考えられる。

1号建物は、建物周囲の固結した紫コラ火山灰を掘り起こした復旧痕跡が唯一残っている事例であり、調査者によって、「住人の性格や立場が、他とは異なる特別なものであったことが想定」されている<sup>(3)</sup>。このことと、建物の柱材自体が他の建物とは異なり大型のものを用いていることは関連性がうかがえるところである。

註

- (1) 指宿市教育委員会 2015 『平成26年度市内遺跡確認調査報告書 敷領遺跡・松尾城跡Ⅲ・その他市内遺跡』
- (2) 註1・3・4・5参照。なお、敷領遺跡3号建物周囲においては、確認調査において、3号建物で特徴的な壁に土を盛りかけた土堤状の土の高まりとその左右で紫コラ火山灰層が一次堆積層と二次堆積層に分かれる箇所の確認から、少なくとも2基の建物が埋没している可能性が考えられている。
- (3) お茶の水女子大学、鹿児島大学法文学部 2014 『敷領遺跡（十町地点・下原地点）の調査』
- (4) 指宿市教育委員会 2010 『平成21年度市内遺跡確認調査報告書（敷領遺跡・大園原遺跡・山王遺跡・森山遺跡）』
- (5) 指宿市教育委員会 2019 『平成30年度市内遺跡発掘調査報告書（敷領遺跡・成川遺跡・下吹越遺跡）』

### 第3節 子持勾玉について

SI37出土の子持勾玉の年代観に関しては、渡部徹也氏の論考(渡部1992)がある。これによると、大平茂氏の編年案(大平1989)では、本子持勾玉は大平氏分類のB型子持勾玉<2類>に比定できると考える。次いで、勾玉本体の断面比が0.78(a/b)、反り比が0.5(c/b)であることから形式的にはⅡ-1型式の範疇に入るものと考えている。

一方、出土層位に関してであるが、子持勾玉は第9層に造営された竪穴式建物(SI37)の埋土から出土している。第9層の上位には、第8層を挟んで開聞岳火山灰である第7層「青コラ」火山灰層が堆積しており、この火山灰は7世紀後半頃と年代比定がなされている。また、第9層中から出土する須恵器では、最も古いもので陶邑古窯(中村氏編年)のI型式第5段階相当期、最も新しいもので陶邑古窯(中村氏編年)H型式4段階から6段階相当期と考えられている。須恵器の年代観によれば、第9層は5世紀後半から7世紀前半に相当する包含層と考えられ、出土した子持勾玉も大枠ではその範囲の所産ととらえ、5世紀後半から6世紀前半の時期としている。



一方、九州出土の子持勾玉に関して桃崎祐輔氏が詳細な考察を行っている（桃崎 2013）。その中で、V区出土の子持勾玉に関しては、形態的に時代が下るものとされ、九州Ⅶ期に区分されている。九州Ⅶ期と同型事例の年代観は、福岡市重留村下遺跡群竪穴建物SC033出土の6世紀末の事例、壱岐市双六古墳出土の6世紀後半の事例、大野城市中通S2号墳の7世紀後半以降の事例、行橋市渡築紫遺跡C区の7世紀中葉～後半の事例と同型とされている。このため、時期的には6世紀後半以降7世紀後半の範囲とみられる。これは、上記に示した9層の年代幅と比較してやや新しい位置づけとなっている。

V区SI37出土の子持勾玉の年代観に関しては、それが出土したSI37が、建物の切り合い上、古い位置づけとなっていることを加味して検討する必要があると考える。ただ、埋土中出土であり、竪穴建物の切り合い関係が著しいことから、所属遺構の埋土の混同や、新しい時期からの掘り込みなどの可能性も考慮する必要があり得ることを付記しておく。

子持勾玉が出土する建物跡の性格について桜井秀雄氏は、石製模造品との関連性の強さと拠点集落からの出土の2点について指摘している（桜井 2004）。特に、拠点集落に関しては、長野県本村東遺跡・榎田遺跡の調査例から、古墳時代中期中葉において大規模な集落形成が開始された集落で、カマドや鉄刃を有する農耕具などの新技術・新文化を伴った拠点集落からの子持勾玉出土を重視している（桜井 2004）。橋牟礼川遺跡に関しては、主に幹線道路部分の調査だけで150軒を超える竪穴建物が確認されており、指宿地域における拠点集落の一つと考えられている。また、V区・Ⅵ区においては、鏡片や青銅製鈴などの特殊な遺物の出土がある。さらに、Ⅸ区においては馬鋤痕跡が確認されるなど、新技術・新文化の招来と考えられる。桜井氏が指摘するように、子持勾玉は橋牟礼川遺跡の拠点集落としての性格を反映した遺物であると考えられる。

#### 文献

- 渡部徹也 1992 「橋牟礼川遺跡出土の子持勾玉について」『人類史研究』第8号  
大平 茂 1989 「子持勾玉年代考」『古文化談叢』21  
桜井秀雄 2004 「建物跡出土の子持勾玉」『金沢大学考古学紀要』27  
桃崎祐輔 2013 「九州出土子持勾玉研究入門」『福岡大学考古学論集』2

## 第5章 総括

### 第1節 古墳時代

V区では竪穴建物と考えられる遺構は53基検出され、東側に隣接するVI区においては26基検出されている。V区に関しては切り合いが著しく、平面形を把握できないものもある。周辺調査区の遺構も参考にし、古墳時代の全般的な傾向を述べたい。

橋牟礼川遺跡全体で150基を越えて検出された古墳時代の竪穴建物は、橋牟礼川遺跡が立地する火山性扇状地のトップ部分に濃密に分布する。これまで都市計画道路部分の発掘調査が主体となっていることから、集落の全体形を含めて不明な点は多いが、この一帯を中心とした大規模な集落が形成されていたと考えられる。V区・VI区は、遺跡中央を流下する河川東側の建物集中地点である。この地点では、重要な遺物の出土件数が卓越しており集落全体における中心的役割を担っていたと考えられる。

竪穴建物出土遺物の傾向からは、V区の竪穴建物造営時期は古墳時代中期後半～後期と考えられる。また、VI区等の事例から、この地点の集落は、少なくとも7世紀後半の火山災害以降も継続していたことが判明している。集落の大規模化の時期は弥生時代や古墳時代前期の遺構が明確でないことから、明らかではないが、V区の竪穴建物群形成の時期に大量の竪穴建物が造営されたことから、古墳時代中期後半以降、この地点で集住が行われていたことは確実である。

橋牟礼川遺跡の建物検出数は、鹿児島県下においても極めて多い状況である。さらに、橋牟礼川遺跡においては、初期須恵器・青銅製鈴・青銅鏡片・子持勾玉等の重要な遺物の出土がある。滑石製子持勾玉や青銅製品等は近畿地方などの他地域からの搬入品であると考えられるが、中村直子氏は、遠距離交易物である須恵器、青銅製の鈴、ガラス小玉などの遺物が出土する集落について、小平野単位の中核的集落とし、その地域における物資流通・配分に関する権限を持つ集団が居住していた可能性を指摘している（中村 2006）。橋牟礼川遺跡においては、後に郡家等公的施設が置かれた可能性が考えられているが、古墳時代において既に、他地域との物資流通の権限を有する社会的上位階層が居住した集落であった可能性が考えられる。

ただ、現在の調査状況からは社会的上位階層の人々の建物が明確ではない。中村氏も、南九州で発見されている集落跡では、集落内の建物跡間に確固たる階層差を見出すことは難しいとしているが、橋牟礼川遺跡でも同様の状況である。ただ、分析でも触れたが、「方形+円形」プランなどで大型の「Cグループ」に関しては、数量が圧倒的に少なく、その立地位置が固定的であるという傾向があることが判明している。また、隣接するVI区のS B 4は床面積が42㎡であり、「Cグループ」に属する竪穴建物であるが、7世紀後半の青コラ火山灰降灰時点で埋没途上にある竪穴建物であり、その設置時期は7世紀後半に近い時期と考えられる。

したがって、橋牟礼川遺跡の古墳時代中期後半～後期にかけての集落においては、集落を構成する竪穴建物のうち、大型のCグループ竪穴建物が少数存在し、設置位置が固定的になるという傾向があるが、V区とVI区におけるこのような建物構成は青コラ火山灰が降灰する7世紀後半に近い時期まで継続するといえるのである。さらに、青コラ火山灰降灰以降に形成された建物群が検出された国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡地内のK 1・K 2トレンチでは、一辺5.5 mの大型竪穴建物と小型の竪穴建物の組み合わせが確認できており、このような傾向はより新しい時期に継続することが予想されるところである。

では、「Cグループ」に属する大型の竪穴建物の性格については、その出土遺物から想定するし

かないのが現状である。出土遺物のうち、特殊な遺物としては、SI 3で青銅製鈴と袋状鉄斧が、SI 8で青銅鏡片が出土しており、また、SI48では軽石製舟形模造品が出土している。このことをもって、各建物の性格を言及することは難しいが、一般家屋とは異なる性格を持つことは想定できる。

(文献)

中村直子 2006 「南九州(本土)の様相」『先史・古代の鹿児島(通史編)』鹿児島県教育委員会

## 第2節 古代

ここでは、V区に加え隣接するVI区を含めて記述する。

橋牟礼川遺跡6層中においては、「厨」墨書土器、「真」墨書土器、青銅製帯金具(「巡方」、「丸軛」)、鉄製刀子等に加えて、須恵器・土師器が出土した。また、VI区においては建物遺構が2棟確認された。鹿児島県内では、「厨」墨書土器は、出水市尾崎B遺跡、薩摩川内市薩摩国府跡、鹿児島市一ノ宮遺跡、いちき串木野市柵城跡、安茶ヶ原遺跡、市ノ原遺跡第1地点、南さつま市金峰町芝原遺跡での出土例がある。永山修一氏は「厨」は饗饌に伴う施設を意味するとし、「厨」の墨書土器が出土した一ノ宮遺跡など5遺跡の墨書土器以外の遺物や、古代の国府と郡衙を結ぶ官道の存在を考慮し、「厨」墨書土器出土遺跡に関しては、官衙あるいはその近傍、官衙を結ぶ交通路上であると指摘している(永山2009・2016)。

橋牟礼川遺跡出土の「厨」墨書土器の年代観に関して、柴田博子氏の教示では、字体が大きく丁寧ではなく、8世紀的ではなく、9世紀代に下る可能性を示唆しており、「真」の墨書に関しては、小ぶりで丁寧な字体から8世紀代に収まるものとのことであり、いずれも8世紀後半から9世紀初頭とされている(柴田2006)。

青銅製帯金具の「丸軛」「巡方」に関しては、青銅製であり、丸軛の表面に鍍金の痕跡が残っている。757年施行の養老令の第19衣服令中朝服条には、金銀装の腰帯は五位以上としている。したがって、出土帯金具は「通貴」と呼ばれる貴族階級の人物が使用していたことになる。しかしながら、櫛木謙周氏によると、8世紀前期から律令政府は、国家の諸費用を肩代わりして私物を献上する者に位階を与えて、民間の私富を導入する献物叙位政策を行っており、地方の豪族や富豪たちにとって自らの富を政治的地位に結びつける絶好の機会であったとし、多くは郡司の地位にある者が行ったとしている(櫛木1993)。このことは、地方郡家にも五位の人物がいた可能性を示している。なお、永山修一氏の教示では、薩摩国の郡司には外五位の人物がいることが資料上確認できているが、8世紀代に関する記録では揖宿郡では該当者がいないとのことである。

ところで、青銅製帯金具のうち「丸軛」と「巡方」には、本来垂飾りを装着した穴の痕跡である「垂孔」が設けられるが、橋牟礼川遺跡出土のものは明瞭ではない。田中広明氏は、「丸軛」「巡方」いずれも、「垂孔」の形式的変遷が大孔→小孔→細長孔と変化することを示し、さらに、細長孔には孔の無い裏金具が対応するとしている(田中2006)。橋牟礼川遺跡出土の「丸軛」「巡方」に垂孔がないのであれば、裏金具である可能性も検討する必要がある。そうであるならば、時期的には最も新しい段階の金具であることになる。既述のように、橋牟礼川遺跡出土の帯金具の年代観は、ほぼ8世紀の範疇か、下っても9世紀初頭に帰属するとしたが、上記のことからは、8世紀後半から9世紀初頭の時期に限定される可能性を考慮しておきたい。

遺構に関しては、掘立柱建物がVI区の2軒のみとなる。1号建物の南側で青銅製帯金具が出土し、3号建物の東面の桁付近で墨書土器「真」が出土している。建物の配置は方位を意識した規格性は

見出せるとはいえない。建物の検出例が少ないのも、橋牟礼川遺跡の調査が、都市計画事業に伴う道路部分（最大で 12 m 幅）に限られることが要因になっているとみられる。

6 層中の出土遺物が示す郡家的施設の存在時期に関しては、「厨」墨書土器と帯金具からは 8 世紀後半から 9 世紀初頭の可能性が示されているが、「真」墨書土器等は 8 世紀代に帰属するものと考えられ、その範囲で郡家的施設が設置された可能性を考えておきたい。

このことに関連して、IX 区において馬の頭骨のみを埋納した馬骨埋納土坑が検出されている。これは 6 層上面付近から掘削しており、874 年に極めて近い時期の遺構であると考えられる。水野正好氏は馬頭骨を埋納した遺構に関して、雨乞いの作法としての殺馬・殺牛と関連付けている（水野 1981）。殺牛・殺馬に関しては、『続日本紀』に延暦十年（791）9 月 16 日、伊勢・尾張・近江・紀伊と並んで若狭・越前に対し禁止され、『類聚三代格』同日の太政官符「応禁制殺牛用祭漢神事」に、違反した場合は故殺馬牛罪を科されている（門脇 1993）。殺牛・殺馬については天武 4 年以降度々朝廷によって禁止された。橋牟礼川遺跡で馬骨埋納土坑がみられるのは郡家的施設が置かれなくなり、耕作地に転換した時期であることを示していると考えられ、公的施設が橋牟礼川遺跡から他の場所への移動したことを裏付けていると考えられる。

（文献）

- 永山修一 2009 『隼人と古代日本』 同成社  
2016 「第 1 節 文献・出土文字資料から見る薩摩国揖宿郡と開聞岳噴火～橋牟礼川遺跡を理解するために～」『橋牟礼川遺跡総括報告書』
- 榎木謙周 1993 「四 若越出身の官人たち」『福井県史』 通史編 1
- 田中広明 2006 『国司の館—古代の地方官人たち』 学生社
- 下山 覚 1996 「杭列の時期と評価」『橋牟礼川遺跡 IX』 指宿市教育委員会
- 柴田博子 2006 「鹿児島県の墨書土器」『先史・古代の鹿児島 通史編』 鹿児島県教育委員会
- 水野正好 1981 「祭祀と儀礼」『古代史発掘』 10 講談社

### 第 3 節 開聞岳噴火災害を受けた建物跡と 6 層上面をめぐる課題

V 区で確認された倒壊建物跡は、開聞岳噴火に伴う紫コラ火山灰の降灰と、その後発生した土石流により埋没した建物である。この建物の発見によって、開聞岳噴火が直接人へ被害をもたらしたことが明らかとなり、橋牟礼川遺跡の火山災害遺跡としての価値が注目されることになった。

倒壊建物の埋没過程については分析において述べたが、指宿市内では過去の調査において同様の被災建物が、橋牟礼川遺跡倒壊建物 1 基、隣接地の向吉遺跡で 1 基、敷領遺跡で 4 基の合計 6 基が検出されている。また、開聞岳噴火に伴う火山災害は建物の被災だけでなく、道、畠、貝塚、河川、植物などが降下したテフラの付着、加圧、埋積が加害因子となり被災している（下山 1997）。

近年の敷領遺跡の発掘調査においては、敷領遺跡 1 号建物や水田畔等のように開聞岳噴火による火山災害からの復旧痕跡が確認されている（鷹野編 2009・2010・2014）。復旧作業の対象となった 1 号建物は、「文字を扱う」、「集落の中での特別な立場にいる人の住まい」であったことが指摘されている。新田栄治氏は、開聞岳噴火による火山災害に対する国家による対応と災害評価に関して考察している。この中で、『日本三代実録』や『類聚国史』などに記載された日本における 9 世紀の自然災害について、人的被害に着目し 2 分類している。台風・地震の人的被害が大であった「災害 A」と、火山災害の人的被害が少なかった「災害 B」である。

新田氏は、開聞岳の貞観 16 年の災害について、敷領村落では十分避難できる時間的余裕があり、土地基本線や境界の復旧活動を試みるだけの余裕があり、人的被害が少なかったと推定している。国家による災害への対応については、卜占による神意の実践が主であり、他の災害 A の事例のように住民に対する実質的災害対応はないとしており、中央政府にとって開聞岳噴火の災害が大きいという認識はなかったと考えている（新田 2014）。

実際に、橋牟礼川遺跡倒壊建物や敷領遺跡の埋没建物の調査をとおして、遺骸が発見された事例は現在のところない。また、倒壊建物に関しては、内部に家財道具が残されていないため、これまで居住者はそれを携え避難する時間的余裕があったとされてきた。今回、倒壊建物内部にあったと考えられる土器等の家財が、土石流により建物外に押し流されたことが推定された。建物外部の遺物は敷領式甕 1 点あるいは 2 点、須恵器杯身 1 点、小型の壺 1 点が紫コラ二次堆積物層（土石流堆積物）に埋没していた。この遺物数量に関しては、例えば群馬県中筋遺跡の古墳時代の榛名山火山災害で被災・埋没した 1 号建物内の家財が土師器甕 1 点、小甕 1 点、杯 2 点に加え、曲物が検出されている事例（渋川市教育委員会 1988）と比較しても、少ないとは言い切れないため、家財道具を残して避難したことも考える必要がある。

近年、敷領遺跡での調査資料の蓄積により、紫コラ火山灰の直下から出土する遺物は 8 世紀後半から 9 世紀前半に位置づけられるものであり、火山灰降下年代と 50 年から 100 年ほどの年代齟齬がある可能性が浮上している（松崎 2018）。この現状について松崎氏は、指宿地域における問題だけでなく、関連諸科学においても問題が生じることになり、安易に考古学的成果だけで年代補正や資料批判を行うことに警鐘を鳴らしている（松崎 2022）。

下山覚氏は、7 世紀後半の青コラ火山灰層（7 層）堆積後の 6 層中の文化変異から時間的変遷を A 期・B 期・C 期に区分し、A 期を 8 世紀前半、B 期を 8 世紀後半から 9 世紀前半、C 期を 9 世紀後半から 874 年と設定している（下山 1997）。紫コラ火山灰や土石流で埋没した橋牟礼川遺跡倒壊建物や敷領遺跡の各建物出土遺物の考古学的な年代と紫コラ火山灰の降下年代とのずれは、3 期区分の C 期の年代に関してのものであり、今後の研究の進展を待って再検討する必要がある。ただ、7 層青コラ火山灰層直上から紫コラ火山灰との間の 6 層中における文化様相に関する下山氏の分類内容については、妥当性があると考えられる。V 区等での検出建物の状況から再度確認する。

A 期：古墳時代以来の竪穴建物を主体とする時期。建物の煮炊形態は古墳時代を継承し、建物内に土器炉を含む炉が設置される。橋牟礼川遺跡 VI 区の S B 7, K 1・K 2 調査区の 2 号建物など。

B 期：竪穴建物が残り、掘立柱建物も存在する。橋牟礼川遺跡 VI 区の掘立柱建物の近辺では、郡家所在を示唆する墨書土器、帯金具等の遺物が出土。在地系成川式土器も残っており、煮炊形態は古墳時代を継承。敷領遺跡東部では溝付掘立柱建物や正倉とされる総柱建物が設けられるが、その後、竪穴建物が造営されている。

C 期：橋牟礼川遺跡では少数の掘立柱建物のみとなる。橋牟礼川遺跡の土地利用は、C 期最終段階の火山災害時点には、古墳時代までの集落域範囲の大部分が畠域に転換している。また、橋牟礼川遺跡・敷領遺跡において、C 期最終段階の開聞岳火山災害により掘立柱建物が倒壊したり、埋没している。橋牟礼川遺跡倒壊建物では建物に隣接し、敷領式の脚台付甕等が出土し、建物床面に炉跡が検出されるため、煮炊形態は従来の炉とみられる<sup>(1)</sup>。敷領遺跡 3 号建物にはカマドが、2 号建物でも類似遺構が検出されたが、他の建物床には炉がみられる。V 区西半には、北東方向に伸びる大型の道が造営されている。

上記の道跡の西側には畠が新たに確認され、また、昭和 63 年度以前に調査が実施された V 区の

東側のⅥ区と西側のⅣ区では明確な畠遺構は確認されていないが、6層上面に遺構が検出されていないことは、土地の大半が畠であった可能性を示唆していると思われる、土地の大部分が畠地に転換していることが再確認できる。

このように、6層の遺構形態等から、層中の文化様相が3段階に分けられることは下山氏の分類と全く同様であるため、問題の所在は年代観に絞られることになる。

下山氏が指摘しているように、B期において郡家所在が考えられたⅤ区・Ⅵ区は、C期には建物が少数となり、周辺を含め大半は畠地へとその様相を大きく変えた。その原因として、郡家的施設が他に移動したことに求めることは極めて説得力があると考えられる。

C期最終段階の橋牟礼川遺跡において注目すべきは、既述の大型の道跡である。Ⅴ区で確認した上端幅3.5m道跡は、60m南のⅪ区で確認されている上端幅3.5mの道跡と直線的に繋がり、北西—南東方向に伸びることが推定できる。同時に、Ⅷ区において上端幅3.5m～4.5mの大型の道跡が南西—北東方向に延びており、両者は直交に近い角度で交差すると推定されていたが、可能性がより高まっている。同時期の敷領遺跡においては、水田において土地区画目的とみられる真北方向の大畔が複数設置されていることを考慮すると、既述の大型の道跡は土地区画に用いられた基幹的道路施設の可能性が浮上する。つまり、C期(874年)においては、敷領遺跡同様に橋牟礼川遺跡においても一定の基準に沿った土地区画がなされ、その中で畠耕作を担う小規模村落が置かれており、その村落の建物の一つが、倒壊建物であったと想定されるのである。

(文献)

渋川市教育委員会 1988 『中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書』

下山 覚 1997 「『災害考古学』の展望「災害」が与える影響度を考察するために(予察)」『HOMINIDS』1

鷹野光行編 2009 『鹿児島県指宿市敷領遺跡(中敷領地点)の調査』

鷹野光行編 2010 『鹿児島県指宿市敷領遺跡(中敷領地点)第2次調査』

鷹野光行編 2014 『鹿児島県指宿市敷領遺跡(十町地点・下原地点)の調査』

新田栄治 2014 「9世紀の日本災害史のなかでの開聞岳噴火」『鹿児島県指宿市敷領遺跡(十町地点・下原地点)の調査』

松崎大嗣 2018 「開聞岳貞観噴火による火山災害とその後」『隼人文化研究会第500回記念例会資料集』

松崎大嗣 2022 「紫コラ火山灰の降下年代再考」『地域考古学研究の可能性Ⅱ』

註

(1) 倒壊建物近隣出土の敷領式の甕外面には粘土が付着している。これは、敷領遺跡3号建物のカマドに置かれた土師甕と同様であり、煮炊形態が炉のみであるとは断言できない。

## 第4節 倒壊建物の移設

Ⅴ区で検出された倒壊建物に関しては、その重要性を鑑み、移設保存を前提とした取り上げ工事が実施された。

取り上げ工事に伴い、倒壊建物の遺構面の保存と土ごと取り上げる方法が検討された。そのために、遺構の周囲の層序を約1m程度掘り下げ、重量を考慮し遺構面を複数に分割した。遺構面の保全のために、表面と側面をサンコールシンナーで固結させた後に、発砲ウレタンで被覆した。その後、下部にH鋼をとおして補強し、発掘現場から地層ごとクレーンで釣り上げられ、搬出された(図

版 13-3)。

倒壊建物は、指宿市役所内旧中央公民館横に一旦保管されたが、平成8年4月にオープンした指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれ内で展示するため、平成6年度において、建築中の博物館前庭部分の野外展示施設内に移設し、博物館開館と同時に展示を開始した。

発掘現場からの取り上げ業務及び保全加工委託に関しては、昭和63年度の国宝重要文化財保存整備費補助金を得て、以下のように実施した。

委託者：指宿市長 鶴田芳廣

受注者：株式会社近畿ウレタン工事

件名：指宿駅西部土地地区画整理地内建物跡復元加工委託

履行期間：平成元年1月17日～2月1日

現在、移設展示された倒壊建物は、日常的に考古博物館の展示の一部として活用されているが、本報告書の執筆において、遺構の詳細について、現物を観察しながら再確認することができた。遺構が移設保存されたことの意義がさらに明確になった。

表4 土器観察表1

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法 (cm)							色調				混和材	取上番号	備考	備考2
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	突帯幅	その他	内面	外面	断面	丹				
1	C20		SI-1	甕 or 鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	5YR7/4 に ぶい橙	5YR7/4 に ぶい橙	10R6/6 赤橙	石英・角閃石・白色 粒・灰色粒・黒色粒	ハリダシ床	良好		
5	-		SI7	短頸壺	口縁部	(10.0)	-	-	-	-	-	-	2.5Y4/1 黄 灰	10YR7/3 に ぶい黄橙	10YR3/1 黒 褐	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	床下 100	良好		
9	C20		SI8	甕	口縁部	-	-	-	-	-	1.4	-	2.5YR7/4 淡赤橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石	床直 4	良好	突帯	
10	C20		SI8	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	5YR8/3 淡 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/4 に ぶい橙	石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	床直 8	良好		
11	C20		SI8	甕	底部	-	-	(8.0)	-	-	-	-	10R5/6 赤	2.5YR7/3 淡赤橙	10YR7/2 に ぶい黄橙	角閃石・白色粒・赤 色粒	床直	良好		
12	C20		SI8	壺	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 に ぶい橙	石英・長石・雲母	中央グリッ ド	良好	口唇部に突起あり 浮文径 0.8cm	
13	C20		SI8	埴	胴部	-	-	-	-	-	-	-	5YR7/3 に ぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 に ぶい橙	石英・角閃石・白色 粒	床直	良好		
21	C21		SI10	甕	口縁部	(20.0)	-	-	-	-	1.1	胴部径 19.9	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 に ぶい橙	雲母・角閃石・白色 粒	床直 49	良好	突帯	
22	C21		SI10	甕 or 鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	5YR6/4 に ぶい橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・白色 粒・灰色粒・黒色粒	7	良好		
23	C21		SI10	甕	口縁部	-	-	-	-	-	1.3	-	10YR7/3 に ぶい黄橙	10YR6/3 に ぶい黄橙	10YR7/3 に ぶい黄橙	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	埋土 12	良好	刻目突帯	
24	C21		SI10	甕	口縁部	(25.0)	-	-	-	-	1.0	-	2.5YR7/3 淡赤橙	10YR8/4 浅 黄橙	10YR8/3 浅 黄橙	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	埋土 10	良好	突帯	
25	C21		SI10	甕	脚部	-	-	6.6	8.0	3.0	-	-	7.5R4/2 灰 赤	10YR7/4 に ぶい黄橙	10YR8/2 灰 白	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	床直 28	良好		
26	C21		SI10	甕	脚部	-	-	(6.6)	(8.0)	(2.3)	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR7/8 橙	10R5/6 赤	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	埋土 1	良好	胎土に 6mm 大 のレキ	
27	C21		SI10	壺	底部	-	-	(7.8)	-	-	-	-	10R6/6 赤 橙	2.5YR7/2 明赤灰	2.5YR7/2 明 赤灰	石英・角閃石・白色 粒	床直 51・ 52	良好		
28	C21		SI10	高杯	杯部	(25.0)	-	-	-	-	-	-	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰 白	石英・角閃石・白色 粒・赤褐色粒・黒色 粒	床直 25	良好		
29	C21		SI10	埴	肩部	-	-	-	-	-	-	-	2.5YR5/6 明赤褐	5YR7/6 橙	2.5YR5/6 明 赤褐	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	床直 13・ 18・32	良好		
30	C21		SI10	埴	胴部	-	-	2.5	-	-	-	胴部最大径 7.2	10R6/6 赤 橙	7.5YR8/4 浅黄橙	10R6/6 赤橙	石英・角閃石・白色 粒	床直 33	良好	外面はミガキ	
31	C21		SI10	鉢	口縁部	(10.0)	-	-	-	-	-	-	10R6/3 に ぶい赤橙	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/2 灰 白	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	床直 43	良好		
33	C21		SI11	埴	完形	10.6	13.3	-	-	-	-	頸部径 7.1 胴部最大径 11.2	5YR7/2 明 褐灰	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/3 に ぶい橙	石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	床直 6	良好		
34	C21		SI12	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 に ぶい褐	角閃石・雲母・白色 粒・赤色粒・黒色粒	埋土 1	良好	山ノ口式	
35	C21		SI12	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	2.5YR7/6 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	床直 34	良好		
36	C21		SI12	甕	口縁部～ 突帯部	-	-	-	-	-	-	-	5YR7/3 に ぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR6/3 にぶ い橙	石英・角閃石・白色 粒・褐色粒	床直 5	良好	突帯	
37	C21		SI12	壺	口縁部	(12.0)	-	-	-	-	-	-	10R6/4 に ぶい赤橙	2.5YR6/4 にぶい橙	10R6/4 にぶ い赤橙	石英・角閃石	床直 42	良好		
38	C21		SI12	甕	脚部	-	-	-	7.5	2.0	-	-	5YR8/4 淡 橙	2.5YR7/1 明赤灰	7.5R5/3 にぶ い赤褐	石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	埋土 11	良好		
39	C21		SI12	壺	底部	-	-	(3.0)	-	-	-	-	7.5YR7/6 橙	5YR7/4 に ぶい橙	10YR7/2 に ぶい黄橙	石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	床直 40	良好		
46	C21		SI13	甕	口縁部～ 突帯部	-	-	-	-	-	-	-	2.5Y5/1 黄 灰	10YR6/3 に ぶい黄橙	10YR7/3 に ぶい黄橙	石英・角閃石・褐色 粒	南壁レン チ一括	良好	突帯	
47	C21		SI13	甕	口縁部	-	-	-	-	-	1.1	-	7.5YR7/3 にぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明 赤褐	石英・角閃石・白色 粒・茶色粒	床直 1	軟質	絡繩突帯	
48	C21		SI13	甕	脚台	-	-	-	(9.6)	-	-	-	2.5YR7/4 淡赤橙	10R6/6 赤 橙	10R6/6 赤橙	石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	南壁レン チ	良好		
49	C21		SI13	壺	底部	-	-	(1.5)	-	-	-	-	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR8/6 浅黄橙	10YR8/2 灰 白	石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	2	良好	丸底	
50	C21		SI13	壺	胴部～ 底部	-	-	(2.5)	-	-	-	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	10YR7/2 に ぶい黄橙	石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	床直 10	軟質	丸底	
51	C21		SI13	高杯	口縁部	(23.0)	-	-	-	-	-	-	5YR7/4 に ぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR8/4 浅 黄橙	石英・角閃石・白色 粒・茶色粒	1	良好	胎土に 3mm 大 の白色粒	
55	C21		SI14	甕	口縁部～ 突帯部	-	-	-	-	-	-	-	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	2.5 Y R4/4 にぶい赤褐	石英・角閃石・白色 粒	床直 100	良好	突帯	
56	C21		SI14	甕	口縁部～ 突帯部	-	-	-	-	-	1.0	-	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5 Y R5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明 赤褐	石英・角閃石・白色 粒	床直 5	良好	突帯	
57	C21		SI14	鉢	口縁部	(15.6)	-	-	-	-	-	-	5YR8/4 淡 褐灰	5YR7/1 明 褐灰	5YR8/1 灰白	石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	床直 101	良好		
65	C21		SI15	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/2 に ぶい黄橙	石英・角閃石・白色 粒・褐色粒	東壁	良好		
66	C21		SI15	甕 or 鉢	口縁部～ 突帯部	-	-	-	-	-	0.6	-	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR6/4 に ぶい橙	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	北カマ 6	良好	突帯	
67	C21		SI15	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	石英・角閃石・茶褐 色粒・黒色粒	Pit3-2	良好		
68	C21		SI15	甕	口縁部～ 突帯部	-	-	-	-	-	1.2	-	10YR8/2 灰 白	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/3 に ぶい橙	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	床直 26	良好	刻目突帯	
69	C21		SI15	壺	胴部	-	-	-	-	-	2.8	-	2.5YR6/6 橙	7.5YR8/3 浅黄橙	2.5YR5/4 に ぶい赤褐	石英・角閃石・白色 粒・赤色粒・黒色粒	埋土	良好	幅広突帯	
70	C21		SI15	高杯	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR8/2 灰白	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	床直 3	良好		
71	C21		SI15	高杯	完形	21.9	16.2～ 16.6	-	14.3	8.0	-	-	2.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	10R4/6 赤	石英・角閃石・褐色 粒	A-315	良好	赤色顔料塗布	
72	C21		SI15	高杯	脚部	-	-	-	(9.4)	-	-	-	2.5YR6/6 橙	10R5/6 赤 赤褐	2.5YR5/8 明 赤褐	石英・角閃石・白色 粒	床直	良好	赤色顔料塗布・脚 台底辺部に黒斑	
73	C21		SI15	埴	胴部	-	-	-	-	-	-	胴部最大径 (11.0)	10YR6/3 に ぶい黄橙	5YR6/4 に ぶい黄橙	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	東壁	良好		
74	C21		SI16	高杯	杯部	-	-	-	-	-	-	-	5YR6/4 に ぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 に ぶい橙	石英・角閃石	床直 1	良好		
75	C21		SI16	甕	口縁部	(21.0)	-	-	-	-	-	-	7.5YR6/2 灰褐	5YR6/3 に ぶい橙	2.5YR6/4 に ぶい橙	石英・角閃石・赤色 粒	床直 1	良好		
76	C21		SI17	高杯	脚部	-	-	-	(12.4)	-	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/3 褐	石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	床直 12	良好		



表5 土器観察表2

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法 (cm)							色調				混和材	取上番号	備考	備考2
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	突帯幅	その他	内面	外面	断面	丹				
78	C21		SI18	甕	口縁部～突帯部	(34.0)	-	-	-	-	1.2	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR7/6 橙		石英・角閃石・白色粒・黒色粒	埋土2	良好	突帯
79	C21		SI18	甕	口縁部～胴部	-	-	-	-	-	-	-	5YR7/3 にぶい橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/4 にぶい橙		石英・角閃石・白色粒	床直3	良好	
80	C21		SI18	甕	突帯部	-	-	-	-	-	2.5	-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/1 褐灰		角閃石・白色粒・黒色粒	床直	良好	大甕 / 突帯
81	C21		SI18	甕	胴部～脚部	-	-	4.6	-	-	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白		石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	床下2	良好	
82	C21		SI18	甕	脚部	-	-	8.0	-	-	-	-	10R6/8 赤橙	5YR7/4 にぶい橙	10R6/8 赤橙		石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	1	良好	
83	C21		SI18	壺	突帯部	-	-	-	-	-	3.0	-	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙		石英・角閃石・白色粒	床下7	良好	幅広突帯 (歯文)
84	C21		SI19	甕	口縁部～突帯部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙		石英・雲母・白色粒	床直1	軟質	突帯
85	C21		SI19	ミニチュア土器	脚部	-	-	-	(2.6)	1.5	-	-	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白		石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	3	良好	
88	C21		SI21	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5Y6/2 灰黄	5YR6/3 にぶい橙		石英・角閃石・白色粒	一括	良好	
89	C21		SI21	甕	口縁部	-	-	-	-	-	1.0	-	5YR6/3 にぶい橙	2.5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR6/6 橙		石英・角閃石・白色粒・赤色粒	埋土19	良好	外面にミガキがみられる
90	C22		SI21	甕	口縁部	-	-	-	-	-	1.0	-	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐		石英・角閃石・白色粒	埋土	良好	突帯
91	C22		SI21	甕	口縁部～突帯部	-	-	-	-	-	1.2	-	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR5/2 灰褐	7.5YR6/2 灰褐		石英・角閃石・白色粒	埋土	良好	突帯
92	C21		SI21	甕	突帯部	-	-	-	-	-	1.4	-	5YR7/2 明褐灰	5YR5/2 灰褐	2.5YR5/3 にぶい赤褐		石英・長石・黒曜石	埋土	良好	刻目突帯
93	C21		SI21	甕	脚部	-	-	-	(9.0)	-	-	-	10R6/6 赤橙	10R6/6 赤橙	10R6/6 赤橙		石英・角閃石・白色粒・黒色粒	埋土10	良好	
94	C21		SI21	壺	突帯部	-	-	-	-	-	2.7	-	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙		石英・角閃石	埋土12	良好	刻目突帯
95	C21		SI21	壺	底部	-	-	(10.0)	-	-	-	-	2.5YR6/2 灰赤	2.5YR7/3 淡赤橙	2.5YR7/3 淡赤橙		石英・角閃石・白色粒・赤色粒	埋土7	良好	部分的にタテ方向のミガキが見られる
96	C21		SI21	高杯	杯部	(24.0)	-	-	-	-	-	-	2.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	10R6/6 赤橙		石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直19	良好	
97	C21		SI21	高杯	杯部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	5YR5/1 褐灰		石英・角閃石・白色粒・赤色粒・黒色粒	埋土14	良好	内面に黒斑がみられる
98	C21		SI21	高杯	脚部	-	-	-	(16.0)	-	-	-	10YR3/1 黒褐	7.5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙		石英・角閃石・白色粒・灰色粒	埋土3	良好	
99	C21		SI21	埴	胴部～底部	-	-	5.6	-	-	-	胴部最大径 9.3	2.5YR4/1 赤灰	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙		石英・角閃石	床直19	軟質	
100	C21		SI21	埴	肩部	-	-	-	-	-	-	胴部最大径 9.7	10YR7/2 にぶい黄橙	5YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙		石英・角閃石・長石・黒色粒	床直9	軟質	外面スス付着
101	C21		SI21	甕 or 鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	N7/ 灰白	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白		石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直11	良好	
102	C21		SI21	鉢	胴部～底部	-	-	2.4	-	-	-	-	10R6/6 赤橙	2.5YR6/6 橙	10R6/6 赤橙		石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	床直13	良好	
103	C21		SI21	ミニチュア土器	口縁部～底部	3.9	5.5	-	-	-	-	-	5YR5/2 灰褐	5YR4/1 褐灰	2.5YR5/3 にぶい赤褐		石英・角閃石・白色粒・赤色粒	埋土4		手づくね土器
110	C21		SI22	鉢 or 高杯	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	10R6/4 にぶい赤橙		石英・角閃石・白色粒	ハリ床	良好	
111	C24		SI23	ミニチュア土器	完形	4.2	3.6	-	-	-	-	-	2.5YR6/6 橙	10R5/6 赤	2.5YR6/4 にぶい橙		石英・角閃石・白色粒	埋土	良好	
114-1	C22		SI26	蓋	完形	28.8	15.3	-	-	-	-	-	2.5YR7/3 淡赤橙～2.5YR6/3 にぶい橙	2.5YR7/3 淡赤橙～2.5YR6/2 にぶい橙	2.5YR7/3 淡赤橙～2.5YR6/4 にぶい橙		石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直	良好	
118	C22		SI27	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	10R6/4 にぶい赤橙	2.5YR6/4 にぶい橙	10R6/4 にぶい赤橙		石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	床直4	良好	
121	C21		SI28	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙		石英・角閃石・雲母・白色粒	床直10	軟質	突帯
122	C21		SI28	甕	口縁部～突帯部	-	-	-	-	-	1.6	-	2.5YR6/6 橙	5YR7/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙		石英・角閃石・白色粒	埋土5	軟質	刻目突帯
123	C21		SI28	甕	口縁部～突帯部	-	-	-	-	-	1.3	-	7.5YR7/3 にぶい橙	2.5YR6/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙		石英・長石	埋土2	良好	突帯
124	C21		SI28	甕	口縁部～突帯部	-	-	-	-	-	1.0	-	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	2.5YR6/6 橙		石英・角閃石・白色粒	床直5	良好	突帯
125	C21		SI28	甕	突帯部	-	-	-	-	-	1.4	-	10R6/4 にぶい赤橙	5YR7/3 にぶい橙	7.5YR8/3 浅黄橙		石英・角閃石・白色粒・赤褐粒	埋土1	良好	刻目突帯
126	C22		SI28	壺	底部	-	-	3.8	-	-	-	器壁 2.0	2.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/1 灰白		石英・角閃石・白色粒・赤色粒・黒色粒	ハリ床	良好	
129	C22		SI29	甕	口縁部～底部	(27.1)	25.0	8.4	9.2	1.8	1.2	-	2.5YR6/3 にぶい橙	2.5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR6/3 にぶい橙		石英・角閃石・白色粒・赤色粒・黒色粒	床直6	良好	突帯
130	C22		SI29	埴	胴部	-	-	-	-	-	-	胴部最大径 (9.4)	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	10YR6/1 褐灰		石英・角閃石・黒色粒	埋土	良好	
133	C23		SI33	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	5YR7/4 にぶい橙		石英・角閃石・黒色粒	1	軟質	
139	C22		SI34	甕	脚部	-	-	-	(9.6)	-	-	-	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	10YR8/1 灰白		石英・角閃石・白色粒・赤色粒・黒色粒	床直13	良好	
140	C23		SI34	甕	脚部	-	-	(7.4)	(8.3)	(1.5)	-	-	10YR6/2 灰黄褐	2.5YR6/4 にぶい橙	10R6/4 にぶい赤橙		石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直18	良好	
141	C22		SI34	壺	頭部	-	-	-	-	-	-	-	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR5/4 にぶい赤褐		石英・角閃石・白色粒	埋土2	良好	突帯
142	C23		SI34	壺	底部	-	-	(7.2)	-	-	-	-	10YR4/1 褐灰	10YR3/1 黒褐	2.5Y4/1 黄灰		石英・角閃石・白色粒・透明鉱物	床直16	良好	平底
143	C23		SI34	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	2.5YR7/3 淡赤橙	2.5YR7/3 淡赤橙	5YR8/2 灰白		石英・角閃石・白色粒・赤色粒	埋土	良好	
145	C23		SI35	甕	口縁部	(21.8)	-	-	-	-	1.0	-	7.5YR8/3 浅黄橙	5YR6/1 褐灰	10YR8/2 灰白		石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	床直2・3	良好	突帯
146	C23		SI35	甕	脚部	-	-	-	10.2	-	-	-	10R6/6 赤橙	10R5/4 赤褐	10R5/4 赤褐		石英・角閃石・白色粒・灰色粒・黒色粒	床直1	良好	ていねいなナデ
147	C23		SI35	甕	脚部	-	-	-	(9.0)	-	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y6/1 黄灰	10YR7/2 にぶい黄橙		石英・角閃石・白色粒	埋土	良好	

表6 土器観察表3

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法 (cm)							色調				混和材	取上番号	備考	備考2
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	突帯幅	その他	内面	外面	断面	丹				
149	C23		SI37	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	角閃石・赤色粒	埋土	良好		
150	C23		SI37	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英・角閃石	埋土	良好		
151	C23		SI37	高杯	脚部	-	-	-	(5.6)	3.7	-	-	5YR5/3 にぶい赤褐	2.5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR6/1 褐灰	石英・角閃石・白色粒・褐色粒	埋土	良好	外面赤色顔料塗布	
152	C23		SI37	埴	底部	-	-	-	-	-	-	-	2.5YR7/3 淡赤橙	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5YR7/3 淡赤橙	石英・角閃石・長石・白色粒	埋土	やや軟質	底部に突起	
153	C23		SI37	ミニチュア土器	底部	-	-	-	-	-	-	-	2.5YR6/6 橙	5YR7/3 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	石英・角閃石・白色粒	埋土	良好		
160	C23		SI39	甕	口縁部～胴部	(36.2)	-	-	-	-	1.0	-	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	埋土	良好	突帯	
161	C23		SI39	甕	脚部	-	-	5.5	7.9	3.0	-	-	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	2埋土	良好		
162	C23		SI39	甕	脚部	-	-	-	8.4	-	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/2 灰白	2.5YR7/3 淡赤橙	石英・白色粒・黒色粒	5	良好		
163	C23		SI39	鉢	脚部	-	-	3.0	4.7	2.0	-	-	7.5YR8/2 灰白	2.5YR7/2 明赤褐	7.5YR7/4 にぶい橙	石英・角閃石・白色粒・茶色粒	床直4	良好		
167	C23		SI41	甕	口縁部～突帯部	-	-	-	-	-	1.3	-	2.5YR7/6 橙	10R5/6 赤	10R5/8 赤	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	床直2	良好	突帯	
168	C23		SI41	甕	口縁部～胴部	(10.0)	-	-	-	-	-	-	10R6/3 にぶい赤橙	10R6/6 赤橙	10R6/6 赤橙	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	埋土2	良好		
169	C23		SI41	甕	脚部	-	-	4.7	5.7	0.8	-	-	5YR7/3 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	5YR8/2 灰白	石英・角閃石・白色粒・灰色粒・黒色粒	床直2	良好		
174	C23		SI42	甕	脚部	-	-	(5.3)	7.2	(2.3)	-	-	5YR8/4 淡橙	10R6/6 赤橙	5YR7/2 明褐灰	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	埋土10	良好		
175	C23		SI42	甕	脚部	-	-	(4.4)	6.4	1.8	-	-	10YR5/1 褐灰	2.5YR7/2 明赤灰	7.5YR7/2 明褐灰	石英・角閃石・灰色粒・黒色粒	床直3	良好	内面に黒斑	
176	C23		SI42	壺	底部	-	-	-	-	-	-	-	5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙	5YR6/1 褐灰	石英・角閃石・白色粒・灰色粒・黒色粒	埋土12	良好	胎土に4mm大のレキを含む	
177	C23		SI42	高杯	脚部	-	-	-	(26.2)	-	-	-	10R6/6 赤橙	10R6/6 赤橙	10R6/6 赤橙	石英・角閃石・白色粒・赤色粒・灰色粒	埋土5	良好		
178	C23		SI42	高杯	脚部	-	-	-	15.7	7.7	-	筒部最大径5.7	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・白色粒・灰色粒・黒色粒	埋土9	良好		
180	C23		SI44	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	10YR8/2 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	石英・角閃石・赤色粒・灰色粒	張床1	軟質		
181	C23		SI46	甕	口縁部～突帯部	-	-	-	-	-	1.0	-	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR8/2 灰白	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直8	良好	突帯	
182	C23		SI46	甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	10R6/4 にぶい赤橙	10R6/3 にぶい赤橙	10R6/4 にぶい赤橙	石英・角閃石・白色粒	ハリ床2	良好		
183	C23		SI46	甕	口縁部～胴部	-	-	-	-	-	1.3	-	10R6/6 赤橙	10R6/4 にぶい赤橙	10R5/6 赤	石英・角閃石・白色粒	3	良好	突帯 内外面ともミガキ	
184	C23		SI46	甕	脚部	-	-	(7.8)	(9.2)	2.3	-	-	10R5/2 灰赤	2.5YR6/6 橙	10R5/6 赤	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直4	良好		
185	C23		SI46	高杯	杯部	(22.8)	-	-	-	-	-	-	7.5YR7/2 明褐灰	5YR8/4 淡白	10YR8/1 灰白	石英・角閃石・白色粒・赤色粒	埋土4	良好	角閃石が多く見られる	
186	C23		SI46	高杯	脚部	-	-	3.5	8.5	4.0	-	-	7.5YR8/1 灰白	2.5YR6/4 にぶい橙	10R6/4 にぶい赤橙	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	床直1	良好		
187	C23		SI46	高杯 or 椀	口縁部	(13.9)	-	-	-	-	-	-	7.5YR8/2 灰白	2.5YR7/4 淡赤橙	5YR8/3 淡橙	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	床直2	良好		
188	C23		SI46	埴	胴部～底部	-	-	(3.3)	-	-	-	胴部最大径7.0	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/1 灰白	石英・長石・黒曜石	床直10	良好		
189	C23		SI46	埴	胴部	-	-	-	-	-	-	胴部最大径10.0	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英・長石	埋土2	良好		
196	C24		SI48	甕	脚部	-	-	4.7	6.0	(1.7)	-	-	5YR7/3 にぶい橙	10R6/6 赤橙	10R6/6 赤橙	石英・角閃石・白色粒	埋土16	良好		
197	C24		SI48	甕	脚部	-	-	-	(9.0)	-	-	-	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR8/6 浅黄橙	2.5YR5/8 明赤褐	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	7	良好		
201	C24		SI49	甕	胴部	-	-	-	-	-	-	-	10R6/6 赤橙	10R6/3 にぶい橙	10R6/3 にぶい橙	石英・角閃石・白色粒・黒色粒		良好		
202	C24		SI50	ミニチュア土器	脚部	-	-	-	(3.6)	-	-	-	10R7/4 にぶい黄橙	10R8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	石英・角閃石・白色粒・赤色粒・黒色粒	床直5	良好		
203	C24		SI50	壺	底部	-	-	3.6	-	-	-	-	5YR7/2 明褐灰	5YR6/4 にぶい橙	10R6/4 にぶい赤橙	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直2	良好	内面底部に黒斑	
208	C20		SI52	甕	口縁部	(13.4)	-	-	-	-	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	石英・角閃石・白色粒・赤色粒・黒色粒	床直16	良好		
209	C22		SI52	甕	口縁部～胴部	(24.8)	-	-	-	-	1.3	-	2.5YR5/3 にぶい赤褐	2.5YR5/2 灰赤	2.5YR5/3 にぶい赤褐	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直7	良好	突帯	
210	C22		SI52	甕	胴部	-	-	-	-	-	(1.2)	-	2.5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	埋土6	良好	突帯	
211	C22		SI52	甕	脚部	-	-	-	(8.0)	-	-	-	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	10R5/6 赤	石英・角閃石・白色粒・灰色粒・黒色粒	埋土4	良好		
212	C22		SI52	甕	脚部	-	-	(5.7)	(8.2)	(3.3)	-	-	5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	床直1	良好		
213	C22		SI52	甕	脚部	-	-	(7.0)	(8.7)	(2.9)	-	-	10R6/4 にぶい赤橙	10R6/4 にぶい赤橙	10R5/4 赤褐	石英・角閃石・白色粒・灰色粒・黒色粒	8	良好		
214	C20		SI52	甕	脚部	-	-	(6.0)	(7.4)	(2.5)	-	-	2.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	2.5YR4/4 にぶい赤褐	石英・灰色粒・黒色粒	一括	良好		
215	C20		SI52	壺	頸部	-	-	-	-	-	-	-	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR5/1 褐灰	石英・長石・黒曜石	床直22	良好	内外面ともハケメ	
216	C20		SI52	壺	底部	-	-	(2.4)	-	-	-	-	2.5YR7/3 淡赤橙	2.5YR7/4 淡赤橙	2.5YR7/3 淡赤橙	石英・角閃石・白色粒・茶色粒	床直24	良好		
217	C22		SI52	高杯	杯部	(30.0)	-	-	-	-	-	-	10R6/4 にぶい赤橙	10R6/4 にぶい赤橙	10R5/4 赤褐	石英・角閃石・黒色粒	床直9	良好		
218	C22		SI52	鉢	完形	7.3	5.1	1.7	-	-	-	-	5YR7/3 にぶい橙	5YR8/3 淡橙	10R5/6 赤	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	12	良好		
219	C22		SI52	壺	底部	-	-	-	-	-	-	-	5YR6/6 橙	10YR8/4 浅黄橙	5YR6/6 橙	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	埋土11	良好		
224	C24	8		高杯	脚部	-	-	5.0	12.6	-	-	-	7.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	10YR8/2 灰白	石英・長石・赤色粒	52	良好	脚部内面炭化物付着 外面赤色顔料塗布	
227	-	9		甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	石英・角閃石・赤色粒・黒色粒	一括	良好		

表7 土器観察表4

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法 (cm)							色調				混和材	取上番号	備考	備考2
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	突部幅	その他	内面	外面	断面	丹				
228	C22	9		甕	口縁部 ~胴部	(34.0)	-	-	-	-	1.0	-	10YR7/2に ぶい黄橙	7.5YR6/3 にぶい黄	10YR7/2に ぶい黄橙		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒	829・833・ 907	良好	突部
229	C22	9		甕	口縁部 ~胴部	(24.3)	-	-	-	-	1.3	-	10R6/6赤 橙	2.5YR5/4に ぶい赤褐	2.5YR6/4に ぶい橙		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒・黒色粒	Pt82	良好	刻目突部
230	C24	9		甕	口縁部 ~突部	(17.7)	-	-	-	-	0.6	-	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR5/3 にぶい赤褐	2.5YR6/4に ぶい橙		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	229	良好	刻目突部
231	C22	9		甕	口縁部 ~胴部	(24.0)	-	-	-	-	(0.5)	-	5YR7/4に ぶい橙	2.5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR6/6橙		石英・角閃石・茶 色粒		良好	
232	C22	9		甕	口縁部 ~突部	-	-	-	-	-	0.8	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6橙		石英・角閃石・茶 色粒	P37	良好	突部
233	C22	9		甕	口縁部 ~胴部	(26.8)	-	-	-	-	1.0	-	10YR7/1灰 白	2.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/2に ぶい黄橙		石英・長石・角閃石	P54	良好	刻目突部
234	C23	9		甕	口縁部 ~胴部	(23.0)	-	-	-	-	1.5	-	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/2 灰褐	2.5YR7/4淡 赤橙		石英・角閃石・茶 色粒・黒色粒	445・446	良好	突部(斜め刻目)
235	C21	9		甕	口縁部 ~胴部	(28.4)	-	-	-	-	1.3	-	5YR8/4淡 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/4に ぶい橙		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	107	良好	突部
236	C22	9		甕	口縁部	(22.0)	-	-	-	-	-	-	10YR7/2に ぶい黄橙	10R6/3に ぶい赤橙	5YR7/2明褐 灰		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒	589・649	良好	
237	C22	9		甕	口縁部	-	-	-	-	-	0.9	-	5YR6/3に ぶい橙	2.5YR6/3 にぶい橙	2.5YR5/6明 赤褐		石英・角閃石・赤 色粒	897	良好	刻目突部
238	C23	9		甕	口縁部 ~胴部	-	-	-	-	-	1.2	-	5YR7/4に ぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6橙		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	435	良好	刻目突部
239	C22	9		甕	口縁部 ~胴部	-	-	-	-	-	1.2	-	2.5YR6/6 橙	N7/灰白 2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6橙		石英・長石・角閃石・ 赤色粒	392	良好	突部
240	C23	9		甕	口縁部 ~胴部	-	-	-	-	-	-	-	5YR6/4に ぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4にぶ い橙		石英・長石・黒色粒・ 赤色粒	308	良好	刻目突部
241	C24	9		甕	口縁部 ~突部	-	-	-	-	-	0.8	-	5YR7/4に ぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐	5YR6/4にぶ い橙		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	202	良好	刻目突部
242	C22	9		甕	口縁部 ~突部	-	-	-	-	-	1.0	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6明 赤褐		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	P41	良好	刻目突部
243	C21	9		甕	口縁部 ~突部	-	-	-	-	-	2.0	-	10YR7/3に ぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/3に ぶい橙		石英・角閃石・白色 粒・灰色粒	106	良好	刻目突部(間隔 広い)
244	C22	9		甕	口縁部 ~胴部	-	-	-	-	-	1.1	-	10R6/6赤 褐	10R5/4赤 褐	10R5/4赤褐		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	695	良好	突部(鋸歯状刻 目)
245	C22	9		甕	口縁部 ~突部	-	-	-	-	-	1.0	-	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4に ぶい橙		石英・角閃石・雲母・ 白色粒	580	良好	刻目突部
246	C22	9		甕	口縁部 ~突部	-	-	-	-	-	1.2	-	5YR6/3に ぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	5YR7/2明褐 灰		石英・角閃石・赤 色粒	P42	良好	突部
247	C22	9		甕	胴部 ~脚部	-	-	7.0	(9.2)	2.4	-	-	2.5YR7/3 淡赤橙	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR8/2灰 白		石英・角閃石・茶 色粒・黒色粒	577	良好	
248	C23	9		甕	胴部 ~脚部	-	-	5.5	7.4	1.7	-	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	5YR8/3淡橙		石英・角閃石・白色 粒	304	軟質	胴部と脚部にス ス付着
249	C22	9		甕	脚部	-	-	8.9	8.7	1.9	-	-	5YR7/2明 褐灰	2.5YR7/4 淡赤橙	10YR7/3に ぶい黄橙		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	725	良好	底部の厚みが、 とても薄い
250	C24	9		甕	脚部	-	-	(7.0)	(10.0)	(3.5)	-	-	10R5/6赤 橙	5YR8/3淡 橙	10R6/6赤橙		石英・角閃石・茶 色粒・灰色粒	83	軟質	
251	C24	9		甕	脚部	-	-	-	9.0	-	-	-	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR5/2 灰褐	10R5/6赤		石英・角閃石・白色 粒	105	軟質	
252	C22	9		甕	胴部 ~脚部	-	-	5.9	7.2	2.4	-	-	10YR8/2灰 白	2.5YR6/6 橙	10YR8/1灰 白		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒	300	良好	
253	C22	9		甕	胴部 ~脚部	-	-	7.3	8.6	2.6	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR8/2灰 白	2.5YR7/6橙		石英・角閃石・白色 粒	582	軟質	
254	C22	9		甕	脚部	-	-	-	(8.4)	2.6	-	-	5YR8/3淡 橙	5YR8/4淡 橙	10YR7/2に ぶい黄橙		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	757	良好	
255	C22	9		甕	脚部	-	-	(8.3)	(9.6)	2.5	-	-	5YR7/4に ぶい橙	2.5YR7/4 淡赤橙	5YR8/2灰白		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色粒	765	良好	
256	C24	9		甕	脚部	-	-	(7.2)	(9.2)	(2.9)	-	-	2.5YR4/3 にぶい赤褐	5YR6/6橙	10R6/6赤橙		石英・透明鉱物・黒 色粒	195	良好	
257	C22	9		甕	脚部	-	-	7.5	9.7	2.3	-	-	10YR8/1灰 白	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR8/2灰 白		石英・角閃石・茶 色粒	P89	軟質	
258	C24	9		甕	胴部 ~脚部	-	-	(6.4)	(8.2)	(2.2)	-	器壁 3.0	2.5Y4/1黄 灰	2.5YR7/6 橙	2.5Y7/2灰黄		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒	214	軟質	
259	C23	9		甕	胴部 ~脚部	-	-	6.3	9.2	3.3	-	-	5YR8/3淡 橙	5YR7/3に ぶい橙	5YR8/2灰白		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒	457	良好	
260	C21	9		甕	脚部	-	-	5.6	8.8	2.6	-	-	10YR5/1褐 灰	10R6/6赤 橙	10R6/6赤橙		石英・角閃石・赤 色粒	42	良好	
261	C22	9		甕	胴部 ~脚部	-	-	(6.4)	(8.8)	(2.5)	-	-	2.5YR6/6 橙	10YR8/1灰 白	10YR8/1灰 白		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒・黒色粒	664	良好	
262	C24	9		甕	脚部	-	-	-	8.8	-	-	-	7.5YR6/3 にぶい褐	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6明 赤褐		石英・角閃石・白色 粒・赤色粒・黒色粒	157	良好	
263	C24	9		甕	脚部	-	-	6.0	8.9	2.6	-	-	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/3 淡赤橙	2.5YR7/3淡 赤橙		石英・角閃石・赤 色粒・黒色粒	150		
264	C24	9		甕	脚部	-	-	5.1	(6.4)	2.0	-	-	10YR6/3に ぶい黄橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/4に ぶい橙		石英・角閃石・白 色粒・黒色粒	64	良好	
265	C22	9		甕	脚部	-	-	5.2	(6.3)	1.3	-	-	10YR5/1褐 灰	5YR7/6橙	10YR5/1褐 灰		石英・角閃石・茶 色粒	603	軟質	
266	C24	9		甕	脚部	-	-	(2.3)	(6.0)	(8.0)	-	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6明 赤褐		石英・角閃石・黒 色粒	66	軟質	
267	C23	9		甕	脚部	-	-	5.2	7.2	2.5	-	-	2.5YR6/8 橙	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6明 赤褐		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色 粒	447	良好	
268	C22	9		甕	脚部	-	-	(5.4)	7.6	(2.5)	-	-	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR4/1褐 灰	5YR7/4にぶ い橙		石英・角閃石	962	良好	外面に黒斑がみ られる
269	C22	9		甕	脚部	-	-	(4.2)	(5.4)	(1.6)	-	-	5YR7/6橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6明 赤褐		石英・角閃石・白色 粒	400	良好	
270	C22	9		甕	脚部	-	-	6.2	6.4	2.0	-	-	10R5/6赤 橙	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8明 赤褐		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色 粒	798	良好	
271	C24	9		甕	脚部	-	-	(6.2)	(7.4)	(2.0)	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR8/2灰 白	5YR8/3淡橙		石英・角閃石・白色 粒・茶色粒・黒色 粒	133	良好	
272	C22	9		甕	脚部	-	-	-	(10.2)	-	-	-	5YR6/4に ぶい橙	2.5YR7/4 淡赤橙	5YR7/4にぶ い橙		石英・角閃石・白色 粒・赤褐色粒	P67	軟質	3-5mm程度の 白色鉱物が含ま れている。脚台 底にスス付着

表 8 土器観察表 5

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法 (cm)						色調				混和材	取上番号	備考	備考 2
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	突帯幅	その他	内面	外面	断面				
273	C24	9		甕	脚部	-	-	8.1	-	-	-	-	10R5/4 赤褐灰	5YR7/2 明赤褐	10R5/4 赤褐	石英・角閃石・白色粒・茶色粒	79	良好	
274	C22	9		甕	底部	-	-	9.4	-	-	-	-	5YR8/4 淡赤	5YR7/4 にぶい黄	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・赤褐色粒・黒色粒	P39	軟質	底面は楕円形と呈する
275	C22	9		甕	脚部	-	-	(6.6)	(8.0)	(1.8)	-	-	5YR6/3 にぶい黄	5YR6/6 橙	2.5YR7/4 淡赤	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	919	軟質	
276	C20	9		甕	脚部	-	-	6.1	6.5	1.8	-	-	7.5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄	2.5YR6/4 にぶい黄	石英・角閃石・白色粒	7	良好	
277	C22	9		壺	口縁部	(12.0)	-	-	-	-	-	-	10R6/4 にぶい赤	10R6/4 にぶい赤	10R6/6 赤	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒・黒色粒	903	良好	
278	C22	9		壺	底部	-	-	5.5	-	-	-	-	10YR6/1 褐灰	10YR7/3 にぶい黄	5YR5/3 にぶい赤	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	858	良好	外面の底部は雑な工具ナデ
279	C22	9		壺	底部	-	-	(5.8)	-	-	-	-	5YR8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白	石英・角閃石・茶色粒	677	良好	
280	C22	9		壺	底部	-	-	4.7	-	-	-	-	7.5YR8/4 浅黄	7.5YR7/4 にぶい黄	10R6/4 にぶい赤	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	861	軟質	
281	C22	9		壺	底部	-	-	(3.6)	-	-	-	-	5YR7/4 にぶい黄	7.5YR8/4 浅黄	2.5YR6/4 にぶい黄	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	48	良好	外面に黒斑がみられる
282	C22	9		高杯	杯部	(16.2)	-	(4.5)	-	-	-	-	2.5YR7/3 淡赤	2.5YR6/6 橙	2.5Y7/2 灰黄	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	639	良好	
283	C22	9		高杯	杯部～脚部	-	-	5.5	-	-	-	-	10R6/6 赤	2.5YR7/4 淡赤	2.5YR7/2 明赤	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒・黒色粒	769	良好	杯部内面にスス付着
284	C22	9		高杯	杯部～脚部	-	-	5.2	8.1	4.0	-	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5YR7/6 橙	2.5Y8/1 灰白	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	723	良好	
285	C22	9		高杯	脚部	-	-	-	(15.4)	9.0	-	-	10R5/6 赤	10R6/6 赤	10R6/6 赤	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	551・951	良好	
286	C22	9		高杯	脚部	-	-	3.3	9.4	6.2	-	-	10YR4/1 褐灰	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・赤褐色粒	960	良好	
287	C24	9		甕	脚部	-	-	-	(10.0)	-	-	-	2.5YR7/3 淡赤	7.5YR8/3 淡黄	10R5/6 赤	石英・角閃石・白色粒・茶色粒	304	良好	
288	C 21	9		鉢	口縁部～脚部	20.0	14.3	5.4	2.5	8.1	-	-	10R6/4 にぶい赤	10R5/3 赤	-	黒色粒	28	良好	
289	C24	9		鉢	口縁部	(11.0)	-	-	-	-	-	-	5YR5/8 明赤	5Y3/1 オリーブ黒	2.5Y6/3 にぶい黄	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	1342	良好	内外面ともにていねいなナデ
290	C21	9		甕 or 鉢	脚部	-	-	(9.0)	(6.5)	(2.5)	-	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR7/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	南壁 26	軟質	
291	C22	9		鉢	脚部	-	-	(6.2)	-	-	-	-	5YR4/1 褐	2.5YR7/4 淡赤	2.5YR7/4 淡赤	石英・角閃石・白色粒	655	良好	
292	C22	9		鉢	脚部	-	-	5.4	7.2	1.6	-	-	5YR8/4 淡	5YR7/4 にぶい黄	10R6/6 赤	石英・角閃石・赤褐色粒・黒色粒	583	良好	
293	C24	9		鉢	底部	-	-	-	-	-	-	-	7.5YR7/2 明褐	2.5YR6/8 橙	10YR8/2 灰白	石英・角閃石・透明・白色粒	243	良好	内面底にスス付着
294	C22	9		鉢	底部	-	-	(9.8)	-	-	-	-	10R4/1 暗赤	10R6/6 赤	10R6/6 赤	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	678	良好	底部 外面にしっかりと指ナデの跡が見られる
295	C22	9		鉢	底部	-	-	5.8	-	-	-	-	10YR6/2 灰黄	2.5YR7/8 橙	2.5YR7/6 橙	石英・角閃石・赤褐色粒・黒色粒	P41	良好	3mm 大の赤褐色粒子を胎土に含む
296	C21	9		鉢 or 壺	底部	-	-	(3.4)	-	-	-	-	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい黄	10YR6/2 灰黄	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	20	良好	外面に黒斑がみられる
297	C22	9		鉢 or 壺	底部	-	-	(2.0)	-	-	-	-	10R6/6 赤	2.5YR7/4 淡赤	10R6/6 赤	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	752	良好	丸底に近い
298	C20	9		鉢	胴部～底部	-	-	(4.5)	-	-	-	-	7.5YR6/3 にぶい黄	7.5YR6/3 にぶい黄	7.5YR6/2 灰褐	角閃石・白色粒	21	良好	
299	C22	9		罎	口縁部～底部	10.0	5.2	1.7	-	-	-	-	2.5YR7/4 淡赤	2.5YR6/4 にぶい黄	2.5YR6/4 にぶい黄	石英・角閃石・白色粒	945	良好	径 1.7 cm の突起がついている
300	C23	9		罎	口縁部～底部	6.3	5.3	-	-	-	-	-	2.5YR7/2 明赤	7.5YR6/1 褐	10YR7/1 灰白	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	733	良好	
301	C22	9		罎	口縁部～底部	(8.7)	7.8	3.9	-	-	-	-	10R6/6 赤	10R6/6 赤	2.5 Y 7/2 灰黄	石英・角閃石・白色粒・茶色粒・黒色粒	999	良好	
302	C23	9		罎	口縁部～胴部	(9.6)	-	-	-	-	-	頸部径 7.6	2.5YR7/4 淡赤	10R6/6 赤	10R6/4 にぶい赤	石英・角閃石・橙褐色粒・茶色粒	456	良好	口縁部は工具ナデ
303	C22	9		罎	口縁部～胴部	(7.8)	-	-	-	-	-	-	2.5YR5/6 明赤	2.5YR6/6 橙	2.5YR4/2 灰赤	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	667	良好	
304	C22	9		罎	胴部	-	-	-	-	-	-	胴部最大径 (5.3)	5YR7/4 にぶい黄	7.5YR8/3 浅黄	7.5YR8/3 浅黄	石英・長石・赤褐色粒・黒色粒	952.167	良好	外面黒斑あり
305	C22	9		罎	胴部～底部	-	-	-	-	-	-	胴部最大径 (6.4)	2.5YR6/4 にぶい黄	5YR7/4 にぶい黄	10R6/8 赤	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	957	良好	
306	C23	9		罎	胴部～底部	-	-	-	-	-	-	-	2.5YR6/3 にぶい黄	5YR6/4 にぶい黄	2.5YR6/3 にぶい黄	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	398	良好	
307	C24	9		罎	胴部～底部	-	-	-	-	-	-	胴部最大径 (14.7)	7.5YR5/3 にぶい黄	5YR5/4 にぶい赤	10R5/6 赤	石英・角閃石・白色粒	219	良好	
308	C22	9		罎	肩部～胴部	-	-	-	-	-	-	胴部最大長 (14.7)	2.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR7/3 にぶい黄	5Y7/1 灰白	石英・長石・赤褐色粒・黒色粒	963.160	良好	外面黒斑あり
309	C22	9		壺	胴部～胴部	-	-	-	-	-	-	胴部最大長 (11.0)	5YR7/4 にぶい黄	5YR6/4 にぶい黄	5YR7/4 にぶい黄	石英・長石・赤褐色粒・黒色粒	P5.174	良好	
310	C22	9		ミニチュア土器	胴部～底部	-	-	(3.0)	-	-	-	-	2.5YR5/6 明赤	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	石英・角閃石・白色粒・茶色粒	P11.P14	良好	P11.P14 接合
311	C22	9		ミニチュア土器	口縁部～底部	(6.8)	6.6	2.5	-	-	-	-	10R6/4 にぶい赤	10R5/4 赤	10R6/4 にぶい赤	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	935	良好	
312	C22	9		ミニチュア土器	口縁部～底部	5.1	3.3	-	-	-	-	-	7.5YR7/4 にぶい黄	7.5YR7/4 にぶい黄	7.5YR6/3 にぶい黄	石英・角閃石	631	良好	手づくね
313	C21	9		ミニチュア土器	口縁部～底部	(5.9)	4.5	(2.5)	-	-	-	-	7.5YR7/3 にぶい黄	5YR7/3 にぶい黄	2.5YR6/6 橙	石英・角閃石・白色粒	33	良好	
314	C21	9		ミニチュア土器	口縁部～底部	(4.6)	4.5	-	-	-	-	-	5YR7/1 明褐	5YR7/1 明褐	5YR7/1 明褐	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	61	良好	
315	C24	9		ミニチュア土器	胴部～脚部	-	-	4.1	-	-	-	-	5YR6/3 にぶい黄	5YR6/3 にぶい黄	5YR7/3 にぶい黄	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	210	良好	
316	C23	9		鍋 or 甕	把手	3.5 (最大幅)	(5.7) (最大径)	2.9 (最大厚)	-	-	-	-	2.5YR5/2 明赤	2.5YR5/2 明赤	2.5YR5/2 明赤	石英・長石・黒色粒	464.175	良好	
317	C23	9		土製勾玉	頭部	1.4 (最大幅)	(2.9) (最大径)	1.3 (最大厚)	-	-	-	-	5YR7/4 にぶい黄	10YR8/2 灰白 (首)	10YR8/2 灰白	石英・長石・雲母・赤褐色粒	458	良好	丁字頭勾玉
318		9		須恵器杯	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
356	C23	6		甕	口縁部～胴部	(28.1)	-	-	-	-	1.3	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英・長石	P3.181	良好	絡繩突帯

表9 土器観察表6

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法 (cm)						色調				混和材	取上番号	備考	備考2		
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	突帯幅	その他	内面	外面	断面					丹	
357	C22	6		甕	脚部	-	-	(7.0)	(9.7)	3.0	-	-	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/2 に ぶい黄橙	10YR7/2 に ぶい黄橙		石英・長石	91.200	やや良好	外面スス付着	
358	C22	6		甕	脚部	-	-	(5.9)	(6.6)	1.7	-	-	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	2.5YR5/3 に ぶい赤褐		石英・角閃石・白色 粒	203	良好		
359	C22	6		甕	底部	-	-	(8.4)	-	-	-	-	10YR7/3 に ぶい黄橙	10YR7/3 に ぶい黄橙	10YR7/3 に ぶい黄橙		石英・長石・黒曜石	201.114. 117.116	やや良好	内面コゲ付着。 胎土に3ミリ大 の礫含む。	
360	C22	6		杯	口縁部 ～底部	(13.4)	5.8	(8.6)	-	-	-	-	10YR7/4 に ぶい黄橙	10R6/6 赤 褐	10YR7/4 に ぶい黄橙		石英・角閃石・白色 粒・黒色粒	90	良好		
361		6		土師器蓋	ツمام ～基部	18.4	3.0	-	-	-	-	ツمام径 6.1	7.5YR7/4 に ぶい黄橙	5YR5/6 明 赤褐			石英・赤色粒		良好		
362	C22	6		土師器杯	口縁部 ～高台	(13.3)	4.5	高台径 (8.2)	-	高台高 0.9	-	-	10YR7/6 明 黄褐	7.5YR6/6 橙	10YR8/3 浅 黄橙		石英・角閃石・褐色 粒	13	良好		
363	C23 C22・ 23	6		土師器杯	口縁部 ～高台	(15.3)	5.7	高台径 (8.8)	-	高台高 0.6	-	-	10YR7/3 に ぶい黄橙	10YR7/3 に ぶい黄橙	10YR7/3 に ぶい黄橙			35・100・ 101・ 160・ 207	良好	高台内見込み部 に「府」字が墨 書されている	
364	C23	6		土師器杯	口縁部 ～底部	(12.8)	4.2	(8.6)	-	-	-	-						1・3	良好		
365		6		土師器杯	口縁部 ～底部	12.9	3.8	7.7	-	-	-	-	10YR8/4 浅 黄橙	7.5YR8/6 黄橙	10YR8/4 浅 黄橙				良好		
366	C23	6		土師器杯	口縁部 ～底部	(17.8)	5.0	(10.0)	-	-	-	-	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙		赤色粒・茶色粒・黒 色粒	埋南15・ 16	良好		
367	C23	6		土師器甕	口縁部 ～胴部	-	-	-	-	-	-	-					石英・白色粒・外	86	良好		
368	C23	6		土師器甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-						79・103・ 105	良好		
369	C23	6		土師器甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-					白色粒・外	一般	良好		
370	C23	6		土師器甕	口縁部	(25.9)	-	-	-	-	-	-					白色粒・外		97・98・ 99・100・ 106・107・ 109	良好	
371	C22	6		甕	口縁部～ 突帯部	-	-	-	-	-	-	-					石英・角閃石・白色 粒・外	225・292	良好	突帯	
372	C22	6		甕 (折衷型)	口縁部 ～胴部	21.0	-	-	-	-	0.8	-						15・17・ 61	良好	突帯/折衷型	
373	C22 C23	6		須恵器杯 蓋	基部	(18.7)	-	-	-	-	-	-	2.5Y6/2 灰 黄	10YR6/1 褐 灰	2.5Y7/1 灰白		角閃石・白色粒	238・534	良好	№15・17・61	
374	C23	6		須恵器杯 蓋	ツمام ～基部	(17.3)	2.3	-	-	-	-	ツمام径 2.7	7.5YR5/3 にぶい褐	N7/1 灰白	10Y6/1 灰		石英・白色粒	165	良好		
375	C22	6		須恵器杯 蓋	基部	16.4	-	-	-	-	-	-	N6/ 灰	7.5Y6/1 灰	N6/ 灰		白色粒		33・36・ 37・82・ 126	良好	
376	C23	6		須恵器杯	口縁部 ～高台	(16.2)	7.4	高台径 (11.2)	-	高台高 0.5	-	-	2.5Y7/4 浅 黄	10YR6/4 に ぶい黄橙	2.5Y7/4 浅黄		白色粒・黒色粒	30・31	良好		
377	C22 C23 23	6		須恵器杯	口縁部 ～高台	13.4	4.5	高台径 7.4	-	高台高 0.3	-	-						41・67・ 72・73・ 93・95・ 157	良好	高台内見込み部 に墨書あり	
378	C23	6		須恵器杯	口縁部 ～高台	12.1	3.6	高台径 8.4	-	高台高 0.3	-	-	10Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰		白色粒・黒色粒	29	良好	高台内は工具に よるナデ	
379	C23	6		須恵器杯	口縁部 ～高台	(15.0)	3.9	高台径 (10.8)	-	高台高 0.5	-	-	7.5Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰	10Y7/1 灰白		白色粒・黒色粒	19・22	良好		
380	C23	6		須恵器杯	口縁部 ～高台	(11.2)	3.3	高台径 (7.8)	-	高台高 0.3	-	-	2.5Y7/1 灰 白	N7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白		白色粒	埋南25	良好		
381	C24	6		須恵器杯	高台	-	-	高台径 (7.2)	-	高台高 0.4	-	-	N5/ 灰	N4/ 灰	N4/ 灰		白色粒	2	良好		
382		6		須恵器杯	口縁部 ～底部	13.5	3.0	10.0	-	-	-	-	N5/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰		石英・白色粒	62・63・ 65・66・ 70	良好		
383	C23	6		須恵器杯	口縁部 ～底部	(13.3)	3.4	(9.9)	-	-	-	-	10YR6/1 褐 灰	N4/ 灰	10YR5/1 褐 灰		白色粒・黒色粒	24	良好		
384		6		須恵器高 杯	口縁部 ～脚部	(15.2)	9.1	12.4	(9.6)	7.2	-	-	5YR5/2 灰 褐	5YR5/2 灰 褐					良好		
385	C22	6		須恵器長 頸壺	胴部	-	-	-	-	-	胴部最大径 11.0	-	10YR6/2 灰 黄褐	10YR2/2 黒 褐	10YR8/1 灰 白		黒色粒・白色粒	27・125	良好		
389	C24	5 (紫コ ラ2次 推積層)		甕	口縁部 ～胴部	(23.0)	-	-	-	-	1.7	-	10YR4/2 灰 黄褐	10YR5/2 灰 黄褐	10YR5/3 に ぶい黄褐		角閃石・白色粒		良好		
390	倒壊建物 東側 ベルト	5 (紫コ ラ2次 推積層)		甕	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	10YR3/1 黒 褐	10YR3/1 黒 褐	10YR6/3 に ぶい黄橙		石英・白色粒		良好		
391	倒壊建物 東側 ベルト	5 (紫コ ラ2次 推積層)		甕	胴部～ 脚部	-	15.9	-	16.3	-	-	-	2.5Y4/1 黄 灰	2.5Y7/3 浅 黄	2.5Y4/1 黄灰		白色粒		良好	内外面が黒変・内 面底にコゲ。脚台 内外に被熱による 白色化がみられる。 ※外面下半に粘 土厚く付着し帯 状。	
392	倒壊建物 東側 ベルト	5 (紫コ ラ2次 推積層)		甕	突帯部	-	-	-	-	-	-	-	10YR4/1 褐 灰	10YR4/1 褐 灰	10YR4/1 褐 灰		石英・白色粒		良好	内外ともに、敷 式甕と類似。突帯 は下がり、上面に ユビオサエ	
393	倒壊建物 東側 ベルト	5 (紫コ ラ2次 推積層)		小壺	完形	(10.2)	20.8	-	14.0	-	-	胴径 14.0	2.5YR6/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙		石英・白色粒・黒色 粒		良好	胴部ゆがみ。丸 底。上半は指宿 色。		
394	倒壊建物 東側 ベルト	5 (紫コ ラ2次 推積層)	5	須恵器杯	完形	14.9	4.7	7.6	-	-	-	-	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰		石英・白色粒・外		良好		
395	C23	5 (紫コ ラ2次 推積層)		須恵器長 頸壺	胴部～ 底部	-	-	(7.0)	-	-	-	-	10YR6/3 に ぶい黄橙	7.5YR3/3 暗褐	10YR7/2 に ぶい黄橙		白色粒・茶色粒・黒 色粒	焼土 P24	良好		
396	C23	5 (紫コ ラ2次 推積層)		須恵器	胴部	-	-	-	-	-	-	-	N5/ 灰	N5/ 灰	7.5YR4/1 褐 灰		白色粒	P24	良好		

表 10 石器観察表 1

番号	区	層	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
2	G20	-	SI-1	剥片	頁岩	2.5	2.76	0.5	4.2	-	石包丁?
6	C20	-	SI7	滑石製模造品	滑石	3.9	2.7	0.3	6	-	勾玉?鏡?
7	C20	-	SI7	磨製石鏃	頁岩	3.35	2.04	0.27	2.2	埋土	
8	C20	-	SI7	軽石製加工品	軽石	8.04	7.45	2.95	71.2	-	
14	C20	-	SI8	磨製石器	頁岩	1.85	2.2	0.33	1.2	床直 11	刃部
15	C20	-	SI8	砥石	安山岩	6.14	7.38	4.6	802.6	床直 6	
16	C21	-	SI8	軽石製加工品	軽石	4.93	4.27	3.9	28.9	床直?	
17	C20	-	SI8	軽石製加工品	軽石	4.05	3.6	1.82	5	床直?	
19	C20	-	SI9	砥石	ホルンフェルス	23.6	8.98	4.05	1131.4	床直 1~4	
20	C20	-	SI9	砥石	砂岩	16.7	6.8	6.1	1127.9	床直 3	
32	C21	-	SI10	打製石斧	頁岩	10.5	6.7	0.88	73.9	床下	
40	C21	-	SI12	磨製石器	頁岩	5.24	2.98	0.52	9.7	埋土 5	
41	C21	-	SI12	磨石	安山岩	13.5	7.38	5.45	790.1	埋土 8 (1~10)	
42	C21	-	SI12	砥石	安山岩	13.07	6.27	4.5	549.4	埋土 10	
43	C21	-	SI12	軽石製加工品	軽石	5.88	3.2	2.3	26.7	床直 30	
44	C21	-	SI12	軽石製加工品	軽石	6.32	5.51	2.55	17.4	床直 37	
45	C21	-	SI12	軽石製加工品	軽石	10.4	4.62	3.75	76.1	埋土 2	
52	C21	-	SI13	剥片	頁岩	3.61	2.8	0.6	7.1	-	
53	C21	-	SI13	軽石製加工品	軽石	7.84	6.6	1.2	67.4	南カベ	
54	C21	-	SI13	軽石製加工品	軽石	7.93	5.4	2.7	43.4	床直 16	
58	C21	-	SI14	台石	安山岩	30.6	30.65	7.7	1007	床直 1	金床石?
77	C21	-	SI17	砥石	頁岩	11.4	3.3	1.85	81.9	床直 19	
86	C21	-	SI19	軽石製加工品	軽石	5.25	3.85	2.35	16.1	埋土 1	穿孔・線刻
87	C21	-	SI19	軽石製加工品	軽石	4.38	2.78	1.47	3.8	床直	
104	C23	-	SI21	加工痕のある剥片	ホルンフェルス(?)	3.8	3.25	1.24	15.5	-	二次剥離痕
105	C21	-	SI21	加工痕のある礫石器	砂岩	8.75	5.4	2.55	180.7	床直	
106	C21	-	SI21	凹石	安山岩	9.94	7.37	6.1	586.9	床直 6	
107	C21	-	SI21	砥石	砂岩	7.67	3.42	1.5	41.5	埋土 20	
108	C22	-	SI21	砥石	砂岩	2.9	2.6	1.4	15	埋土	
109	C21	-	SI21	軽石製加工品	軽石	4.28	2.75	1.82	8.5	埋土	凹部 2
112	-	-	SI24	軽石製加工品	軽石	2.42	3	0.85	1.7	埋土	
113	C22	-	SI25	磨製石鏃	頁岩	4.3	2.05	0.41	4.5	埋土	
114	C22	-	SI26	凹石	安山岩	10.58	9.24	6.5	1029.4	床直 10	
115	C22	-	SI26	台石	安山岩	13.22	7.89	4.5	627.5	床直 12	
116	C22	-	SI26	軽石製加工品	軽石	5.08	3.1	1.85	5.8	床直 17	線刻
117	C22	-	SI26	軽石製加工品	軽石	7.12	7.08	4.12	89	床直 9	
119	C22	-	SI27	磨製石斧	頁岩	5.21	2.94	0.6	10.2	床直 6	基部
120	C22	-	SI27	軽石製加工品	軽石	6.39	4.99	4.2	49.6	床直 3	
127	C21	-	SI28	磨製石鏃	頁岩	4.8	2.76	0.5	7.4	床直 2	
128	C21	-	SI28	軽石製加工品	軽石	2.63	4.42	1.6	4.5	床直 6	線刻
131	C21	-	SI29	剥片	黒曜石	2.94	1.87	0.5	2.7	-	
132	C22	-	SI29	磨石	安山岩	3.9	3.6	3.15	56.3	埋土 2	
134	C23	-	SI33	加工痕のある剥片	頁岩	3.28	2.03	0.47	3.7	-	
135	C23	-	SI33	楔形石器	鉄石英	2.6	1.44	0.8	3.5	床直 19	
136	C23	-	SI33	磨石	安山岩	13.1	10.1	6	1239.8	床直 5	磨面 3
137	C23	-	SI33	砥石	砂岩	24.93	8.3	8.7	1961.2	床直 9	
138	C23	-	SI33	砥石?石皿?	頁岩	8.78	8.1	2.1	220.1	床直 8	
144	C22・C23	-	SI34	磨石?	砂岩	4.8	4.35	1.45	25.3	埋土	
148	C23	-	SI35	磨製石斧?	頁岩	4.85	3.45	0.9	21.1	埋土	基部?
154	C23	-	SI37	子持勾玉	滑石	8.9	5	3.1	122	-	
155	C23	-	SI37	磨製石鏃	頁岩	4.22	4.06	0.5	12.1	埋土 1	
156	C23	-	SI37	砥石	砂岩	4.1	2.45	0.85	12.9	埋土	
157	C23	-	SI37	砥石	砂岩	5.92	2.65	1.9	59.7	埋土	砥面 4
158	C23	-	SI37	軽石製加工品	軽石	4.35	4.72	3.12	13.3	埋土	
159	C23	-	SI38	加工痕のある剥片	頁岩	2.8	2.78	0.32	2.8	-	
164	C23	-	SI39	磨製石鏃	頁岩	6.12	3.73	0.52	14	床直	
165	C23	-	SI39	磨石	安山岩	6.85	5.8	4.3	239.1	床直 3	
166	C23	-	SI39	凹石	安山岩	13.03	12.68	14.1	2000	埋土 1	
170	C23	-	SI41	石包丁破片	頁岩	1.48	2.22	0.38	1	床直 6	穿孔
171	C23	-	SI41	磨石	安山岩	6.6	4.1	3.2	123.6	床直 20	
172	C23	-	SI41	磨石	安山岩	6.05	5.2	1.45	76.3	床直 11	
173	C23	-	SI41	磨石	安山岩	8.2	6.1	5.2	371.7	床直 22	
179	C23	-	SI42	磨石	安山岩	8	6.3	1.5	117.9	床直 8	磨面 2
190	C23	-	SI46	磨製石器片	頁岩	2.96	2.87	0.38	4.1	床直 11	
191	C23	-	SI46	磨石	安山岩	7.6	5.95	1.2	91	床直 5	
192	C23	-	SI46	凹石	花こう岩	4.57	6.48	5	176.2	土壇・床	
193	C23	-	SI46	石皿	安山岩	12.6	8.88	7.45	1170.2	床直 7	
194	C23	-	SI46	砥石	砂岩	13.6	4.7	2.35	170.9	埋土 1	両面砥面
195	C23	-	SI46	軽石製加工品	軽石	9.91	7.76	4.95	82.1	床直 1	
198	C24	-	SI48	加工痕のある石器	砂岩	4.43	5.07	1.03	26.7	-	
199	C24	-	SI48	軽石製加工品	軽石	6.64	3.72	1.65	14.7	1	舟形

表 11 石器観察表 2

番号	区	層	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
200	C24	-	SI48	軽石製加工品	軽石	9.15	5.37	4.32	46.6	埋土 13	穿孔?
204	C24	-	SI50	打製石斧	ホルンフェルス	7.4	5.55	1.48	70.5	4	
205	C24	-	SI50	敲石	安山岩	11.3	5.5	4.55	458.9	床 1	
206	C24	-	SI50	凹石	凝灰岩?	5.8	5.8	3.45	187.8	3	
207	C24	-	SI50	砥石	頁岩	8	2.65	1.1	36.5	床 3	
220	C20	-	SI52	磨石	安山岩	13.08	8.69	5.23	928.5	床直 27	
221	C22	-	SI52	凹石	安山岩	8.3	7.5	5.35	470.4	床底 4	凹部 3
222	C21	-	SI52	軽石製加工品	軽石	5.8	3.58	2.07	12.2	床直 5	石包丁形?
223	C22	-	溝	凹石	ホルンフェルス	10.8	8.83	4.6	479	溝埋土	
225	C24	8	-	石鏃	頁岩	4.3	2.12	0.35	4	45	三角鏃
226	C24	8	-	台石	安山岩	11.92	16.72	4.81	1060.4	31	研磨痕
319	C24	9	-	磨製石鏃	頁岩	3.9	2.46	0.52	6.1	189	
320	C24	9	-	加工痕のある剥片	頁岩	4.73	3.25	0.7	13.3	117	
321	C24	9	-	打製石斧	ホルンフェルス	6.85	5.5	2.05	113.8	82	
322	C24	9	-	打製石斧片?	頁岩	7.52	5.89	0.88	63.5	70	
323	C22	9	-	打製石鏃未成品	頁岩	4.59	2.8	0.63	7.5	631	
324	C22	9	-	打製石器	頁岩	3.98	6.46	0.6	21.8	964	
325	C24	9	-	不明	砂岩	8.5	3.4	1.45	43.3	132	
326	C23	9	-	磨石	砂岩	10.63	4.3	3	205.6	273	
327	C22	9	-	敲石	安山岩	12.7	5.94	1.73	242.7	931	
328	C24	9	-	磨石	安山岩	6.8	6.72	6	451	143	
329	C24	9	-	敲石	安山岩	9.35	6.67	4.8	442.3	239	
330	C24	9	-	磨・敲石?	砂岩	13.8	3.79	1.7	91.3	146	
331	C24	9	-	敲石	安山岩	5.25	7.35	6	261.7	68	
332	C23	9	-	磨石	安山岩	9.9	7.2	4.7	470.4	436	
333	C24	9	-	磨石	砂岩?	8.7	5	2.1	118.7	186	
334	C22	9	-	磨石	安山岩	7.98	5.97	4.7	305.7	641	
335	C24	9	-	台石破片?	砂岩	8.3	6.55	4.45	376.9	62	
336	C24	9	-	磨石	安山岩	4.75	4.2	1.1	38.4	139	
337	C23	9	-	凹石	安山岩	8.93	7.62	3.35	364.3	459	
338	C22	9	-	凹石	安山岩	16.32	11.23	3.48	1053.9	905	
339	C22	9	-	台石	ホルンフェルス	13.5	12.73	2.6	754.2	923	
340	C24	9	-	砥石	細粒砂岩	3.85	2.4	0.5	10.2	189	
341	C24	9	-	砥石	細粒砂岩	3.15	3.15	0.95	11.9	187	
342	C24	9	-	砥石	砂岩	6.08	8.59	3.25	230.1	72・58	細長い凹部 4
343	C24	9	-	砥石	砂岩	9.65	8.6	2.51	302.7	162	
344	C22	9	-	砥石	砂岩	11.25	7.11	2.48	204	941	
345	C23	9	-	軽石製加工品	軽石	3.75	3.13	3.1	9.8	932	魚形
346	C23	9	-	軽石製加工品	軽石	5.3	3.88	1.8	9.9	441	
347	C24	9	-	軽石製加工品	軽石	5.78	3.55	2.9	13.5	155	舟形
348	C24	9	-	軽石製加工品	軽石	6.23	5.4	4.6	34.6	91	
349	C24	9	-	軽石製加工品	軽石	3.9	6.1	2.12	11.1	231	魚形
350	C23	9	-	軽石製加工品	軽石	7.63	5.22	2.32	47.7	400(住)	
386	C23	6	-	砥石片	細粒砂岩	8.2	5.7	2.41	107.2	埋南 27	

表 12 金属器観察表

番号	区	層	遺構	種類	器種	最大高	最大長	最大幅	取上番号	備考
3	C20	-	SI3	鉄器	袋状鉄斧	5.2	3.3	-	-	無肩
4	C20	-	SI3	青銅器	青銅鈴	2.0	1.5	体部高 1.5	-	
18	C20	-	SI8	青銅器	青銅鏡片	1.1	1.2	厚 0.45	-	縁部
59	C21	-	SI14	鉄滓	鍛冶滓	1.7	1.7	1.3	床直 5	
60	C21	-	SI14	鉄滓	鍛冶滓	1.95	2.1	2.01	床直 6	
61	C21	-	SI14	鉄滓	鍛冶滓	2.1	1.75		床直 6	
62	C21	-	SI14	鉄滓	鍛冶滓	2.0	1.7	1.1	床直 6	
63	C21	-	SI14	鉄滓	鍛冶滓	3.3	4.5	1.8	床直 6	
64	C21	-	SI14	鉄滓	鍛冶滓	2.7	3.3	2.0	床直 6	
351	C22	9	-	鉄器	鉄鏃基部	13.65	※ 3.1	※ 1.1	320	
352	C22	9	-	鉄器	鉄鏃基部	4.6	※ 1.7	※ 0.65	315	
353	C23	9	-	鉄器	鉄鏃基部	4.7	※ 1.3	※ 0.95	263	
354	C23	9	-	鉄器	刀子	※ 1.9	5.4	0.8	298	切先
355	C23	9	-	鉄器	刀子	※ 1.5	3.4	0.7	288	切先
387	C23	6	-	鉄器	針?	1.3	0.5	0.2	142	
388	C23	6	-	青銅器	帯金具 遼方	(3.5)	(5.2)	0.015		

※ 付きは鏃を含めた実測値

圖 版



図版 1



橋牟礼川遺跡空撮写真（赤表示がV区）



V区空撮写真（古墳時代竪穴建物全景）

# 図版3



1 古墳時代竪穴建物完掘状況（西から）



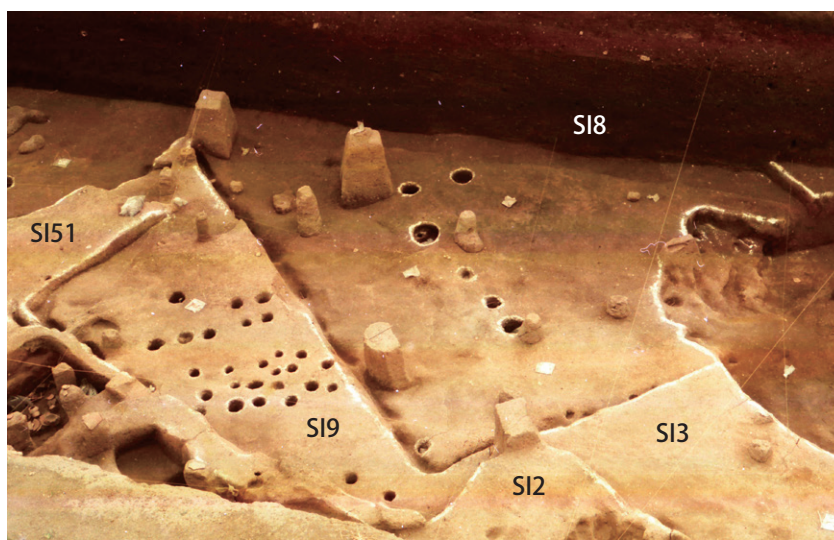
2 古墳時代竪穴建物完掘状況（東から）



1 SI3

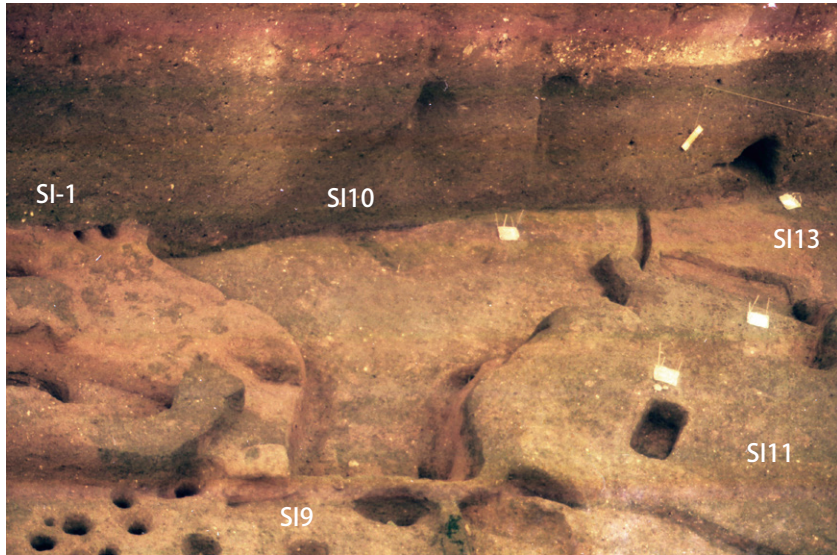


2 SI3

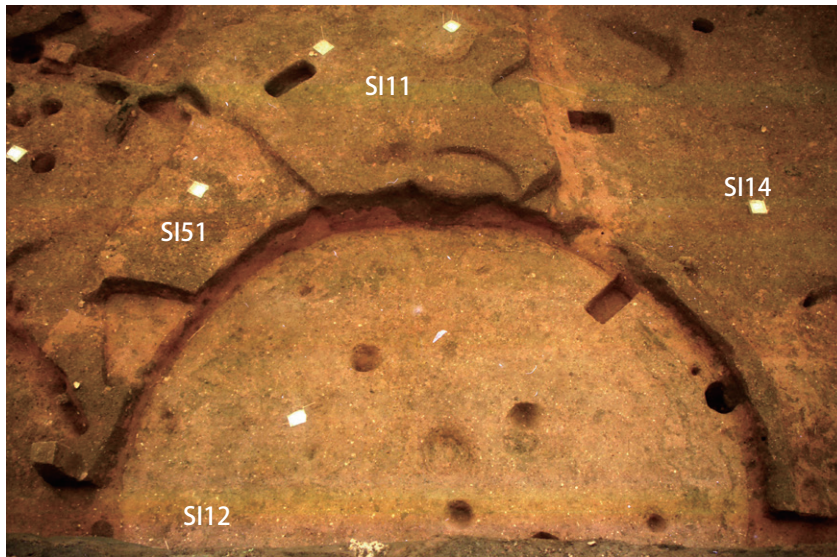


3 SI 8, SI 2, SI 9, SI51

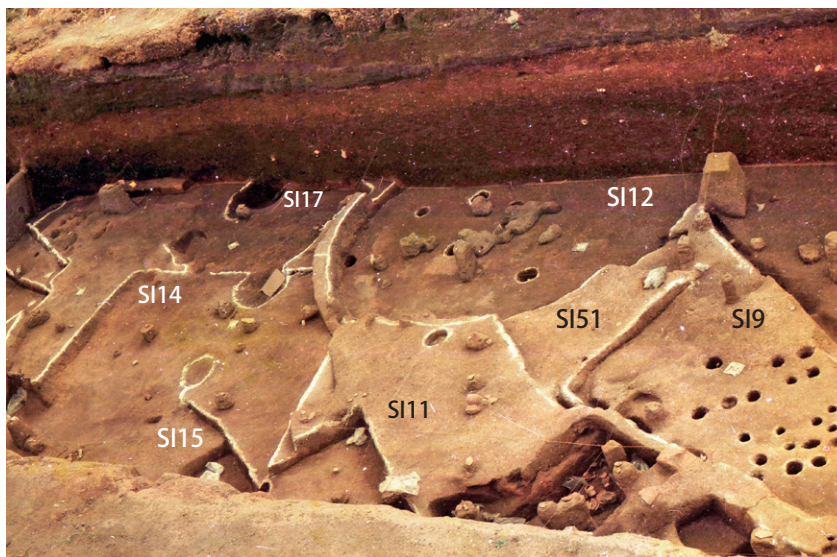
图版 5



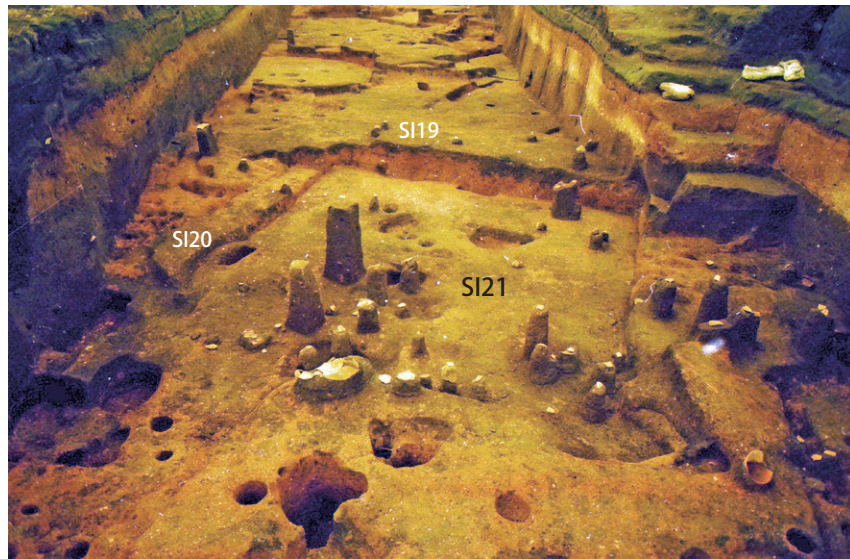
1 SI-1, SI-9, SI-10, SI-11, SI-13



2 SI-12, SI-11, SI-14, SI-51



3 SI-9, SI-11, SI-12, SI-14, SI-15, SI-17, SI-51



1 SI21, SI19, SI20



2 SI22



3 SI23, SI24, SI25, SI26, SI27, SI28, SI30, SI34, SI36, SI37

图版 7



1 SI24



2 SI26, SI24, SI25



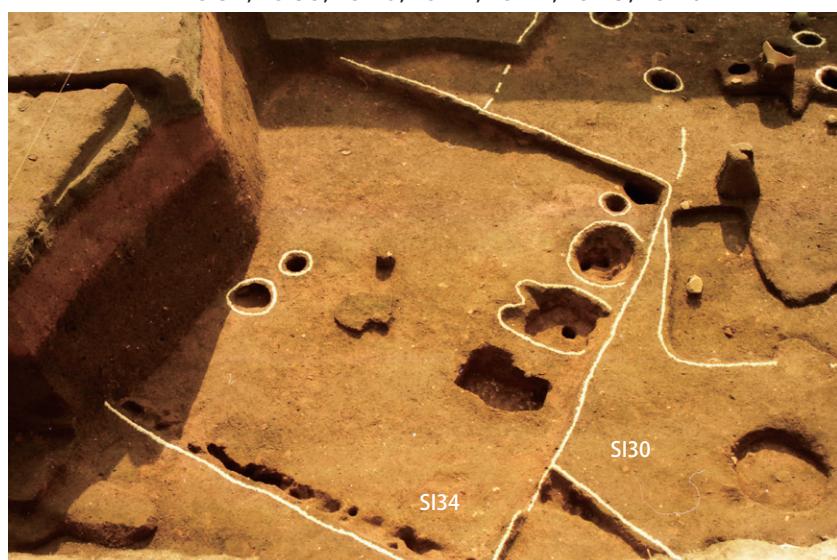
3 SI26 炉迹内出土盖



1 SI27



2 SI34, SI38, SI40, SI41, SI42, SI43, SI46



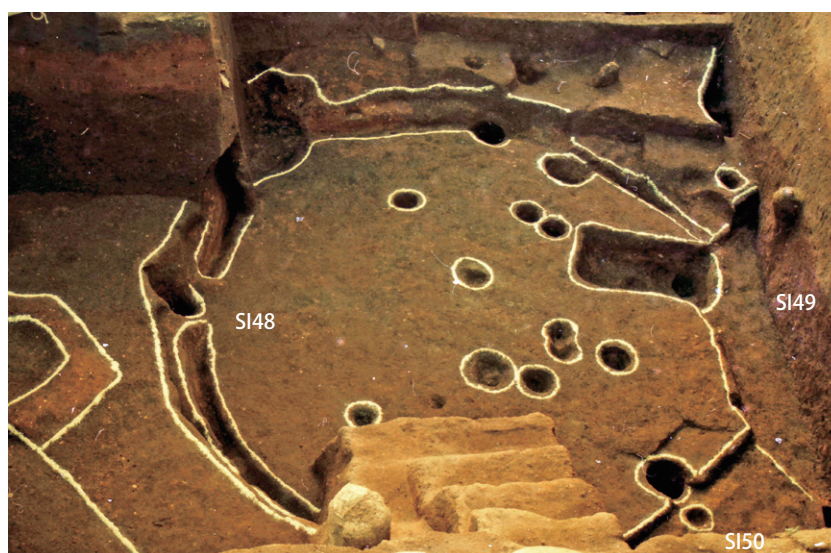
3 SI34, SI30



図版9



1 SI46



2 SI48, SI49, SI50



3 SI49 張出部遺物出土状況



1 SI37 子持勾玉出土状況



2 9層遺物出土状況

図版 11



1 倒壊建物跡全景（北から）



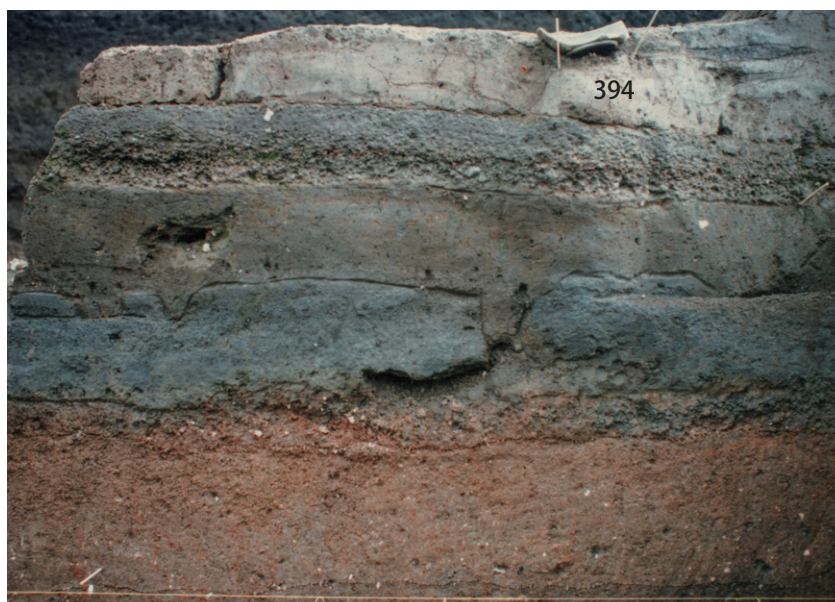
2 倒壊建物平面（南から）



3 倒壊建物部材痕跡



1 倒壊建物東側遺物 (No. 391) 出土状況



2 倒壊建物東側二次堆積層中須恵器 (No. 394) 出土状況



3 石膏型取り出し状況

# 図版 13



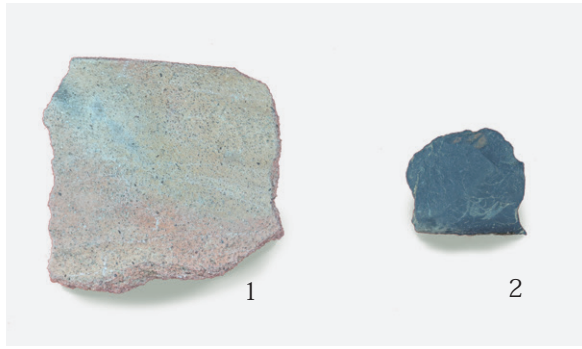
1 倒壊建物移設作業 1



2 倒壊建物移設作業 2



3 指宿市考古博物館における倒壊建物展示



SI- 1 出土遺物



SI 3 出土遺物



SI 7 出土遺物



SI 8 出土遺物

图版 15



1 SI 8 出土遺物



2 SI 9 出土遺物



S110 出土遺物



图版 17



1 S111 出土遺物



2 S112 出土遺物



1 SI12 出土遺物



2 SI13 出土遺物

图版 19



1 S113 出土遺物



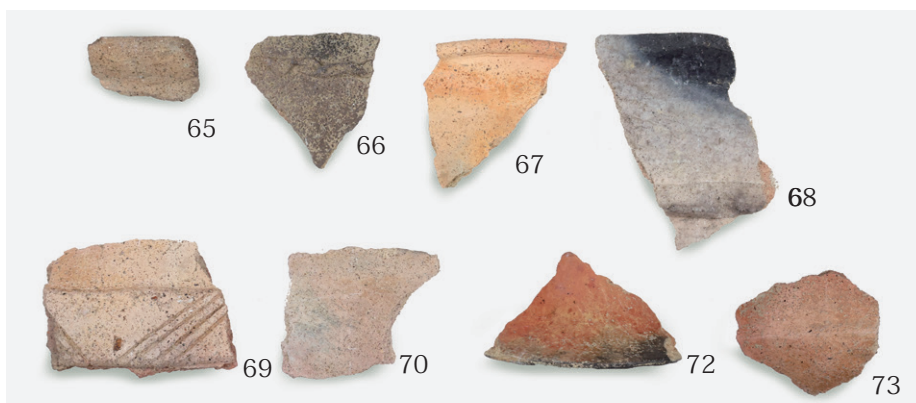
2 S114 出土遺物



58



3 S114 鍛冶遺構 出土遺物



1 SI15 出土遺物



2 SI16 出土遺物

図版 21

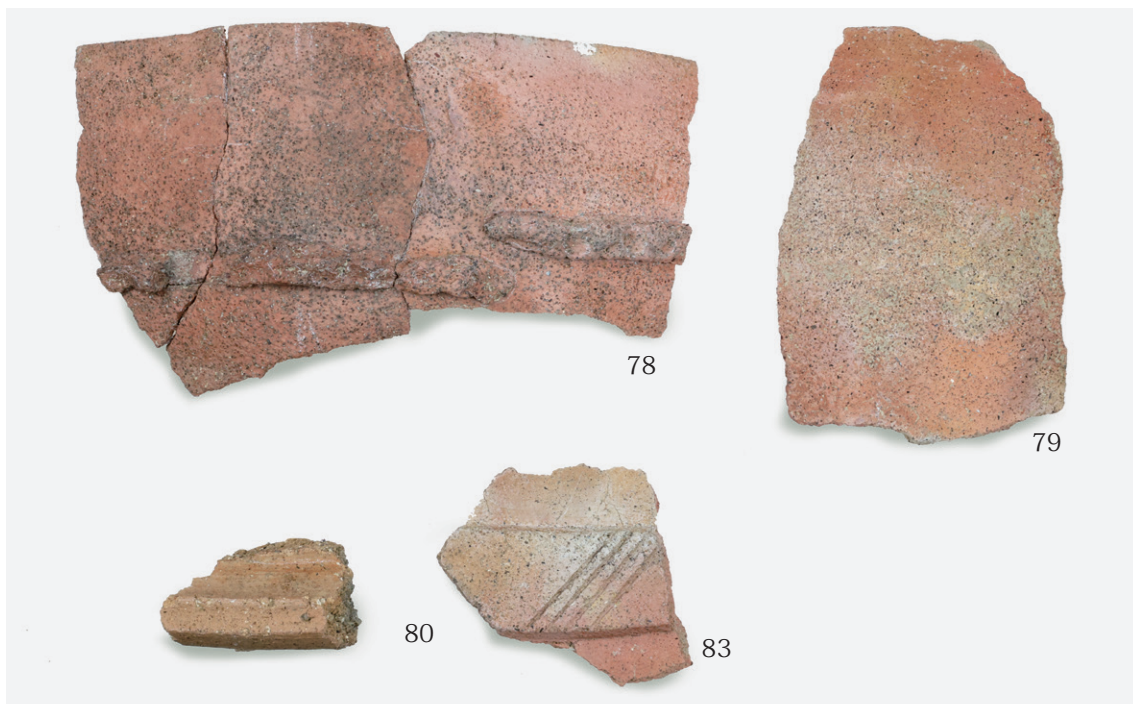


76



77

1 S117 出土遺物



78

79

80

83



81

82

2 S118 出土遺物



1 SI19 出土遺物



2 SI21 出土遺物

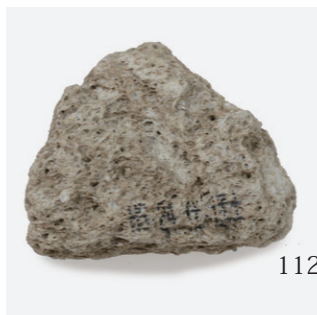
图版 23



SI21 出土遺物



1 SI23 出土遺物



2 SI24 出土遺物



3 SI25 出土遺物



4 SI26 出土遺物



図版 25



1 SI27 出土遺物



2 SI28 出土遺物



1 S129 出土遺物



2 S133 出土遺物

図版 27



1 SI33 出土遺物



2 SI34 出土遺物



3 SI35 出土遺物



154

S137 出土遺物

图版 29



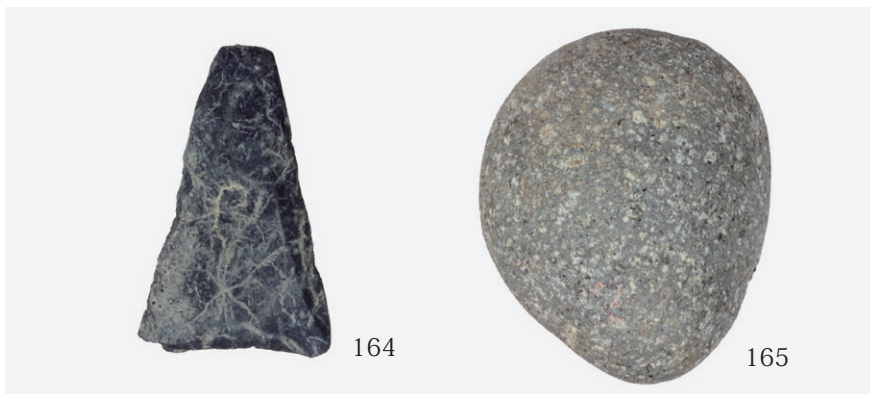
1 S137 出土遺物



2 S138 出土遺物



160



3 S139 出土遺物



1 SI39 出土遺物



2 SI41 出土遺物



3 SI42 出土遺物

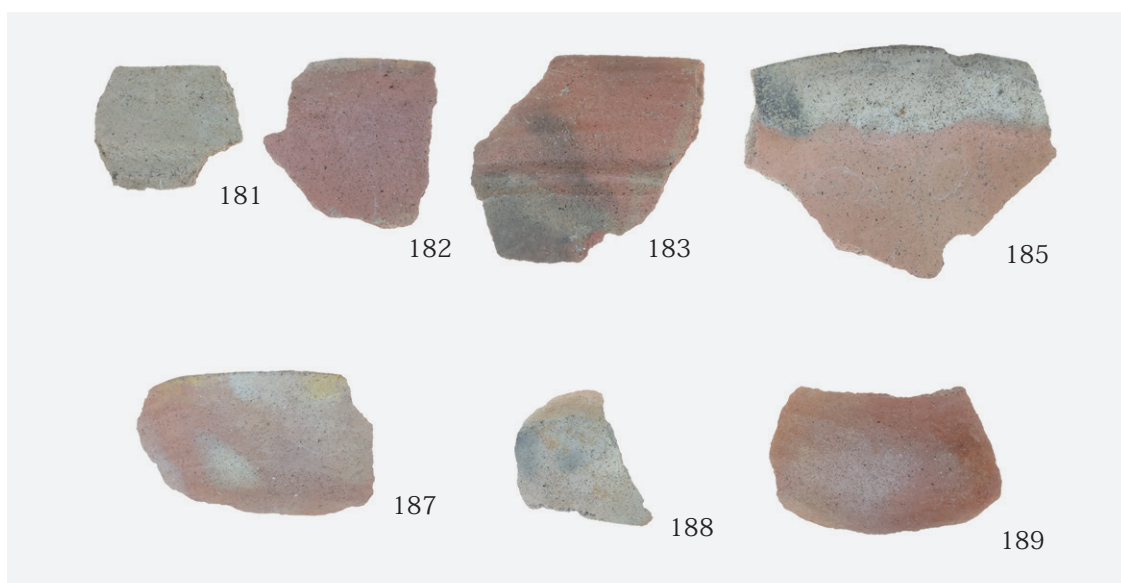
図版 31



1 SI42 出土遺物



2 SI44 出土遺物



3 SI46 出土遺物



1 SI46 出土遺物



2 SI48 出土遺物



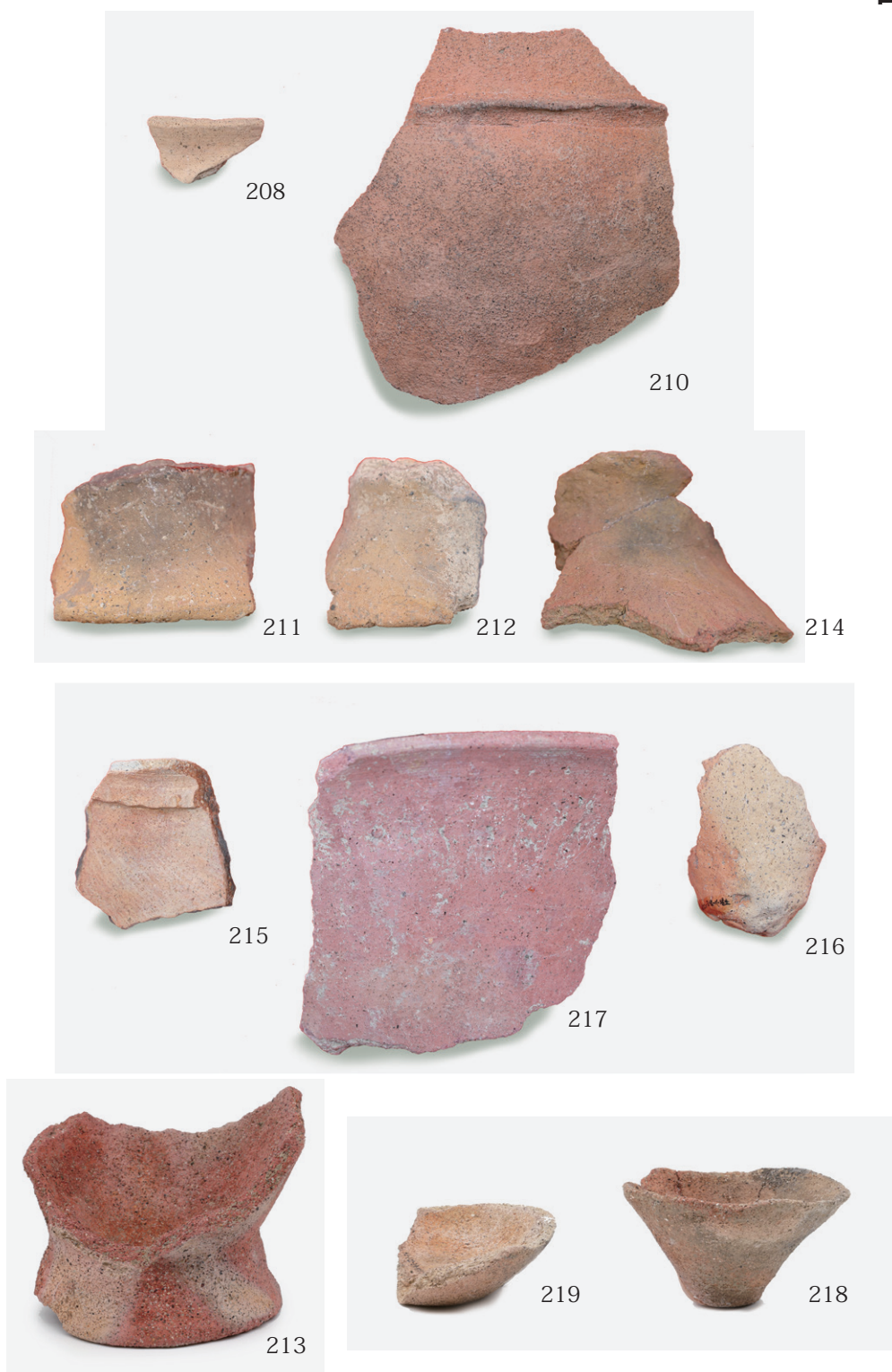
图版 33



1 SI49 出土遺物



2 SI50 出土遺物



S152 出土遺物

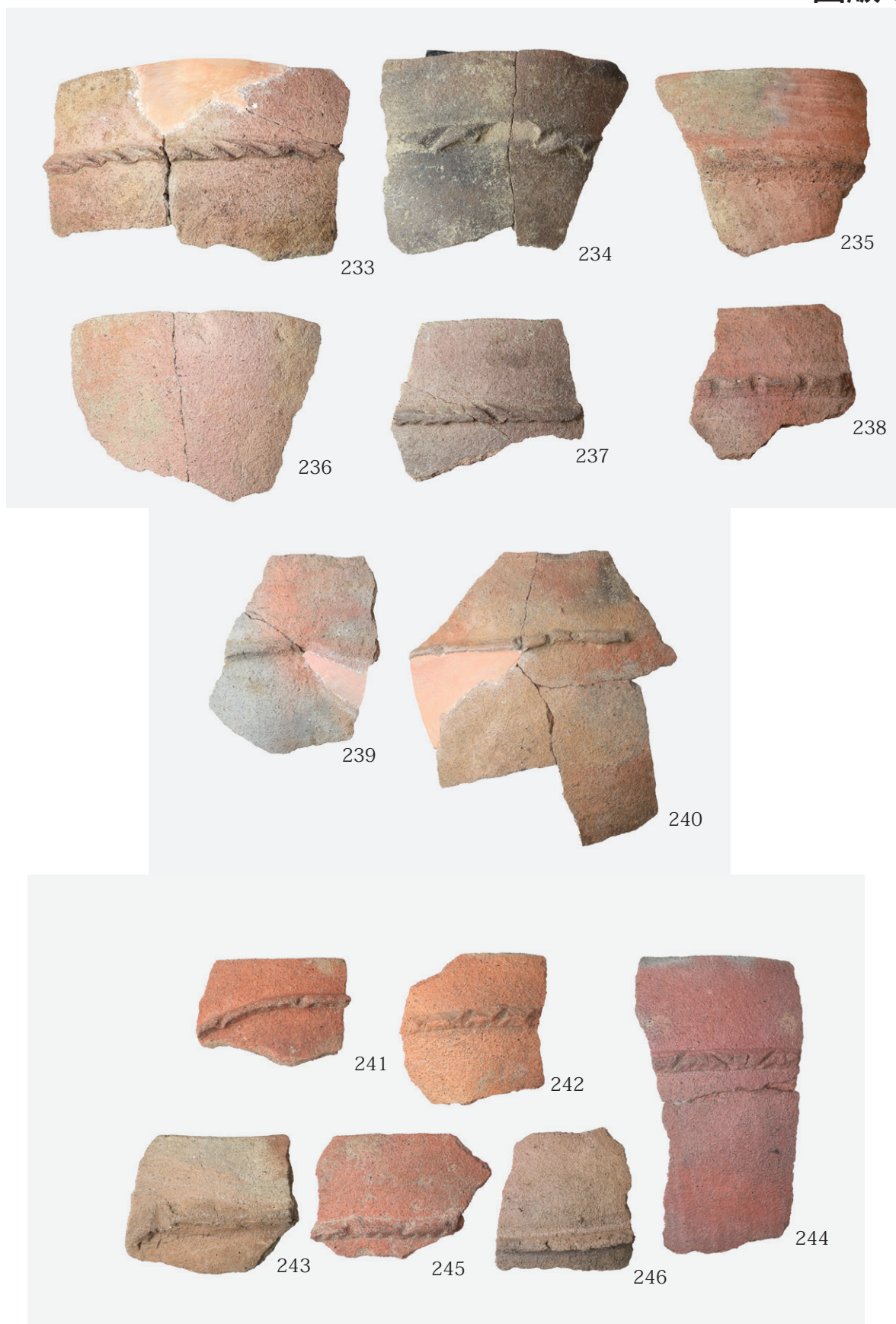
圖版 35



1 古墳時代遺物包含層（8層）出土遺物



2 古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 1



古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 2

图版 37



古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 3



古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 4

圖版 39



古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 5



古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 6



図版 41

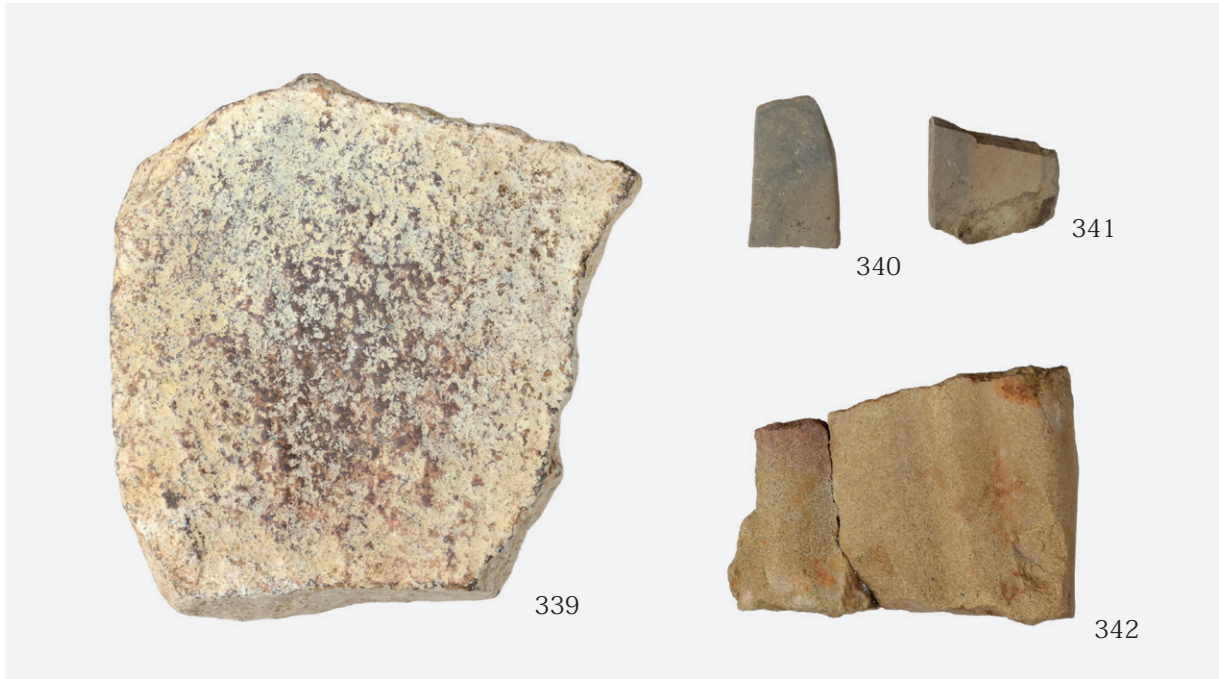


古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 7



古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 8

図版 43



古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 9



古墳時代遺物包含層（9層）出土遺物 10

圖版 45



6層出土遺物 1



6層出土遺物 2

図版 47



6層出土遺物 3



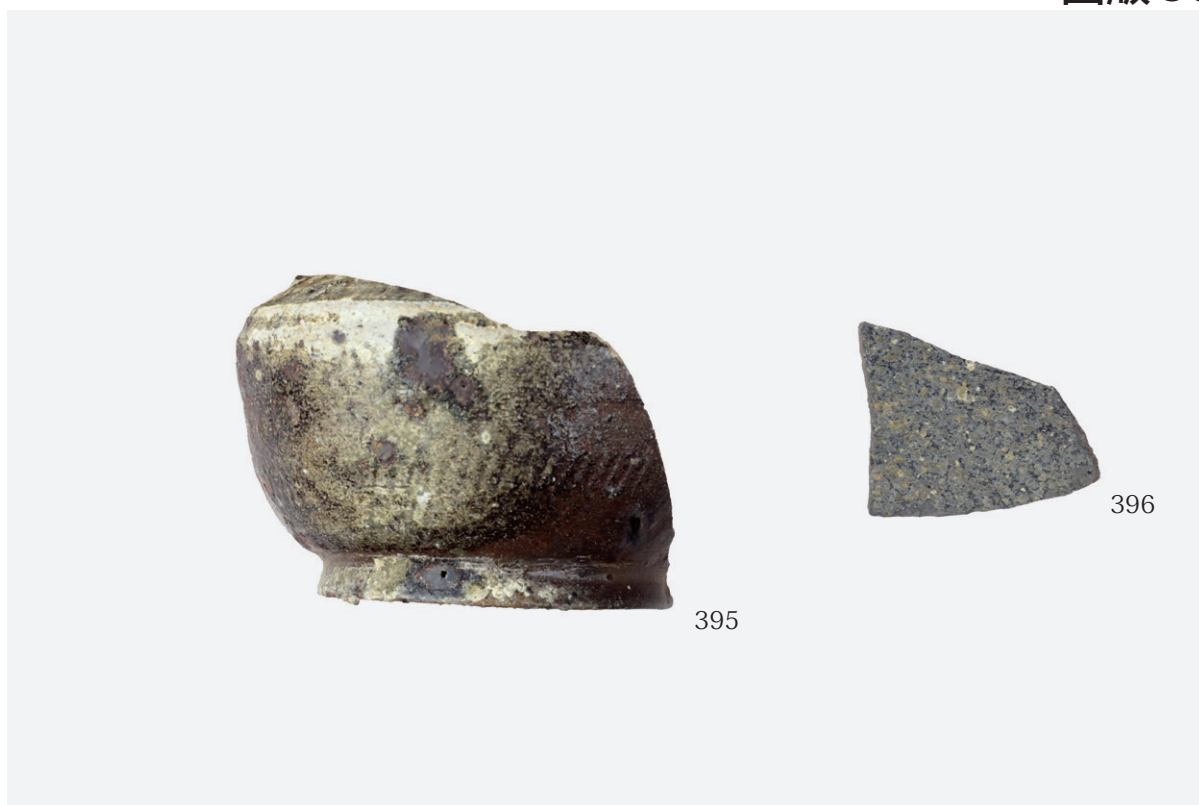
倒壊建物東側紫コラ火山灰二次堆積層中出土遺物 1



図版 49



倒壊建物東側紫コラ火山灰二次堆積層中出土遺物 2



1 紫コラ火山灰二次堆積層中出土遺物



2 発掘調査に携わった作業員の方々



## 報告書抄録

ふりがな	はしむれがわいせき								
書名	橋牟礼川遺跡(V区)								
副書名	指宿駅西部土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書								
巻次	vol.4								
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号	第69集								
編著者名	中摩浩太郎・松崎大嗣・西牟田 瑛子								
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会歴史文化課(指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ)								
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL:0993-23-5100								
発行年月日	令和5年3月31日								
			コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
橋牟礼川遺跡	指宿市十二町地内	46210	6-23	31° 12'	130° 38'	1988.7.4 ～ 1989.1.30	—	指宿駅西部土地区画整理事業に伴う発掘調査	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
		古墳時代	竪穴住居群・溝跡・土坑等	成川式土器・須恵器・青銅製鈴・青銅製鏡片・子持勾玉・鉄鏃・鉄斧・石包丁・磨製石鏃・磨製石斧・土製勾玉・軽石製加工品等	古墳時代の中核集落
		奈良～平安時代	—	墨書土器「厨」・須恵器・土師器・青銅製帯金具・成川式土器等	古代の郡家推定地
		874年	倒壊建物・畠遺構・道跡等	須恵器・成川式土器等	874年の火山災害で倒壊した建物

---

---

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第 69 集

指宿駅西部土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 Vol. 4

## 橋牟礼川遺跡V区

令和 5（2023）年 3 月

発行

指宿市教育委員会

鹿児島県指宿市十二町 2290 番地

TEL 0993-23-5100

印刷所

溯上印刷株式会社

鹿児島市南栄 3 丁目 1 - 6

TEL 099-268-1002

---

---

# The Panoptic Report of The Hashimuregawa Site 2023



Board of Education of Ibusuki city